
「全力のハクア」

sleepdog

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「全力のハクア」

【Zコード】

Z0758Z

【作者名】

sleepdog

【あらすじ】

小学五年生の一人がはじめた「天文係」の天体観測ピクニック。そのささやかな「天文係」の歴史に、あの夜、思いもかけない記念の一ページが刻まれた。

流星が山の向こうに消えた一週間後、ちょっと変わった転校生ハクアがやって来た。

ハクアが来てから少しずつ起きるおかしなこと。

そして、ハクアのリミッターが外れる瞬間が

“僕がきみの力になる” 現代ファンタジー小説、連載開始。

名前もわからない星が無数に輝く景色は、はじめそれほどすこいと思わなかつた。

でも、澄みきつた星空が見おろす郊外の公園に来るよになつたのは、同じクラスの気が合う女の子と、それそれで一生懸命作った夜のお弁当を持つてピクニックに行く、というのがすこく楽しく感じて、それに女の子が話す星座の物語が面白かつたから。実は、あとで父親に買つてもらつた星座図鑑で確かめると、女の子の話は半分くらいデタラメな話が混ざつていて、何を読んだのか不思議だつたけれど、朱鳥タツヤはなぜか月本希に対し、間違いと言つ気持ちにはならなかつた。

ピクニックと言つても、たつた一人である。放課後、家にランドセルを置いて、自分のお弁当を作り、宿題が出ていたらそれを済ませ、リュックを背負い、バス停で待ち合わせ、市営体育館行きに乗り、公園で星空を眺めて、そしてまたバスで家に帰るという短いものだ。郊外の公園は、住宅地に近いのに夜は完全に明かりが落ちるので、月本希が小さい頃から星を見に来ていた場所だつた。

小学五年生の六月、梅雨もそろそろ明けるころ。朱鳥タツヤはさっぱりした短い髪に半袖半ズボン姿で、月本希は白いブラウスと水色のスカート。髪の長いおつとりした希には、星の髪飾りとピンク色のサンダルがとても似合つていた。

バスを降り、まずバス停の電灯の下でお弁当を食べる。公園に入つてしまつと、自分が何を食べているかもわからないほど明かりがないのだ。すっかり恒例な感じでおかずをいくつか交換しながらお弁当を食べ終えたら、草の匂いに包まれ、眺めがいい広場のベンチまで歩き、二人並んで腰かける。

歩幅も縮まるほどの暗さと静けさに、最初は恐い思いのほうが勝つていた。ただ、希はこの公園に着いたら口数が多くなり、このと

きだけはぐいぐい手を握つてくる。それに引っ張られてタツヤもだんだん目や心が慣れていった。希の手は握り返すと汗ばんで、やらかかった。

希は星が本当に好きだ。季節によつて星座が変わることも、時間によつて星が動くこともすべて希に教わつた。

天文新聞が作りたいの。

一ヶ月前、いきなり希からそう誘われた。タツヤは何もクラスの係をしていなかつたが、それはやる気がないからではなかつた。タツヤは父子家庭で、料理がまったくできない父親と、まだ小学二年生の妹と三人暮らしなので、食事はすべてタツヤが作つているのだ。それが忙しくて係をしていなかつたが、まさかそんな誘いを受けるとは思つていなかつた。希は、天文新聞を作る『天文係』というのを作りたいと言つた。ない係を自分で作るなんてことは初めてだ。

美星小つていうのに、『天文係』がないのはダメだよね。

二人が住む町は美星町という。せつかく星が美しい名前の町だから、希はクラスメイトにもつと星のことを知つてほしいと願つた。希は最初一人で、担任の暮田晴海先生に頼みに行つたら、クラスでもう一人いれば作つていいと言われた。係のかけもちはダメだから、他に声をかけられる人も少なかつただろうし、新聞を作るから字がきれいなタツヤと一緒に作りたいと言わた。字がきれいと女の子に言われたのは驚きだが、タツヤは普段からよく話す希の頼みを断れず、校内でもこのクラスにしかない『天文係』といふものができた。

郊外の公園の真つ暗な広場にあるベンチで、二人並んで星空をじつと見る。希のとめどない『デタラメ混じりの星座物語をずっと聞いている。それが月二回くらいのペース。天文係はそれくらい小さな活動くらいだつた。

そんな美星小天文係の歴史に、その夜、思いもかけない記念のページが刻まれた。

一人の眺める星空に　巨大な流星が斜めに走つて地面まで落ちたのである。

巨大と言つても、普通の流星が米粒大の淡い輝きだとしたら、この夜の流星はビー玉くらいのまぶしい白銀の輝きだった。タツヤも希も「あつ！」と同時に声を上げ、思わず立ちあがつた。

「いまの落ちたよね。えつ、どこ？　どこだろ？」

希がすごく興奮している。

「うん、落ちたね。あれって星だったのかな？」

タツヤの目に見えた感じでは、この公園よりもっと山の中にあるどこかに流星は落ちたようだつた。しかし、山の重なる向こうに落ちたとして、それがこの近くなのか、あるいは日本のどこかなのか、もしかすると海を越えた果てしないどこかなのか、それはわからぬい。ともかく、あれだけ大粒のきれいな流星をこの眺めのいい場所で見たことはただすごい感動で、しかも天文係の活動中だつた偶然に不思議なよろこびがあつた。

「いまのすごいね！　すごいよね！　明日、新聞にのるかな？」

希は目をキラキラさせてタツヤの手をぎゅっと握る。タツヤは少し赤くなつた。

「どうだろ？　うん、気になるよね」

一人だけが流星を見たような奇跡を感じる興奮はあつたが、バスで帰る時間も近づいていた。春に買つてもらつたばかりの携帯電話を開き、時間を見る。今日はあれだけのことがあつたので、タツヤはもう少し希と一緒にいたかった。

でも、流星の落下とは関係なく、バスはきちんと予定通りの時間にやつてきた。ただ、バス停で待つ希は、握る手の汗ばみも口数もいつもより多かつたから、やっぱり天文係にとつて絶対に忘れられない特別な夜だつたのだ。

次の日、タツヤは早起きして父親の廉太郎れんたろうから新聞を取り、隅々まで流星の写真や記事を探したが、何も載つていなかつ

た。少しがつかりして小学校に行くと、クラスメイトも何人か大きな流星を見たと言う。やはり流星が落ちてきたのは間違いないようだ。放課後、昇降口で希に声をかけ、帰り道タツヤの携帯でポチポチとニュースを探してみたが、それらしき情報はまだ見つからなかつた。

そして次の朝、新聞にようやく流星の記事が載つた。タツヤは希と一緒に見た光景が本物でちょっとそれしかつたが、くわしい記事を読んで驚いた。漢字がかなり難しかつたので廉太郎に手伝つてもらつたが、流星の正体は『隕石』というもので、その落下場所はやはりここからそう離れていない山中だつた。ただ、隕石は山都小学校という小学校に直撃し、校舎がすべて倒壊したと書いてあつた。幸い夜だつたので小学校は無人で、先生もみんな帰宅していて、被害にあつた人はいなかつたみたいだ。

ハサミで記事を切り抜き、学校で希に見せると、希もその記事を同じように切り抜き持つてきていた。一人して笑い、次の天文新聞はこれにしようと話した。

そして、隕石落下から一週間後 朝の天気予報で例年より早く梅雨が明けたと言つていたその日、ひとりの女の子が突然タツヤのクラスに転校してきた。学期の途中で転校生が来るのは珍しい。晴海先生のあとに続いて、女の子が教室に入ってきた。クラスがざわつく。

第一印象は女の子っぽくなかった。パイナップルみたいに明るい色の袖なしシャツに、大きなジャングルの絵がプリントされている。半ズボンのデニムパンツと黒いハイソックスを履いている。髪は明るい栗色で、肩までの長さだつた。

「はじめまして、寺野ハクアです！」

女の子だが、ハツとするほど声が大きかつた。続いて、晴海先生が寺野ハクアのことを紹介する。

「寺野さんは山都小学校から転校してきました。今日からみんなよろしくね」

山都小学校と言えば、先週の隕石落下で壊れてしまった小学校だ。その後、タツヤは父親の廉太郎に聞いたのだが、もともと山都小学校は生徒が減つていて、もう廃校になりそうだつたらしい。隕石は専門の研究所に回収されたそうだが、校舎は完全に壊れてしまったので、生徒はみんな転校することになったのだ。ただ、主な転校先は美星小学校ではなく、もっと近い小学校に行くことになっていた気がする。

晴海先生も隕石落下事故のことはクラスに話したが、タツヤが知っている新聞の内容ほど細かい説明でなかつた。晴海先生が少しつけ加える。

「山都小学校から美星小に転校してきたのは寺野さんだけです。おうちが美星町に引っ越すことになつたので、美星小になりました。前の学校のお友達とは分かれてしまつたので、仲良くしてあげてね」クラスはみんない返事をした。タツヤは後ろから一番目の席に座つていたが、寺野ハクアはタツヤのすぐ後ろの席になつた。赤いランドセルにベタベタと派手なステッカーが貼つてあつて、何となく馴染みにくそうだな、という印象をタツヤは持つた。

晴海先生はそのまま一時間目の算数の授業をはじめた。先週やつた小テストの返却があり、タツヤは九十五点だつた。一問だけ間違えたのは残念だつたが、前回が八十点台だったので、上がつていてうれしかつた。

席に戻るといきなりハクアがまわりのクラスメイトに点数を聞いていて、当然タツヤも聞かれた。まだ仲良くなつてないのに点数を話すのに気後れしていると、好奇心丸出しの顔でテスト用紙をめくり取られるように点を見られてしまつた。

「うわつ、頭いいね！」

タツヤはハクアからすぐ取り返し、席にきちんと座り、間違つたところを見直した。

一時間目が終わり、休み時間にタツヤは後ろを向いて、寺野ハクアにあいさつをした。クラスの女の子も早速何人かハクアの席を囲みに来た。みんなが気になつたのは、ハクアのことよりもむしろ隕石落下事故と壊れた山都小学校のことだ。タツヤも天文新聞を書くのにいいかな、と思つてそのまま輪に入つて聞いていた。気づくと、希も横に立つて話に加わっている。

「髪の毛そめてるの？」

「もともとこういう色だよ」

「ねえねえ、本当に学校なくなっちゃったの？」

「うん、そうだよ。朝行つたら学校がバラバラになつてたの。ほんとビックリしちゃつた。地面にでつかい穴ができたんだって」

ハクアは別に暗い表情ではない。自分だつたら小学校が壊れたらかなり落ちこむが、この子は平氣なのかな、とタツヤは不思議に思う。

希も身を乗り出してハクアに聞く。やつぱり隕石のことが一番気になるようだつた。

「寺野さん、隕石は見たの？」

「ハクアでいいよ」

「じゃあ、わたしも希つて呼んでね」

「うん！ それで隕石なんだけど、あたしは見てないんだ。学校の門から入れなくて。学校もずっとお休みだつたしね」

「そなんだ……」

「ねえねえ、隕石つて光つてたりするのかな？」「隕石はもつひとつに持つてかれたの？」「何でハクアさんだけ美星小なの？」「ハクアさんちつてどこ？」「他の子は何小に転校したの？」と女の子たちが好き好きに口をはさむ。ハクアは質問攻めに答えるのは大変に見えたが、輪の中にいるのがわりと楽しそうだった。

盛りあがつているところに、学級委員の十和田とわだ霧枝きりえが割つて入つてきた。きりつと清潔に結んだポニーテールで、クラ

スで一番勉強ができる優等生。口ゲンカでは誰も十和田霧枝には勝てない。

「寺野さん、給食が終わったら学校を案内するからね」

「うん。あつ、給食か！ 楽しみだね！ あと、ハクアでいいよー」

「案内してつて先生に言われてるの。じゃ、よろしくね」

「うんうん！」

ハクアは会心の笑みを返したが、霧枝とのやりとりは少しづれていたように思つた。

寺野ハクアは持ち前の明るさと、隕石で壊れた小学校からの転校生という意外さで、一日中クラスの注目を集めた。声が大きくて休み時間でもかなり存在感があるし、給食でも男子並みのスピードでおかわりをもらいに行つたので、そういうのもかなり目立つた。そして、給食のあとに学校案内に行くという約束を忘れて、三度目が四度目のおかわりをしようとしていたところを、十和田霧枝に止められるというのもあって、霧枝嫌いが多い男子たちにもハクアの性格は受けっていた。

ただ、ハクアが少し変わつてるのは間違いない。放課後、タツヤが廊下で希と少し話をしたときも、希は不思議そうな顔をしていた。

「ハクアさんてほんと元氣だよね。前の学校……なくなっちゃったのに」

「普通落ちこむと思うんだけどなあ」

「うん。あと、給食すつごいおかわりしてたね」

「食べるのが早くてビックリしたよ」

寺野ハクアの転校初日は、クラスにインパクトを残した以外はわりと平穀に終わつた。帰りのホームルームでも、晴海先生が「寺野さんと遊んであげてね」とみんなに言つていたが、その心配はなさそうに感じた。タツヤは家に帰り、廉太郎と妹の由果と三人で夕食を囲みながら、食欲旺盛すぎる転校生のことを話した。三年生の由

果はにこにこしながら「由果はそんなにおかわりしたことない」と笑っていた。タツヤも驚いたと言えばそれくらいの印象しかなかつた。

しかし、それはまだハクアの本当のことをまだ一割ほども知らなかつたのだ。

次の日、午後の理科の授業で、春海先生が小テストの用紙を配りはじめたとき、いきなりハクアが後ろからタツヤの背中をつついてきた。テストに少し緊張していたので、余計に驚いて振り返る。

「えつ、どうしたの？」

ハクアはかなりへばつた顔をしていた。

「ううう、助けてー。前の学校よりすごい先のところやつてるんだよ」

教科書は同じなのだが、山都小学校は授業の進みが遅かつたようだ。タツヤは冷たい性格ではないが、テスト中に助けられるはずもない。ハクアの声が大きいので晴海先生に注意されるのも気になり、タツヤは小声で答えた。

「それなら、今日はできなくともしようがないと思つよ」

「えつ！ダメ、先生があたしのことバカだと思つちやうー！」

ハクアが少し怒った顔になる。そんな顔をされてもタツヤは困るだけだ。

「あとでノートとかなら貸すよ。今はごめんね」

とにかく今はどうしようもない。これ以上は無理だと思つてタツヤは前を向く。

「えつ……じゃあ、借りるね！」

ハクアはそう言つて、トン、とタツヤの後頭部を軽く突いた。少し気が散つたが、晴海先生がテスト時間を黒板に書いたので、教室の時計を見て、テスト用紙に目を落とした。

タツヤは頭が真っ白になつた。問題は、魚の誕生に関する写真や

イラストを見て答えるといふものだ。とりあえず、まつたく何も出でこない。鉛筆がちつとも動かない。変な汗だけが出てくる。次の問題を見ても、やっぱり何も思い出せない。結局、タツヤが自信を持つて書けたのは自分の名前だけだった。あとはいくつか記号を力んで埋めたり、思いついた言葉をぼんやり書いたりしただけだ。

でも、タツヤはできないものは仕方ないとあきらめていた。思い出せないのだから、どうしようもないと。かなり時間が余つたので、手を動かしていないと先生に怒られると思い、テストが終わるまで用紙の余白に変なドラゴンの絵を描いていた。

晴海先生が終わりの合図をして、後ろからテスト用紙を回していく。先生が全部集め終わり、また授業が再開した。すると、ハクアがまたタツヤの頭をトンとついた。

「ごめんね！」

タツヤは少し変な感じがしたが、とりあえず教科書とノートを開き、いつも通り授業を聞いた。振り向くと、テスト前はあれだけ困った顔をしていたはずなのに、ハクアはすっかり満面の笑顔だった。できなくとも仕方ないと思ったのかな、とタツヤは感じた。

翌日、理科の授業で、そのテスト結果が返ってきてタツヤは呆然となつた。たつたの六点。三択の問題がふたつ合つていただけ。おかしい。答えはほとんどわかるのに、みんな空白だつたり間違つたりしていて、タツヤは驚きで心臓が跳ね出しそうだった。

「朱鳥くん、昨日は風邪ひいてた？」

晴海先生はテストを返す時、今まで見たこともないほど不安げな表情でタツヤの顔を見た。さらに、用紙の余白にはドラゴンの絵が描いてあり、そこに晴海先生から赤ペンで『ちゃんと集中しましょう！ 次は0点にするかもよ！』という注意書きまでされていた。五年生にもなつてテスト用紙に絵なんか描いたことはない。でも、間違いなくそれはタツヤがたまに気まぐれで描く変なドラゴンの絵だった。誰かのイタズラではないのだ。

理科の授業の後、休み時間にハクアの席で何人か女の子がテストのことを話していたが、タツヤはまだ最悪なテスト結果のショックが残っていて、後ろに会話があまり頭に入つてこなかつた。家に帰つてもこれは廉太郎に見せず、部屋のゴミ箱に丸めて捨てた。テスト結果をゴミ箱直行にしたのは、これが初めてかもしれないとタツヤは悲しんだ。

それから数日はおかしなことは起きなかつた。授業もちゃんとわかつたし、宿題もきちんとできたし、晴海先生もあれ以上は心配してこなかつた。ハクアも理科以外はそれほど困つてゐるようでもなく、タツヤが勉強を教えると言つたのも忘れたと見え、特にハクアと勉強の話題もなかつた。

そして、身体測定の日がやつて來た。ここでも思いがけないトラブルが起きた。男子と女子は時間を分けて測定を受けるが、午前中、女子がやつてゐるときに、希が急に具合を悪くして保健室に運びこまれたのだ。ただ、身体測定が終わつた後、クラスの女子何人かで様子を見に行くと、希は普通の体調に戻り、一緒に教室に帰つてきたのだが、希は午後もずっと浮かない表情をしていた。こんなことはかなり珍しい。

今日は週に一回、学校の図書室で天文係の話をする日だったので、放課後タツヤは希に声をかけた。週一回なのは、他の曜日は希がいろいろな習い事に行つてゐるからだ。目の前で見ると、希の顔色は全然悪くない。いつも通りだ。

「もう大丈夫なの？ 今日は早く帰る？」

「ううん、平気だよ。図書室に行こつ」

図書室で話を聞くと、希も本当に自分でもよくわからないのだと言つ。はじめ身長や体重を測つていたときは何ともなくて、視力検査を受けて、次の検査へ行こうとしたら、いきなり目の前がぼんやりしてしまい、気分が悪くなり、恐くて歩けなくなつたらしい。でも、視力検査の結果は両目2・0だつたのだ。先に身体測定が終わつていた女の子たちに支えられて、保健室まで何とか行き、ベッドに寝てゐた。その後、終わつて保健室へ様子見に來た女の子たちに抱き起こされたら、すぐに視力が戻つたというのだ。

タツヤは話を聞くうち、体調を心配するのとは違う、何とも言え

ない不気味さを感じた。ただ、つまづ葉にできないので、希には言い出さなかつた。

「でも、田が急に悪くなつたり良くなつたりするの?」

「つうん、そんなことないと思つけど……」

「何か、視力検査で思い出すことはない?」

「え? あ、ハクちゃんが来てくれたんだけど」

「ハクちゃんて、寺野さんのこと?」

「うん。視力検査が終わつたとき、ハクちゃんがわたしの視力を聞いてきたの」

希が思い出したのは、普通に聞いていて少しおかしな話だつた。希は検査をして両田2・0と言われ、次の列に並ぼうとしたのだが、出席番号順つまりアイウエオ順で次に検査を受ける寺野ハクアが希に駆け寄つてきて視力を聞いたらしい。そして、顔にごみがついていると、言つて希のまぶたに触り、視力検査に戻つた。それから、希は急に田の前がぼんやりした状態になつて、すぐしゃがみこんでしまつた。その後は保健室だ。

タツヤは考えこむ。やつぱり何かがおかしい。ただ、それが何なのか考へてもよくわからなかつた。

「あ、あと

「うん」

「保健室に行くとき、おでこに変なのがあるつて言われたの。霧枝ちゃんから」

希と霧枝は幼稚園が同じでいつも仲が良い。

「おでこ?」

「うん。おでこ。でも今はいよね」

希はイスをそばに動かし、手で前髪を持ち上げ、タツヤによく見せた。顔が近づいたので少しドキドキしたが、確かにアザのようないものはまつたくない。

「転んだとき、おでこをぶつけたの?」

「つうん、転んでなによ。くらくらしたけど、座つただけ

「じゃあ、今日どうかにぶつけた？」

「そんなことないよ。朝うちで顔を洗つたときもアザはなかつたよ」あとで霧枝にも聞いてみよう、とタツヤは思った。ただ、とにかくアザがあつたのなら、希の具合は良くないだろうと考え、今日は早く帰ることにした。希はこの天文係が週に一度の大きな楽しみなので残念がつたが、本気で心配するタツヤの顔を見て、おとなしく帰ることにしたようだつた。

タツヤは、夜ベッドに寝転がりまた希の話を思い出すと、ずっと気になつて仕方なかつた。

次の日、霧枝に聞いてみると、希の話とだいたい一緒だつた。出席番号では寺野ハクアの次は十和田霧枝なので、三人は並んでいたのだ。希の視力検査が終わつた後、ハクアが話しかけ、ハクアが戻つたら希の具合が急に悪くなつたという流れだ。

「あと、月本さんのおでこにアザがあつたみたいだけど、覚えてる？」

霧枝は唇をとがらせる。

「うーん……花びらみたいなアザがあつたかも」

「花びらみたいな？」

「視力測定の前は、あんなのツッキーの顔になかつたと思うんだよね。汚れじゃないと思うけど」

霧枝は希のことを昔からツッキーと呼んでいる。ただし、希をツッキーと言うのは霧枝だけだ。

「汚れだつたら寺野さんが何か言つそつだよね

「まあ、そうだね」

「それで……寺野さんはそれからどうしたの？」

「んー、普通に身体測定やつてたけど。みんな終わつてあたしとが保健室にツッキーの様子見に行つたとき、テリーも一緒に来てくれたよ」

寺野ハクアをテリーと呼ぶのもたぶん霧枝だけだ。なぜなら朱鳥

タツヤはアツシーと呼ばれているからだ。

「なんだ」

「ツツキーをベッドから起こすのも手伝ってくれたし。テリーは思つたよりいい人だよね」

霧枝の言い方はともかく、ハクアが後で保健室に行つたというのは初めて聞いた。タツヤが少し黙りこむと、霧枝がむすつとした顔で腕組みをした。

「 でさあ

「 なに？」

「アツシーはツツキーのことが好きなの？」

霧枝は田の奥を覗きこむように突然聞いてきた。霧枝はクラス内のこういう話が大好きだつた。今回、タツヤはいつもより希のことを心配しすぎて、変なふうに思われたのかもしれない。霧枝のじつとりとした視線が逃げたいくらい突き刺さる。

「え……違うよ」

「ふーん、そうなんだあ。一人だけで新聞書いてるし、絶対そうだと思つてた」

「新聞は面白いからだよ。星も好きだし」

「あつ、そあ……。星はあたしも好きだよ」

「うん。ごめん、ありがと」

タツヤはこれ以上希のことを聞くのが恥ずかしくなり、逃げるよう席に戻つた。後ろの席にはハクアが寝ぼけた顔で座つていたが、ハクアと話すと何か変なことが起こる気配がして、自分からはなるべく話しかけなかつた。そして、放課後になつた。

借りていた本を図書室へ返しに行くと、たまたま希と行きあつた。まだ表情が明るくなかつたので、タツヤは一緒に帰ろうと誘つた。希はピアノの習い事がある曜日だが、今日はピアノの先生の都合でいつもより遅い時間らしいので、気分転換にちょっと寄り道をした。

梅雨明けの日差しが強く、一人でアイスを食べたり、大通りにあるバー「ガーザウルス」のショイクをめざすことにした。

「タツヤくんは、今日霧枝ちゃんと話してたの？」

希は横目でタツヤの顔色をじっと見る。

「え……？ えっと、月本さんのこと」

「昨日のこと？」

「うん。ごめん。ずっと気になつてて」

だが、タツヤは言葉が続かなかつた。何か気になるかもよくわからぬのだ。しかし、

「ほんとに？」

希の表情が少し明るくなる。「ほんとだよ」と答えると、希はほつとしたように微笑んだ。

バー「ガーザウルス」は、並びにパチンコ屋やゲーセンもあり、かなり賑やかな場所にあつた。店に入ろうとするとき、一階の窓際席で大きな口を開けている寺野ハクアと目が合つた。希が「ひやつ！」と変な悲鳴を上げる。驚くにしてもそれはあんまりだ。タツヤは希の様子を確かめる。

「どうしたの？」

「ごめん、ちょっと驚いただけ。ハクちゃんもいるからお店で食べようよ」

希は明るく手を振つて、窓越しにハクアへ合図した。ハクアも拳をエイエイと元気に振りあげて応える。横にランドセルがあつたので下校途中だと思うが、同級生が一人でハンバーガーを店内で食べているのを見たのは初めてだ。タツヤと希は店に入り、タツヤがシェイクを二つ注文する間に、希はハクアに話しに行つた。タツヤはレジに並ぶ間、二人の様子を見ていたが、特におかしな感じもなく楽しそうにしゃべつている。

シェイクを二個持つて席に行くと、ハクアはものすごい量のハンバーガーを食べているところだった。『ギガバーガー』という一段重ねの一番大きなハンバーガーを五個も買つていて、すでに三個食

べ終わり四個目にかぶりついていた。何となく今はハクアと距離を置きたかったが、希が店で食べると言つたので、仕方なくタツヤも希の横に座つた。

テーブルが小さくて、希と肩がくつついて少し恥ずかしかつた。店内がエアコンでかなり涼しいからか、希はタツヤにぴたり寄り添つようにひじをつけてくる。

「んー、美味しい！」

「ほんとだね」

希の表情によつやく明るさが戻り、タツヤは一安心した。

「ところで、ハクちゃん、ギガバーガーが好きなの？」

ハクアは口の動きを止めず、巨大な食べ物をもぐもぐと両手で握つている。こんな量でも太つていなければ不思議だつた。

「これさあ、暴れるほどつまいまいよね。毎日でもイケるよ！」

言い方がおかしい。タツヤはトレーの上でくしゃくしゃになつた袋に目を落とす。

「……家でごはん食べられなくなるよ」

「んっ？ いいの！ たまにはいいの！ ギガバーガーは別腹なんだよ」

「別腹つてごはん食べたあと言つんだよ」

「うつそ！ プレパラは頭いいなー」

いきなり変なことをハクアは言つた。いつからそんな意味不明のあだ名になつたのか。

「え？ 何でプレパラって言つの？」

希がいきなりタツヤに聞いてくる。不思議な表情とつよりは少し困つた顔をしている。

「……いや、僕もわかんないけど

「あ、ごめん。この前、あたし理科のテストで一個だけ間違えたんだ。それがプレパラートだつたの。『あ、プレパラートはわからなかつたんだ』と思つてさ。それでつい言つちやつた」

この「転校生は、何を言つているんだ？」理科のテストで、そ

れだけ間違えた？

タツヤはシェイクを吸うのを止めて、ハクアの言葉をよく思い返した。理科のテストは、タツヤが六点しか取れなかつたテストのことだ。顕微鏡の器具の名前を答える問題もいくつかあつた。

希も難しい顔をしている。

「んーと……？ ハクちゃんがプレパラートって書けなくて間違えちゃつたんだよね……？」

「あー、んー、そうそう」

ハクアは変な苦笑いをしている。

理科のテスト。それでハクアは百点近く取つたみたいだが、テスト直前に『助けて』と言つてたはずだ。どうしてそんな点数が取れるのか。

ハクアが最後のギガバーガーに手を伸ばす。

「プレパラも、テストができなかつたからって、暗い顔すんなって！」

タツヤは背筋がすつと寒くなる。エアコンやシェイクのせいではない。どうしてハクアは見せてもらいないテスト結果を知つているのか。

「……僕はプレパラじゃないよ。変なあだ名はつけないでよ

「それに、朱鳥くんは頭いいんだよ？」

希がフォローを入れてくれたのはうれしかつたが、今まで取つたことのない点だつたショックが戻つてきて、完全にシェイクを飲む気をなくしてしまつた。それと、ハクアが自分の間違えた問題をタツヤのあだ名にしたことも気になつた。その間に、ハクアはギガバーガーを全部食べ終わり、ドリンクのふたを開け、ガリガリと氷を噛んでいた。文字通り、完食だ。

結局タツヤはシェイクを二つそり残し、希が飲み終わるのを待つて、三人で店を出た。帰る方向が一緒だつたので、三人で通りを歩いていると、五、六人の高校生たちが道幅いっぱいに歩いてきて、

誰かのカバンがハクアの肩にぶつかった。ハクアはよろけてタツヤの腕にしがみつく。タツヤはビクッと身を強ばらせ、慌ててハクアを支えた。ハクアは囁みつきそうな目つきで高校生の背中を睨んだが、高校生たちはまったく気にせずゲーセンに入つていいく。明らかにガラの悪い感じだった。

「あいつら、小学生だからって『ごめん』の一言もないのか！」ハクアはいきなり鼻息が荒くなつた。ただ、文句を言つても絶対に敵わないので、タツヤはその場を過ぎようとしたが、ハクアは何を思ったかゲーセンの中をまだ覗いている。希が不安げに声をかける。だが、険しい顔で「王立ちしたままだつた。タツヤはせめて飛びかかるのは止めようと、ハクアのそばまで行つた。

「寺野さん、もう行こうよ」

「待て、あいつら何か変だぞ。何してる？」

短髪の高校生が、ズボンに手をつっこんで両替機の前に立つていた。さつき見た高校生たちの一人だ。

「何してるって……見えないの？」

タツヤはハクアに聞き返す。両替機は店の奥でもないし、外からでも普通に見える。お釣りの返却口がピカピカ赤く光つている。あれはお札が残つている時のサインだつたと思つ。ハクアはそれが気になるのだろうか。

「あたし、目が悪いんだ」

「それならメガネとか」と言いかけたとき、両替機の前にいる高校生が奇声を上げた。

「おおつ！ 超ラッキー！」

短髪の高校生は両替機からお札を取り出したようだ。

「オレ、今日マジやばいかも！」

どうした、と言つて仲間が集まつてくる。あのお金はもしかすると前に両替えした人がうつかり取り忘れたものかもしれない。

「すいません、それ僕のです！」

すると案の定、店の奥から走つてきた。近くの私立中学校のブレ

ザーを着ていて、見るからに氣弱そうな感じだつた。タツヤは何となく嫌な予感がして、早くハクアを連れてこの場を離れたかつたが、腕を引いてもハクアはまったく動かなかつた。

「朱鳥くん、ハクちゃん……」

一人とも店の入口から動かないで、希も心配になつてそばに来た。店内では、ブレザーの氣弱な中学生が、さつきのガラの悪い高校生たちにぐるりと囲まれている。店員の姿はどこにもない。

「それ、僕のなんです。返してください」

声がどんどん高くなつていぐ。

「ごめん、わりいんだけど、これ、オレのお金だよ?」

「いや、でも……。僕のなんです……」

「ふざけんなつて! お前のつて言うシモー「がないじやん」

「でも……あの、力、カメラとか見れば……」

震える手で、天井を指差す。暗くて見えにくいが、天井に監視カメラがあつた。

「ん? どうしたの、このひと」

別の高校生が後ろから現れ、ブレザーの肩にぐいっと腕を回す。金髪で体格が大きく、かなりの威圧感があつた。

「なんかさ、オレがとっちやつたつて言つてんの。超ヌレギヌなんだよね」 そう言って、短髪は両替機から取つたお札をポケットに入れた。仲間たちが口を出す。

「なになに? メーヨキソン?」

「ちょ、それ合つてんのかよ?」

「ぶはははは、いや合つてんだろう、バカ」

すると、ブレザーの肩をつかんだ金髪の高校生が、尻を蹴りあげる。

「なあ、店でさわぐのはメーワクだから、ちょっと外出で話そうぜ」
ブレザーの中学生を強引に取り囲んで六人が店の外に向かっていく。店員はまだ来ない。近くにいるのかどうかもわからない。ハクアは恐い顔でじつと目を凝らしたまま黙つていた。目が悪いからよ

く見えないのか、何を考えているのか全然わからない。まさか止めに入るつもりではないだろうかと、タツヤはかなり不安になった。不良たちは店を出て、すぐそばの薄暗い路地に入つていった。ブレザーの中学生が立ち止まりそうになるので、金髪が後ろから何度も尻を蹴りあげ無理やり歩かせている。「プレバラ、あれはいじめか?」

「そう言つて、ハクアはようやく歩きはじめた。

「いや、ああいうのは『かつあげ』だよ」

変なあだ名がくり返されたことに抵抗を感じたが、タツヤは素直に答えた。ハクアは早足になり、不良たちが入つていった路地のところを曲がり、前方に再び見えた集団の背を睨みつける。

「カツ……わかつた、覚えた。お前は頭がいいけど、あれを見て平気か?」

「悪いことだと思つ。だけど、僕らが注意しても聞かないよ。店員さんを呼ばないと」

「でも、店を出たぞ」

「じゃあ、交番に行かないとダメだ」

「そつか。国には いまさら頼れないな」

意味不明な言葉を残して、次の瞬間、ハクアはタツヤの手を振り払い、まっすぐ駆け出した。ビルの谷間の暗い路地に、ハクアの走る音がよく響く。

「待て、おまえらあああつ!」

赤いランドセルを背負つた女の子が大声を出しながら突進していく。不良たちがすぐに後ろを振り返つた。タツヤは胸の鼓動が一気に速まつたが、足がすくんでハクアを追いかけられなかつた。

「ぶはははっ、なんか小学生が走ってきたぜ!」

ロン毛の不良が集団の前にさつと躍り出て、ハクアの進路に大きく立ちふさがる。ハクアは走る勢いのまま、その足に飛びかかつた。

「貸せッ!」

ハクアはそう発すると、ロン毛から一寸距離を取った。

「ふはつ、貸せとか言つちやつてるよ~。最近のちびっ子はアタマおかしいな」

「ゲームしすぎなんじやね? つたぐ、これだからゆとり世代は「それ、オレらもだる?」

仲間たちが高笑いすると、ロン毛が急にひざから崩れ落ちた。

「あれつ? ! なんでなんで? !」

ロン毛はパニック状態でわめきながら尻もちをついた。仲間がからかう。

「バーか、どうしたんだよ? ちびっ子に負けんなよ~」

「ちがう、足の力が全然入んねえんだよ!」

悲鳴に近い声を上げながら、ロン毛の体はアスファルトの道に転がつた。

「はあ?」

「こいつ、新しい彼女とエッチしすぎてお疲れなんじやないの?」

「うわー超それくせえ。ゆとりのリア充はちびっ子にやられとけ!」

仲間たちがまた笑つてゐる。その間に、ハクアは他の不良たちの足元をすばしつこく動き回つた。

「つたぐ、うぜえな!」

不良たちは手や足を出すのも面倒くさそうに、カバンを振つてハクアを払おうとするが、ハクアは体を低くしてちょこまかと背後に回る。離れた場所から見ているタツヤには、何が起きているのかまったくわからない。ただ、寺野ハクアがさらに一人もう一人と足に飛びかかり、次々と高校生の大きな体を道に転がしていくのだ。もしかして、テレビで見たことがある合氣道とかいうものだろうか。足に飛びつく度に「カセツ!」と言つてゐるが、武道で気合いを入れる発声のようにも聞こえた。

希も一緒にあつけに取られてゐる。

「朱鳥くん……あれつて何なの?」

「わかんない。合氣道つていうやつかも」

「アイキドウ？」

うまく説明ができない。どう見てもハクアは、ただ相手の足に触つていいだけのようだつた。たつたそれだけのことで、不良たちが糸の切れた人形みたいに倒れていく。だがそれにしても、道に倒れた不良が一人も起き上がれないのがどうも変なのだ。みんな何とか必死に立とうともがいでいるが、力む声がするだけで、尻もちの状態から誰も抜け出せない。

あつという間に、六人の不良たちのうち五人を道に横倒しにし、最後に、ブレザーの中学生を太い腕で捕まえている金髪の不良が残つた。すると、ブレザーが逃げないよう、片方の脇で首を絞め、本気の構えになつた。今まで小学生となめてかかつっていた五人とは気配が違う。

それでも、ハクアは同じように後ろに回りこんで、足に飛びつこうとした。だが、金髪の不良はそれを読んでいて、足を真後ろに蹴り出した。その蹴りがハクアに命中し、ハクアの軽い体は吹き飛ばされて道に倒れされた。ランドセルがガシャッとつぶれる音が響いた。

タツヤは息を飲んだ。心臓が止まりそうだった。ハクアは痛みで苦しそうに顔をしかめている。そして、起き上がるうとしたとき、すぐそばに寝ていた不良の一人がハクアの肩をつかんで地面に押しつけた。「あつ！」希が鋭い悲鳴を上げる。もがくハクアの近くに金髪の不良が来て、足で踏みつけようとしていた。

「ハクアーーーー！」

タツヤは路地の入口から大声で叫ぶ。不良たちの注意がタツヤのほうに移る。

「もういいよーーー！　早く逃げろーーー！」

助けを呼びに行く時間なんかない。不良の気を逸らしてハクアを逃がしたい、その一心だつた。いくら武道を習つても、小学生が本気の高校生に敵うわけがないのだ。

「大丈夫！　あたしは助けられるから！」

気迫のこもつたハクアの声が路地の真ん中に再び響く。ハクアは、肩を押さえつけていた不良の脇腹を蹴り、すぐ抜け出して立ち上がった。脇を蹴られた不良はすさまじい苦痛の悲鳴を吐き、うずくまつた。「痛え、痛え」と叫び続ける。道にただ寝かされたときとは明らかに様子が違う。他の不良も異変に気づき、口々に騒いでいる。金髪の不良はハクアに向き合い、カバンを構える。脇に絞められた中学生が逃げようとバタつくが、まったくびくともしない。それだけ強い力で押さえつけているのだ。

「おい、クソガキ、武道とかやつてんだろ」

「ワルに話す義理はない」

ハクアは恐いくらい堂々としている。

「調子に乗るなよ！ さらっちまうぞ！！」

不良の口から出た言葉に、タツヤは体が震えた。いくら何でも高校生相手では無茶だ。どうしてハクアの腕を離してしまったんだろう、どうして逃げろと言つても逃げないんだ、とタツヤは胸が痛む思いだった。

だが、ハクアはまったく物怖じしていない。それどころか不敵に笑つた。

「おどし文句はさ、力の強いほうが言うんだよ

「てめえ！ ふつ飛ばすぞ、オラア！！」

金髪は狙いをすましてカバンを振つた。ハクアは横からの早い一撃を、キックではじき返す。カバンはものすごい破裂音を立てて空中に高く飛び、金髪の体の重心を浮かした。その足元にハクアは迷わず突進する。金髪は足をつかまれまいと、浮いた右足でハクアを蹴り倒そうとする。だが、ハクアはその向かつてきた右足のすねを、なんと正面から力いっぱい蹴り返したのだ。

男子高校生と女子小学生のキック力がぶつかって、小学生が勝てるはずがない。ところが次の瞬間、金髪のキックは完全に撃ち返された。鈍い音とともに、ハクアのほうが見事にキックを振り抜いたのだ。

「ぐああああっ！！」

金髪は今日最大の悲鳴を上げ、体をねじらせて道に倒れた。そのときの衝撃で、ブレザーの中学生は、金髪のヘッドロックから解放された。中学生はよろめきながらも、何とか転ばず踏みとどまりた。すでに半分泣き顔で、道にうめく不良たちを見て、たひたひ歩三歩と後ずさる。

集団の真ん中に一人悠然と立つハクアの顔を見る。だが、どう見ても、通りすがりの正義漢でなく、赤いラングセルを背負った女子小学生であった。

「さて、あとはお金だね」

ハクアが不良たちの顔を見渡した後、短髪の不良に近づいていく。「ねえ。さっきの両替機で取つたお釣り、すぐに返して」

不良は、ハクアに迫られても足がまったく自由にならず、ただ慌てるばかりで、腕を振り回す様子はまるで幼児のだだっこみたいだつた。ハクアはため息をつき、後ろで足を抱えて痛がっている金髪の不良を指差した。

「見てたでしょ？ あんたも、あいつみたいに蹴られたい？」

「ふ、ふざけんな！ クソチビがなに」

「あのさ」よく通る声で、相手の言葉をさえぎった。「もう一回言つけど、おどし文句は、力の強いほつが言つんだよ」

「……」

短髪の不良は押し黙り、ポケットからお札を出してハクアに投げつけた。千円札四枚が宙に舞つて地面に落ちる。ハクアはそれを拾い、立ちすくむブレザーの中学生に渡した。そして、中学生はお礼も何も言わず、青ざめた顔で向こうへ逃げて行つた。

そのあと、希は消え入りそうな声でタツヤのシャツを引いた。

「ハクちゃんを、早く、こっちに……」

「うん……わかった」

タツヤは、ハクアがなぜ高校生に蹴り勝つたのかわからず混乱し

ていて、胸の鼓動もまつたく静まらなかつたが、とにかくハクアをこの危ない場所から早く離れさせたい一心だつた。ランドセルを力ちや力ちや鳴らして駆け寄ると、ハクアも一仕事終えた感じの満足した顔でタツヤのほうに歩いてきた。だが、不良たちは尻もちをついたまま、悠々と自分たちの横を通り過ぎるハクアの姿を野犬のように睨んでいた。

「寺野さん、ケガはない？」

「ん？ ハクアでいいって。さつきそう呼んでくれたでしょ？」

「えつ、あ、うん」

「これからもそう呼んでね。なんかうれしかつたの」

「そつ、そんなことはどうでもいいよ。それよりケガは？」

「うん。ちつと、すりむいた」

何気ない顔で言つが、ひざの皮がめくれ、じわじわと血が出ていた。金髪にはじめ蹴り倒れたときの傷だらけ。これは絶対に痛いはずだ。

「ねえ、早く戻ってきて！ 危ないから！」

希が遠くから一人に声を飛ばす。タツヤは一気に緊張が高まつた。

「ちくしょう！ このクソガキ！」

道に寝ていたロン毛が、手元にあつた何かを拾つて投げた。タツヤは慌ててハクアを手で押すと、ボン！ という音がして、ランドセルに衝撃を受けた。当たつたのはタツヤのランドセルだつた。足元に石が落ちる。ロン毛がどつちを狙つたのか、それともコントロールが狂つたのかはわからない。だが、一步間違えれば、タツヤは後頭部に大きなケガをしていたかもしぬなかつた。身の凍る思いだつた。

「 つたぐ、こりねえやローだなあ！」

タツヤがひるんでいる間に、ハクアが猛スピードでダッシュして、ロン毛を正面から蹴り飛ばした。ロン毛は慌てて両腕でガードしたのだが、その防御をまるで物ともせず、固いアスファルトへ激しく打ち倒した。ロン毛は「うおおお……」と胃から何か吐きそうな声

を出し、仰向けになつてあえいだ。

そして、ロン毛の頭のそばにハクアはしゃがみ、まぶたの上に手を当てた。

「お・に・い・ちゃん」ゾッとするほど可愛い声を出す。「あたしがおにいちゃんに、まつぐらな世界を見せてあげてもいいんだよほら、どう? やつちやつとい?」

タツヤは無邪気な言い方に恐さを感じ、必死でハクアの腕を引っ張つた。

「もういいから! ここから逃げよ!」

「うーん、まあ、そうだね」

大通りまで走つて戻り、途中で希の腕も一緒につかんで、三人で路地から離れた。もう追つてこないとと思う場所まで三人で逃げてから、タツヤはひとまず呼吸を落ち着かせた。ハクアは元気いっぽいだが、希は顔を赤らめ息を切らしている。

タツヤはかなり氣が動転していたが、それでも不良たちの輪から走り去るとき、不思議なものを見た気がした。何人かのおでこに桜の花みたいなアザがあるのを見たのだ。不良たちがゲーセンを出てきたときは、誰にもこんなアザはなかつた。だが、ハクアに倒された不良たちをそばで見たとき、全員にくつきりとアザがあつたのだ。ハクアはおでこなんて蹴つていないので。

それから、落ち着いて考えれば、ハクアが不良たちを打ち負かした強さは、どう考へても変だつた。男子高校生が、小学生に転ばされて起き上がりれないなんて信じられない。小学生の女の子とキックを打ち合つて負けるなんて。これだけおかしなことが重なつて、タツヤは寺野ハクアという転校生にきちんと話を聞かないといけない、と決心した。

「寺野さん、さつき、いつたい何をしたの?」

「ん、なつて? ケンカはダメ?」

「そうじやないよ。あれは、普通のケンカじやない と僕は思う
ハクアの目つきが変わる。はつきりとまじめな顔になつた。

「僕のテストのことも、田本さんの身体測定のことも、絶対おかしいと思つんだ」

タツヤは続ける。希も不安げな田でじつと睨つめっこる。

「……あたしに何が聞きたいの？」

「僕もわかんない。だから寺野さんから、ちやんと僕たちに語つて」
しかし、次にあつたのは沈黙だった。ハクアは不良を倒したときは違う險しさでタツヤを見る。タツヤも田を逸らさなかつた。希がこわごわと口をはさむ。

「朱鳥くん……。ハクちゃん、ひざをケガしてるから、先に手当しあつがいいよ」

言われて思い出した。走つたせいで、血がさらに流れで真つ赤になつてゐる。ハクアもどうして痛いと口に出さないのか。

「うん、やうだね。」めん

「あのや」

ハクアもよつやく重い口を開く。少し悲しげな顔つきになつていた。

「じゃあ、今からうちに来てよ。」めん、話すのイヤだから……

ハクアの家は町外れにあった。大人が一人暮らしするようなワンルームマンションだ。前の小学校が隕石で壊れて、一人だけ美星町に引っ越してきたと聞いたが、よく考えれば、小学校が壊れたこととハクアの引っ越しが関係がないように思える。

ドアを開けて、湿り気のある部屋に入る。広さはタツヤの部屋よりも少しあるが、小さなキッチン以外はたった一部屋だけ。床には布団がくちゃくちゃになっていた。家具らしいものは全然ない。テレビも電話も本棚もない。部屋の角には、服が入っている大きなプラスチックケースが三つ重ねて積まれていた。中の服は、赤やオレンジや黄色がやたら多い。

まずは、押入れの中からほこりだらけの救急箱を探し出し、希が消毒液と脱脂綿でハクアの傷を手当てした。包帯はなかつたので、きれいなガーゼを当ててテープで止めた。ハクアはお礼を言い、布団をすみに押しのけた。顔色を見ると、痛みもだいぶ引いたようだ。

「うーん。さてと、どうから話そうかな」

ハクアはキッチンの小さな冷蔵庫から、コーラの大きなペットボトルを取り出す。さつきのギガバーガーと言い、本当に体に悪そうなものしか口にしていない感じだ。

希も、ずっと不思議そうに部屋を眺めていた。紙コップにコーラを注いで出されたが、一口つけただけで、すぐ置いてしまった。炭酸が苦手なのかもしね。

「ハクちゃん、お母さんは働いてるの？」

「いないよ」

ハクアはさらっと呟つ。うつと同じだ、とタツヤは胸の内で思つたが言わなかつた。

「あ、ごめんね……」

「いやいや気にしないで。お父さんもいないし

「えつ？！」

タツヤと希は一人して目を丸くした。両親がいない人というのは同級生にはいない。希は少しショックを受けたのか、急に黙りこんでしまった。タツヤが続ける。

「いないつて……？」

「失踪。 行方不明って言つたほうがわかる？」

二人の口が一気に重くなる。これ以上何を聞いていいのかわからない。両親が行方不明というのが想像できない。

「……なんで？」

「わかんない」

「い、いつから？」

「生まれたときから」

ハクアの説明では、生まれて数ヶ月後に両親がいきなり行方不明になつてしまつたらしい。身寄りがなかつたので、施設に入れられ、小学校四年までそこで過ごしたと言つた。そのとき通つっていたのは山都小学校の前の小学校だつたらしい。山都小学校に転校したのは、養父になりたいという人が名乗り出てきたからで、施設を出て、その人の家に住んだと言う。タツヤはつらいはずの身の上をカラッと話すハクアに対し、胸が苦しくなる。

「じゃあ、転校は二回してるんだね」

「まあね」

「養父の人はどこにいるの？ 一緒に住んでないの？」

「会つたことないんだよね」

「えつ？！」

養父はアメリカに住んでいて、授業料も出してくれるし、家賃や食費も銀行口座に毎月送ってくれるが、顔は知らないという。仲介人という弁護士の人から、山都小学校に入る手続きをしてもらつて、それで一年は過ごしたが、隕石落下事故で別の小学校にまた転校が必要になつて、そうしたら、養父からは山都小学校跡から離れて暮らすように、と依頼があり、弁護士の人人が選んだのはこの美星町だ

つたというのだ。

自分たちのこれまでと共通点がなさすぎるハクアの話に、タツヤと希はすっかり混乱状態だつた。顔も見たことがない人から生活費をもらつていい、というのが何となく不気味だつた。ただ、別に悪いことではないのはわかる。もちろん、両親が行方不明というのは気が重い話だけれど。

「じゃあ、一人で住んでるんだ」

ふにゃふにゃになつた紙コップを持ち、タツヤはコーラを飲み干す。ハクアはすぐおかわりを注いでくれたが、一杯で十分だつた。

「うん。昔住んでた施設は、一緒に住んでる子どもが何人かいただけ、あんまり仲良くなかったんだ。ほんと、一人がいいよ」

「そうかなあ……」

「ねえ、ハクちゃん、なんで施設のみんなと仲良くなかったの？」

希がふいに口を開く。希は、仲間外れとかそういう言葉に敏感だつた。女の子ならよく仲良しグループに分かれるが、希はあまりそれがあまり好きでなく、かといって、十和田霧枝のように誰に対してもどんどん口を出す性格でもない。ただ、自分から傷の手当をすると言い出すほど、ハクアともつと仲良くなりたいと思つてているのだと思う。

「性格が合わなかつたんだよ」

ハクアは伸びをしながら答えた。希は悲しい顔をしたが、ハクアは気にしていない。

「あと、施設のごはんは、肉がいつも少なかつたんだ。オカズハンターをしそぎたら、みんなから嫌われちゃつた」

「オカズハンターって？」希がまじめに聞く。

「となりの子のお皿から、肉を盗る奥義だよ

それはダメだろつ。

タツヤが聞きたい話は、ハクアの身の上ではなかつた。今まで

に起こつたおかしなことを、少しでもすつきりさせたかったのだ。

窓の外を見ると、日もだいぶ暮れてきた。きれいな夕陽の色が、三人のこじんまり座る部屋へ斜めに射しこんでくる。

「寺野さん、話すつて言つた約束だよ」

ハクアは笑つた。

「そんな恐い顔するなつて。『まかしてるわけじゃないから』

「朱鳥くん……」

「ただね、これは一人だけの秘密にしてほしい」

「うん、と真剣にうなずく。

「あたし、超能力を使えるんだ」

「えつ？！」

「うーん、どちら話そつかなあ」

「いや……」

「超能力はね、体に適性がある人とない人がいて、適性があつても普通は発動できないんだけど、隕石が近くに落ちてきたときに目覚めることがあるんだつて。あたしはそれが早くて、小学一年生のとき

「ちょっと、ちょっと、待つて！」

タツヤは慌ててハクアの話を止めた。希も一緒に目を丸くしてい

る。

「超能力つて？」

「だからいま言つたじゃん。体に適性がある人がいて」

「そうじやなくつて！ 本当に、超能力なんてあるの？ あの、テレビ番組とかでたまに子どもを探すとかやつてるやつ？」

「うーん。テレビ見ないからわかんないけど、あたしは子どもは探索しないよ」

「じゃあ、何ができるの？ 透視とか？ 瞬間移動とか？」

「そんなものはない。少なくとも、『メテオドロップ』にはない『意味不明な言葉がまた飛び出した。超能力という言葉はイメージできる。スプーンを曲げたり、壁や封筒で隠されたものを当てたり、

行つたことがない場所を写真に映したり、そんな怪しげなテレビは見たことがある。だけど。

「メテオ……？」

「うん。さつき言った、体に超能力の適性がある人で、隕石のせいで目覚めた超能力を『メテオドロップ』って言うの。あたしはそれが使える人なの。どう、わかる？」

「……ごめん、まだわからない。隕石ってのは、山都小に落ちたやつ？」

「違うよ。山都小に隕石が落ちるずっと前から、あたしは超能力を使えたの。でも、隕石で目覚める超能力だから、隕石に近づくと体に変化があるみたいなの。それで、今回は引っ越しになつたんだと思う」

「むずかしいな……」

希も一緒にうんうんと同調した。

「じゃあ、超能力の話をするよ。あたしの使える能力は、『レンタルフォース』っていうんだ。これは、人の力を借りて自分の力にプラスするものなんだ。すごいでしょ？」

「えっと、人の力を借りる……？」

「うん。実際にやってみるよ」

そう言つて、ハクアはいきなりタツヤの横に迫ってきて、耳をつかんだ。熱い指先が耳たぶに触れて、心臓が高鳴つた。女の子に耳を触られるなんて生まれて初めてだ。

「借りるね」

すると世界がいきなり無音になつた。

目の前で、ハクアが何か話しかけてくるが、ぼそぼそと低い音しか聞こえない。ハクアが拍手をしたり、手でテーブルを叩いたりしたが、音がまったく耳に届かない。急に孤独の恐さが一気にこみあげてきて、背筋がゾクゾクと震えた。「あ、あ、あ」と言つたはずが、自分の声が、自分の耳に聞こえない。これは、これはどうなるんだ！ もし一生このままだつたら！

希のほうを向くと、ハクアと希で何か話しているようだが、やはり聞こえない。すると、希がピンクのポシェットから携帯電話を取り出して、タツヤの顔を写真に撮つた。何をされているのかわからぬ。頭が混乱して、目頭も熱くなつていた。

そして、横からいきなりまた耳を触られた。驚いてハクアのほうに振り返る。

「どう？」

音が戻つた。

「聞こえるでしょ？」

もちろん聞こえるが、ハクアの顔が近くて思わず後ずさつた。タツヤはすっかりのどがカラカラになつていて、仕方なく氣の抜けたコーラを流しこむ。

「要はこんな感じなんだ」

「……ごめん、もう少しちゃんと説明して」

「いま、レンタルフォースの能力を使って、プレパ　ごめん。えっと、たつつの聽力を借りたの。だから、たつつんは音が全然聞こえなくなつて、あたしはたつつんから借りた分の聽力がアップしたんだ。それで、さつきちょっと遠い踏切の音まで聞こえたけど、のぞみんは聞こえてないよね？」

ハクアは説明がいつもマイペースだ。

「えっと……うん、踏切の音は聞こえてないよ」

希がこわごわと答える。あだ名は、タツヤはたつん、希はのぞみんになつたようだ。

「僕も、いきなり音が聞こえなくなつた」

「この能力は、右手が発動で、左手が解除なの。だから、右手で触つたら音が聞こえなくなつて、左手で触つたら元に戻るんだ」

「……でも、左耳を触られただけで両方が聞こえなくなつたよ」

「借りるのは『力』なの。両方の耳に触らなくても聽力を借りられるんだ」

人から力を借りる超能力。何だか信じられない。だが、タツヤは

実際に何も聞こえない世界と、元通りの世界の両方をこの短い時間で体験してしまった。これはマジックなんかではない。

ハクアは自分の「コーラを飲み干し、四杯目か五杯目かを紙コップになみなみと注ぐ。そう言えば、ギガバーガーセットのドリンクも「コーラだつた気がする。

タツヤは深いため息をついた。

「やつと意味がわかった」

「たつんは、ほんと飲みこみがいいね！」

実体験すれば、そんなに難しい話ではないとタツヤは感じた。

「寺野さんが使える超能力はその『レンタルフォース』だけ？」

「うん、そう」

「そうか　じゃあ、理科のテストも、視力検査もこれを使つたんだね？　それで、僕はすごくショックを受けて、月本さんは保健室に運ばれたんだ」

ハクアの顔に浮かんでいた笑みが消えた。

また、三人の間に沈黙が生まれる。

「あ、でも……」

希が何か言おうとしたが、タツヤはさえぎった。

「僕のテストのことはもういいよ。だけど、月本さんにはちゃんと説明して、謝つてほしい。それと、もし月本さんが許してくれたつて、友達の視力を勝手に取つてしまふ人と、僕は友達になれない」

ハクアはしおれた顔で、一部始終を素直に打ち明けた。まず、理科のテストの件はやはりタツヤの知力を一時的に借りたのだ。テスト直前にタツヤの後頭部に右手で触つて、「借りる」という発動条件になる言葉を言い、テストを解いた。プレパラートと答える問題がわからなかつたのは、実はタツヤがわからなかつたということだ。そして視力検査については、ハクアは最近目が悪くなつていたが、メガネやコンタクトをつけるのがすごく嫌で、どうしようかと迷っていた。そうしたら、すぐ前の希が視力2・0で、ついやつてしま

つたというのだ。希のそばに行って、まぶたを触つて視力を借りた。それで希の視力2・0がプラスされた。希が保健室に運ばれたので、しまつたと思って、終わつてから保健室に行くクラスメイトについて行き、希をベッドから起こすとき、左手でまぶたを触つて元に戻したのだ。

「たつりん、のぞみん、本当にごめんなさい」

ハクアは深々と頭を下げる。

「わたしはもういいよ。すぐ治つたんだし」

希はやさしすぎる。いきなり視力を奪われて、目の前が異常な世界になる恐さを体験したはずだ。タツヤも聴力を奪われたとき、音のない世界に突然放り出された。まだ目の前に二人がいて、しかもハクアに何かされたとわかつてから良かつたが、保健室に運ばれてベッドにいたときの希は、もっと大きなショックがあつただろうとタツヤは思う。しかも、メガネやコントラクトが嫌だという自分勝手な理由なのだ。それを簡単に許す希は、本当にやさしすぎる。タツヤは真相を聞いて、再び深いため息をつく。

「不良とのケンカも、その能力を使つたの？」

「うん、そうだよ。あれは、連れてかれる人を何とか助けようと思つたから……」

「どうやつて？」

「あいつらの足に触つて、脚力を取つたの。それだと立つてられないから、逃がすのには一番いいんだよ」

「そつか、そういうことか」

「あと、脚力を借りると、あたしの脚力もアップするから、あのときあいつら五人分のキック力がプラスされてたの。最後の金髪のやつは、足を触らせないようにカバンを使つたり蹴つたりしてきたから、足を思いきり蹴り返してやつたんだ！」

高校生五人分の脚力があれば、かなり強力なキックになる。金髪が振り回したカバンを蹴り飛ばしたこともわかるし、金髪とハクアがキックを打ち合つたとき、あれは一対五だったというわけだ。

「あつ！ なあ、解除は左手で触るんだる？ ジャあ、あの高校生たちはあのままずつと起き上がりれないの？」

「ううん。ずっと借りてるのは無理で、だいたい三十分くらいで勝手に戻っちゃうんだ。あいつらはもう歩けると思つよ」

「そなんだ」

だが、一時的な効果だけれど、このハクアの超能力はとんでもない凶器だと思つた。もし一対一でも、最初に相手の視力や脚力をなくしてしまえば、相手は一気に弱くなる。脚力がプラスになれば攻撃するのも逃げるのも思い通りだ。そして、そんな超能力を持つ人が、普通にここにいるということがかなり恐くなつた。もしかして、これは警察に言つたほうが

「すごかつたよね！」

「えつ？」

「ハクちゃんがあの中学生を助けたときだよ。朱鳥くんもそう思つたでしょ？」

希が強引にハクアの好感度を持ち上げようとしている。あの勇気と行動力はすごいと思つた。タツヤもそれはわかっていた。カツアがされたお金もちゃんと取り返した。ハクアが誰よりも一生懸命で、すごく頼りになつた。それもわかつていた。だが、倒した不良に対し、追い打ちで視力まで奪おうとしたハクアの性格の恐さも一緒に思い出す。それを見たのはタツヤだけだ。

「ハクちゃんの能力つて、絶対にもつと人の役に立つと思つんだよね」

あれだけ危険な能力の話を聞いて、希は何も恐れずハクアの両手をぎゅっと握る。

「えつ……そろかな？」

ハクアもすぐ調子に乗せられている。あれほど深々と同級生二人に頭を下げた反省の心はもうどこかへ消えたのだろうか。

「うん。ほんと、ハクちゃんはすごいと思うよ。重いものとか運べるだし、高いところのものとか取れそうだし、固いビンのふたと

かも取れちゃうかも！」

希の明るい笑顔を横で見ているのがつらい。タツヤは聴力を奪われていたときの恐怖が頭にこびりついていた。あんな恐ろしい感覚は忘れようとも簡単に忘れられない。

「でも、そのぶん、誰かの力はなくなるんだよ。レンタルフォースつて、そういうものなんじやないの？」

ハクアは黙っている。結局その通りなのだ。静まった時間が、重く、胸に積み重なる。

だが、希は珍しくタツヤの言葉に対し、首を横に振った。

「でもね、朱鳥くん。ちゃんと返せるんだから大丈夫だよ。ハクちゃんもさつき反省して謝ったんだし、それでも友達にまだなれなつていうのは悲しいよ。友達なら、ハクちゃんがこの力をうまく世の中に入れてられるように応援するものなんじやないの？」

「だけど……」

タツヤはささつき警察に通報することまで考えてしまった。希の言葉はよくわかる。ときどき、それは何も言い返せないほどタツヤの弱い部分に真正面から入ってくるのだ。どうして希の言葉はこんなに簡単で、やさしく、強いのか。

「ハクちゃんの力はみんなに教えられないけれど、今日から、わたしたちが美星小のハクちゃん応援団だよ」

ハクアはじつとうつむいている。少し涙ぐんでいるのかもしれない。

「隕石って、ほんとに奇跡みたいな確率で地球に降ってくるんだよ。『天文係』のわたしたちがハクちゃんの応援団になるのも、奇跡みたいなものだよね」

希はまっすぐな瞳で、タツヤの手をぎゅっと強く握つてくる。手のひらが熱く汗ばんでいる。隕石の確率とかはたぶんデタラメだ。でも、希に手を握られるともうタツヤは何も話せなくなるのだ。

タツヤは、目を赤くはらしたハクアの顔を見た。小さな肩を震わせ、鼻をすすつていて。もしかしたら、これまでの施設や小学校で

は、この能力を人に役立てようなんて言う友達はいなかつたのかもしれない。だつたら、これだけハクアが明るく腹を割つて話してくれたのも、自分と希を信じようといつ氣持ちなんじやないか、とタツヤは感じた。

「朱鳥くんがわたしのことを心配してくれるのはうれしいの。でもね、わたしはぜんぜん大丈夫。あれくらい宇宙サイズで考えたら小さことだよ！」

まあ、宇宙サイズで、考えたら……。

そして、とじめを刺すよ^{うこ}、希が上田づかいでタツヤの顔を覗いてくる。

「こんなにお願いしてもダメ？」

「いや……」

「ハクちゃんとわたしはもう友達なんだよ。朱鳥くんもちゃんと言つてね」

ここで謝るタイミングをなくしてはダメだ 転校してすぐ『友達にはなれない』なんて言われたら、自分ならどうしようもなく落ちこんでしまうはずだ。

「ごめん」

「もう。ちがうよ、ハクちゃんに言つて」

希にしかられて、ハクアと向き合つ。どちらも恥ずかしくて顔が真つ赤だった。

「ほんとはもう怒つてないんだ。ハクアの秘密は守るよ。あと、困つたときは僕も力を貸すよ。もう、僕は『たつりん』だから『言葉にして、心のつかえがすつと和らいだ』

「ありがと。良かつたね、ハクちゃん」

「うんつ！ たつりん、ありゲフフツ」

炭酸のゲップが混ざつて大事なところが台無しだった。

希の習い事の時間が迫つていたので、二人は帰ることにした。ハ

クアはすつきりした顔で、マンションの前まで見送りに来てくれた。歩き出すと、ハクアは「あつ、大事なことを忘れてた」と希を呼び止めて、タツヤに携帯の写真を見せるよつと云つた。

「携帯の？」

「うん。さつさ、レンタルフォースの実験しているときに撮つたやつ」

「ああ……なんで僕の顔なんか
ん？ ほら。かわいいでしょ」

希が、携帯のデータフォルダに入れたタツヤの顔写真を見せる。そこには、おでこに桜の花びら というよりは、犬か猫の肉球みたいなアザができていた。ハクアが倒した不良たちのおでこにあつたものと似ている気がする。ハクアが説明をする。

「レンタルフォースで力を借りているとき、相手のおでこに猫の手っぽい形のアザができるんだよ。で、力を返すと消えるんだ。かわいいだる？」

これが、霧枝が希のおでこで叩きした花びらのアザとか、タツヤが不良たちのおでこに見たアザのことか。

「ハクちゃんは携帯持つてないんだよね。じゃ、あとで朱鳥くんにも送るね」

「いっ、要らねーよ！ 早く削除しろって！」

「ダメ。ハクちゃんとどの友達記念だよ」

希は夕陽に照らされた温かい笑顔で、うれしそうに携帯をポシェットにしまつた。

不思議な気分だった。朱鳥タツヤは部屋のベッドに寝転がり、ぼんやりとしていた。まだ胸が少しどキドキしている。自分が作つた晩ご飯の味もよく覚えていない。ただ窓の外を眺めると、隕石が落ちたあの夜みたいに、今夜も星空がきれいだった。

あたし、超能力が使えるんだ。

寺野ハクアは明るい顔で打ち明けた。他人の力を借りられる超能力『レンタルフォース』。それはすごい。驚いた。本当にすごい。だけど、使い方を想像するとやつぱり恐かつた。聴力を取られて何も聞こえなくなつたあの感覚を思い出す。自分が自分でなくなつたようなパニック状態になつた。

ハクアはマンションの小さな部屋に一人きり。両親もいなくて、兄弟もいなくて、養父という人に会つたこともないと言つていた。力を借りる他人が、ハクアのまわりには同級生くらいしかいないのだ。冷蔵庫にはコーラしか入つてなくて、ちゃんとしたご飯も食べていられない感じだった。

ハクちゃんの能力つて、絶対にもつと人の役に立つと思うんだよね。

月本希の笑顔が浮かんでくる。タツヤはあのとき希の勢いに負けてしまつたが、本当にそなのかな、と少し冷めた頭で思い直す。ハクアの能力があつたら役立つことって……と考えてみたが、あまり思いつかなかつた。それに、能力を秘密にしたまま世の中に役立てるなんて本当にできるのかな、と疑問に思う。

気分転換をしようと、枕もとのマンガに手を伸ばした。ちょうど主人公が仲間のパワーを集めて最強クラスの魔法を放ち、魔剣士を倒すクライマックスだった。だが、タツヤにとつては、あの不良高校生たちをすべて倒したハクアのほうがずっと迫力があった。不良たちが道に倒れる音、カバンを蹴り返す大きな衝撃音、キックが思

いきりぶつかつた生々しい音、全部はっきり記憶に残っている。

ケン力で役に立つたって意味がない。ケン力なんて無いほうが多いに決まっている。タツヤはなぜか少し不安な気分になり、マンガを途中で閉じた。ため息が出る。

携帯を取り、希に何となくメールを送つたら、『起きてるよ 眠れないの どうしたの?』という返事がすぐ来た。タツヤは、ハクアの超能力のことをどう思つているか希に聞きたかったし、たぶん希が眠れない理由も同じだと思つたけれど、メールに書けなかつた。結局、返信は『星を見てたらメールしたくなつた ごめん おやすみ』と書いて送つた。タツヤは自分でも意味が分からなかつた。でも、希から『なんかうれしいかも おやすみ』と返つてきて、そのまま部屋の電気を落とし、もう少しだけ星空を眺めて眠つた。

次の朝、教室に入ると、ハクアはいつもと変わらず熱帯系の派手な色のTシャツを着て、いつも変わらない感じで話しかけてきた。あんなすごいケン力をして、ひざをケガして、超能力の秘密を話したのに、不思議なくらい普通の笑顔でいさつをしてきた。タツヤより早く教室に来ていた希も、タツヤの姿を見て二人のそばに来た。胸に大きな赤いリボンのついたブラウスを着ている。

「朱鳥くん、ハクちゃん、おはよう」

「おはよう」

「ウイース! 昨日はおつかれさん!」

ハクアはなぜかいつもチンピラみたいな軽いノリのいさつだつた。希がクスクス笑う。

「ハクちゃん、ひざは大丈夫? もう痛くない?」

黒いショートパンツから日焼けした足がむき出しで、ひざはバンソウコウが何枚も適当に貼られていた。

「これくらい余裕、余裕」

「ハクちゃんは本当に元気だね」

「うん、風の子だからね」

それは冬に使う言葉だと思ったが、タツヤは何となく黙っていた。ハクアは唇をとがらせて机の下でタツヤのイスをコシコシと蹴る。

「どうした？ タツヤは暗いな」

「ぐ、暗くはないよ」

「そつか。ならいいや。よし、これは一人におわびのシルシだ」

そう言つてハクアは赤いランドセルからガサガサと音を立て、コンビニの白いビニール袋を出した。そして机の上に、うまい棒を原本も取り出した。なぜかサラミ味ばかりだ。

「十本買つた。一人に好きなだけもらつてほしい」

「えつ、ハクちゃん……ダメだよ」

希は小声になり、慌ててうまい棒をビニール袋に戻した。近くの席の同級生も少し物音に気づいたが、幸い、学校委員の十和田霧枝に大声で告げ口する人はいなかつた。

「いや、そんな遠慮するなつて。サラミ味はダメか？」

タツヤは首を横に振る。パンパンにふくらみじこつじこつしたビニール袋をランドセルに突つこんだ。急いでやつたので、うまい棒が少し割れたかもしれない。

「違うよ、ハクア。学校にお菓子持つたらダメなんだよ」

「えつ、マジで？！」

「当たり前だよ。前の小学校は良かつたの？」

「いや、ダメだつた」

「じゃあ、ダメじゃん！」

晴海先生が教室に入つてきて、日直が起立の号令をかけ、チャイムが鳴り、希は小走りに席へ戻つた。

ハクアが超能力が使えると分かつたからと言つて、毎日おかしなことが起きるわけでもなく、ハクアも授業にだんだん追いついてきたみたいで、何事もなく普通に終わつた。放課後、あらためて学校帰りに公園のベンチで、一人はハクアからうまい棒を配られた。

希は辛いスナックはちょっと苦手と言つて、一本しか取らなかつたので、ハ本もタツヤがもらひつことになつた。やはり全部サラミ味だつた。希がうまい棒をそのままランドセルに入れようとしたので、タツヤは希にビニール袋をあげた。

「朱鳥くんはやさしいね」

希にまつすぐ微笑まれると恥ずかしかつたが、いま食べる用を一本残して、あとは全部ランドセルの平べつたいポケットに並べて入れた。ハクアがじつと見ている。

「ハクアも食べるよね？」一本渡す。

「もちろんだ！ 十円で食べられるサラミなんて！」

サラミじゃないと思うけれど、タツヤは静かに袋を破つてかじつた。それより、タツヤにとって、女の子を下の名前で呼び捨てるのはハクアだけで、たつた一日で言い慣れてしまつたことが不思議だ。何だか男友達みたいだからかな、とタツヤは感じる。

「ハクア」

「たつくん、今日は顔が暗いな。サラミ味じやないのが良かつたか？」

「違うよ。……ねえ、ハクアは両親がいなくて寂しくないの？」

タツヤはストレートに聞いた。ハクアは顔色を変えずにつまい棒にかぶりつく。

「いないものは仕方ない」

「ハクちゃん……」希が悲しい顔をする。

「いないものは仕方ない」

ハクアは一度くり返し言つた。

「実は、うちもお母さんがいないんだ」

タツヤは告白する。希が心配げな目で何か口を挟みかけたが、結局黙つたままだつた。希は両親、おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしている。タツヤは運動会や町内会の行事で見てうらやましいと思ったことがある。だから、ハクアのことを考へると、どうしても超能力より一人暮らしであることに気がいつてしまふのだ。

ハクアはうまい棒のしつぽを噛み碎いて完食した。

「お母さんは、死んだのか？」

「ずしんと重い言葉だった。うまい棒を食べるタツヤの口が止まる。

「うん、一年前に病気でね……」

入院していた病院で死んだ日のことを今でもよく覚えている。あのとき、妹を連れて初めてタクシーに乗った。父親の廉太郎が病院に駆けつけたのはその少し後だった。

いつも明るい母親が大好きで、葬式の後もタツヤはずつとめそめと泣いてばかりいたが、あんまり泣いたらお父さんが悲しむよ、と担任の先生に言つてもらつた。クラスの中には離婚して片親の家庭である子も何人か知つていた。だけど、自分の母親がいなくなるなんてちつとも思つていなかつたのだ。

「そつか、暗い理由はそれなんだな」

ハクアは勝手にタツヤのランドセルに手を伸ばし、うまい棒をもう一本抜き取つた。何も言う気は起きなかつた。

「たつくんは、ほんとにやせしいな。あたしのことも心配してくれてうれしいよ」

「うん……でも、ハクアは明るいよね」

「まあな。落ちこむとご飯おいしくないし。でも、あたしもあんな力より、ちゃんと親がいてくれたらなあ、つて思うんだー」

「……ハクちゃん」

「けどさ、いないものは仕方ないし、あるものは仕方ない。よく分かんないけど、たまたまそうなつたんだよ。でも、おいしいものを食べたい、仲のいい友達を作りたい、好きな子とおしゃべりしたい、とかはみんなと同じでしょ」

「うん」

タツヤの心配をよそに、ハクアはにっこりと笑つた。

「弱いなら強くなる、暗いなら明るくなる、怒つたらぶつかる、お腹が空いたらご飯を食べる。それで大丈夫なんだよ」

「そうだね」

タツヤも少しそつくりした笑顔を返した。ハクアの目を見れば、少しも悩んでいないし、美星小でも楽しい毎日を送っているようを感じる。

「たつりん、だからや、ちょっとお願いがあるんだ」

「うん、なに?」

「今度のぞみんと一緒に、たつりんのつむに泊まりに行つていいよね?」

「えつ?」

タツヤもいきなり驚いたが、希もきよとんとした顔をしている。そんなことは全然話していなかつたみたいだ。タツヤは家に同級生の女の子を泊めたことは今までない。ハクアは本当に強引な性格で、少し戸惑つてしまつが不思議と嫌な感じはなかつた。

ハクアは得意げな顔で、タツヤの田の奥をぐいっと覗きこむ。

「ねつ、寂しければ遊びに行けばいいんだよ」

「……うん、じゃあ、土曜日とかに来てよ。田本さんは、習い事あつたつけ?」

「ううん、土曜の夜はないよ。じゃあ、お母さんに言ひとくね。うわあ、すつごい楽しみ」

希も当然タツヤの家に泊まるのはこれが初めてだ。

「ハイ、決まり!」

ハクアはうれしそうに声を上げ、うまい棒の粉がついた指先をペロリとなめた。

「あー、なんか、やっぱり本物のサラミが食べたくなつてきたよね! ちょっと買いに行かない?」

「えつ? いや、そうでもないけど……コンビニなら一緒に行くよ」

そして、ハクアがコンビニのおつまみコーナーで、ベビーサラミのお徳用パックを買つのに付き合つた。ハクアは店を出て早速パックを開け、二三個食べはじめた。サラミの臭いが鼻まで迫つてくる。さらに、希も一個、タツヤも五個渡されたが、これ以上ビール袋なしでランドセルに入れると、本当に中が肉臭くなりそうだったので

で、ハクアのコンビニ袋をもらうことにした。

「じゃあまた明日ね！ たつん、のぞみん」

ハクアは携帯も家の電話もないから話すのはまた明日だ。さすがに夕焼けのなか、サラミのパックを裸で持ちながら帰るハクアの後ろ姿を見たら、超能力のことを抜きにしても、本当に変わった友達ができた、とタツヤは感じた。希は習い事があるので、少し急ぎ足で帰つて行つた。

その晩タツヤは、父親の廉太郎に土曜日のお泊まり会の許可をもらつた。五個のベビーサラミは廉太郎のビールのつまみになつた。妹の由果も、希には何度か会つたことがあるし、ハクアのことはすごい興味があつたみたいで、お泊まり会をすごく喜んでくれた。タツヤは、作る料理の量が増えて大変だなと思ったが、何となく心が晴れた気がして、キッチンのカレンダーに赤ペンで花丸マークを描いた。

土曜日の六時、空のまだ明るい時間、タツヤの家から近いスーパーの前で待ち合わせて、ジュースやお菓子を買って行つた。ハクアは唐辛子みたいに一面真つ赤なタンクトップと黒いスポーツバッグを担ぎ、希は花柄のワンピースを着て、編みカゴのトートバッグをさげていた。

スーパーで、ハクアは一晩お世話になるからと言つてソーセージの袋を買つたが、たぶん自分でかなり食べるだろうな、とタツヤは横目で見ていた。ギガバーガーとかサラミとかソーセージとか、ハクアは本当に肉が大好きで、ちゃんと野菜を食べてるのか心配になるくらいだ。ただまあ、タツヤは今夜の夕食はハンバーグを作る予定だつた。ちなみに、希は牛乳プリンを一個買つた。由果もこれが大好きなのだ。

廉太郎は駅近くのスポーツジムのインストラクターをしていて、土日はたいてい出勤していた。今日は夜八時くらいに帰るので先に

食べていよいと聞いている。

タツヤの家は、中古の一階建てを五年前にローンで買ったものだ。駅からは遠くてバスが必要だが、タツヤは不便に思つたことはない。廉太郎はスポーツジムの店長をしていてまあまあの収入もあり、また母親の遺したお金で普通の生活は十分できていた。

家に着くと、由果がリビングで寝転びテレビを見ていた。水玉模様の靴下を上に向け、パタパタとさせている。

「うわっ、先客がいた！」

ハクアが驚いて目を丸くする。

「いや、妹だよ。顔似てるだろ？」

「あっ、そうなんだ。いくつ？　名前は？」

タツヤは由果にテレビを止めてあいさつするよう言つた。

「朱鳥由果です。三年生です。あの……ハクアさんですか？」

「おおっ、正解！　よろしくね！　たつつの一個下かー。かわいいなあ、ゆかたん！」

「へっ？　あ、あの……」

由果のあだ名は一瞬でゆかたんになつたようだ。由果はハクアの勢いに少し気後れしているが、無理もない。また希も、由果に会うのは一ヶ月ぶりくらいで、由果の背は大して変わつていないのに大きくなつたと言つて喜ばせている。

タツヤは一人をリビングに残して、ひとりキッチンに入った。ハンバーグの種は昼間に作つてあり、炊飯器もタイマーで炊いてあり、あとはサラダを作つたり、ハンバーグを焼いたりするだけだつた。換気扇を回し、紙パックの「ーンポタージュを鍋に注いで火にかけろ。タツヤはクラスの中でもかなり背が高いほうで、調理台の高さも平氣だつた。

ハクアが由果のそばに座るなり、由果の悲鳴がリビングに響いた。いきなりなれなれしく由果のほっぺをぷにぷにして遊びはじめたのだ。希は、キッチンでタツヤを手伝おつか迷つたが、ハクアと由果を放つておけなくて、二人の近くにすつと座つた。

「ハクちゃん、無茶しないでね。由果ちゃん、大丈夫?」

「うえ……うん」

由果はまともにしゃべれそうにはないが、泣きそうな顔はしていな

い。

「あれ? のぞみんはゆかたんに会つのは初めてじゃないんだつけ?」

ハクアはほっぺをこじる手を少しゆるめる。

「うん、今日が三回目だよ。お泊まりは初めてだけど」

「そつか。なに? 宿題とか?」

「ううん、先月、『天文新聞』をこじで作ったの

「天文新聞?」

「クラスの廊下に貼る、星のことを書いた新聞だよ。暮田先生にお願いして『天文係』を作つてもらって、朱鳥くんと一緒に新聞を書いてるんだ」

「へー。二人で?」

ハクアは由果のほっぺに飽きたみたいで、由果の頭をくりくり撫でていた。

「……そうだよ?」

希は少し引つこんだ声で返す。

「そつか、大変そうだね。なら、あの隕石のことも書くの?」

一週間前、山都小に落ちて校舎を壊してしまった隕石のことだ。ただ、ハクアの話では隕石の落下現場には普通の人は入れないらしい。それに、山都小は車でないと行くのが難しい場所だった。

「隕石つて?」

由果が希に聞く。

「ほり、流星のことだよ」

「あー。お兄ちゃんと希おねえちゃんが見に行つたやつ?」

希は顔を赤くする。

「つうん、見に行つたんじゃなくて、たまたま天体観測に行つたら運良く見ただけだよ」

ハクアは赤くなつた希の顔を面白そうに横から覗きこむ。

「へー、二人は仲いいんだなあ。チューとかした？」

「しつ、しないよ！ 由果ちゃんの前で何言つてんの？」

「ハハハツ、あわてない、あわてない。赤くなつたのぞみんもかわいいねー」

「全然そんなんじやないし！ 天文係の活動なのつ！」

希は本気で怒つていたが、キッチンで野菜を洗つたり切つたりしているタツヤの耳に入らぬように、小声でハクアに返した。ハクアはちよつと希をつづいただけで、もう天文新聞にも隕石にも興味がなくなつたようで、由果のすべすべした肌を触るうとして、逃げ出で由果を楽しげに追いかけていた。

やがて、ハンバーグの焼ける音といい臭いがしてくると、ハクアはぐつたりした由果を放置してキッチンのカウンターにしがみついた。希も立ち、ハクアの横に並ぶ。

「やつた！ ハンバーグだあ！ たつぶん、すごいなあ。超いい臭い！」

「ほんとすごいね。一人で作つたの？」

タツヤは肉を裏返すタイミングをじつと待つていて。

「ハンバーグはだいぶうまくなつたよ。最初は何度か失敗したけどね」

「なあ、料理つていつからしてるの？」

カウンター越しのハクアの目が異様にギラギラしている。やつぱりハンバーグで正解だつたとタツヤは思った。

「二年前だよ」

「ん それって、お母さんが死んだときから？」

「そうだよ」

今でも覚えている。二年前、葬式が終わつてから一ヶ月間くらい、毎日タツヤも由果もコンビニの弁当やスーパーの惣菜だつた。廉太郎はまったく料理ができなくて、しかもスポーツジムの入会キャン

ペーンの時期で夜遅くまで働いていた。近くに親戚もいなくて、夕食はいつも兄妹二人きりだつた。

母、貴志子は本を出すほど有名な料理家だつた。そのおいしい料理を毎日食べていたから、コンビニ弁当やスーパーの総菜に、由果は一週間と我慢ができず、もう何も食べたくないとまで言い出した。タツヤは怒る気力もなく困り果てて、学校でいきなり泣き出してしまつた。それをなぐさめ励ましてくれたのは、希だつた。希とは一年前同じクラスで、去年は別のクラスになり、今年また同じクラスになつた仲なのだ。

一年前、母親をなくして失意のどん底にあつたとき、希は大切な一言をくれた。

じゃあ、朱鳥くんが料理を作ればいいんだよ。

そんなもの、うまくいかない、全然おいしくない、とタツヤは首を横に振つた。だが、希はまるで動じない強い口調でタツヤにこう言つた。

違うよ。お兄ちゃんが作ったものなら、どんなに下手でも由果ちゃんは食べると思うよ！

母親をなくした寂しさを押しのけようと、タツヤは必死になつて料理を覚えた。もちろん教科書は母親が出した本だ。野菜の切り方はそれで覚えた。最初は調理台の高さもつらくて、廉太郎に踏み台を作つてもらつた。おかずも、野菜炒め、焼きそば、目玉焼き、わかめの味噌汁、その四つくらいしかできなかつた。ニンジンが生焼けだつたり、玉子をこがしたり、味が薄かつたり濃かつたりと失敗もしたが、由果はまずくても文句を言わずに食べてくれた。

それでも、コノロや包丁の使い方に慣れれば料理は楽しくなり、味つけもうまくなり、レパートリーもだんだん増えていった。由果も明るくなつたし、タツヤ自身も涙を流さなくなつた。だから、希にはすくなく感謝している。

一年経つた今では、ハンバーグも上手に作れるよになつた。い

い焼き色になつて、フライ返しでハンバーグを四つとも裏返す。今日もいい調子だ。

「あたしさ」

ハクアがカウンターで鼻を鳴らして肉の臭いをうれしそうに吸いこんでいる。

「ハンバーグがすっごくうまく作れるダンナが欲しいんだよね」「えつ？！」

タツヤと希が同時に変な声を上げる。

「なんだよ、そんなに驚くなよ。ただの夢だよ。別にいいだろ？」

「……まあね」

タツヤはフライ返しで押して肉の焼き具合をチェックした。香ばしい肉汁がいい音を立てて弾ける。

「でも、結婚する人つてもっとちゃんと選んだほうがいいと思つよ？」

希は何となくじっくり決めそうな気がするな、とタツヤは思った。「いいんだよ、とにかくハンバーグがうまい人が一番なの！ なあ、ゆかたんはどうだ？」

ハクアはいきなり由果に話を振つた。

「由果は……やさしい人がいい」

「ハハハッ、じゃあ、あたしみたいな性格はアウトだな！ ちえー！ ちえー、じゃねーよ」

タツヤは普段のようにひとり黙々と料理を作るより、たまにこうしてしゃべりながら作るのも楽しいな、と感じた。

手作りハンバーグ、サラダ、コーンポタージュとひと通り食べて、予想通り、ハクアだけはハンバーグをさらに二三個もおかわりして由果をかなり驚かせていたけれど、さすがにタツヤが「もう打ち止め！」と言つたときに、ちょうど廉太郎が帰ってきた。八時より少し前だった。

廉太郎はリビングに顔を見せると、希やハクアのあいさつもそこに、「タツヤが女の子をこんなに家に呼ぶようになつたか！」と意味不明な笑い声を上げ、汗臭いからと書いてすぐに風呂場に向かつた。タツヤは少し顔を赤くして、思わず後ろを追いかけた。

「一人は強引に来たんだよ」

廉太郎の引き締まつた分厚い背中にそつぶやくと、廉太郎は笑つて振り向いた。

「何にしても、お前はすつかり明るくなつて頼もしいよ」

急に変なほめ方をするから、どう返していいか分からなくて廊下で見送つていると、いつの間にかハクアが横にいた。

「お父さん、すごい筋肉だな」

「えっ、ああ」

さつきの、一人は強引に来たと言つたのを聞かれたか少し心配になつた。

「スポーツジムのインストラクターなんだ」

「そつか。じゃあ、肉もたくさん食べるかな」

何でハクアが肉にこだわるのかよく分からないが、確かに廉太郎も結構食べる。

「でも、ハクアのほうが絶対に食べる量が多いよ」

「だつて、あたしは成長期だもん」

それは違うと思うけれど。

廉太郎は、風呂から上がりてきて、ビールを飲みながら、ハクアが買つてきた粗挽きソーセージを喜んで食べた。ソーセージは、廉太郎のハンバーグを焼く前にさつと焼いたのだが、廉太郎とハクアの二人が競うように食べると、あつという間に全部なくなつてしまつた。ハクアはあれだけハンバーグを食べたのにまだソーセージが胃袋に入るのである。どうなつてているのだろう。

希と廉太郎は初めてでなかつたが、ハクアは初めてで、山都小学校からの転校生と言うと、少しだけ隕石の話題になつた。タツヤは

横で聞いていて、超能力のことが頭をかすめたが、ハクアもさすがにあれからいきなり使つことはなく、反省したのだと思える。

由果が牛乳プリンを欲しがつたので、希も食べると言つて、希が買つてくれたものを冷蔵庫から出して渡した。テーブルに戻ると、廉太郎の『ごつい腕や胸板を、ハクアが面白やうにじらじら見ていた。』

「寺野さんは、今の中学校にもう慣れた？」

「バッヂが楽しいです！」

「そーか、そーか。タツヤもよくうわで寺野さんの話するんだよね」いきなり廉太郎は変なことを言つ。タツヤは氣まずい顔で口^バもつた。

「えっ、ああ……うん」

ハクアの超能力のことは家では話していないが、そう思われてしまうかな、と気になつた。ただ、ハクアはそんなふうに考えていな様子だつた。

「たつんは席が近いし、頭いいから、勉強も教えてもらつてます」「タツヤ、お前、女の子にやさしい男だな！ いいぞー」「やさしいとか……そういうんぢやないよ」

廉太郎とハクアの会話は、タツヤはすゞ居心地が悪い。前に廉太郎と希が話していたときのほつがずつと気が楽だつた。ちらつと希の顔を見る。希はテーブルにほおづえをついて話を聞いていたようだが、タツヤの視線にすぐ気づき、にこりと微笑んだ。希の横にいる由果もなぜか一緒に兄を見て、にこりと微笑む。二人の前にはそろつて牛乳プリンの空のカップが並んでいた。

廉太郎の食事が終わり、リビングでプロ野球中継を見はじめたので、先に、由果と希とハクアの三人が一緒に風呂に入ることになった。タツヤは皿洗いをして、三人が出てくるまで廉太郎の横でコーラを飲みながら、ひと休みした。廉太郎はプロ野球を見ているときはほとんどしゃべらないので、タツヤもそばで静かに座つていた。

希は、よく日焼けしたハクアの裸をじっと見ていた。ハクアは今田みたいなタンクトップをよく着ているので、肩まできれいに焼けている。希はあまり日焼けしない体质で、母親から肌がきれいとほめても「うう」のだが、少し日焼けしただけで皮がめくれてすこくヒリヒリするのが苦手だった。何となく胸のふくらみを見比べてみると、希と同じくらいでまだ小さかった。

一番にハクアが湯船に飛びこみ、カーンと手足を伸ばす。「うはあ、広い！ 広い！」と大声ではしゃぎながら、由果に頭からお湯をかけまくっていた。由果は頭からびしょびしょに濡れ、すっかり小さくなっている。ハクアは前に施設で暮らしていたと言つたが、やつぱりこんな感じだったのかな、と希は思つ。

希は、由果を後ろから抱くよつにくつこつと座つた。ひとり子だから、由果が本当に妹みたいに思えてくる。

「由果ちゃん、髪洗つてあげよつか？」

「ほんと？」

「うん、いいよ。」Jのシャンプーでいいの？

「うん、それ」

かわいいウサギの絵が書いてあるシャンプーを取り、手で泡立てて由果の髪をやさしく洗つた。ハクアは鼻歌を歌いながら、アヒルのおもちゃで由果の体にピュンピュンお湯を飛ばしている。由果が身をくねらせ、くすぐつたがつたので、希が注意すると、ハクアはまた「ちえー」という顔で壁にお湯を飛ばして、すぐ飽きた。

由果がクスクスと笑う。

「なんか、希おねえちゃん、お母さんみたい。やせこくて好き」「一年前のことと思うと、希は胸が切なくなつた。でも、やせこくて好きと言われたのがうれしくて、由果の髪を洗いながら少しだけ頭をしつとつ撫でた。

「……うん、そうかなあ」

ハクアは湯船から両足を外にぶらぶら投げ出している。足の裏が生白い。

「あたしも、のぞみんはいい奥さんになると感つよ。子供とかたくさん生みそうだね」

希は顔を真っ赤にした。

「そ、そんなことまだ分かんないよ！」

「まあまあ、あわてない、あわてない」

由果の髪を流し、体を洗つて湯船に入れてから、希は自分の髪と体を洗つた。由果はハクアがやたらお腹を触つてくるので何とか距離を置こうとしていたが、湯船に入っている限り無理だつた。キャアキヤア騒ぐのを見ながら、希もちよつとアヒルのおもちゃを拾つて、ハクアの肩にお湯をかけてみたりした。

ハクアと入れ替わりで希が湯船に入り、由果と一人並んで、ハクアが髪を洗う様子をじつと観察していた。ハクアは適当にシャンプーを選んだのか、廉太郎が使つていると思えるスーパー・ツイックと書かれた別のシャンプーを使つた。いきなり奇声を上げる。

「うわあああ、これすつごいスースーするよつ！ やばい、やみつきになる！」

「えっ？ ハクちゃん、大丈夫？」

「あ、ハクアおねえちゃん、それスースーするよ」

「だから、スースーするつて！ さつきから言つてるじゃん！」

ハクアは大騒ぎしているが、何だかとても楽しそうだつた。そしてシャンプーの泡を、シャワーでゆつくり流すのではなく、湯船から洗面器で湯をすくつて、ザバアと頭からぶつかれた。元からこの色だと言つていた栗色の髪がきれいにペつたりとなつている。

ギラギラした目で、スーパー・ツイックシャンプーを握りしめている。

「なあ、のぞみん、これで体も洗つてもいいかな？」

「えつ？ ダメだよ、シャンプーだもん」

「ああつ、そつかー！ くそー、なんだよーー スーパー・ツイック

石鹼とかないのかな？」

そんなに残念なことかな、と希は笑つた。

プロ野球はホームランがたくさん出て試合は盛りあがっていたが、それ以上に三人の入った風呂がやたらとにぎやかだったので、タツヤはずつと気についていた。

「そんなに気になるなら、お前も入つてくるか？ 僕は許すぞ」と廉太郎に少しかわれたが、由果だけならともかく、希やハクアと一緒に風呂に入るのは考えるだけでも恥ずかしくて、タツヤはつんとそっぽを向いた。

「違うよ。近所迷惑じゃないかなと思って」

「お前はやさしいやつだなあ。いいんだよ、あれくらい。成長期なんだから」

「だけど、お母さんなら、由果とお風呂で騒いだら『少し静かにしない』て言つたよ」

「お母さんはうちで仕事してたからな。そりや、気にするだろ」

「うん……」

「あの子たちがお風呂から上がつたら、アイス出してやれ。株が上がるぞ」

「株つてなんだよ」

そういう会話があつて、タツヤはまた何となく風呂場のほうに意識を向けた。

やがて、長かつたドライヤーの音が終わり、三人がそろつて風呂場から出てきた。由果の髪も乾かしてもらつていた。タツヤは廉太郎に言われた通り、冷凍庫に入っているアイスの箱を出すと、ハクアも希もうれしそうに好きな味を選んだ。ハクアはラムネ味、希はストロベリー味にして、由果は一個が多いので、希のを少しもらつていた。

野球中継も終わり、廉太郎は由果をそばに呼んで、録画したアニメと一緒に見はじめた。また、希とハクアは一人向き合つようにテーブルにつき、アイスを食べながら、廉太郎と由果の後ろ姿を見て

いた。タツヤはキッチンの明かりを消し、風呂場に向かおうとした。

「たつくん、ひとりの風呂は寂しい？」

後ろからハクアが声をかけてくる。

「ん？ そんなことないよ」

「あたしがもう一回入ってあげよっか？」この前のおわびで、

からだ洗うよ」

「えっ？！ いいよ… 要らないよ…」

ハクアは何てこと言うんだ、とタツヤは思わず声を荒げた。廉太郎が面白そうに振り返り、にやにやと笑っている。由果も、タツヤが珍しく大きな声を出したので、タツヤの顔を見てきょとんしている。

「お、おわびは、うまい棒もらつたから」

「んー。いや、あんなうまいハンバーグになつたし」

「そ、ソーセージ持つてきただじゃないか！」

「あ、そっか。じゃあ、このアイスの」

「もういいから… いつもひとりで入つてるから…」

タツヤは耳まで真っ赤になつて、逃げるよつに廊下へ飛び出た。

あれはたぶんまじめな性格なんだ、とタツヤは湯船につかりながら思つ。

つまい棒もサラミもあらびきソーセージも、おわびなのが自分が食べるつもりだったのか分からなければ、ハクアは何かお返しをしたいと考えているのだと思う。施設で他の子からよく肉を取つていたと聞いたときはなんて乱暴な子なんだと感じたけれど、今のハクアは少し違うのかもしれない。タツヤは湯船に身を沈めながら、リビングの様子が気になつて仕方なかつたが、これと黙つて何もなぐ静かだつた。

風呂から上がると、リビングには廉太郎ひとりだけだつた。廉太郎はスポーツ雑誌を床に広げて読んでいる。

「おう、タツヤ。由果は部屋に寝かしたぞ。あと、月本さんと寺野さんの布団は、お母さんの部屋に敷いといたから連れてつてあげろよ」

「うん、わかつた」

母親の部屋は、母親が仕事場と寝室にしていた部屋で、今も料理や食品関係の本や、母親が載つてゐる女性雑誌が全部残つていた。仏壇もそこにある。昔は出版社の人がこの家に打ち合わせに来たので、ソファなどの応接セットもあつたが、それはもう要らなくなつたので廉太郎がリサイクル店で処分してしまつた。

タツヤが母親の部屋を開けると、中は真つ暗だつた。誰の気配もない。

「あれ？」

「あ、朱鳥くん」

振り向くと、廊下にパジャマ姿の希が立つてゐた。

「「めん、おトイレ行つてたの」

「あ……えつと、月本さんと寺野さんの布団はここだよ」

「うん、ありがとね。ハクちゃんはさつも歯をみがいてたよ」

「そつか」

タツヤは部屋の明かりをつけ、思わずペタンと布団の上に座りこんだ。希も同じようにペタンと座った。希はこの部屋に入るのは初めてで、珍しそうに眺めていた。

「本がいっぱいあるね」

部屋には本棚がたくさんあるが、タツヤには難しくてどれも読んだことがない。野菜や魚の本は何となく図鑑みたいで面白かったが、振り仮名のない字が多くて写真や絵を眺めたくらいだ。それよりも部屋で目立つのは、壁のあちこちに貼つてある書道の作品だ。これは全部、由果が書いたものだ。

「由果ちゃんの習字、すごいたくさんあるね」

「うん。由果は習字を習ってるんだよ」

由果は習い事で、去年から近くの書道教室に通っているが、廉太郎の話では、先生がものすごくほめるくらいいつもみたいだ。『ともだち』や『ひまわり』や『えがお』などの習字を、廉太郎が台紙に貼つてきちんと飾っている。タツヤは学校で書道はやるが、あまり得意ではなかった。

「今日ね、ハンバーグとつてもおいしかった」

「うん」

「わたしも朱鳥くんみたいにつまく作れるかな?」

「うん、できると思うよ」

「わたしにも教えてね」

「うん」

希が次から次に話しかけてくる。タツヤは何となく今日は希とあまりしゃべっていない気がした。ハクアはまだ歯みがきから戻つてこない。部屋のドアは開けっぱなしだった。

「あとね、今日はみんなでお風呂に入つて楽しかった」

「うん」

「わたし由果ちゃんの髪を洗つてあげたの」

「あ、ありがと」

「みんなでお湯のかけっことかしたんだよ」

「うん」

「朱鳥くんはつまんなかった?」

「そんなことないよ。ハクアと一緒にじや、何されるか分かんないし

……

「ふーん……そうかなあ」

「うん、こきなり変なこと言うし」

すると、希は急に黙ってしまった。口ロン、と布団の上に倒れた。寝返りをうち、タツヤに背中を向ける。いつもきちんとじてこる希だが、布団の上で丸まつた背中は不思議と由黒くらい小さく見えた。

「どうしたの?」

「ん……寝くなっちゃったの」

希はもぞもぞと寝たまま体を動かして、布団の中に入った。

「もう寝る?」

少しの間、返事がなかつた。タツヤは向となく掛け布団にそつと触れてみた。

「朱鳥くん、電気ちっくやへして」

「あ、でも

「ハクちゃんなら大丈夫だよ」

希が寝るので明るいままかわいそうだと思つて、タツヤは立ち上がり、部屋の電気を豆電球まで落とした。そのついでに、大きく開けていた部屋のドアも少し隙間を残して閉じた。タツヤがハクア用の布団の上に戻ると、希はいつの間にか寝返りをうち、こっちを向いていた。

希が、布団の中から手を伸ばしてくる。小さな声で「手握つて」と言つので、タツヤはあたたかいその手を握つた。隕石が落ちた夜、郊外の公園に行つたときのあの感触と同じだった。

「朱鳥くん あのね」

「ん?」

「もうこっ！」、お願いがあるの

「なに？」

「ハクちゃんが来るまで、こっの部屋にこいとね」

「うん、いいよ」

タツヤはそのまま座つて手を握つていたが、少しすると、希が静かに寝息を立てはじめ、手を握る力も消えたので、布団の中に入れあげて、ハクアの帰りを待つた。ただ、タツヤもとろりと眠気が下りてきて、そのままハクアの布団の上に寝転がつた。

翌朝、タツヤは田代めたら、希の布団になぜか一緒に入つていた。そして、この部屋にハクアは寝ていなかつた。もともとハクア用だつた布団は、誰も使っていなくてきれいなままだつた。

タツヤは朝ご飯を作ろうと思つて起き上がつた。希はまくらを胸に抱いたまま寝ていて、ハクアもどこにいるか分からぬので、とりあえず廊下を通つてリビングに入った。廉太郎がコーヒーを飲みながら新聞を読んでいる。

「お父さん、おはよ！」

「おはよ！」

「あの……寺野さんは？」

すると廉太郎は少し困った顔になつて新聞を閉じた。

「つたぐ、お前らは、持ち場で寝るよ。けやんとしたのは日本さんだけだな」

「えつ……？」

「寺野さんは一階のお父さんの部屋でマンガを読んでたみたいで、そのままベッドで寝てたよ」

「お父さんの部屋で？」

「起こすのもかわいそつだから、そのまま寝かしといったけど。で、

朝起きたら、お前は自分の部屋じやなく、お母さんの部屋で寝てる

し

「あ……」

「月本さんと話でもしてたのか？」

「しろつて言つたぞ」

「「めんなさい……」

「ハハハ。ま、別にいいけどなあ。寺野さん面白い寝言を言つてたし

「えつ、なに？」

「ダッカルビ！って、五回くらこ言つてたな」

「ダッカルビ……？」

「ま、とりあえず二人と由果を起しにしておいで。お父さん、もうすぐ仕事に出かけるから」

タツヤは洗面所で顔を洗つた後、一階に上がり、一番気がかりな廉太郎の部屋から入つた。廉太郎のベッドにはハクアが大の字で寝ていた。掛け布団が足もとに蹴飛ばされて、ベッドから落ちそうになつてている。タツヤが起こそうとする、寝返りをうち、背中の下から三冊もマンガが出てきた。タツヤも読もうと思ったことがないヤクザのマンガだった。廉太郎の本棚には他にもいろいろなマンガがあるが、ハクアはこういうのが好きなのだろうか。

強引に体を揺らすと、ハクアはようやく目を覚ました。寝ぐせがすごくて、髪の毛がめちゃくちゃに跳ねている。

「あれ？ たつさん、あたし、たつさんの部屋で寝ちゃつたか……？」

「全然違うよ

何ひとつ合つていなかつた。

その後、一階で寝る由果を起こし、一階の母親の部屋に戻り、希を起こした。タツヤは希より早く起きたので、同じ布団で寝てしまつたことを希は知らないかなと思つていたけれど、そうではなかつた。希は夜中に一度トイレに起きたようので、ちゃんとそれを知つていて、タツヤは少し恥ずかしかつた。

「なんだ、やつぱりたつさんは寂しかったんだ」

と寝ぐせを直すふうもないハクアに笑われたが、寂しかったから希の横で寝たわけではないので、ムスッとすねて何も答えなかつた。すると、希が間に入つて口を開いた。

「もう、違うよ。ハクちゃんがお部屋に来なかつたから、わたしが寂しくなつて朱鳥くんにいてもらつたんだよ」

「そつか。でも、寝なくてもいいだろ?」

「うるさいな。勝手にお父さんの部屋に入るなよ。 僕が怒られたんだから」

廉太郎はそのとき部屋で着替えていて、リビングにはいなかつた。「だつて好きなマンガがあつたんだ。でも、怒られたんだな。ごめんね」

「もう怒つてないけど……」

「よし、おわびにあたしが今度一緒に寝るよ

「おわびはもういいよ！」

タツヤはキッチンに逃げ、夜のうちに炊飯ジャーで予約しておいた炊きたてのご飯を茶わんに盛り、ハムエッグを焼いた。由果は寝ぼけた顔で玉子焼きのぼうがいいと言つので、それを先に作つてあげた。

希と由果はすっかり仲良くなつたようで、テレビを見ている由果の髪を、後ろからブラシでといてあげている。ハクアは窓辺に座り、晴れた空をぼうつと眺めていたが、ハムの焼ける臭いがリビングまで広がると、大声で「たつさん、ハムエッグは何枚まであるの?」とだけ聞いてきた。

そして、仕事カバンを手にした廉太郎がリビングに顔を出した。

「タツヤ、ちゃんと平等に仲良くやれよ」

それだけ言い残してスポーツジムに出かけた。とにかくタツヤだけひたすら忙しかつたお泊まり会は、ようやくこれで終わつた。

タツヤはすっかり油断していた。土曜日のお泊まり会は、ハクアが超能力者であることを忘れるくらい普通に終わり、いろいろ変なことを言わせて慌てたけれど、とにかく仲良くなれて喜んでいたのだが、次の週、学校で立て続けに一回もハクアに力を借りられて、とんでもない目にあつた。

タツヤは、ハクアが『レンタルフォース』で借りられる力は、前に希から借りた視力と、タツヤから借りた知力、聴力と、高校生の不良たちから取つた脚力しか知らなかつた。他にどんな力を借りることができるので、ハクアから聞いたことはなかつたのだ。

ひとつ目は、火曜日の家庭科の授業中だつた。調理実習である。作る料理はカレーだつた。男女混ざつた五人ずつの班に分かれたが、たまたまタツヤ、ハクア、希は別々の班になつた。タツヤは家でもカレーを作れるくらいの腕前で、先生の説明もきちんと聞いて、まじめに作りはじめた。タツヤと同じ班のクラスメイトも、タツヤが野菜の皮むきや肉の切り方に慣れているのを見て、このままタツヤの作り方に任せてしまおうという雰囲気になつていた。タツヤも家で料理をやつていて、と言つたから余計に安心したのだ。

一方、ハクアは自分の班に不器用な子ばかりなのを見て、かなり心配になつていた。何しろ調理実習は、家庭科の先生が「自分たちの作ったカレーを食べるんですよ。ハイ、頑張つて作つてください」と大きな声で言つたので、ハクアはそこからずつとタツヤの様子を観察していく。

タツヤは、別の班にいるはずのハクアがちよろちよろと様子を見に来るので、あまり自信がないのかなとか、授業中なのに集中力がないな、くらいにしか思つていなかつた。それで、ハクアが何度かタツヤの手や腕を触つているのにも気づかなかつた。

「ちょっと借りるねー」

という能力発動の台詞をどこで言われたか、タツヤはよく覚えていない。ハクアに調理力を奪われた瞬間は、鶏肉と野菜を炒めた鍋を煮はじめるタイミングで、沸騰しアクがたくさん出てきたのを、

タツヤはただぼんやりと見ていた。

「あれ？ この浮いたのは取らないの？」

と同じ班の子が聞いたが、タツヤは首を横に振った。

「うん、これでいいんだよ」

さらに、ずっと強火で鍋を炊き続けたので、お湯が吹きこぼれたり、途中からなぜか思いつきでニンジンを取り出して最後に戻したり、カレールーをよくかき混ぜずさつさと火を消したりして、よく分からぬうちに食べる時間になってしまった。

タツヤの班のカレーは大失敗だった。水が多すぎてしゃばしゃばのうえに、ニンジンが生煮えで固かつたり、カレールーがブロックのまま出てきたり、鍋の底でじやがいもが大量にこげていて、とにかくひどいものだった。

「なんだこれ……超まずい……」

「先生……『じめんなさい』……」

同じ班の子はあまりの失敗に少し涙ぐんでいるし、完食する気力も、タツヤを責める気力もなかつた。タツヤはすく落ちこんだが、自分は料理ができるはずなのに失敗した、という感覚はなかつた。調理力がまだハクアから返つてきていないのだ。

そして、ハクアの班は上手に作りあげ、家庭科の先生からもほめられていた。ハクアはうまくいった自分の班のカレーをきれいに平らげて、大満足で家庭科の授業を終えた。それがちょうどハクアの『レンタルフォース』能力が切れる三十分くらいだった。ハクアがようやくそれを自覚して、教室へ戻るタツヤに声をかけると、タツヤはひどく暗い顔をしてきつく睨み返した。

「たつくん、ごめん！ つい」

その日、タツヤはハクアとほとんど口を聞かなかつた。

ハクアのことを打ち明けられるのは希だけだった。希は、調理実習でタツヤの班が失敗したことを知らなかつたので、タツヤから伝

えるまで氣づいていなかつた。ただ、希は火曜日は学校が終わつたらすぐピアノの習い事があるので一緒に帰れず、仕方なく夜になつてメールを送つた。そのときにはタツヤもだいぶ頭が冷静になつた。

『メールできる?』

『うん』

待つていたみたいに、すぐ希から返信が来た。

『今日またハクアにやられたんだ』

『どうしたの?』

『調理実習です』『まずいものになつた』

すると、少し間があつた。

『うーん そんな力も借りられるんだ』

『そうみたい 授業のあと ハクアにもゴメンって言われた』

『ハクちゃん わざとじやないと思うよ』

『うん わかる これくらいはがまんするよ』

『朱鳥くん えらいね』

『しかたないよ』

『同じ班だつた人には 明日あやまつたほうがいいかもね』

『そうだね』

『そんなんに落ちこまないでね』

『うん つまんないメールでゴメン おやすみ』

『ううん大丈夫だよ おやすみ また明日ね』

ベッドに仰向けになり、携帯を閉じる。タツヤはもしも希がいなくて、自分だけがハクアの超能力を知つてしまい、ハクアに力を借りられても誰にも話せない感じだつたらどうしよう、と考えた。何だかすごく気が重かつた。

ハクアは友達として一緒にいて楽しいし、せつかく仲良くなつたばかりなのだ。あまり冷たくしたくなんかない。今回は、おそらく土曜のお泊まり会でタツヤが料理が得意なのを知つたから、つい力

を借りにきてしまったのだろう、と思つ。

弱いなら強くなる、暗いなら明るくなる。

ハクアはそんなふうに言つていた。その前向きな気持ちは、タツヤは母親をなくした後の自分を思い出してもよく分かる。ただ、それなら、タツヤはできることをハクアに見せていくと、これからもどんどん借りられてしまうのかもしれない。ハクアは苦手なものが多いいのだ。どうしてハクアはもつと何でもできる子じゃないんだろうか、タツヤはついそんなふうに考えてしまう自分が悲しかつた。もうこれ以上考えるのが嫌になり、いつもより早めに寝ることにした。部屋の明かりを消す。窓の外は曇つていて星ひとつ出でていなかつた。

次の日、タツヤは自分からハクアに元気よく朝のあいさつをした。ハクアはしおれた顔で昨日のことを謝つてきて、またランドセルからコンビニ袋を取り出し、うまい棒を何本も出そうとした。だが、あわてて押しとどめ、「わかった。放課後もう少から」と言つてハクアを静かにさせた。ただ、タツヤは何となくそれが嫌だった。そんなもの欲しくないし、昨日の調理実習で同じ班だったみんなのことを思うと受け取りたくない。

ハクアは、力を借りたいとき思いつきで能力を使い、迷惑がかかるたらおわびを出してそれで平気というふうに考えているのだろうか。力を取られたほうはかなり困る、ということをちゃんと考えていいのだろうか。タツヤはそう決めつけたくなかつたけれど、まだ気持ちがもやもやとしていた。

タツヤは希にメールで言われた通り、調理実習で一緒だったクラスメイトに料理の失敗を一人ずつ謝つて回つた。みんなそれほど気にしていなくて、次は先生の言つことを聞いて作ろうつと言つてくれた。タツヤはひどく落ちこんだことを少し反省した。

やがて午後から雨になり、六時間目の授業で、英語の時間になつた。そして、昨日の今日で、ここでもまたハクアのことで問題が起きた。

晴海先生がプリントを配りはじめると、後ろからハクアが弱々しく声をかけてくる。

「なあ……たつさん、これまたテストか？」

この前、理科のテストでハクアに知力を勝手に借りられ、すぐく低い点を取つたことを何となく思い出す。ハクアは英語も苦手なんかと思つたが、今日は貸してと言われてもダメだと言おうとタツヤは考えた。プリントが手もとにある。テストではなかつた。

「ううん、違うよ。書き問題だよ」

「力キ？」

日本語の文章がいくつか書いてあってそれを英語で書く問題のプリントだ。問題はあまり難しくなかつた。みんな英語を書きはじめ、少し時間が過ぎたところで、晴海先生は一問ずつ生徒を指して、黒板に自分の答えを書かせるのをはじめた。

「えつ、マジ？！ 前で書くの？」

またハクアが後ろから話しかけてくる。

「そうだよ」

「たつんはできたの？」

「うん、できたよ」

「そつか……」

ハクアのこのあせり方は嫌な予感がする。振り返ると、英語が全然書けていなかつた。やはりハクアは英語が不得意なのだ。

晴海先生は、今日は列に一人ずつ指している。四問目あたりでタツヤとハクアの列の誰かが指されそつた。ハクアが後ろからタツヤの腕を握つてくる。タツヤは背筋がゾクツとなつた。

「たつん……相談があるんだ。もし、あたしが当たつたら、たつんの英語の力を貸してくれないかな？」

そう言われると思つていた。タツヤは前を向いたまま小声で答える。

「ダメ」

「えつ？！」

「だつて、僕も指されるかもしれないだろ？」

「うーん……」

友達だつたら、ハクアのわがままを何でも聞いてはいけないと考えた。弱いなら強くなると同じで、できないならできるようになる、というのは勉強でも料理でも一緒だ。足りない力をいつも好きなだけ人から借りていたら、何もできない人になるとタツヤは思うのだ。

「たつん……」

「まあ、でもほんとに指されちゃつたら、今日はこのプリントを貸してあげるよ。ハクアも書き写すのはできるだろ?」

「たつづん、頭いいな!」

ところが、四問目で晴海先生に指されたのはタツヤだつた。タツヤは少しほつとして、自分のプリントを手にして前へ行った。チヨークを持ち、間違えないようゆつくり最初の単語を書く。

「次の問題は、寺野さん」

晴海先生は気まぐれで同じ列から一人指した。列に一人ずつの法則をたまたましなかつたのだ。

「えつ? ! はい!」

タツヤは思わず後ろを振り向く。目を丸くしたハクアがその場に立ち上がっている。

「寺野さん、五問目、黒板に書いてください」

「うー……」

ハクアはあきらめて前に出てきた。一応、自分のプリントは持っているが、ほとんど白紙のままだ。弱りきつた顔で近づいてくる。黒板の前で、タツヤの横に並んだ。

「……あたしも指された

「そうだね」

「ねえ……借りていい?」

「無理だよ。まだ書き終わってないし」

「だつて、たつづんはプリント見ればいいじゃん」

すると、晴海先生がハクアを注意した。

「寺野さん、おしゃべりしてないで書きなさい」

少し怒つた言い方だつた。晴海先生はハクアをじつと見ていく。

タツヤは一緒に怒られないよう前に前を向き、黒板に書くことに集中した。

「ゴメン、やっぱ借りるね!」

「えつ」

横からハクアの小声が聞こえて、タツヤは頭の後ろを右手の指でトンと触られた。次の瞬間、手が止まる。黒板に何を書こうとしていたか分からなくなつた。

後で思えば、手もとに答えを書いたプリントがあつたのだから、ただそれを見れば良かつたのだ。だが、タツヤは、前の理科のテストと同じで、いきなり頭が真っ白になつて、そういう考えも浮かばず、チョークを置いて振り返り「先生、分かりません」と言つてしまつた。

クラスから笑い声が起つたが、タツヤは分からるのは仕方ないと感じていた。晴海先生は、驚いたというか困つた顔を見せたが、「じゃあ、席に戻りなさい」と言つた。先生にそう言われたので、タツヤは素直に席に戻つた。

黒板のところでは、ハクアがすらすらと英語の文を書いている。それを見てタツヤは、かなり大きな字だな、くらいの感想しか持たなかつた。

そして、ハクアの書いた問題の答え合わせが終わつたところで、ハクアが「じゃ、返すね」と言つて頭の後ろをトンと左手で触れられた。この間、タツヤは記憶が飛んでいるわけではない。タツヤは、自分とハクアが晴海先生に指されて前に出て、自分だけ書けず、クラスのみんなに笑われ、席に戻ってきたことをしつかりと覚えている。黒板に書きかけた自分の問題に、晴海先生が赤いチョークで答えを書くのも全部見ていた。

六時間目の英語が終わり、放課になつた。ハクアはタツヤに「また明日ね」と一言残し、朝渡そうしたうまい棒の入つたコンビニ袋をタツヤのひざの上にポンと置いて、教室から出て行つた。クラスの女の子たちに、ゴム飛びして遊ぼうと誘われたのだ。

タツヤはすぐコンビニ袋をランドセルに突つこみ、みんなが教室

から出て行くのを待つていた。ハクアのこと少し考えていて、すぐ帰る気分になれなかつたのだ。希がタツヤのそばに来た。気持ちがうまくまとまらない。今日のことは希に黙つておこうかな、とタツヤは考えていた。

「朱鳥くん、英語のとき、大丈夫だつた？」

問題ができなくて笑われたことを希は心配していると思った。

「……なんで？」

「おでこにあのあざつぽいのが出てたから。またハクちゃんかな、と思つて」

「ああ……そつか」

ハクアに力を借りられた人は、その間、おでこに猫の手のような形をしたあざが出る。たぶん席に戻るとき、希はそれを見たのだ。希は言わなくても気づいていた。

「まあな。ハクアが英語できなくて困つてたから貸したんだ」

「……そつなんだ」

「大丈夫だよ」

「うん」

希はまだ不安そうな顔のままだ。この話はもう止めたい、とタツヤは思つた。

「　　月本さんは、今日は習い事は？」

「ううん。今日は天文係の日だよ」

水曜日は希の習い事が何もない日で、毎週、放課後一緒に図書室で天文新聞のことを話すことになつていて。タツヤは頭の中がハクアのことでいっぱい、すつかり忘れていた。

「あ、そうだったね。じゃ、図書室行こ」

「うん！」

ランドセルを背負い廊下を並んで歩きながら、ハクアのことをまだ考えていた。

ハクちゃんの能力つて、絶対にもつと人の役に立つと思つた

だよね。

希の言葉がもう一度、タツヤの胸のうちに帰つてくる。そんなこと、もう何だか信じられない。昨日の調理実習もそうだ、今の英語の授業もそうだ、ハクアは自分の苦手なことから逃げることにしか超能力を使つていないので。晴海先生に困つた顔をされるのも、みんなに笑われて席に戻るのも、本当ならハクアだつたのだ。『レンタルフォース』という能力は、ハクアが借りたいと思つたとき簡単に借りられて、もしタツヤが貸したくないと思つても力は取られてしまうらしい。ハクアの部屋で言つた、自分の言葉をタツヤは思い出す。

困つたときは僕も力を貸すよ。

タツヤは怒りたいというより、寂しい気持ちになつた。きっと、友達になつたから、あんなことを言つたから、ハクアは困つたとき自由に力を借りられると思つていて、と考へてしまつ。

友達つていつも近くにいるんだ。友達つて謝れば許してくれるんだ。だから、友達つてとにかく便利なんだ。それがハクアの考え方だとしたら。

ハクアはケンカではビックリするほど強かつた。あのときはタツヤもすごいと思った。でも、ちょっと考へると、すぐ交番に行つたり誰か大人に助けてもらつたりすれば、ハクアがあんなふうに戦わなくとも良かつたかもしれない。

無茶をしたからハクアはひざをケガしたし、タツヤはハクアのそばに行つたから、危うく不良に石をぶつけられそうになつた。ケンカなんて、バトルゲームと違うのだから、相手を倒さないと終わらないわけでなく、ちゃんと大人に止めてもらつことができる。タツヤはそう思う。

「朱鳥くん……」

希にきゅつと腕をつかまれた。心臓がドキリとして立ち止まる。ハクアのことやケンカの記憶が一瞬で頭から吹つ飛んで、希の顔をじっと見てしまつた。今日は星の髪飾りを左右両方につけていて、

暗い雨の日の廊下なのに、不思議とキラキラ光った。

「 なに？」

「 大丈夫？ 落ちこんでない？」

「 うん、平気だよ」

希に手や腕を握られると、なぜか落ち着いた気持ちになる。ハクアとはまったく逆だ。

「 でも、なんかこわい顔してる」

「 あ……『ごめんね』」

「 もしね、具合が良くないなら……今日はまもつ帰つてもいいよ？」

「 ううん。先週も天文係をしなかつたから、今日はちゃんとやるう」

「 でも、先週はわたしが具合悪かつたから」

「 それは月本さんのせいじゃないよ」

先週の視力検査でハクアに視力を勝手に借りられ、真っ暗な視界のまま保健室に運ばれた希。それでも、希は一人でハクアの応援団になろうと言つた。

希はいつも元気づけてくれる。タツヤはいつもでも自分が暗い顔をしてないで、希との約束を守ろうと思つた。

「 早く図書室に行こつ。僕も天文新聞やりたいんだ」

「 ほんと？」

「 うん」

笑顔を見せると、希はそのままタツヤの手を引っ張つて、廊下をまた元気に歩き出した。

図書室で一時間くらい天文新聞のことを話し、七月は『夏の大三角形』というものを調べることに決まって、一人で一緒に帰ることにした。雨は上がりついて傘をささずに済んだが、水たまりを踏まないよう声を掛け合いながら、ゆっくり道を歩いた。

タツヤは学校から少し離れたところで、ハクアにもらつたコンビ二袋がランドセルに入っているのを思い出し、細い路地に入った。

希も不思議そうについでくる。袋の中を見ると、またサラミ味かなと思つていたが、なぜかコーンポタージュ味だつた。お泊まり会でコーンポタージュを出したから、タツヤはサラミ味よりもこっちの味のほうが好きだと思つたのか、それはよく分からない。

希も、袋に入つたうまい棒を覗いて、タツヤの顔を見た。

「これ、ハクちゃんからまたおわびのしるし？」

「うん。昨日の調理実習のね」

「じゃあ、また明日もあるかもね」

「うん。　月本さんも一本持つて帰る？」

「いいの？」

「いいよ」

「えへへ……おなか空いてるから、いま食べる」

「僕もそうする」

一人でうまい棒を食べながら路地を抜けると、住宅地の中にある少し広い並木道に出た。この道は、朝の通学や通勤の時間は混むけれど、夕方の時間は人の姿があまりなかつた。二人が歩いていく方向の先に、外国人の家族らしい三人が立ち止まって話していた。年齢で見て、おばあさんとお母さんと男の子みたいだ。男の子は由果と同じくらいの年で、まだ小さい。このあたりで外国人を見かけるのは珍しい。みんな金髪だつたので、タツヤはアメリカ人かな、と思つて眺めていた。

「たつつん！　たつつーん！　のぞみーん！」

後ろから、いきなり大きな声で名前を呼ばれた。振り返ると、ハクアが手を空に高く突き上げていた。ハクアも、友達と遊んでいてこの時間に帰つてきたのだ。ハクアの横になぜか由果もいて、ハクアと一緒にタツヤのそばまで走つてくる。

「お兄ちゃん！　希おねえちゃん」

「由果ちゃん」

「うわっ、うまい棒！」

ハクアはもう食べ物に意識がいつている。

「あ、これ今朝ハクアがくれたやつだよ」

「えー、そつかあ。じゃあ、あたしのは　ない？」

思いきりムスッとした顔をした。タツヤはため息をついた。希がクスクスと笑う。

「……いや、一本食べていよい」

タツヤがうまい棒を渡すと、ハクアは「たつんは器がでかいねつー」とよく分からぬことを言い、あつとう間に食べてしまつた。そして、タツヤにうまい棒の袋の「コミ」を渡してくる。仕方なく受け取ると、由果がそばにぴつたりくつついで、コンビニ袋の中身を覗いた。

「　お兄ちゃん、由果のもある？」

「うん、あるある」

家に帰つてからにしようと思っていたが、由果にも一本渡した。由果はここで食べずにランドセルに入れた。

ハクアと由果は、学校の門のところでたまたま一緒になつたらしい。由果もお泊まり会であれだけハクアのいたずらから逃げていたが、嫌いではないみたいだ。ハクアは、由果が今日の給食で苦手なプロセスチーズを残したことをタツヤにバラしながら、由果の頭をつかんで「このワガママ娘めつ、牧場で働かすぞ！　いいのかつ！」と叫んで髪をくしゃくしゃにした。由果はキヤアキヤアさわぎ、ハクアが飽きて静かになつたら、希に髪をやさしく撫でてもらつた。

並木道を進んでいくと、さつきの外国人家族がタツヤたちに気がつき、いきなり声をかけてきた。タツヤは驚いて立ち止まる。後ろにいた希やハクアたちもつられて止まつた。タツヤに話しかけてきたのはお母さんだが、とにかく早口で、はじめの言葉も最後が『ニー』だつたくらいしか聞き取れなかつた。

「あ、あ……」

学校で英語の授業はしているけれど、単語を書いたり、教科書の

英語を読むくらいなので、本当に外国人に話しかけたら会話なんて全然できない。タツヤが何も言えずにはいると、お母さんは手に持っていたメモ用紙をタツヤに見せてきた。何か英単語と数字が書いてあって、住所かもしれないと感じたが、もちろん読めるわけがないし、しかも斜めになつた英語の文字だったので、これは絶対に無理だと思った。

まわりを見渡しても、大人の姿は見あたらない。並木道には、タツヤたちと外国家族以外に誰もいなかつた。お母さんは腕時計を見て、時間を気にしはじめ、おばあさんと弱り顔で話しているのを聞きながら、タツヤは早くここから離れたい、と思った。

「ねえ、どうしよう……？」

希と相談する。由果は、外国家族を恐がつて希の後ろに隠れている。

「朱鳥くん、わたしたちじゃ無理かも」

「うん、そうだよね」

タツヤは深くうなづく。おじきして通り過ぎようつと思つた、そのときだ。

「よおし、出番だな。ここはあたしに任せろー。」

ハクアはいきなり一步前に出た。

「えつ？！」

英語が苦手なハクアが何をしようと考えたのか、よく分からなかつた。もしタツヤや希の英語力を借りたところで、外国人と普通に会話できるわけがない。ハクアを止めようか戸惑つてゐる間に、ハクアは外国人の男の子と向き合い、右手でいきなり男の子の口を触つた。男の子は驚き、ビクツとなつた。お母さんとおばあさんは二人で話していく、それを見ていない。

「ハイ、ちょっと借りるねー。すぐ返すから」

ハクアは男の子にそう言つた。ハクアの日本語が通じたとも思えないが、男の子は何も答えず、驚いた表情のままで黙つた。もしかして、とタツヤは思つたが、男の子は野球帽を深くかぶつていて、

おでこはよく見えなかつた。

そこからは、信じられないというか、本当に不思議な時間だつた。ハクアはいきなりサラサラと英語をしゃべり出し、お母さんとおばあさんに対し、道案内をしあげたのだ。お母さんはすぐほつとしめた顔つきに変わり、流れるようにハクアと会話をしている。タツヤはもちろん全然分からぬ。希も由果もあ然としたまま、ただ眺めている。ただ、栗色の髪をしたハクアは本当に外国人になつたみたいで、道の方向を指差したり、身ぶり手ぶりを加えて説明したりして、お母さんは何度も「オーケー、オーケー」と大きくうなづいていた。そのそばで、男の子はずつと黙つてお母さんを見上げていた。道が分かつたみたいで、お母さんは大きな笑顔を浮かべ、ハクアにお礼を言つた。すると、ハクアはいきなりタツヤのほうに振り向き、「一本残つてゐる?」と言つてタツヤの持つコンビニ袋に手を突つこんだ。さつきまでずつと英語を話していたのに、急に日本語を話したのでタツヤは「えつ?」と短い声を出し、あわててうなづいた。ハクアは最後の一本のうまい棒を取り出すと、男の子に手渡した。

お母さんはうまい棒を指差し、ハクアに何か聞いた。ハクアはにこにこと英語で説明する。タツヤの耳にもスナックという単語だけは何となく聞こえた。そして、ハクアは男の子の口に左手の指先を当て、最後に野球帽をポンポンと軽く叩いた。

「これ、お礼だよ。それじゃ、ボウズ、元気でな!」

そう日本語で言つた。

外国人家族が歩きはじめ、タツヤたちは何となくそれを見送る感じだつた。男の子が何度も不思議そうな顔でチラチラと振り返つたが、お母さんにぐいっと手を引かれ、そのまま道を曲がつて行つた。タツヤも希もこれがどういうことだつたか、見当がついていた。分からぬのは由果だけだ。

「ねえねえ、ハクアおねえちゃん、今のつて英語?」

「おう、英語だよー」

「ハクアおねえちゃん、すごいね。外国人の人とおしゃべりできるの？」

「ん？」 そうだなあ、あれくらい五年生まで習つたら余裕、余裕

ハクアはそう言った。タツヤは、ハクアが由果に本当のことを言わないつもりなのだと感じた。

「そうなの？ お兄ちゃん」

「えつ……？ えつ？」

由果にいきなり聞かれて返事につまつた。

「ハハハ、たつんは大事なときにダメなんだよ。あがり症だから」「お兄ちゃん、アガリショウなの？」

「英語はね」

もう何と答えていいか分からなくて、適当に「まかした。

「よしつ、今日もいいことしてお腹も減つたし、帰ろうぜ！」

ハクアは、満面の笑みでタツヤの肩をバンバンと手で叩いた。このときは、なぜかハクアの手に触られることに不安を感じなかつた。歩きはじめて、希とも目が合つた。希もまたすつきりした笑顔で、「ねつ、わたしのも入れて」と、うまい棒の空き袋をタツヤの持つコンビニ袋に入ってきた。

湯船に入りながら、タツヤは今日のことを思い返す。

ハクアは自分勝手な性格だ。ただ、人が困っているとき、自分の能力を使ってその人を助けられそうなとき、ハクアは迷いなく進み出る。誰かが来るまで待つとか、自分ができないからやらないとか、そういうふうには考えない。あの外国人家族はきっとハクアに感謝していると思う。

ハクアは『レンタルフォース』の能力を使ったと思う。ただ、由果に超能力のことは話さなかつた。だから、タツヤも希も、ハクア

の超能力のことは口に出さなかつた。

人に話さなくとも人に役立つことがある 今日、それを見た。 本当なら、ハクアがそのつもりなら、タツヤや希に打ち明けなくとも良かつたのかもしない。ハクアの本当の気持ちはよく分からない。だけど、自分のことをよく知つていて、いつも近くにいて、謝れば許してくれる友達がいるのは、ハクアでなくとも、タツヤだつてうれしいことだ。

そう考えて、タツヤは湯船で大きく伸びをして、ひとつ深いため息をついた。

部屋に入ると、携帯がチカチカしてて、希からメールが届いていた。ベッドに寝転び、メールを開ける。届いたのは十分前だつた。

『コーンポタージュ味 あんなのあるんだね』

ちょっと意外なメールだつた。

『どうしたの？』

『はまつちやつたかも』

タツヤは声を出して笑つた。そんなことをメールしてくる希が面白かつた。

『明日もあつたら少しあげるよ』

『ハクちゃん 覚えてるかな』

『もう忘れてそうだね それに授業のはハクアが悪いわけじゃないんだ』

『そうなの？』

『僕がプリントを見れば良かつたんだ ハクアもそう言つてたのを思い出した』

希から返事が来るのには少し間があつた。一人の黒板前のやりとりが希にうまく伝わるはずもない。でも、タツヤはつい送つてしまつた。希にはなぜか隠したくないのだ。

『そつか あせつたんだね しつかり！』

短いメールの向こうに、希はどんな表情をしているのかタツヤは

考えた。

『落ちこんで、ゴメン』

『つうん 朱鳥くん やさしいね』

最後におやすみのあこがれをメールで交わし、携帯を静かに机に置いた。

第3話 『花瓶の欠片とキープタブレット』 1／2

七月に入り、天気が良くてとにかく暑い毎日が続いている。日差しあるほど強くなり、セミは力いっぱい鳴きはじめ、洗濯物も干したらすぐ乾くようになった。朱鳥タツヤは日曜の昼、リビングで妹の由果と一緒にそうめんをすすりながら、ぼんやりとテレビを見ていた。父親の廉太郎はスポーツジムに出勤している。

家では、妹の由果がエアコンの冷気に弱くて、風に当たるとすぐ具合が悪くなるので、あまりエアコンをつけないようにしている。廉太郎は家の中が暑いのも寒いのも全然平気らしく、「筋肉のおかげだ」と言っている。だから、夏に料理をすると、キッチンはどんどん熱くなる。つらいのはタツヤだけだ。

気分だけでも涼しくなると、そうめんに大根おろしと刻みネギをたっぷり入れる。タツヤは辛い薬味が好きだった。由果が真似するように大根おろしを欲しがったので、少し分けたが、この辛さは全然ダメだったようで、涙目で舌を出していた。大根おろしをタツヤの器に戻すので、テーブルにぼたぼたとこぼれて大変なことになつた。

「お兄ちゃんの鬼い……！」

「知らないよ。由果が欲しつて言つたんだから」

「あとで牛乳プリン」

「わかったよ」

そうめんを食べ終わつた後、自転車に乗りスーパーに牛乳プリンを買いに行く。この銀色の自転車は三年生のときに買い換えてもらつたもので、もう一年以上乗つている。後ろにシートがついていて、たまに由果を乗せることがあるが、背中にくっつくと暑いので由果は家に置いてきた。

スーパーではソーセージの特売をやつていて、山盛りのワゴンの前でふと足を止めた。もちろん買うつもりはない。ただ、寺野ハク

アと月本希が泊まりに来た日のことを少し思い出す。家族以外の人のために料理を作ったのは初めてで、しかもあんなに何度もおかれりしてくるハクアの姿が何だか面白かった。

廉太郎から「あの子たちはまたうちに来ないのか?」と何度も聞かれたが、タツヤはハクアにからかわれた恥ずかしさが胸に戻ってきて、首を横に振った。それと、タツヤはその後、廉太郎の部屋にあつたヤクザのマンガをまた手に取つてみたが、やはり面白いとは感じなかつた。逆に、ハクアは風呂で使つたトーックシャンプーがかなり気に入つたらしく、家のシャンプーを早速それに変えたとはしゃいでいた。

もう毎日スーパートーックバスタイルだよ! あれを作つた人はすごいね!

あまりハクアが楽しそうに騒ぐから、その晩、タツヤもトーックシャンプーを使ってみたが、一日でいつも使つてているシャンプーに戻した。マンガの好みもシャンプーの好みも全然違うし、家庭科や英語の授業でもひどい目にあつたが、それでもハクアと話すと樂しいし、ハクアがちょっとした気になること、困ったことがあるとよくタツヤに話してくるのでよく聞いてあげている。そういうことが毎日何からもあるのだ。

タツヤは自転車に乗り、真夏の白く焼けた道をすいすいと走つた。家に着き、買つてきた牛乳プリンを由果に渡そうとすると、由果はリビングで寝転がり、すやすやと寝息を立てていた。誰も見ていないテレビを消し、牛乳プリンとソーセージを冷蔵庫に入れ、大根おろしで汚れたテーブルをきれいにふき、カーテンを閉じ、扇風機をつけた。

額から流れ落ちる汗がすつと冷えていく。

たつさんは席が近いし、頭いいから、勉強も教えてもらつてます。

タツヤ、お前、女の子にやさしい男だな! いいぞ!

きつと、ハクアが頼つてくるからだ。タツヤはゆっくり首を振る

扇風機をぼつぼつと見つめ、目が乾くとまぶたを閉じた。

ある朝、学校に着くと、廊下で学級委員の十和田霧枝に会った。水道で花瓶の水を換えてきたみたいだ。教室に飾つてある花で、晴海先生が持つてきたものだ。花瓶は陶器の細長いもの。霧枝は背が小さいので、花瓶が大きく見える。タツヤがおはようと挨拶すると、一瞬驚いたように鋭い目線を向けたが、すぐにっこりと笑った。

「あつ、聞いたよ」

「何を？」

「ツツキーとテリーが家に泊まりに行つたんでしょう？」

霧枝は希のことをツツキー、ハクアのことをテリーといつも呼んでいる。

「ああ、うん」

「ふーん、仲いいなあ。で、ツツキーと同じ布団で寝たんでしょう？」

霧枝は何でそんな細かいことまで知っているのか。タツヤは心臓がビクリとなつた。

「えつ？！……それ、月本さんから聞いたの？」

「ううん、テリーから」

ハクアはタツヤが起こしに行つたので、タツヤが希の布団で寝ていたのを見てないと思ったが、もしかして夜中に部屋に戻つて来て、あの姿を見たのだろうか。考えてもよく分からなかつた。

霧枝は花瓶を抱えて教室に入ろうとした。ところがそのとき、教室から男の子が飛び出して来て、激しくぶつかつた。霧枝の手から花瓶がすべり落ちる。そばにいたタツヤは慌てて手を伸ばした。花瓶の上のほうをつかんだ感触はあつたけれど、花瓶の底は床にぶつかつて、パキッと割れる音がした。

「ああつ！！」

霧枝が悲鳴みたいな大声を上げ、クラスのみんなの目を集めた。

霧枝にぶつかつたのは同じクラスの丘野アランだ。アランは、日本

人の父親とアメリカ人の母親のハーフで、髪はオレンジっぽい色で、体の線は細く、茶色い目をしている。

アランはもともと社長の息子で、東京の都心の高級マンションに暮らしていたと聞いた。だが、親の会社の経営が急に悪くなり、去年からこの美星町に引っ越してきたのだ。すぐ目立ちたがりで、何かといばる性格で、短気で素直にしているところをタツヤは見たことがない。アランと霧枝はいつも仲が悪いので、タツヤも他のみんなもこれはまずいことになる、という予感を持った。

花瓶はバラバラに壊れていなかつたが、二つに割れてしまい、割れた片方が床に転がり、水がビタビタ流れ出していた。

「ちょっと！ 割れちゃつたじゃない！」

霧枝がヒステリックな声でアランの腕をつかむ。アランは面倒くさそうな顔で手を振りほどく。

「うるせーな。見えなかつたんだから、しょうがないだろ」

「今すぐ先生に謝りに行つて！ これ持つて、早く！」

霧枝はそう叫びながら、しゃがみこんで花瓶の破片を拾いはじめる。

「イヤだよ！ なんで俺が謝るんだよ！ お前がしゃべりながら歩いてたからじゃん。よけられないグズなお前が悪い」

「何で私が悪いのよ！」

霧枝は手を止め、顔を真っ赤にして下から睨みつける。アランは渋い顔で舌打ちする。

「うるせーな。お前が花の世話をしてるんだろ？ 早く先生に言つて来いよ」

床に流れた水はかなり広がっていた。これだと誰かがすべつて転んでしまう氣がする。タツヤはこれ以上霧枝とアランがケンカしていくも意味がないと思った。それより早く床をふかないとみんなが困る。教室内にいる希やハクアとも一瞬目が合つた。

人の役に立つ 難しい、その言葉がふいに頭に浮かぶ。

「十和田さん、僕がこれ片づけるよ。話しかけたの僕だし」

「えつ……！」

タツヤは教室のロッカーからバケツと雑巾を持って来て、割れた花瓶をバケツに入れ、雑巾で床の水をふいた。水の量はそれほどでもなく、すぐに床はきれいになつた。怒鳴り合つよりもすぐやつたほうがいいや、とタツヤは胸の中で思う。

「十和田さん、バケツはここに置いておくね。後で先生に謝らうよ」そう言つて後ろのロッカーの上に置き、濡れた雑巾を絞るために廊下へ出た。クラスはそれで静かになり、アランも清々した顔で友達と話しながら向こうに行つた。

霧枝は小走りにタツヤの後ろを追いかけてきた。タツヤは水道で雑巾を絞つている。「ねえ、ちょっと、何で丘野くんに謝らせないの？！」

「今のは誰も悪くないよ。しあうがないって

「でも……」

「これでいいって

タツヤが言つと、霧枝はそれきり黙つてしまつた。

朝のホームルームの後、一人で晴海先生の前に行き、割れた花瓶を見せて謝つた。

「先生、すいません。不注意で落として割れちゃいました。ごめんなさい」

結局、アランとぶつかったことは言わなかつた。タツヤがそれを言わないので、霧枝もあまり騒ぎ立てず、横で静かにしていた。

「まあ、しようがないわね」

晴海先生は何となくスッキリしない顔を見せながら、許してくれた。

「先生、どうしたらいいですか？ 捨てちゃうのはもつたいてなくて

……」

霧枝が少し伏し目がちに聞く。

「そうね、もし接着剤とかで直せるようなら直してくれる？ 破片

で手を切らないように気をつけてね」

晴海先生は、学校の物が壊れたとき、「じゃあ、先生がやつとくわ」という言葉はまず言わない。自分たちでどうにかできるかやつてみなさい、という答えが返ってくる。晴海先生が美星小学校に来たとき、全校朝礼のときみんなの前で話したことをタツヤはなぜか今でもよく覚えている。

晴海先生は理系大学の出身だが、大学生のとき、エクアドルで一年間ひとりで過ごし、現地の子どもたちの面倒をたくさん見たと言っていた。日本の子どもは、ないなら買う、壊れたら買う、という考え方をするけれど、エクアドルの子どもは、ないなら作る、壊れたら直す、と最初に考えると言つ。そのとき先生は将来どんな仕事をしたいか考えていなかつたが、エクアドルに行き、日本に帰つて小学校の先生になりたいと決心したと言つた。

だから、買えないと泣く、壊れたら泣く、というのは幼稚園までで卒業し、小学生になつたらねだつたり泣いたりする前に自分で考えましょう と、このことにつも厳しかつた。

「接着剤は買わなくても用務員室にあるから、もらつて来なさい」

晴海先生の声はやさしかつた。

給食が終わつた後、一人で用務員室に行き、接着剤を借りてきて、タツヤの席で修理をした。花瓶は、真ん中あたりから斜め下に向かってパツキリと割れていが、破片がぴつたり合わさつたので接着は大丈夫だつた。霧枝もほつとした笑顔になる。

希も心配そうにやつて來た。また、アランもいつもならすぐ校庭に遊びに行くのだが、このときはチラリと様子見に來た。ただ、アランから謝りの一言はなかつた。霧枝もアランを完全に無視して、タツヤとだけ話していたので、アランはもう関係ないなという顔をして教室を出て行つた。一方ハクアは、給食を満腹以上に食べた後、自分の席に座り、修理に夢中になつているタツヤの背中をじつと見ていた。希は、ずっと不機嫌そうにタツヤを睨んでいるハクアの視

線に気づいたが、何となく言い出せなかつた。

昼休みは接着作業で終わり、放課後、霧枝と一緒にちゃんとくつついたかを確かめた。希は習い事があるので帰つた。アランはもう来なかつた。ハクアはなぜか腕組みをして席に残り、まだ帰らない。今日は他の女子と遊びに行つたりしないのだろうか。

ともかく、くつついた花瓶を持つて水道で水を入れてみると、割れ目に穴が空いた場所があるようで、水が少しづつこぼれ出した。仕方なく、濡れた花瓶を一旦ふいて教室に戻つた。霧枝がため息をつく。

「あーあ、どうしよう……」

「紙粘土でふさいでみる?」この前、図工で使つたやつが余つてゐるんだ

「あつ、そうだね。いいかも。アッシー、よくそんなこと思いつくな

霧枝だけは朱鳥タツヤをアッシーと呼ぶ。

「まだうまく行くかわかんないよ。でも、見た目がすぐ修理しつて感じになるかもね」

「じゃあ、あたしの持つてるビーズで飾るのよ。明日持つてくるね」そして、明日タツヤは紙粘土を持って来て、霧枝がビーズをたくさん持つてくる約束をした。修理中の花瓶をバケツに入れ、ロッカーの上に置く。教室にはほとんどクラスメイトの姿はなかつた。みんな帰つたのだ。そう思つていた。

「あのせ、たつん」

二人の後ろにハクアが立つてゐた。明らかに不満げな顔をしている。

「何でたつんがそれやつてるの?」

「えつ……?」

ハクアの口から出たのは、思いも寄らない言葉だつた。

「アランはさつさと帰つたじやん。あいつ、先生にも謝らないし」それはそうだけど、ハクアはなぜ怒つてゐるのか分からぬ。タ

タツヤが話そつとすると、霧枝がさえぎつて前に出た。頭ひとつ低いので、後ろに束ねたポニーテールが荒馬みたいにタツヤの鼻先で跳ね上がる。

「ツツキー、何でアツシーに向かつて怒るの？」

「たつづんが悪いからだ」

ハクアは直球でそう言い放つた。

「な、なんでだよ」

「ねえ、それはアランに言つことじやない？」

霧枝がきつい口調で言い返す。アランの呼び方はアランのままだ。「今朝のは、アランと霧枝が一人で謝りに行くものだ。直すのだとて一人がやればいい。たつづんが間に入るから変になつた

「別に変なことじやないつて」

タツヤは首を横に振り、ランドセルを担いだ。ハクアの相手をするより、もう早く帰りたい。夕食の支度だつてしなくてはいけないのだ。だが、ハクアは一步も引き下がらない。

「いや、変だよ！」

「……そんなことないよ」

「たつづん、見てないのか？ アランは笑つて帰つたんだぞ！」

「あのさあ、それなら、テリーがアランを注意すれば良かつたじやない！」

霧枝がさらにヒステリックな声を上げる。タツヤはそのせいで少し気持ちが冷静になつた。だが、ハクアはまだ仁王立ちのままだ。「それじゃ、たつづんが変わらない！ あたしはたつづんに怒つてるの！」

もう何に腹を立てているのかよく分からなくなつていた。霧枝の横顔を見る。もしアランと一緒に修理することになつても、仲の悪い一人が絶対にうまくやるはずがない。アランは霧枝と口ゲンカして、霧枝をひとり置いて帰るに違ひない。ハクアは何も考へないで、ただ怒つているだけなのだ。ハクアはタツヤに変われと言つたが、タツヤは霧枝を手伝う気持ちを変えたいとは思わない。

「 つるさいな

「 なつ……！」

ハクアは言葉を失う。タツヤから突き放したのは初めてかもしれない。

「 花瓶はクラスのなんだ。それが壊れちゃつたから何とか直してるんだよ。アランにやらせたら絶対に直らない」

霧枝は振り返り、目を丸くした。タツヤはハクアを一直線に見つめている。

「 怒鳴るだけなら、構うなよ」

タツヤはハクアに対し、冷たく言い切つた。三人しかいない教室が一瞬で静まる。ハクアは下唇をきつく噛んだまま、何も言い返して来なかつた。タツヤはこれで済んだと思ってそっぽを向き、反対側のドアに歩いて行つた。霧枝が慌てて後についてくる。タツヤは早くこの場から離れたかつた。そして、希がここにいなくて良かつた。前にハクアの応援団になると約束したわけで、こんなところは希に見せたくないと思つた。

霧枝はずつと真つ赤な顔をして、昇降口まで黙つてついてくる。校舎内に人が少なかつたせいか、何となく距離が近かつた。霧枝とは帰る方向が違うので、校門のところで別れた。霧枝の表情はすっかり明るくなつていて、「また明日ね！」と元気に手を振り合う。その後、少し気になつて昇降口を振り返つたが、ハクアはまだ校舎から出てこなかつた。

夕食はちゃんといつも通り作つたはずだが、味見をしてもいまいちだつた。廉太郎と由果は満足げに食べていたが、タツヤはあまり美味しく感じなかつた。紙粘土をランドセルに入れて、その夜は早々と寝ることにした。

花瓶は、昼休み、割れ目に沿つて木工用ボンドをたっぷりと塗り、その上から紙粘土を少しづつ貼りつけ、はがれないように接着した。そして、やわらかい紙粘土に、霧枝の持つてきたビーズや携帯のデ

コレーションパーティをボンドで次々に貼つていくと、何となく最初からそういう飾り付けがあつたように見えてくるから不思議だ。

飾り付けは希も楽しそうに混ざつてきたので、タツヤは、この作業は幼稚園からの仲良し二人組に任せて、男友達と校庭へボール遊びを行つた。アランも一緒だつたが、普通に楽しく走り回つた。ハクアのことは、ほつたらかしのままだ。もちろん、希にハクアと口ゲンカしたことは言つていない。希からも何も聞いて来なかつたので、ハクアも希に話してないとと思う。なら、もう済んだのだと思う。

ただ、霧枝とアランの仲の悪さは変わらなかつた。放課後になり、紙粘土が乾いたのを確かめて、タツヤと霧枝と希の三人は花瓶を水道へ持つていつた。少しづつ水を入れてみると、上まで入れても水は一滴もこぼれ出なかつた。

「あー。すごいね。アッシーのおかげだよ！」

霧枝はタツヤの顔を見て、本当にうれしそうに目を輝かせる。普段、クラスメイトに注意することが多い霧枝だが、今回は本当に困つていたのだと愚つ。

「うん、うまくいったね。これならまた使えると思うよ」

すると、ちょうど水を飲みに来たアランが、水の入つた花瓶を横から眺めていた。だが、霧枝もアランも目を合わさず、口もきかず、やつぱりアランから謝りの言葉は出なかつた。

アランが教室に戻つた後、希が霧枝に話しかける。

「丘野くん、少しは霧枝ちゃんに悪いつて思つてるみたいだね……」「はあ？ 何で？」

霧枝は、希が相手でも遠慮なくきつい言い方をする。

「だつて、これ直してるときいつも見に来るでしょ？ 直るか気にしてるんだよ」

「ツッキー……。ダメ、それはやさしきさ。直らなかつたら笑おうと思つてるんだよ、あいつは」

いや、それは厳しすぎだつて、とタツヤは横で思った。

ただ、アランが最後まで霧枝に謝りに来ないのは、タツヤも残念な気分だった。ハクアが怒鳴ったのも理由はわかる。だけど、花瓶はこうしてちゃんと直ったし、霧枝とアランの仲が良くなるはずもないし、結局自分が霧枝を手伝つて良かったのだ、と思つた。

タツヤがランドセルを取りに席へ戻ると、ハクアが深海魚みたいに暗い顔をして机にへばりついていた。一応、報告というか声をかける。

「花瓶、ちゃんと直つたよ」

「……あつそう」

何だか嫌みのある返事だ。目を合わせようともしない。

「具合悪いの？」

少し沈黙があつた。ハクアは、机に投げ出した両腕に顔を埋め、低くこもつた声で答える。

「……やけ食いしたい」

「やけ食い？」

「昨日の夜、何も食べてないんだ」

「バランス悪いなあ。ちゃんと食べたほうがいいよ」

タツヤは、お菓子を食べすぎて夕飯が入らない小さい子を叱るような気分だった。「うるさいな」

まるで昨日の言葉をそのまま言い返してきた感じだ。

「怒鳴るだけなら、構うなよ」

リピートなんて本当に子どもだと思つ。

「別に怒鳴つてないし……」

すると、ハクアは無言でいきなり立ち上がり、振り回すような勢いで赤いランドセルをガバツと背負い、さつさと教室を出て行つた。それから、ハクアが何気ない軽い相談を話しかけてくることは急になくなつた。

水曜日の放課後、七月の「天文新聞」を作るために、図書室で希と話していく、希が少し変わったことを言い出した。

「山都小に落ちた隕石なんだけどね、あれ、もうちょっとハクちゃんに聞きたいの」

七月は夏の大三角形のことを書くことは決まっている。それだけだとタツヤは思っていた。

「え……隕石のこと？」

「うん。なんか『天文新聞』を毎回読んでくれてるクラスの子から、あの隕石のことも書いてって言われちゃったの。他の子からも言われて……それで、『うん』って言っちゃって……」

「ちょっと希りじくない、もう」もじした話し方をする。

「えへへ。どうじよつか」

希は無理に笑っている感じだ。タツヤがここ数日ハクアとまったく話していないのを心配しているのだろうか。

「書くのはいいと思うけど……ハクアに聞けばいいの？」

「うん。今日、ヒマだつて言つからもう呼んじやつた。ちょっと待つてね」

タツヤが何か言つ前に、希は図書室の奥に走つて行き、ハクアの手を引いて戻つてきた。別にケンカしているわけではない。けれど、むつすり顔のハクアが目に前に座ると、やっぱり気まずかった。

「はい。ハクちゃんが来たよ」

希はどうも変な言い方だ。タツヤはまわりを気にしつつ、小さい声でハクアに聞いた。

「隕石のこと、図書室で話していくの？」

「別に」

やっぱり機嫌が悪い。話していいのか悪いのかよく分からない。

「まあいならハクアの家とかに行く？」

「別に」

タツヤはちよつとイライラした。この前、不良に対して強かつたハクア、勇氣があつたハクア、廉太郎や由果とすぐに打ち解けた明るいハクア、外国人に対しても落ち着いていたハクア、良いところはたくさん見たはずなのに、今は少し憎たらしかつた。タツヤが話を聞いて、ちゃんと答えてくれるのか不安になり、希の顔を見る。なのに、希はなぜかニコニと笑つた。

「ハクちゃん、落ちてきた隕石を見たんだっけ？」

希が聞きはじめる。タツヤは希に任せようと思つた。

「ううん、見てないよ。あたしお風呂入つてて。でも、すうじいのが来たのはわかつた」

「それって、落下した音が聞こえたの？」

「でつかい音は聞こえたけど、でも、落ちてくる前にわかつた」
小学校を倒壊させる威力のある隕石だ。衝突音もすごかつたと想像できる。

「ううん、それは平氣。あたし一度隕石の落下で覚醒してゐるから」
そんな話を聞くと、ハクアは特別な力を持つてゐることを考えたくなる。

「恐くなかった？」

「ううん、それは平氣。あたし一度隕石の落下で覚醒してゐるから」「えつと……」

希の言葉が止まつた。前にもハクアから少し聞いた覚えがあるが、超能力に目覚めたのは今回の隕石でなく、何年か前だと言つていた気がする。今日は図書室にいる人はたまたま少ないが、それでもタツヤはもう少し声を落とした。

「なあ、それって、どういうことなの？」

「あれ、訓練学校のこと言わなかつたっけ？」

「訓練学校？」ううん、初めて聞いたよ」

すると、ハクアは急に弱つた顔になつた。

「あ。えーと……ううー……えつとね」

「待つて、ハクア」

タツヤは極限に小さく落とした声を出す。

「それはしゃべつたらまずいことなのか？ 月本さんや僕が危険になるとか」

「ん？ あ、全然平気だよ」

ハクアは普通の声であつさり言つた。

「訓練学校にはね、あたしみたいな子が何人かいるんだよ」

「えつ？ ジやあ、それが山都小の前にいたつて言つ施設なの？」

「うん、そう。たつん、ほんとよく覚えてるねー」

当たり前だ、とタツヤは言いかけて止める。こんな重大なこと忘れるほうが不思議だ。

「施設？ ハクちゃん、施設にいたの？」

希は、前に聞いた話をもう忘れていた。ハクアが他の子からおかずを奪つていた、とか言つていた施設だ。そこに同じ年くらいの超能力者がいるような話しぶりだ。ここまで聞くと、もう完全に天文新聞に書ける内容ではない。

「でもね、あたしも覚醒してないときは、のぞみんやたつんみたいに普通に生活してたんだよ。でも、三年生のとき、近くに隕石が落ちたらしくて、あたしは小さくて気づかなかつたんだけど、適性があつてメテオドロップが発見されちゃつたの」

メテオドロップ 隕石の落下で目覚める超能力。ハクアは最初にそう説明したのを思い出す。発見されたというのはちょっとイメージができなかつた。ハクアが自分からその施設に入つた感じではない。

「発見されたの？」

「うん、訓練学校のレーダーに見つかった。地球の外に衛星が飛んでるみたいなんだ」

「……ねえ、ハクちゃん、エーセーって？」

希が困つた顔で聞く。話の範囲が普通の生活を飛び超えすぎている、かなり手に届かない感じだ。

「えーと、何だろう、宇宙船？」

「うん、訓練学校のレーダーに見つかった。地球の外に衛星が飛んでるみたいなんだ」

「宇宙船かー。『テロロ軍曹』みたいな感じ?」

とアーネ番組の名前が出てきて、タツヤは絶対に違うと思ったが、うまく説明できなかつた。それよりもハクアは超能力者として一度発見されて、特別な施設に入つたのに、どうして普通の山都小に通つていたのだろう。もしかして、山都小は普通の小学校じゃないのかも それで何かトラブルがあつて、隕石がわざと落とされて、消滅したとか ？」

「テロロ軍曹、面白いよな~」

「あれ? ハクちゃんのうひ、テレビあつたつけ?」

「ん? あー、立ち読み、立ち読み」

「あつ、それはダメだよ~」

「女の子一人で話が変な方向に行こうとしていた。一人して声もだんだん大きくなつてきている。まわりに気を配つているのはタツヤだけだ。」

「あのせ、そんなことより、その訓練学校では何をしてたの?」
声を落とす。

「別に。訓練とか」

急に冷めた口調に戻つた。タツヤにはもうハクアの考えが何だかよく分からない。

「訓練とかつて……あの能力を何度も使うのか?」

「そうだよ。最初はこんなにラクラクと発動できなかつたんだ。ほれっ」

そう言ってハクアはいきなり右手を伸ばし、タツヤの耳をつまもうとする。タツヤは慌ててその手から逃げた。もう音の無い世界は嫌だ。今の不機嫌さだと、左手ですぐ解除してくれるとも思えない。

「よせつて!」

「アハハッ、『ごめん、ごめん。たつん、耳が敏感だったの?』

「そうじゃない!」

「朱鳥くん、声があつきいよ……図書室だよ」

希が人差し指を唇に立てて注意する。まわりに気を付けていたは

ずなのに、つい少しパニックになってしまった。ハクアは変に意地悪げな目つきで、タツヤをじっと見ていた。イラだちが胸に戻ってくる。ハクアを睨むと、向こうは歯を剥いて返した。本当に子どもだ。

「ふーん、訓練が必要なんだね」

「そうだよ。最初はうまく発動や解除ができないし、寝てる間に勝手に力が暴走したり、使った後、気を失つたりするんだ」

「えつ……ちょっと恐いね」

希が真面目な顔に戻る。

「うん、恐いなんて感じじゃないよ。メテオドロップは、覚醒していくのときはだいたい暴走するんだって。だから、訓練学校に入つたほうが安全なんだ。もしあの学校に連れて行かれなかつたら、あたし死んでたんじやないかなあ」

タツヤも希も言葉が出なかつた。

死んでいたかもしれない、と普通に話せるのも驚きだつたし、死にかけるほどの危険な経験をした子どもが、その学校にはハクア以外に何人かいるらしい。おかげを奪つていたとか聞いたとき、もつと幼稚園みたいにほのぼのした施設を想像していた。だけど、聞くほどに、死の危険があるくらいの場所みたいだつた。仲が良いも悪いも、みんな精神的に限界ギリギリの生活だつたのかもしれない。

ハクアはそれでも笑顔で話す。どういう心臓の強さなんだろう。「そんな恐い顔しなくとも、先生とかお医者さんいるから大丈夫だよ。ただね、これは使い続けないと、どんどん力が落ちちゃうんだ。で、最後は消えちゃうんだよ」

右手を見つめながら話す。希と比べても、普通の女の子の手だ。体に特別な訓練を受けたという感じはない。死ぬとか消えるとかいう言葉を聞いて、タツヤはだんだん背筋が寒くなってきた。

「その力……使い続けないとダメなんだ」

「うん。どんなつまんないことも、たまに使わないとダメ。体の具合が悪くなる」

「 消えるとどうなるの？」

「先生は、死ぬとか、植物人間化するとか言つてたなあ。植物人間化ってのはよく分かんないんだけど、なんか眠つたまま」飯も食べられないらしいの。だから困るんだよね」

これ以上、ハクアから能力の話を聞いてもいいのだろうか、とタツヤは思った。希も気分の悪そうな顔をしているし、これくらいでもう今日は帰りたい。完全に天文新聞を書く気持ちではなくなつている。ただ、最後に少し訓練学校から山都小に移つた理由だけが気になつた。

「でも、そこを出て山都小に行つたんだろ？ 訓練学校はいつ卒業したの？」

「ん？ 違うよ、あたし脱走したの」

「えつ？！」

タツヤはまた声を出してしまつた。希も呆気に取られて目を丸くしている。

「うん。ほんとはね、訓練学校を出たら危ないんだ」

「それは 訓練途中だつたから？」

「そうじやないよ。訓練学校で、キープタブレットつていう特別な薬が配られるんだけど、それを飲んでるとメテオドロップのいろんな反動とか、まずいことが抑えられるんだ。だから、出たらちょっとヤバいんだよね」

「反動つて……？」

「ん？ だから、気を失つたり、記憶が消えたり、感覚がおかしくなつたり、とか」

もうタツヤも希も頭が混乱していて、大まかにしか整理できていない。つまり、超能力は使い続けないと危険で、でも力を使つても薬をちゃんと飲んでないと危険で、じゃあ、ハクアはその学校の外に出たら、本当に危ない状態じやないか。ここには超能力者のことが分かる先生も医者もいない。正直こんなに恐い話とは思わなかつた。ただ、ちょっと便利な能力を持つてるだけだと思つていた。

「なあ、ハクア、何で訓練学校を出たんだ？ そんなに……危ないこと知つてて」「それはさあ、もう、あの三段重ねのギガバーガーだよ。あれをテレビで見ちゃってさ、もう食べたくて食べたくて！」

タツヤは脱力した。肉か。結局、肉だつた。

「ハクア……」

どうしてハクアはこんな話をずっと黙つていたのだろう。ハクアとクラスメイトになつてまだ一ヶ月だし、知らないことがすぐ多いことに驚いた。希もかなり沈んだ顔をしているが、きっと同じことを考えていると思う。応援団と言つた自分たちの言葉が、また軽々しく感じた。

「脱走つて 連れ戻されないのか？」

「うん、平気。たぶんもう見つからないよ」

ハクアは余裕の笑顔を見せた。本当に信じていいのか、正直タツヤには分からぬ。

今月の天文新聞はまだ隕石のことは書けないね、と希はノートを閉じて、このまま三人で帰ることにした。学校の堀沿いに並ぶ桜やイチョウの木々からセミの声が暑苦しく降り注ぐ。

タツヤとハクアは図書室であれだけ話したが、仲直りしたわけでもないし、気が重い話だつたから、話しているのはずつとハクアと希の二人だつた。希は、霧枝から少し分けてもらつた携帯のデコレーションパーツをハクアに楽しそうに見せていた。

「ハクちゃんも携帯持つたらいいのにね」

「うーん。携帯つて、逆探知されてるみたいでさ、なーんかイヤなんだよね」

「そつか、現在地はわかるみたいだしね」

ゆっくり歩くうちに、近くの広い公園の前に通りかかつた。クラスマイトの男子が何人か集まりサッカーをして遊んでいた。声をかけようとしたが、アランの姿が目に入つて少しためらつた。公園に

は他にも下の学年の子たちが何人か遊ぶ姿があった。

「ごめん、水飲んでくる」

そう言つてハクアが公園に入ったので、タツヤと希も公園の中に入つた。アランは三人の姿に気づいて、急にこちらへ走つてきた。Tシャツと半ズボン姿だが、真っ赤な顔をして汗をびっしょりかいしている。アランもまた不機嫌な顔をしていた。

「花瓶……直つたのか？」

「うん、直つたよ」

希は隣りでやつぱりという顔をして見せた。だが、アランの目つきは鋭いままだ。

「お前さ、十和田にいいとこ見せて、いいことなんかないぜ」「なつ、何だよ、いきなり」

タツヤは驚いた。困つていた霧枝を手伝つただけなのに、ハクアと言い、アランと言い、なぜか突つかかつてくるのだ。タツヤは悪いことをしたつもりはない。

「十和田は人のことなんか気にしないから」

アランは霧枝が嫌いなのは知つていて、ただ、何か気になる言い方だつた。

「ねえ、霧枝ちゃんを変なふうに言わないでよ」

希が我慢できず、横から口を出した。

「あ、ごめんな」

アランは希には素直に謝ると、もう一度タツヤの顔をちらりと見て、サツカーに戻つていつた。希は霧枝の悪口を言われたせいで不機嫌になり、タツヤも少し話しかけにくくなつた。そこにさつぱり顔のハクアが戻つてくる。希の変化にすぐ気づいた。

「あれ？ あんたら、もめた？」

「……もめてないよ」

「うん。ハクちゃん、大丈夫だよ」

それから、クラスメイトの男子がタツヤにサツカーに入るかと声をかけてきたが、タツヤはそろそろ夕食の支度で帰ろうと思つてい

たので、遠慮した。アランはタツヤの声には振り向かなかった。

「帰ろうよ」

気持ちを変えてタツヤが言つと、ハクアは「うん」と返事をしながらも、視線は少し違うところを見ていた。不機嫌というよりは、緊張したような恐い顔をしている。明らかに様子が変だつた。両手の拳を握り締め、公園の外を用心深く睨んでいた。

そつと、希が声をかけた。

「ハクちゃん、どうしたの？」

「あの車の中……」

ハクアが声を低くして、道路を指差す。公園の外側の道路脇に、シルバーの車が一台停まっていた。サングラスをかけた若い男の人が運転席に乗つていて。車の中に他にも人が乗つているようだが、公園からはよく見えなかつた。確かにサングラスは見た目が少し恐いが、夏ならば別に珍しくない。

「あいつら、ちょっとやばいかも」

ハクアは警戒心を強め、ますます険しい顔つきになる。サングラスの連中だなんて、少年探偵の漫画みたいだけど、そんなことは普通起こらないと思う。どうしたのだろうか。

「……ハクちゃん、知つてる人なの？」

「いや、そうじゃないけど、あたし、もしかして見つかっちゃつたかな……」

「えつ　？」

タツヤと希はそろつて息を飲みこんだ。

公園の外の道路に停まつたシルバーの車。運転席には黒いサングラスの若い男。車の中にも何人か乗つてゐる気配がする。朱鳥タツヤがよく遊びにくるこの公園で、あまり見かけない感じだった。寺野ハクアはすつと横に動き、タツヤの陰に隠れた。

「でも、ちょっと年いつてるかな…………？」

よく分からぬ言葉を口にする。見覚えがあるようでもないが、何となく避けたい感じなのだろうか。

あたし、もしかして見つかっちゃつたかな…………？

そんなふうにハクアが口走つたせいで、月本希も少しそわそわしていた。タツヤだけは心配しすぎじやないかな、と思つて背伸びをする。ただ、ハクアがタツヤの陰から動かないでの、帰るのはもう少し待つことにした。

タツヤの同級生の男子たちは、相変わらず公園でサッカーに熱中している。その中で丘野アランは運動神経が良く、オレンジの髪が目立つので、よくボールが回つてくる。タツヤも足は自信があつて、アランとは毎年必ずリレー選手に選ばれているくらいだ。アランは勝負事にはやたらこだわる性格で、勝つたときは何度も自慢するし、負けたときはまったく話題にしない、そんな感じだ。タツヤはそういうアランが嫌いではない。

公園の入口に、自転車に乗つた女人がやつて來た。自転車を停めて、公園で遊んでいる小さい学年の男の子たちに向かつて声をかける。迎えに來たみたいだ。

「えー、まだー」

と男の子が大きな声でわがままに答えた。母親はふいに携帯が鳴つて、バッグから出して電話をしづらめた。すると、例のシルバーの車がするすると動いた。後部座席のドアが開き、若い男が飛び出してくる。黒っぽい帽子をかぶり、顔はよく見えない。男は、電話

中の母親に足音も立てず近寄ると、自転車のカゴに入ったバッグをつかみ取った。

「あつ？！」

最初に気づいたのはタツヤたちだった。男はバッグを脇に抱えた。母親は電話に注意を取られていたが、自転車が揺れたので、バッグを盗られたことに慌てて気づいた。

「えつ？！ あつ、ちょっと…」

母親は男を追いかけようとした。ところが男は、自転車を母親のほうに向かって蹴飛ばし、車に逃げた。母親は自転車の下敷きになつて倒れた。公園の入口近く、タツヤたちがいる本当にすぐ目の前の出来事だった。

「ドロボー！」

母親は叫んだ。

「非常事態だ！」

ハクアが叫んだ。

タツヤは一瞬の出来事に目を奪われていたが、ハクアの大声に驚いた。

「あいつらは追跡隊じゃない、泥棒じゃないか！ たつん、何とかするぞ！」

ハクアは拳を握り、野獣のよつに元田をランランと輝かせていく。

「おいつ、何だ？！」

アランがそばまで駆け寄ってきた。

「たつん、ちょっと借りるぞ…」

ハクアはそう言つと、右手でタツヤの足を握り、いきなり力を抜き取つた。タツヤは足の力を借りられるのは初めてで、すぐに膝がガクッと来た。この前ハクアに倒された不良たちはこういう感覚だったのか。

それより、足の力を借りてどうする気だ。まさか車を追いかける気なのか。ハクアが鬼気迫る表情で、希の顔を見る。

「月本さんはやめろ！」

タツヤは咄嗟に叫んだ。すると、ハクアは希から視線を外し、アランに向き合つ。

「まあいい、援軍が来た！ アラン、お前、足早かつたな。借りるぞ！」

「はつ？ 何を？」

「ハクア、待てよ！」

タツヤの声も届かず、ハクアはアランの足に触れて力を奪つた。アランはふらふらっとよろめいて地面に尻もちをついた。アランは驚き、言葉を失っている。前髪からのぞくおでこに猫の肉球マークのあざが出ている。これがハクアの超能力『レンタルフォース』で力を借りられた証だ。

「ハクア、追いかけるなんて無理だ！」

「いや、あの自転車を借りる！」

ダメだ。ハクアは本気だ。

「わかった。だつたら、車の番号を」

「あたしは視力が悪い。じゃあ、たつづん、後ろに乗れ！」

はいもいいえもなく、ハクアはタツヤの腕を強く引っ張つたまま、母親の自転車を起こしてまたがつた。赤いランドセルを前力ゴにぶちこむ。そして、タツヤの腕をつかんだまま思いきりペダルを踏み、走り出した。これじゃあ、ハクアが自転車泥棒みたいだ。タツヤは脚力が弱つた状態だが、転びたくない一心で後部座席にしがみつき、何とかお尻を乗せてまたがつた。

「おばさん、これ借りるね！ バッグは絶対取り返すからね！」

ハクアは振り返りそう言い残すと、前を向いてペダルをさらに強力に踏み込んだ。

「えつ？ えつ？ ちょっと！」

母親がうろたえるのも構わず、ハクアとタツヤの二人乗り自転車はぐんぐん加速していく。犯人の車が逃げた道を、恐ろしいような

スピードで、風を切り、一直線に突き進んでいく。公園で鳴くセミの声があつという間に後ろに遠のいた。

前方を見ると、だいぶ先だが、運良くシルバーの車が最後尾で信号待ちしているのを発見した。だが、信号が赤から青になり、シルバーの車が右に曲がっていく。

「たつりん、あの銀色だよな？」

「うん、そうだと思つ！」

「オッケー！ ターゲット、ロックオン！ ファイア————！」

ハクアは立ちこぎの前傾姿勢でフルスピードに突入した。

タツヤは振り落とされないよう、夢中で後部座席を握りしめる。ももから下に力がまつたく入らない異常な感覚。一方、自転車はトップスピードで突つ走り、今にも腰が宙に浮きそうで、声も出せず、体だけが縮こまる。自転車はこんなに速く走れるものだったのか、という驚きにも包まれる。

犯人が右折した交差点は、大きな道路と交わっていた。ハクアはスピードをまつたく落とさず、右に曲がり、歩道へと入った。まるで人をひきそつな勢いだ。カーブするとき反動でガードレールにつかりそうだが、ハクアが左足でガードレールを蹴り返し、見事なバランスでスピードを保つた。もう無茶苦茶だ。

そして、再び前方にシルバーの車を目で捉える。ハクアの足に力が入る。

「たつりん、のぞみんに説明させといて」

「えつ ？」

「携帯持つてるんでしょ？」

「わかつた」

何が分かつたのか自分でも分からぬが、タツヤはポケットから携帯電話を取り出し、希に「ホールした。希はすぐ出てくれた。

「朱鳥くん？」

「うん、僕だ」

「こまどりなの？」

「ハクアと自転車で追いかけている」

「ダメだよ！ 危ないよ！」

「わかつてゐる。車の番号を見たらハクアを止めゐる。」「めん、せつてお母さんに言つておいて」

「えつ？ うん、うん でも」

車が道路をまっすぐ走つてゐるせいで、ハクアも歩道をフルスピードでひたすら直進してゐる。距離は少しづつ縮まつてゐる気がするが、歩道の段差があると、後輪がバウンドして跳ね上がる。タツヤは今にも放り出されそうだつたが、片手の力で懸命にこらえた。

「あと、アランにも」

アランはパニックになつてゐると思つ。希に何を説明してもらつたらしいのかよく分からない。

「いいの？」

「わかんない！」

タツヤは電話口で悲鳴みたいな声を上げた。

「左に曲がるぞ！ 電話をしまえ！」

ハクアの命令が飛んでくる。タツヤは思わず通話ボタンを切り、携帯をポケットに突つ込んだ。両手で後部座席を握り、顔を伏せた瞬間、体が大きく左に傾いた。Y字の交差点を左へと突き進んでいく。ハクアは他の車があろうと歩行者がいようと、まつたくスピードを落とさない。横から来る車にぶつからないように、ギリギリのタイミングでハンドルを操り、一気に道を駆け抜ける。

何の恐れもなく立ちこぎするハクアの日焼けした背中の先に、確かにシルバーの車の姿が見えてゐる。ただ、番号はよく見えない。こんなスピードで番号を見るなんて無理なんじやないか、と本気で思つた。それなら、どうして追い続けているのか。

「ハクア！ もう無理だよ！」

汗ばむハクアの背中に向かつて叫ぶ。

「弱音を吐くな。あたしを信じろ！」

後ろに振り向くもせず、ただ前方のターゲットだけを見ている。

もしかして、ハクアにいま自分の視力を貸せば、犯人の車の番号が分かるのだろうか、と頭によぎって、その考えをすぐ振り捨てた。タツヤは視力を失い、この猛スピードの自転車に乗つていられるわけがない。

「番号は見えない？！」

「小さい数字は無理だ。大丈夫、車のスピードがさつきより落ちた！ あいつら、じつちに気づいてないな。たつん、追いつけるぞ！」

だんだん草の匂いが強くなってきた。美星みほし町の中心を流れる大きな川に近づいている。道の先には鉄橋がある。犯人の車はそれを渡ろうとしているかもしだいと思った。

「たつん！」

「なに？！」

「あいつら、橋を渡らないで、河川敷のほうに曲がつて行くぞ！」

ハクアの言葉通り、車のスピードが落ちて、横道に入り、河川敷へと昇っていく。二人乗りの自転車も少し安定した速度になり、確実に後ろをついていく。ただ、河川敷の砂利道になると、後輪が躍るようにならぬで、タツヤの体をオモチャみたいに何度も揺さぶつた。振り落とされないよう、体を支える両手に力をこめる。

「ハ・ク・アッ、深・追い・するの・は・危・険・だ・よ・っ！」

砂利の振動で、勝手に声が弾んでしまう。

「たつん、悪いけど、あたしさあ 追跡されるのは大嫌いだけど、追跡するのは大好きなんだ！」

ハクアは息ひとつ乱さない。そして正義のスイッチが入つていて。ダメだ。何を言つても通じない。タツヤはどうやって無事に帰るかを考えようと思つたが、砂利道が考えを激しく吹き散らした。

「あいつら停まるぞ。よし、一気に寄せて片付けよう！」

すごい言葉だった。ここまで来たら、もうハクアを もうこれ

以上ケガさせないように、守るしかない。タツヤは覚悟を決めた。

ハクアは車が停まってから引つたくなり犯人たちに近づくのだと、タツヤは思い込んでいた。この前、不良たちに立ち向かつたときのように。

だが、その考えは甘かった。

夕暮れ迫る川の上に、巨大な白い鉄橋が伸び、橋にはたくさんの車が連なっているが、河川敷には人の姿も、鳥の影も見当たらない。見晴らしはいいけれど、風の音もなく、かえつて恐くらいたつた。公園からここまで必死に追いかけてきたシルバーの車が、土手の上の道路で停止する。ハクアは自転車から下りず、そのまま走つて距離を一気に縮める。後部座席が少し開いて、母親から引つたつた犯人の男が出てくる。手には盗んだバッグを持っている。

「そいつを返せえっ！ クソヤロー！」

叫びながら、ハクアは自転車の前輪から男に突っ込んだ。思わず目をつぶる。自転車全体に大きな衝撃が走る。足が踏ん張れなくて体が左右に揺れた。人が倒れる音がしたが、どうなったのかよく分からぬ。まさか自転車ごと突つ込むなんて想像もしなかった。キッと自転車のブレーキがかかり、タツヤはガクンとなつて目を開けた。

ハクアの背中。　自転車の前方に、男の人が大の字に倒れいる。男は起き上がらない。

「まず一人目」

ハクアは冷静に自転車のスタンドを起こした。

「たつつんは下りなくていいからね。後はあたしが全部片付けるから」

「ま、待つて……」

全部片付ける　タツヤは背筋が震えた。自転車から下りようにも、足の力はまだハクアに借りられたまま。気が動転していて、

何かをしようといつ頭にならなかつた。

すると、助手席のドアが開いた。背が高い坊主頭の男が慌てて出でくる。

「おいつ、どうした？ 大丈夫か？」

目の前に、小学生二人と、倒れた自転車と、仰向けになつて氣を失つた仲間。男は一瞬で表情が険しくなり、重々しい足音で草を踏みながら近づいてくる。ハクアは体格がいい男が出てきたのにも全然ひるみなく、一歩前に進み出でぐつと睨み返す。

「おい、人にぶつかつといて謝りもしないのか、クソガキが！」

坊主頭の男はすごい剣幕で怒鳴つた。ハクアが自転車で公園から追いかけてきたことは本当に知らないようだ。だが、いくら大男がすごもうとも、ハクアは視線をまつすぐ外さない。

「ふざけるな！ 人様のものを盗むようなお前に謝る義理はない！」

「なつ、なに？！ お前、何言つてんだ？」

男は急に様子が変わつた。ハクアは不敵な笑みを浮かべる。

「こいつ強そудし、一応、借りとこうかな」

そして、足下で大の字に伸びた男の足を、右手で持ち上げる。力を借りると、用済みという感じでポイと離した。これで大小合わせて三人分の脚力がハクアの足にプラスされた。

ハクアもゆっくり草を踏み、坊主頭の大男に近づいて行く。男がハクアの体を捕まえようと手を伸ばしたが、一瞬の素早いダッシュで横へ回り込み、思いきりふくらはぎをキックした。

「ああつ……！」

男は悲痛なうめき声を上げ、前のめりに草の上へ倒れた。ハクアはさつさと男の足をつかみ、手を離した。坊主頭の広いおでこに肉球マークのあざが現れる。これで四人分の脚力。男は急いで体勢を立て直そうとしたが、足の力が入らず、上半身がねじれて、そのまま仰向けに寝転がつた。草のつぶれる音だけが空しく響く。

クマのような大男が、今は小学生のハクアに完全に見下ろされていた。河川敷の上を、ぬるい川風がざわざわと通り過ぎていく。栗色のショートヘアが夕焼けの気配に少し染まり、きれいな飴色に変わつて見えた。

「二人目か。 ねえ、あと何人いるの？」

「なつ、なんだ、これ……起きられねえ……ちゅ、中国拳法か？」

男はすっかり戦意喪失し、腕をバタバタさせている。裏返つた力のようだ。「まあ、そんな感じだ。お前、やつぱりすごい脚力だな。ものすごい力が入ってきた」

ハクアは男を悠々と見下ろし、満足げな笑顔を見せる。その強気な目を見て、タツヤは背筋がゾッとする。だが、自転車の上からは金縛りにあつたように一步も動けない。

そのとき、車の運転席のドアが開いた。サングラスをかけた細身の男が姿を見せる。仲間が一人とも少女に倒されている様子を見て、舌打ちをした。

「おい、起きろバカ！ ガキなんかどうでもいいだろ！ 早く行くぞ！」

サングラスの男は、坊主頭の大男に向かつて怒鳴った。

「いや！ それが、変な中国拳法で、起き上がれねえんだ！」

「つたく、面倒くせえヤツだな！ そんな拳法あるかよ」

「ほんとなんだよお！ 起こしてくれよ！」

すると、サングラスの男はすっと冷静になつた。

「まあいい。何にしろ、そのガキにはここで恩返ししないとな」男は氣だるそうに笑い、地面につばを吐く。ハクアは正面から向き合つた。

「……恩返し？ そんくだらないもんよりも、さつき公園で盗つたおばさんの金を返せよ。どうせこのバッグは空なんだろ？」

ハクアは草の上に転がつたバッグを指差した。

「なに言つてゐるこのガキ……」

「言つてゐるのは、真実だ。悪党め、少しば人の役に立つことをしろ

！」

人の役に立つ ハクアの口からたまに出てくる言葉。これをぶつけると、サングラスの男の口元が激しく歪んだ。

「説教くせえガキだな！ ガキだから許してやるかと思つたが、本気で叩きつぶしてやるからな」

「そいつ、つかまると変な拳法使うぞ！」

坊主頭の男が叫ぶ。

「へーえ。それじゃあ、これかな」

車の後部座席のドアを開け、金属バットを取り出した。タツヤは息を飲む。あんなもの使われたらハクアは男に近づけない。キックで返しても、金属バットの硬さは危険だ。

男はサングラスを外し、シャツのポケットに差した。

「金も思つたより少なかつたし。あーあ、不況つてやだね。いま、すっげえむかついてるからさ、お友達と一緒にボツゴボツにしてやるよ！」

そしてバットを構えて踏み出し、一気にハクアの頭上に迫つた。ハクアは金属バットを警戒したが、足下の砂利で滑つて、バランスを崩す。だが、咄嗟に横に跳んだおかげで、振り下ろされたバットは紙一重で避けられた。

ハクアは体勢を直してキックを当てようとするが、細身の男も素早くハクアの姿を捉え、バットを水平に振り抜いた。ハクアは驚きしゃがんでかわす。ハクアの背がもう少し高ければ確実に当たつていた。

男は人に向かつてバットを振ることに全然迷いがない。ハクアが挑発したせいか、男が子ども相手でも容赦ないのか。ハクアが反撃しようとするが、男も後ろにジャンプして距離を取り、すかさずバットをスwingした。ハクアは慌てて地面に転がり、危険な一撃からは何とか逃げた。だが、さらに金属バットが、男の体の一部みたいにハクアを打ちのめそうと何度も追い回していく。

ハクアは近づくこともできず、一旦思い切つて距離を取つた。か

なり息が上がっている。

「ちつ、金属バットか……」

「手足の短けえガキが大人にケンカ売つてくるんじゃねえよ！ 超えられない壁がわかつたかあ！」

男はバットをこん棒のように構えて再びハクアに突進する。

「ハクア、砂利をぶつける！」

タツヤは叫んでいた。逃げる、どうして言わなかつたのか。タツヤは混乱し興奮し熱狂していた。自分が逃げられないからか。ハクアが勝たないと自分があの金属バットで殴られるかもしれない。そんな恐怖が全身に走つたからか。タツヤはハクアが強盗の男に勝つことだけを一心に祈つていた。

「うんっ！」

ハクアは両手で地面の砂利をすくい、突つ込んでくる男の顔や体にぶつけた。男の足が一瞬止まる。バットを振り上げた男は、胴がガラ空きだつた。ハクアが一気に踏み切り、詰め寄つて、すかさずキックの体勢に入る。だが、タツヤはまた大声で叫んだ。

「腹は蹴るな！ お尻だ！」

その声が届いたか、ハクアはさらに加速して男の脇の下を潜るようになり抜け、ひるんだ男の背後につき、尻に強烈な回転キックを叩きこんだ。すさまじい音が鳴り、男の体が浮いて、砂利道に突つ伏した。タツヤはさらに叫ぶ。

「バットを蹴つ飛ばせ！」

ハクアは確かにその声を聞き、男の手からこぼれたバットを土手の下のほうへ思い切り蹴り出した。サッカー選手のフリー キックみたいに見事なキック。とんでもない飛距離だつた。バットは草の上を跳ね、河原の石にぶつかつて、甲高い金属音を鳴り散らした後、草むらに吸い込まれた。

静かな川風が流れる土手 悲鳴を上げて苦しむ細身の男の横で、決着を確信したハクアだけがひとり立つていた。呼吸をひとつ整え

ると落ち着いた表情になり、右手で男の足首をつかみ、脚力を取り上げた。

続いて、ハクアは車の中の様子を確かめる。もう誰も仲間はいなかつた。

ハクアはほつとした顔に戻り、ちょこんと自転車にまたがるタツヤと目を合わせた。

「たつん、悪い、携帯で警察に電話してくれ」

「う、うん。わかった」

タツヤは興奮のやまない手でポケットの携帯を握る。ハクアが勝った。ハクアが勝ったのだ。ハクアが強盗たちに勝ったのだ。

そのハクアがタツヤにゆっくり近づいてくる。栗色の髪がゆつたりした風になびく。

「たつん」

「なつ、なに？」

「助かつたよ。ありがとう」

ハクアの熱い左手が、タツヤの足の肌に触れる。ドクン、と胸が波打つた。「返すね」というハクアの声とともに、脚力が足に戻ってきた。不思議だが、返してもらったというより、ハクアに「えられたような感覚だった。

タツヤは携帯で110番に電話して、現在地を伝えた。警察への電話は初めてのことでの、説明もじどろもじどろだが、すぐに近くの交番からパートカーが来てくれるに至った。

それから、希の携帯にもかけて、引つたくなり犯を捕まえたことを話した。希は電話口で、「えつ？ えつ？ 車の番号を見に行つたんじゃないの？」と混乱気味だった。タツヤは言われて思い出した。そうだった、どこかでそれを忘れてしまった、とため息をつく。車が停まり、出てきた男に自転車で突っ込んだあたりから、もう後はハクアが犯人たちを倒すことだけを考えていた気がする。

「うん、大丈夫。今回はケガしていないよ」

「ほんと? 良かった……」

「心配かけてごめんね」

「すぐ帰つてこれるの? 自転車を返さないと……」

「もうすぐ警察が来るから、そしたら帰れるよ」

「うん。あ、ちょっと待つて、丘野くんが」

そう言つと、希の電話にアランが出た。慌てて替わつた感じだった。

「おい」

声は明らかに怒つている。分かつたのは、希はアランにまだ話していなかつたことだ。ハクアとタツヤの帰りを待つていてるのだと思つ。

「いや、大丈夫だよ。ちゃんと元に戻るから」

「そうなんだ。タツヤ、お前、知つてるんだな?」

「えつ……?」

「これつて絶対普通じやないよな」

アランは鋭く言い切つた。だが、タツヤは答へに困つて「いや……」と返した。

少しの間、沈黙が続く。やがて、アランは「ふーっ」と大きなため息をついて、「わかつた。待つてる」と言い、希に電話を戻した。希に少し言葉をかけて、電話は一旦切つた。

数分後、河川敷にパトカーが一台到着し、若い警察官が一人駆けつけてくれた。一人とも背が高く、肩幅が大きく、顔は恐いくらい真剣そのもので、タツヤは完全に委縮してしまつた。一方、ハクアは堂々と状況を説明している。

まず、公園で引つたくり犯を叩撃したこと。そして、自転車でこ

ここまで来たこと。ハクアは追いかけてきたとは言わず、探しにきたら偶然見つけた、と言った。それから道に落ちたバッグを指差した。

「取り返したいと思って自転車でぶつかつたんだ」

ハクアはそう話した。警察官はバッグを拾い上げ、財布の中身を確かめる。タツヤには見えないが、たぶん中は空っぽだろうと思う。

犯人たちは道に倒れたまま、観念したように静かにしていた。

やがてパトカーがもう一台到着し、警察官の人数も増え、引ったくり犯は三人とも抱き起こされ、パトカーのほうに連れて行かれた。

「こいつらみんな腰抜かしてるな」とぼやくのが聞こえた。

ハクアと話していた若い警察官は、他の警察官から何か報告を受けると、明るい顔で向き直り、ポンポンと二人の小さな肩を叩いた。

「どうもありがとう。これから犯人を警察署に連れて行くよ。だけど、犯人を追つたり探したりするのは危険だから、もう絶対にしないようにね。相手は大人だから、危ない目に会うことがあるよ。わかつた?」

「はい」

二人して頷く。

「それと、自転車で人にぶつかるのは絶対に良くないよ。相手をケガさせてしまうし、転んだら自分がケガするからね。お兄さんと約束できるか?」

「はい」

二人して頷く。

「それじゃあ、君たちはこれで帰つていよい。家族の人に連絡しようか?」

タツヤは、ハクアの顔を見た。

「ううん、自転車で帰れるよ。公園で友達が待つてるし

ハクアは笑顔で返した。

「それと、二人乗りで探しに来たんだよね? 一人乗りは危ないから、もう絶対するんじゃないぞ。わかったね?」

警察官が少し厳しい顔をする。

「はい」

ハクアはまた素直に返事をした。そしてタツヤの腕をぐいっと引張り、すたすたと駆け足で歩いた。横顔を見ると、急いで公園に帰りたいというより、早くこの場を離れたい、という雰囲気だった。倒れた自転車を起こすと、日もだいぶ落ちてきていた。

ハクアは若い警察官の視界から外れると、颯爽とサドルにまたがり、タツヤに後部座席に座るよう言った。

「いや、さつき警察の人から一人乗りはダメだつて……」

「たつん」

「え？」

「さびしいこと言つたな。一人で戦つたじゃないか。一緒に帰ろうよ」タツヤはなぜか気持ちが軽くなつた。おとなしく後部座席にまたがる。ハクアの日焼けした背中は、こうして見ると大きいよう意外と小さかった。サラサラした栗色の髪が目の前にあり、町の景色がゆっくり流れていき、よつやく心が落ち着きを取り戻した。

「なあ、たつん？」

ハクアが自転車をこぎながら聞いてくる。いつもより少しやわらかい声に聞こえた。「どうしたの？」

「あのとき、何で腹を蹴るな、って言つたの？」

「ああ……いや、あのパワーアップしたキック力でもし腹を蹴つたら、内臓がつぶれちゃうかもしれないだろ。悪いやつでも大ケガをさせたら、ほんとに大変だと思うよ」

「あー、そつか。そんなこと考えたことなかつたなあ」

「それはダメだよ。腹は危ないって、ハクアがうつで読んだ漫画にもあつただろ？」

自転車をこぐ背中に、少し沈黙があつた。ちょっとと思い出せないのかもしない。

「……へへっ。たつんは、ほんと、よく覚えてるんだね」

「でも、あのときハクアがちゃんと聞いてくれてさ、ほつとしたよ」

「うん。たつつの声はね ちゃんと聞いてるんだよ
赤信号で停まった。ハクアが後ろに振り向く。

「そうだ、途中にザウルスあるよね。アランと希にシェイク買って
行こうよ。いいよね？」

「ああ、うん」

要是はバー・ガーザ・ウルスに寄つて、ギガ・バー・ガーを買いたいんだろ
うな、と思つた。

公園に着くと、入口近くのベンチに希とアランが座つていた。引
つたぐりにあつた母親とその子どもの姿はない。二人乗りの自転車
を見ると、希が立ち上がり、飛び跳ねるように大きく手を振つた。

「あつ、朱鳥くん、ハクちゃん！」

「のぞみん、心配させてごめんね」

自転車を公園の中に停め、ベンチのほうに行く。

「あれ？ バッグのお母さんは？」

「あ、うん、あのね、近くの交番に行つてるの。電話してつて言わ
れてるから、ちょっと待つてて」

希はそう言つて携帯で電話をかけはじめた。

一方、ベンチに座つていたアランは、持つていたペットボトルの
ジュー・スを置いて、不機嫌そうに立ち上がつた。もう普通に立てる
ようになつてゐる。アランのおでこを見ると、猫の肉球マークのア
ザが消えている。ハクアの能力発動から三十分過ぎて、自然と戻つ
たのかもしれない。

「おい」

タツヤをきつく睨みつける。

「寄り道してるヒマがあつたら、まつすぐ帰つて来いよ。こつちは
待つてたんだよ！」

アランに厳しく言われて、確かにザウルス・バー・ガーに寄るのは後
でも良かつたと氣づいた。せつかくショイクを買つてきたのに、す

「」く渡しにくくなってしまった。

だが、ハクアはそんな険悪な空氣も関係なく、キヨトンとした顔で間に入つてくる。

「あれ？ アラン、もう立てるのか？」

「……今さっき、急に足が元に戻つたんだ。もう、どうなつてんだよつ！」

アランは血管が浮き出すほど激怒していたが、目が真つ赤で、少し涙目にも見えた。歩く力を奪われ、胸の中で巨大な不安が噴き上がりつていたのだと思う。

「いや……」「めん……」

「たつづん、だからそれは違う。すまない アラン、悪かつた」ハクアはいきなりアランに深く頭を下げた。

「本当に、悪かった。全部あたしの思いつきでやつたんだ。お前の足のことも、犯人を追つたのも、寄り道も。だから、たつづんにはもう怒鳴らないでくれ。頼む」

アランは黙つた。深々と頭を下げられて驚いたのもあるが、学校でもほとんど話したことがないハクアに向かつて、これ以上責めることとは気持ちの上でブレークがかかつた。

すると、希が横から小さな声で三人の間に入つてきた。

「あの……バググのお母さんなんだけど、うまく説明できなくて、朱鳥くんかハクちゃんに、電話代わつてほしいんだけど 大丈夫？」

「うん、あたしが出る」

ハクアが携帯を受け取る。希はちらりとタツヤの顔を見た。タツヤもアランに何か言わなくてはいけない。だが、希も打ち明けなかつたハクアの秘密を自分が最初に言い出すことはできない。言葉を迷つてゐるうちに、アランは少し冷ややかな目をタツヤに向けた。

「お前はいつも人に守つてもらつんだな。自分が怒られればいいと思つてゐるんだろ。本当は全部知つてゐるくせに」

「いや、違う 僕は」

「もういいよ。お前の性格はわかつて。俺も何か巻き込まれたけどさ、いいことしたんだろ?」

アランは鮮やかな茶色の瞳で、タツヤの心の内側にぐっと強く踏み込んでくる。

「でも、こっちもさ、お前らが追いかけてった後、月本さんがすごい大変だったんだよ。あのお母さんの連絡先を聞いたり、歩けない俺をベンチに座らせてくれたり。ありがとう、の一言くらい言えよ」アランにまっすぐそう言われ、タツヤは胸を撃ち抜かれたような気持ちだった。

「丘野くん、そんなのいいよ。みんな困つてたんだもん」

「月本さん、ごめん」

タツヤは希の田を見る。それでも『ありがとう』より先に『『』めん』が出てしまった。何だかひどく恥ずかしくなった。

「朱鳥くんはがんばつたんだと思うよ。ハクちゃんひとりだと心配だもんね」

当のハクアは、希の携帯で母親に説明している。アランはふいに下を向き、ポケットに手を突っ込んだ。携帯がマナーモードで光っていた。

「ふーう。親から何回も着信来てるから、もつ帰るよ。明日ひやん

と説明してくれ」

アランがイライラしていた原因はこれもあつたようで、小走りに

公園を出て行った。

後ろ姿を見送ると、希は横を向いてタツヤの顔を覗き込んだ。希のやさしい瞳が何となくタツヤを見上げる感じなのは、身長差がまた少し広がったからだろうか。

「ねえ。朱鳥くん、新聞とか載るのかな?」

「わかんない。でも、絶対載らないほうがいいよ」

「えー、そうかな。もし載つたら、わたしずっと取つておくね」

希がクスクス笑うと、ハクアの電話も終わった。希に携帯を返す。
「よおし、自転車を交番に返しに行こうじゃないかっ！」あれ
？ アランは？

タツヤは、アランが先に帰つたことを話した。ハクアはちょっと
つまらなさそうに、まあ、いいか、という顔をした。それよりも、
自転車のカゴに入つたバー・ガーザウルスの袋から、ずっと肉と油の
臭いがしているのが我慢できないのだ。

「あ、これ冷めちゃうから歩きながら食べてもいいよな？」
「ギガバー・ガー・食べるのはハクアだけだろ？」

言う間に、早速ハクアは袋から一個田を取り出し、肉三段重ねの
サイズをあつと/or>う間にほおばつて幸せそうな笑顔を見せた。

ハクアはちょっと足が痛いというので、タツヤが自転車を押して、
交番に向かつて歩き出した。希も帰り道だったので、一緒について
きた。

タツヤは歩きながら、アランに『レンタルフォース』のことを説
明するのか、とハクアに聞いた。ハクアは少し悩む様子をしてから、
一晩考える、という答えを返してきた。それは少し意外だった。
だが、あまりはつきりと説明するのは心配なのだろう、と思う。
今回は引ったり犯だったが、ハクアが口走つた「追跡隊」という
言葉が、タツヤの脳裏に戻つてきて、しばらく引っかかっていた。
交番に貼つてある指名手配 みたいなものとは違うだろうが、訓
練学校から脱走した超能力者を放置しておくものかな、と思う。
「なあ、ハクア、交番とかに行くのは大丈夫なのか？ もし発見さ
れたら連れ戻されたりするんじゃないの？」

「ん？」
「いや、もしそうなら、僕が自転車届けるよ。なんか、足も痛そう
だし」

ハクアは左手でトントンとやさしく背中を叩いてきた。
「たつづん、その気持ちだけでうれしいよ。平気平気。訓練学校と

警察はつながつてないんだ。まあ、それにして？」

「それに？」

五個田 最後のギガバーガーを袋から取り出す。交番は遠くないが、このスピードで食べ切るとは思わなかつた。ちゃんと噛んでいるのか心配だ。

「この肉汁のある生活を、あたしは何があつても失いたくないんだ！」

希がフフッと笑い、ハイテンションで調子を合わせる。

「大丈夫、ハクちゃん応援団がいる限り、ハクちゃんの自由は不滅だよ！」

よく分からぬが、肉の臭いに包まれ、タツヤも空腹をかなり感じていた。やがて前方に交番の赤いランプと親子の姿が見えて、タツヤは今日の夕食はすぐできるものにしよう、と思つた。

引ったくり犯を倒した次の日、朱鳥タツヤと月本希と丘野アランは普通に登校したが、寺野ハクアが学校を休んだ。タツヤには意外だった。ハクアは転校日以来、学校を休んだことがなくて、昨日交番の前で別れたときも、あれだけギガバーガーを食べたくらい普通に元気だったのだ。ただ、少し足が痛いと言ったのを思い出した。

朝のホームルームで暮田晴海先生が出席を確認しながら、タツヤの後ろ ハクアの席がぽつんと空いているのに気づいた。

「あれ？ 寺野さんはお休み？」

クラスが少しづわざわする。晴海先生に連絡が来ていなかった。希もアランも驚いた顔をしてタツヤのほうを見た。晴海先生はクラスを見渡す。

「誰か寺野さんから聞いてない？ 十和田さん、月本さん、どう？」

「あたしはわかりません」

十和田霧枝がそつけなく答える。

「私も聞いてません……」

希も続いた。

「わかりました。先生からちょっとおつちに電話してみます」

晴海先生はホームルームを終えると、足早に教室を出て行つた。

先生が廊下に出てすぐに、アランが席を立ち、タツヤにいきなり詰め寄つてきた。

「おい、あいつ今日休みなのか？」

「えつ？ 寺野さんのこと？」

「そうだよ！ 今日話してくれるって約束だろ？」

昨日、引ったくり犯を追跡するとき、ハクアは『レンタルフォース』という超能力でアランの脚力まで借りてしまった。解決して公園に戻つたとき、アランは明らかに普通じゃないことに巻き込まれ

たのに気づいていたが、まだ詳しくは知らない。今日ハクアから話すことになっていた。その肝心のハクアが学校に来ないのだ。

「さうだけど、寺野さんが休むなんて思わなかつたんだ」

「お前、本当に休んだ理由を聞いてないのか？　あいつ俺を避けてるんじゃないよな」

「ハクアはそんな性格じゃないと思つよ」

タツヤは思わずハクアと呼んでしまつたが、アランは気に留めず、怪しむような目つきでタツヤの顔を覗き込んでくる。

「……お前の言葉は、何かあいつをかばつてる感じに聞こえるんだよな」

何となく答えにくい。別にかばついているわけではないが、ハクアの超能力のことをハクアのいない場所で勝手に話すのはダメだ。その日、ハクアが学校に来るまで黙つていようと考えたが、結局いつまで経つてもハクアは来なかつた。

休み時間、晴海先生に聞いてみると、家の電話にかけてもまつたく出ないらしい。晴海先生は「夏風邪でも引いちやつたのかしら」と首をひねつていたが、タツヤはそうは思わなかつた。席に戻るとまたアランが来て、「あいつやつぱり休みなのか？」と聞いてきたが、タツヤは重い口で「たぶんそう」と答えただけだつた。

ハクアが来ないまま放課後になり、帰りのホームルームが終わつた後、霧枝が晴海先生に呼ばれていた。

「十和田さん、放課後つて何か用事ある？」

「いえ、ないです」

「あのね、誰かに寺野さんの様子見て来てほしいんだけど、十和田さん、家は知つてる？」

霧枝は首を横に振つた。ポーテールがふわふわ揺れる。

「寺野さんのうちに行つたことないです」

「うーん。じゃあ、誰か知つてる人、わからない？」

「あの……先生、私行つたことがあります」

霧枝の後ろから声を上げたのは希だつた。霧枝は驚いて振り返る。

晴海先生はほつとした様子で希の顔を見た。

「あ、ほんと？　月本さん、今日は用事ある？」

「ないです。私、寺野さんのうちに行つてみます」

「じゃあ、月本さんにお願いするね。風邪かどうかわからないけど、もし大変そしたら病院に行くよう行つてね」

「はい」

希はランセルを背負い、すたすたとまつすぐタツヤの席に来た。タツヤもランセルを背負い田を含わせる。

「先生にハクちゃんむけにお見舞い行くよ」と言われたよ。ねえ、朱鳥くんも行くでしょ？」

「うん。あと、アランにも話さう

「そうだね」

体を溶かすような暑い日差しで、逃げ場もなく照らされた白い道。風が少しもない歩道を三人並んで歩いていく。アランは暑い暑いとぼやいていたが、タツヤも希も口数少なく歩いていたので、アランも静かになった。どこへ行つてもセミの鳴き声が途切れることがない。道に落ちて裏返り、干からびているのもいた。

タツヤは先頭を歩きつつ、信号で立ち止まる度にアランの様子を見た。アランは肌が白くてまったく田焼けしておらず、赤くなっている。体はやせているが、すじく汗かきで、顔いっぱいに汗が流れ、少し機嫌の悪そうな顔をしていた。

お前はいつも人に守つてもらうんだな。

自分が怒られればいいと思つてゐるんだろ。

昨日、公園に戻ったときアランに投げつけられた言葉が、タツヤに胸に深く残つていた。親に守つてもらうとか、そういう意味ではないのはわかる。男なのに女の子にかばつてもらつて情けない、と言つたかったわけでもないと思つ。

誰かを守るとか、そういうことを今まで意識したことはなかつた。

それは、絶対にハクアと一緒に行動するよになつたからだ。ハクアといふと自分も何かしたくなるのだ。

それならもつとはつきり違うと言い返せば良かつた、とタツヤは後悔した。強引に巻き込んでしまつたアランと向き合つて、また最初に「ごめん」が出てきそうで、あまり顔を向けていられなかつた。歩きながら、アランが口を開く。

「あれから俺も考えたんだけどさ、足の力が抜けてまた戻つたってことは、何かの中国拳法とかなの?」

「え?」

「寺野さん、そういうの習つてゐる? 駅前に何とか流つていう看

板あるけど?」

「うーん……えっと」

偶然か、昨日倒した引つたくり犯の大男とアランは同じ発想だつた。タツヤは中国拳法とかの映画も見たことはないが、そういうのがあるのだろうかと首をひねる。希も不思議そうな顔で様子を見ている。それよりも、アランの話し方が明るいのが意外だつた。

「寺野さんならあるかな、と思つてさ。いつも給食すごい食べてるし」

タツヤが何と言おうか戸惑つてゐると、希が前の交差点を指差した。

「あ、ここを曲がつたとこだよ」

「あつ、そなんだ。そんなに遠くないね」

アランは希に對しては明るい声を向ける。タツヤは無表情に徹した。

「あのせ、実は僕らもよく説明できないんだ。寺野さんが自分で話すつて言つてたから」

「ふーん……つか、入れんのかな。鍵かかつてんじやないの? なあ」

タツヤには厳しい顔を見せる。何となくむなしい気分だ。

「ピンポン押してみるよ」

ドアの前で『寺野』という表札を確かめ、タツヤがインターフォンを押す。寝てるか、起きてるか、外出してるか
かりなのに、一日学校で会わないどんな感じになつてゐるか気になつた。少しして、ドアの向こうで「ゴトゴト」と物音がした。

『はーい！ こちら、ハクアです！』

インターフォンから声が出て、いきなり名前を言つたので驚いたが、間違いなくハクアだつた。晴海先生は風邪を心配していたが、どうも思い切り元気そうだつた。

「タツヤです。今日はお見舞いに来ました」

後ろで希がふふっと笑う。言い方が変だつただろうか。

『おーー！ たつづん？！ あたしのために？！』

『そうだよ。月本さんと丘野くんも一緒にです。いま入れる？』

後ろでアランが「何で月本さんのほうが先なんだ」とぼやいた。正直順番とかはどうでも良かつた。逆に、部屋の中からは一瞬沈黙があつた。

『……あー、そっか、昨日あれがあつたもんね。ごめんごめん。すぐ開けるよ』

するとガチャッと音声が切れて、部屋の中でもた物音がした。だが、すぐ開けると言つたわりに、一、三分くらい暑いドアの前でじつと待たされた。アランはイライラした顔つきで「おい、倒れたんじゃないか？」と言つたが、希が「きっと部屋を少しきれいにしてるんだよ」と言つないので、三人で顔に汗をにじませながらじつと待つていた。

ようやくドアが開く。ハクアはなぜか満面の笑みだつたが、髪はいつもよりボサボサで、服はパジャマでなく普通の服だつた。着替えたのかなと思つたが、よく見ると、確かな記憶とは言えないが、昨日着ていた服のままのような気がした。

「……体は大丈夫なの？」

「うん、もうだいぶ動けるようになつたよ」

「えつ？ そんなに大変だつたの？」

「まあ、部屋で話すよ。たつん、それよりさあ、寝起きの炭酸がなくて困つてたんだ。コーラとか持つてない？」

そんなもの、持つてるわけがない。

拝んでくるハクアの頬みを聞き、結局タツヤが自転車を借りて近いコンビニまでコーラの大きなペットボトルを買いに行くことになつた。バナナみたいに強烈な黄色の自転車だった。

ハクアの部屋に入ると、希とアランがテーブルのそばに座つている。ハクアの姿がないと思つたら、ハクアは浴室からせつと違う服に着替えて出てきた。

きれいに日焼けした肌に、爽やかな明るいオレンジのタンクトップを着て、ショートパンツからスラッシュとした健康的な脚が伸びている。田が合つと、ハクアが嬉しそうに駆け寄つてきて、手に持つたコンビニ袋からコーラを抜き取つていつた。タツヤはため息を吐き、空っぽの袋をゴミ箱に入れ、冷房の効いた部屋に入った。

ハクアはアランにどう説明するのだろうか。タツヤはお使いについている間もそれを考へていた。もしかしたら、『ごまかすかもしない。この前、学校帰りにタツヤの妹の由果ゆかもいる前で『レンタルフォース』を使って外国人と話したときは、由香に対して『ごまかした。だから、ハクアの超能力を知るのはこの美星町ではまだタツヤと希だけだ。』

ハクアはコーラをコップで三杯続けて飲む。その間にアランもコーラを飲み、一緒に出されたベビーサラミの袋からひとつ取り、一口かじつた。タツヤと希はサラミには手を出す気分にならなかつた。第一声、ハクアは嬉しそうに言つた。

「なんかさ、悪いね。お誕生パーティみたいだなあ」「え？」

「最初は寂しかつたけど、このうちに来る人がどんどん増えてくれ。本気で心配してくれる友達がいると、寝込むのもたまにはいいね」

ハクアの言葉に対し、どう答えていいかタツヤは困惑した。アランも困った顔をする。

「寺野さん……急に来て悪かった。起きてて大丈夫なのか？」

「ハクアでいいよ。あたしもアランと呼ぶから」

「あ、ああ。わかった」

「アラン、昨日は」「めんな。これは超能力の反動なんだ。今から説明するね」

「いきなり超能力と言つた。

「はつ？ 超能力？」

「うん、そう。あたし超能力が使えるんだ。たつんとのぞみんはもう知ってるんだけど、アランにもきちんと話すよ。でも、絶対に秘密な」

「えっ？ あのテレビでやつてるような……？」

「違う。そんなのじゃなく、これはもつと危険な能力なんだ」

「それって……あの昨日のやつだよな？」

「いいか、絶対に秘密だ。約束できるか？ まず、それを聞きたい」

ハクアは手を伸ばし、アランの両肩をぐつとつかんだ。眼差しは真剣そのものだ。

「まあ、それはいいけど……」

「はつきり答える。どうする、アラン」

アランは落ち着いた顔になり、しゃきっと背筋を伸ばした。

「わかった。絶対に秘密にする。これでいいか」

「よし。ありがとう。ほら、サラリモつと食べていいぞ」

ハクアは満足げにベビーサラミを二、四個つかみ、アランの右手に握らせた。アランも嫌いでないようで、またひとつ口に放り込む。そばで見ていると、犬がしつけをされているみたいな不思議な光景だった。しかし、ハクアが正直に超能力を言つたのは確かだった。

希が少しほつとした表情になり、やつと口を開く。

「そつか。じゃあ、丘野くんもハクちゃん応援団の仲間入りだね」

「何だそれ？」

「ハクちゃんを応援する会だよ。私が一号、朱鳥くんが二号、丘野くんが三号だね」

「どうか、希が一号なんだ、とタツヤは胸のうちに思つた。

「のぞみん」ハクアが手で止める。

「ごめん、ハクちゃんの話が先だつたね」「プシュー、と部屋のエアコンが一息ついた。

ハクアは、タツヤと希が初めてこの部屋に来たときのように、超能力『レンタルフォース』のことをアランに説明した。隕石が近くに落ちた影響で三年前に覚醒したこと、相手の力を右手で借り、左手で返すこと、脚力だけでなく触る場所によっていろいろな力を借りられること、三十分くらいで自動的に元に戻ること、おでこに出る猫の肉球マークのあざ、覚醒してすぐ訓練学校に入れられたこと、ギガバーガーが食べたくて脱走したこと、超能力を使い続けないと植物人間になること、超能力を使うと体に反動があること、それを抑える錠剤キープタブレットがあるが、訓練学校でしか手に入らないこと、あとは、両親は失踪していて今は養父が生活費を出してくれていること、その養父にはまだ会つたことがないこと これだけの話を連續で浴びて、アランは途中からだいぶ放心状態になつていた気がする。

「どう、アラン。だいたいわかった？」

ゆっくり、こくんとアランは頷いた。難しそうな顔をして唇は硬く閉じている。タツヤが初めて説明を聞いたときは、試しで聴覚を借りられる実験があつたが、ハクアはアランにはそれをやらなかつた。それは昨日脚力を借りたとき、アランが自分からおかしなことが起きたと言つたからだと思つ。

ハクアは五個目のベビーサラミの包みをむいていた。干し肉の匂いが部屋中に漂つてゐる。タツヤはさすがに胸が悪くなりそうだつた。仕方なくコーラの炭酸をのどに流す。

「アラン、聞きたいことがあつたら遠慮なく言つてくれ」

「……要するに、三十分間、人の力を借りることができるんだな？」

「まとめる、そうだな」

「訓練学校つてことは、そんな超能力を持つてゐやつがたくさんいたのか？」

「いや、実は」

すると、そこでハクアは一呼吸置いた。タツヤと希も注意を向ける。ハクアは続けた。

「隕石で覚醒する超能力は一種類だけじゃないんだ。他にもいくつあるけど、あたしはフォース系の学生棟だった。そこは『レンタルフォース』の超能力者ばかり集まつてた」

「え？ 何種類もあるの？」

タツヤは思わず口を挟む。アランは応援団二号のタツヤが入つてきたので、少し身を引き様子を見る感じになつた。

「うん……まあ、メテオドロップが全部で何種類あるかは知らないんだけどね。開発中とか未発見の系統もあるつて聞いたし。でも、他の学生棟とは完全に分けられてたから、会つたことないんだよ。名前だけちらつと聞いたのは、エリア系と、モーション系と、ロック系……くらいだつたかな」

「それつてどんな能力なの？」

「ごめんな、たつづん、他の能力は一度も見たことがないんだ。まあ、名前だけ聞いてもよくわからないよね。あたしのフォース系だつてそうだしさ」

ふと、部屋が静かになつた。ハクアが「ゴミ箱に投げたサラミの包みの音だけが小さく響く。希はまた不安げな顔をしていた。ハクアから訓練学校のことや超能力の反動の話を聞くとやはり気持ちが重くなる。

静けさを破つて、アランがつぶやいた。

「まあ……名前だけだと、フォース系つてのが一番強そうだな」

すると、ハクアは首を横に振る。

「そんなことはないよ。訓練学校に入った最初の日、校長に言われたんだけど、どの系統も使い方次第でかなりの威力になるって言った」

「そんな力を小学生に訓練させるなんて、おつかない校長だな」アランは吐き捨てるように言った。そして、また四人とも黙る。校長と言えば、美星小の校長先生は白髪頭で話し方ものんびりしていて和やかな感じだ。タツヤはその校長と比べると、訓練学校の校長というのは、前に一度体験入会した空手道場の先生のように迫力がある恐ろしい人だろうか、想像した。あるいは、自分の父親はスポーツジムのインストラクターをしているが、そういう筋肉質な先生がいるのだろうかと考えると、そこから逃げたい気持ちになつた。

「ハクちゃん」

希が声をかける。

「今日は学校休んじゃつたけど、体の反動はひどかったの？」

「いやー、メンボクない。みんな心配かけてごめんね。実は、昨日うちに帰つたらそのまま体が動かなくなつちゃつて」

「えつ？！」

「まあ、キープタブレットがないから仕方ないんだけど、服のまんま床に倒れて、あー、ダメだ、動かないなーと思ってとりあえず寝たんだ。朝は一応目が覚めたんだけど、やっぱり体がまだ動かなくて、昼間まで寝てたんだよ」

「それって……体が痛いの？」希が恐る恐る聞く。

「大丈夫、痛みはないよ。体が固まつたみたいに動かなくなるだけ」何だかすごい話だ。タツヤは思わず割つて入る。

「でもさ、ハクア、昨日足が痛いって言つてたよね」

「たつくんはほんとによく聞いてるし、よく覚えてるね。やっぱ頭がいいわけだ」

「そんなことどうでもいいよ」

「ごめんね。足の痛みはこれだよ」

そう言つてハクアはハイソックスの片方を脱いで見せた。包帯が巻いてあり、それを解くと、血豆がつぶれていた。インターフォンが切れてからドアを開けるまで時間がかかったのは部屋の片付けだけでなく、足の裏を傷めていたせいもある気がした。

「これは痛そうだね……」

「まあね。『レンタルフォース』は便利なんだけど、今の体で自転車をあれだけのパワーでこいだら、こんなになっちゃうみたいだね」「ハクちゃん、ちゃんと傷薬はぬつた？」

「うん、ぬつたぬつた。スーツとして気持ちいいよね！」

「それより、せっかくだし包帯を取り替えてあげるね

「のぞみん、よろしく頼む！」

希は、救急箱の置き場所を覚えていて、傷薬と包帯をすぐ取り出した。ハクアは楽しそうに鼻歌混じりでもう一方の靴下も脱ぎ、希の前に「デンと両足を差し出した。アランは包帯巻きが始まるとトイレに立ち、タツヤは何となく部屋の時計を見た。

引つたぐり犯の車を自転車で全力で追いかける。そして、三人の男を打ち倒す。あれだけの激しい運動をした結果、ハクアは半日以上時間、まったく起き上がれなくなってしまった。

こういうことを知れば知るほど、見れば見るほど、この超能力は本当にハクアにとつていいものなのか、考えてしまう。もしかすると希だつて同じ思いかもしない。学校で一緒に過ごしていれば、ハクアは普通の楽しい友達だ。でも、何か大きな出来事があると、ハクアは自分とまったく違う力を持つ人であることを強く思い知る。

アランがトイレから戻ってきて、タツヤと田が合った。タツヤが初めて超能力を説明されたときに比べ、何となくアランは落ちている気がする。タツヤは、トイレなんて自分の家に帰つてから思い出したくらいだったのに。

「アランはなんか普通だな……」

「何が?」

アランが座る。包帯巻きに夢中になつている一人をちらりと見ていた。

「いや、何でもないよ」

「お前、ほんとに俺が普通だと思つか?」

「えつ?」

「まあいいけど。これつて、十和田は知らないんだな?」

「あ、うん、知らないよ」

「お前ら仲がいいけど、あいつには言つなよ。口が軽いから」

「ハクアのことは、誰にも言わないよ」

タツヤは真剣な目つきではつきりと言い返した。それよりも、霧枝と仲がいいと思われていたのが意外だった。いつも霧枝は男子と口ゲンカしていく、しかも口で負けたのを見たことがないが、その霧枝と普通に話しているのはタツヤくらいかもしない。けれど、霧枝と学校以外で会うこともないし、希の幼稚園からの友達だから少し身近に感じているくらいだ。もちろん、ハクアの秘密は話していない。

すると、アランは鼻で笑つた。

「でもな、ハクアはあの性格じゃあ、もつといろんなやつを巻き込むと思つぞ。俺たち、ずっとそれが守れるかな」

「……」

「守れるよ」

希が言つ。包帯を薬箱にしまつ手を止め、タツヤたちをまっすぐ見ていた。

「そうだ。守ってくれよ」

ハクアが言つた。顔は明るかつたが、言葉は少し重くて強かつた。

「……ごめん、そうだな。俺は口が堅いから安心して」

「アラン、ありがとう」

「でも、いきなりは止めてくれよな」

「まあ、昨日みたいにさ、大変なときはたつぶんが助けてくれるから平気平気！」

ハクアは軽い調子で笑い、サラミをひとつ宙に投げ、うまく口でキャッチした。希も薬箱を戻し、アランも背伸びをして、何となく落ち着いた雰囲気になつた。タツヤはその間、ハクアのことをじっと見ていた。

「僕はいつもハクアのそばにいるわけじゃない」

四人の間の雰囲気が一気に冷たくなる。

「……朱鳥くん」

希が何か言おうとしたが、タツヤはハクアから目を離さない。ハ

クアは少し緊張した顔で、正面から向き合つた。

「まあ、確かにね。さつきのはあたしの甘えだね」

「そうじやない。僕もハクアといるのは楽しい。ハクアは人を助けるすごい力を持つてる。そんな友達は他にないよ」

「うん」

「でも、無茶はしないでほしいんだ。ハクアに本当に助けてほしいとき、倒れてたら困るんだよ」

「わかった。あたしも約束するよ」

昨日、あの公園に戻ると、自転車をこいでいたハクアの背中を思い出す。

たつつの声はね、ちゃんと聞いてるんだよ。

タツヤはあのときの言葉を信じた。本当に聞いているのなら、どうしてこういうことを言つか、ちゃんと考えてほしいと思った。ハクアが特別な力を持つても持つていなくても本当は関係ない。ハクアがちゃんと学校に来て、元気に話しかけてくれることが大事なのだ。

すると、少しの沈黙があつて、ハクアがいきなりぼろぼろと大粒の涙をこぼして泣きはじめた。アランと希が驚いて口を開く。

「えつ？ どうした？」

「ハクちゃん？！」

タツヤも戸惑つて何とかなだめようと思い、ハクアの肩に手を伸ばそうとした。すると、ハクアは泣きじやくつた顔を起こし、目の前にあるタツヤの顔を見定めた。ハクアの体がいきなりタツヤの胸に飛び込んでくる。タツヤは思わず抱き止めたが、どうしていいかまったくわからなかつた。ハクアの髪や日焼けした肌から温かい太陽の匂いがした。心臓の鼓動が急激に速くなる。

ハクアは涙で濡れた真つ赤な顔をタツヤの首筋に押しつけながら、次から次に涙が出てくるのをこらえ切れずにいる。

「たつさんの言葉は、ちゃんと聞いてるんだよー。」

「え？ 「う、うん」

「あたしね、たつさんの言葉は、ちゃんと聞いてるのー。」

「わかつてる」

「……ほんとにわかつてる?」

「うん わかつてるよ」

タツヤは、顔をうずめたハクアの耳にも聞こえるよ、同じ言葉をはつきりとくり返した。こきなり泣き出すなんて思わなかつた。けれど、いつも大きなことを言つハクアがこんなに心をむき出しつして、頼りにしてくれていてのを体温で感じ、タツヤは胸が急に切なくなつた。

「あたし、動けないときもたつさんのこと考えてたんだよ。昨日みんなに心配かけて、早く会いたくて……。でも、起きられなくて……学校行けなくて……こっぱい悲しくて……せびしくて……」

「だから会いに来たよ」

「うん……そうだね……ほんと、ありがと」

「もう大丈夫か？」

タツヤはふと、母親がなくなつてしまつて妹の由果の心が不安定になつたときを思い出した。学校から帰ると、何度も由果が泣きながら抱きついてきた。由果がどうしようもなく頼つてきたから、タツヤは自分の悲しみを胸の奥に押さえ、そのうちに、どんなことにも我慢強くなつていった。

タツヤは自分の心を静めながら、あのときみたいに、ハクアの髪や肩をポンポンと撫でてあげると、ハクアは少し落ち着いて、ようやく身を起こした。アランも希も同じ部屋にいるけれど、まるでいなかのよう、元気と息をひそめている。

ハクアはもうタツヤの顔しか見ていなかつた。グスグス言つて手で涙をふこうとするので、タツヤはティッシュを渡そうとした。けれども、ぼうつとしているので、タツヤは仕方なくティッシュでハクアの濡れた目元をふいてあげた。

「あたし……たつさんの言葉はちゃんと聞いてるよ~。」

「大丈夫、わかつてるよ」

ハクアのこんなに女の子らしい一面は初めて見た。ただ明るく楽しいクラスメイトでなく、勝手に人の力を借りるときの強引さ、不良や強盗を追いかけるときの勇敢さ、すべて倒して敗者を見下すときの威圧感、どれもみんなハクアの間違いない姿で、動けない状態からようやく戻った不安定なハクアも、全部タツヤの前にいるのだ。

「 平氣平氣つてすぐ言うなよ」

タツヤはやせしい声で諭す。

「うん、そうだね。来てくれて、ありがと」

ハクアはやつと泣きやんで、どこか無理した笑顔でなく、夏に咲き誇るひまわりみたいな笑顔に戻った。

アランが横から少し意地悪な顔を見せる。

「ハハツ、お前が言うのかよ」

「僕だつて……直すよ」

「オッケー、オッケー。ハクアの前じや、そう言つしかないよな」
わかつた顔をするアランが何となく憎たらしかつたが、ハクアの前では心も言葉も強くなるのはその通りだった。思えば、ハクアは一人でもかなり心が強いはずなのに、どうして自分を頼つてくるのか不思議だが、それがハクアのために自分にできることならば、と思うと、何だか少し嬉しくもなつた。

三人が帰ろうと玄関に向かうと、ハクアがタツヤを後ろから呼び止めた。

「たつくん、ごめんね。あたし泣いて服を汚しちゃったね。お風呂入つてくる?」

「はっ、入らないよ!」

慌てて返すと、ハクアがきょとんとした目をする。

「そんなおつきに声出さなくても」

「あ……ごめんな。うち帰つて夕飯作らないと」

「じゃあさ、あたしにあのハンバーグを作つてから帰つてよー」

「何でだよー」

「体が全然動かなくてさ」

「うそつけよ！ 動くだろ？！」

フフフッ、と隣りで希が吹き出した。ハクアが泣き出してから希はずつと静かだつたが、心配性な希にもだいぶ明るさが戻つた感じがした。希はきゅつと下唇を噛み、ひとつ深呼吸をした。

「ハクちゃん、もつとみんな一緒にいたいなら、ハクちゃんも『天文係』に入らない？」

すると、いきなり希がタツヤの腕に手を回し、ぐつと体を引き寄せた。驚いて振り向くと、大きな瞳で下から見上げている。これは何を言われても断れない流れだ。

「朱鳥くんもイヤつて言わないよね？」

「あ、うん」

「みんな一緒か。夏っぽいなあ」

ハクアは心から嬉しそうな顔をする。

「それ、アランも入つてるのか？」

「俺は入つてないよ。何かキラキラしたかわいい新聞作つてるやつだろ？ 俺、漢字苦手だし。星よりは野球とかサッカーだな」

あまり意識していなかつたが、キラキラしたかわいい新聞と言わると、タツヤは少し恥ずかしかつた。天文新聞は、字はタツヤが担当で、イラストやシールなどの飾りつけは希が担当なので当然そんな感じになるが、アランだけでなく、クラスの他の男子からどんなふうに思われているのか、ちょっと不安になつた。

「ハクちゃん、あのね、次の土曜日の夜、お弁当持つて天体観測に行くんだよ。予定は空いてる？」

「よし、行く行く！」

「じゃあ、明日学校でまた話すね。楽しみにしててね

ハクアは希に対し張りきつて頷くと、続いてタツヤの顔を見た。

「なあ、お弁当はたつんが全部作ってくれるのか？」

「いや、自分で持つてくるの！」

「なんだ…… そうなのか。まあ、そういう決まりなら仕方ない。用意していくよ」

冷蔵庫に「一ラの大きなペットボトルしか見たことがないハクアが、ちゃんと弁当を作る様子が想像できなかつた。

「どうせギガバーガーだろ？」

「違う、それはお弁当じゃない。一応、お弁当箱に何か思いついたものを詰めていくよ」

どんな弁当になるかよく分からなかつたが、月に一度、丘の上の公園に天体観測へ行く水曜日が来るのがまた楽しみになつた。

灰色のコンクリートの廊下に、ペタペタとひとり小走りする足音が鳴り響く。赤茶色の長い髪をカールさせた少女が、明らかに焦りとイライラをあらわにした歩調で進んでいく。

トレーニングルームと会議ルームを結ぶ、トンネルのように長くカーブしている廊下。内側の壁に大小さまざまなクリスタルキューブが無数に貼り付けられていて、天の河のようにキラキラと輝いている。クリスタルキューブには鏡が入つていて、黒いトレーニングウェアを着た少女の横顔がひとつずつに小さく映し出され、緊張感を駆り立てる。

廊下の突き当たりには、数字を入力するパネルによつて制御された厳重なドアがある。まず、首からさげたIDカードを当て、続いてパネルに番号を入れる。エンターキーを押そうとした指先に、どこからか迷い込んでいた小さな羽虫が近づいた。手で払うと、素早く逃げて姿を見失つた。羽音を聞くと蚊のようだ。

「ちつ！」

少女はいまいましげに舌打ちする。「こいつは、少女の一の腕に赤い斑点を作った張本人か、知り合いか、ただの同類か。」「つたぐ。この先はエリートだけに許された厳肅な会議ルームなよ。お前のような下級生物が、生きて通れると思うなよ」

巻き髪の少女はその場にしゃがみ、床を右手で触った。すると、宙を飛んでいた蚊は、急に下から糸で引っ張られたかのようにまっすぐ床に落下して、少女の足下にへばりついた。

「次は、もつと大きな上級生物に生まれ変わるのね」網タイツをはいた少女の足が、動けない蚊をためらいなく踏みつぶした。

数字パネルのあるドアを開け、ガラス張りの会議室がいくつも並ぶ会議棟に入る。これらガラス張りの会議室は、中からスイッチを押すと、一瞬で曇りガラスになり、廊下から何も見えなくなるようになっている。曇りガラスの色は所属によって変化し、少女の所属する組織の色は、アメリカンチェリーのような濃い赤だった。

スマートフォンに届いた緊急招集メールに書いてあつた会議室をめざすと、ガラスがアメリカンチェリーの色に染まった会議室を見つけた。間違いない。中に入っている人数が表示されている。1.5だ。少女はほつと胸を撫で下ろした。

アメリカンチェリー色のドアを開けると、

「お兄様？」

ツインテールのチビガキが顔を上げた。イスの背もたれには、いつも黒くて大きなジャングル生まれの九官鳥が横向きに乗っている。巻き髪の少女の姿を見て、チビガキは一転して不機嫌な顔をした。

「……なんだ、こだまじやないの。遅いわよ

こだまと呼ばれた少女のイライラは三倍に跳ね上がる。生意気なチビだ。

「うるさいわね。トreeningルームから来たの。あんたみたいに

ヒマジヤないのよ

「あたし、ヒマジヤないわよ！」

すぐムキになる。冷静で動じない兄にはないヒステリックを、きっと全部こいつが親から受け継いだのだ。つるさければすぐにどこかに沈めることはできるけど、さすがにそれは上級生としてみつともない。「こだまは冷ややかな瞳でチビガキを見る。

「ねえ、紅花

「なによ」

「さふるく？」「

「…………うう…………！」

「口答えするなら、九九を覚えてからにしてね

すると、紅花は絵に描いたようなふくれつ面をした。

「それより、あんた一番に来たんでしょう？ つばさはまだ見てないの？」

「あの女はどうせまたお兄様と一緒にでしょ？」

姑みたいだな、とこだまは苦笑する。だが、たぶん今日もそので、それはそれで腹が立つ。紅花は話を変え、妙に期待に満ちた笑みを見せた。

「ねえねえ、検体が見つかった可能性が高いのよね？ あたしもついに初仕事かな？」

「さあて。これまでの検体探知レポートは九三パーセント空振りだしね。もっと精度は上がらないの？ って話よ」

「こだま……あんた悪口が多いわね」

「じめんだけ、あんたに言われたくないわ」

紅花がまたふくれつ面をすると同時に、後ろのドアが開く音がした。こだまは気を引き締めて、きりっとした笑顔で振り返る。

「さくらんぼ隊、集まっているか？！」

「こだまより二歳上の天童将王^{まわお}が、きつちりアメリカンチヨリーチの隊服に着替えて入ってきた。だから遅かったのか。すぐ後ろに薩摩つばさが続いて、こちらもきつちり隊服を着ている。外はねのシ

ヨートヘアに、隊服と同じ色のメッシュが少し入っている。メガネのフレームまで同じ色だ。何という忠誠心。一方、紅花のフリルだけのかわいい幼児服はともかく、こだまは地味なトレーニング用のハーフパンツと縁起担ぎの網タイツだった。緊急招集とは言え、どうしてこうなった。

天童は極めてすみやかに議長席に立ち、高々と手を掲げる。

「さくらんぼ隊、点呼するぞ！ 一番、薩摩つばさー。」

「はい！」

それよりも天童隊長に問いたい。その幼稚園みたいな隊名は何とかならないだろうか。こだまは秘かにため息をつく。だが、天童は外国語が大嫌いなのだ。そして、それはともかく、天童の声変期を迎えた悩ましい声に「一番、羽島^{はしま}こだま！」と呼ばれて、すかさず「はい！」と威勢よく答えた。

妹の紅花と、九官鳥のテンロクが点呼に答えると、天童は極めてすみやかに会議室のディスプレイに新しい検体探知レポートを映し出した。力強く右の拳を握り締める。

「諸君、あの悪名高き『オカズ泥棒』の名を覚えているか？」

第5話『四人の約束とアメリカンチエリー』 2／2（後書き）

次回更新は8月下旬の予定です。どうぞお楽しみ。

天文係はこれまで朱鳥タツヤと月本希の二人だけだった。月に一度、水曜日の夜にバスに乗つて天体観測に行く。二人で星を見て、星の話をするだけの小さなピクニック。行き先はこの美星町で一番見晴らしがいい郊外の公園。そして、そこは一ヶ月前、寺野ハクアの転校のきっかけとなつた隕石落下を、タツヤと希が目撃した思い出の場所だった。

先週、超能力を使って無茶をして、力を使い過ぎた反動で丸一日も体が動かなくなつたハクア。学校に行けず誰にも会えなかつたことを、タツヤの胸にしがみつき、涙を流しながらさびしいと叫んだハクア。

ただ、時間を置いてみると、どうしてハクアはあんなに一人を恐がつたのか少し不思議だつた。タツヤも風邪で一日や二日学校を休んだことはあるが、そんなに激しい悲しさにはならない。女の子はだいたいそうなんだろうか……。タツヤには分からない。

もつとみんな一緒にいたいなら、ハクちゃんも『天文係』に入らない？

ともかく、そんな希の誘いで本当にハクアは天文係に入ることになつた。次の日、晴海先生に話したらすぐいいよと言つてもらえて、ハクアはすごく喜んでいた。

朱鳥くんもイヤつて言わないよね？

タツヤはあのとき希に頷いたが、希はどうしてあんなふうに聞いたのだろうか。希がハクアを誘つたことに、タツヤがイヤと言つわけがない。

ハクアはもう大切な友達なのだ。

夏休みに入る直前の水曜日、約束通り、タツヤ、希、ハクアの三人で郊外の公園に行くことになつた。ちなみに、もう一人ハクア応

援団に入ることになった丘野アランは、希がもう一度学校で聞いてみたが、やはり「入らない、行かない」という返事だった。

「ハクちゃん応援団なのに？」

と希が少し残念そうな声を出すと、アランは一瞬ためらう顔を見せたが、

「……ごめんな。俺、サッカーの試合をテレビで見たいんだ」そう言って断つた。テレビなら録画できるのに、とタツヤは内心思つたが、興味がないのを押しつけるのも良くないと思つて口に出さなかつた。

水曜日になる前に、ハクアがこれまで作つた天文新聞を見たい、というので、希が五月、六月、七月の三枚を学校に持つて来て、図書室で広げて見せた。ハクアは、タツヤが星座図鑑やネットで調べた星座にまつわる神話を読みはじめ、「おおっ」とか「それやつちやつたかー」とか変な声を上げて面白そうに読んでいた。図書室なので静かにしたほうがいいと思ったが、自分たちで作った新聞をこんなに一生懸命読んでくれるハクアを、何となくそのままにしていた。

三枚全部読み終わり、ハクアはニヤッと笑顔を見せた。満足してくれたのだろうか。

「ハクちゃん、星座のことが少しわかつてきた?」

「うん、バツチリ頭に入った!」

自信満々に親指でグーを作る。理科のテストで僕の力を勝手に借りたハクアが、本当に覚えられたのかあやしいが。

「これ、次はいつ作るんだ?」

「うーん、八月は学校がお休みだから、次は九月だよ。せっかく一ヶ月あるし、ちょっと新聞の枚数を多くしたいなあ、て思つてるので希はタツヤとハクアの顔を見つめながら話す。

「字はたつづんが書くのか?」

「まあ、そうだけど……少しはハクアが書いてもいいんだよ?」

「ん？ あたし、字は下手だから無理。じゃあ、食べ物のこと調べるよ」

「いや、星のこと調べろって」

「カニ座とかって食べ物じゃないのか？」

希は声を出して笑つた。タツヤはため息をつく。本当にハクアは天文係に向いているのだろうか。希は目を輝かせてハクアの手を握る。

「うん、それなら、星型の食べ物のことでいいよ」

「おおっ、ヒドデとか？」

と二人してよく分からぬことを言つていた。

そして 天体観測のあの夜が来た。

いつも街中のバス停を集合場所にしているのだが、ハクアがどのバス停か分からぬと言つので、希がハクアの家まで迎えに行くことになった。タツヤは家に帰り、家族の夕食と自分の弁当を作つた。キッチンを覗きに来た妹の由果に、ハクアも天文係に入つたと話すと、なぜか由果もすごく喜んだが、ふとタツヤの手元を見て「そのお弁当の量で足りるの……？」と心配された。

ハクアは一応「自分で弁当を作つてくる！」と自信たつぶりに宣言していたのだが、由果の言葉もそうだなと思ったので、タツヤはおかげを多めに作つてタッパに詰めた。おかげでリュックが弁当だけばかりふくらんてしまつたが、ハクアが星を見ずにずっと物欲しそうな顔をすることを思えば、これくらいでいいだろ。

日もすっかり暮れた集合時間にバス停に着くと、停留所のベンチに希とハクアが並んで座つていた。信号待ちをしていると、希が立ち上がりて手を振つた。希はもつとおつとり落ち着いた性格だつたが、最近はハクアと一緒にいるせいか、やけに元気がいい感じがする。ハクアはじっと目を凝らす。そう言えば、視力があまり良くないと言つていた。

停留所には他にも人がいて、ベンチに座きはなく、タツヤは立つて待った。バスが来るまでまだ時間がある。ハクアはいつもの派手な色のタンクトップとショートパンツ、ハイソックス、スニーカーという格好だが、意外なのは希の格好だった。だいたい半袖の服と長いスカートが多いのだが、なぜか今日はピンクのTシャツと黒のショートパンツで、ぱつと見てまるで印象が違った。髪もいつもと違つて、星の髪飾りで一つにくくり、両脇から自然に下ろしていた。今日、学校でこんな服や髪型をしていただろうか。

「ふふつ、驚いた？ これ、ハクちゃんの服だよ」

希が楽しそうに言う。靴下は足首までなので、足がすごく長く見える。しかもハクアと違つて、希の足はほとんど日焼けしていないので、夜の暗さでも一人並ぶとかなり希の白い肌が目立つた。

「あ…… そなんなんだ

言われると、その服はハクアが着ているのを見たことがある気がした。

「ちつ、なんだ、あんまり驚かないなあ」

ハクアがつまらなさそうに舌打ちした。ひざの上に迷彩柄のリュックを載せている。ちゃんと弁当を持って来ただろうか。不意に、希がいきなりタツヤの片方の手首を握つた。

「ねえ、あんまり 似合わない？」

希がさびしそうな瞳でタツヤを見上げる。タツヤは慌てて首を横に振つた。

「そつ、そんなことないよ。なんか、そんなのも、たまには いいと思うよ」

「ほんと？ ほんとに？」

タツヤは希の満面の笑みを見て、顔が真っ赤になつた。自分でも何を言つていいか混乱している。希は何で急にハクアの服を着たいと思ったのか。女の子の気持ちはよく分からない。

「あたしは毎日そんなのだけどねー」

ハクアは不満げにほほをふくらませる。希は手を離した。タツヤ

は少しほつとする。

「今後、逆をやつしめる?」

「のぞみんの服をあたしが? いや、のぞみんのはみんな可愛いから似合わないって」

「朱鳥くんは見たい?」

「えつ、えつ? 何を?」

聞き返すと、髪を一つくくつにした希とまた目が合つた。なぜか恥ずかしくて目を逸らしたいが、それでもつい見てしまう。

「たつんさあ、のぞみんの顔ばっかり見てないで、話聞けよー」

「いや、聞こてるよ」

「……じゃあ、答えるよー!」

ハクアはちょっと機嫌が悪かった。タツヤがぼうっとしていたからだと思うが、何と言つたら機嫌が直るのが分からない。

「まあ……見てもいいけど、その……」

「ねえ、見たいって! ハクちゃん、どうする?」

希は脇にある赤いリュックを叩いた。その中に希の着替えた服が入つてているようだ。

「たつんが乗り気じゃないならいいや。まあ……今度にするよ」「じゃあ、わたしが持つてる一番かわいい服を貸してあげるね! 霧枝ちゃんとか由果ちゃんにも見せようよー!」

すると、ハクアはきつい視線でタツヤをにらんだ。

「別に、見たくないなら見たくないくて言えばいいからな。あたしの前で心を偽るなよ? まあ、仕方ないから、今度たつんのうちで着てやるけど」

「あ、うん……」

今度つていつだよ とタツヤが胸のうひでつぶやいた。自分が着たいんじゃないのかな。それを僕との約束っぽくするなんて……とタツヤは浮かんだ言葉を全部飲みこんだ。ただ、心は偽つていな。少し、見てみたかった。由果もきっと喜ぶだろ?と思つた。

郊外の公園行きのバスに乗り込むと、いきなり弁当の話になつた。希と二人ならここで星座の話をいろいろするのだが、ハクアが突然リュックから弁当を取り出したのだ。バスの中は空いていて、三人は後方の二人がけ座席に向かい、ハクアと希が並び、タツヤは一人でそのまま前の列に座つた。いつもだとタツヤと希は並んで座るのだが、今日の夏らしい希の姿を間近で見るのがまだ慣れなくて、タツヤは黙つて一人になつた。

「のぞみん、見てくれっ！ これが『ハクア・スペシャルギガ弁当』だつ！」

ハクアが大声とともに弁当箱を開けると、一気に肉と油の臭いが広がつた。タツヤはこの臭いを知つていて、間違いないギガバーガーの臭いだ。振り返ると、やはりそうだつた。

「ハクア、バスの中でお弁当を食べるなよ

「えっ？ 何で？」

「何でつて……他の人も乗つてるだろ？」

「でも、他の人は前のほうだぞ？」

後方の席には乗客の姿がなくて、前方には大人や高校生が何人か静かに乗つていた。

「ダメだ。マナーだよ」

「……じゃあ、食べない。見るだけ！ ちょっと見るだけ！ それで我慢する！」

そう言うハクアの手元には、大人でもあまり使わないような巨大なアルミ製の弁当箱があつた。仕切りで二つに分かれしていて、片方に平べつたいハンバーグが何枚も重ねて押し込められている。そして、もう片方は、たぶん元はハンバーガーのパンだと思うが、大きなソーセージが挟んであつた。

ハンバーガーを分解して詰めたまでは良いとして、まさかパンをホットドッグにするとは。恐るべき肉だらけのスペシャルギガ弁当だ。ちなみに野菜はゼロだ。

「あれ？ ハクちゃん、ポテトは？ 帰りにセットで買つてたよね

？」

希が聞く。学校帰りに一緒に行つたみたいだ。

「ポテト？ あ、作つてゐる間に食べた」

これを作つたとは言わせたくない。それはともかく、希は目を丸くした。

「えつ、全部？」

「うん、全部」

「……もう、いいからしまえつて。肉の臭いが……すごいから」

タツヤが言つと、ハクアは弁当にふたをして、なぜか挑戦的な笑みを見せた。

「たつりん、あとでじつくり見ていいからな！ ギガバーガーの味にもちよつと飽きてきたし、半分くらい取り換えっこしてもいいぞ！」

「いや……」

「たつりん、ちゃんと水筒も持つてきたんだ！ すごいぞ！ コーラ満タンだ！」

水筒にコーラを入れてくるのまでは予想できなかつた。もう笑うのを飛び越して、噴き出すことが心配だ。服が汚れないといいけれど。

「……わかつた、公園でゆつくり見るよ」

タツヤは興奮するハクアを静め、席に座り直した。あれだけ食べていてちよつと飽きたくらいと言うハクアもハクアだが、タツヤはだいぶギガバーガーの臭いやコーラの味に飽きていた。

そして、しばらくして ハクアは静かになつた。

タツヤが氣になつて後ろの席をまた見ると、希と田が合つた。希は小声で答える。

「ふふつ、ハクちゃん、寝つけやつた」

ハクアは窓側に座つてゐるが、希の肩に頭をことんと置いてよく寝ていた。バスが出発してからまだ五分くらいしか経っていない。

ハクアの手の力が抜けて、リュックが希のひざに半分載っている。

「月本さん、重くない？」

タツヤは小声で聞くと、希はきょとんとした顔をして、それからにっこりほほ笑んだ。

「……朱鳥くん、ほんとやさしいね」

「いや、その、ちょっと気になつただけだよ」

何となく今日の希の笑顔は特別だった。いつもなら希と並んで話すのに、今日は隣りが空いているのも少し残念だった。だからつい後ろを見てしまう。もちろん、そんな気持ちはここで言い出せない。希は初めて天体観測に来てくれたハクアときつとたくさん話したいのだ。肝心のハクアは寝てしまつたけれど。

「朱鳥くん、退屈なの？」

だけど、希に正面からそう聞かれると、タツヤは「まかせなかつた。

「あはは……まあ、ちょっとだけね。うん。大丈夫なら、いいんだけど」

「そうなんだ、ごめんね」

希は顔を曇らせた。タツヤはこれ以上見ていられなくて、また座り直した。そして、希も静かになつた。

タツヤは窓の外に夜が流れていくのをぼんやり眺める。今日のために星座図鑑の夏のページをいろいろ読んできたのだ。何となく、やつぱり、希と話したかった。ハクアはもちろん大事な友達だけど、この天体観測は、希とゆっくり話す月に一度きりの大好きな時間だったのだ。ハクアが一緒に来たことで、タツヤはかえつてそれを強く感じてしまった。

ハクアがいるから学校が楽しいし、誰かを一生懸命助けたり、誰かに助けてもらつたり、そんなことが何度も重なつて、少しは男らしい勇気もついてきた氣もするけれど、さびしいときだけはつい希のことを考えてしまう。

そんなに急に　　強くはなれないのだ。タツヤはそれを

「朱鳥くん、奥につめてー」

希がリュックを持つて横に立っていた。

「えつ？ ハクアは？」

「えへへ。寝ちゃったから置いてきた。ねえ、座つていい？」

タツヤは真ん中に座っていたので、お尻を窓側にずらした。ついでに立ち上がり、後ろの席を見ると、ハクアは寝顔のまま窓際に頭を傾けていた。多少の揺れでは起きる気配もない。

バスは坂道を登りはじめる。小高い丘にある郊外の公園に少しずつ近づいているのだ。夜、星空が降つてくる、あの静かな公園に。星と過ごす時間がある、あの場所に。

「どうぞ」

希はくすくす笑つて、空いた席にちょこんと座つた。ハクアみたいにスポーティな格好をしているけれど、ひとつひとつ仕草が間違いく希だつた。

「ハクちゃんね、学校帰り、とにかくテンションが高くて大変だつたんだよ」

「そうなんだ」

「ほんとに星が好きなんだなあつて、うれしくなつちゃつて」

「……みたいだね」

タツヤは本心ではそう思わなかつた。たぶん弁当を持ってみんなで出かけるというのが楽しみで仕方なかつたのだ。星の話なんかひとつもしていない。もちろん、あの公園の広場から星空を見たら感動するだろうけど、それはこれからでいいのだ。希もそう感じているかもしぬないけれど、タツヤはそれを口にはしなかつた。

「朱鳥くん、一人にしちゃつてごめんね」

思いがけない言葉だつた。でも、それは違う。タツヤが一人の席の横に行けば良かつたのだ。単に気後れしただけだ。

「いや、僕は」

「やっぱり話したくなつちゃつて」

タツヤの声をさえぎつて希が言つた。タツヤは驚き、息が止まり

そうだった。さっき自分の胸にあつた気持ちが、希の口から自分に届いた。肩が触れるくらいの距離で話すのはお泊まり会ふりだらうか。

夜に包まれた丘を進むと、窓明かりの数がだんだん少なくなつていぐ。バスの中は静かで、話しているのは本当に一人だけだった。

「うん、そうだね、せっかくいろいろ調べてきたし」

「ねえ、聞かせて」

希は少し身を乗り出して、タツヤの瞳の中をじっと見た。タツヤは戸惑う。

「ハクアは起こさなくていい?」

「いいよ……だつて気持ちよく寝ちゃつてるもん」

「そうだね」

タツヤは『夏の大三角形』の星座について調べたことを話した。こと座のベガ、はくちょう座のデネブ、わし座のアルタイルを頂点にして結んだ三角形。こと座は愛する妻を生き返らそうとした天才音楽家の神様の形見をゼウスが拾ったとか、はくちょう座はゼウスが王妃に近づくために白鳥に化けたとか、わし座は美少年の王子を召使いにするためにゼウスがワシに化けて連れ去ったとか、調べるどいたい星座はゼウスが何となく作ったみたいだ。

夏から現れる三角形。でも、中国や日本では、こと座のベガとわし座のアルタイルだけが七夕伝説として織姫と彦星になる。どうして星の数も大きさも地球から見れば同じなのに、ヨーロッパの人は三つを結びつけ、中国人は二つを結びつけたのだろうか。考えるに不思議だ。こと座とはくちょう座のほうが、実は近いのに。

「近いより遠いほうが、燃えるんだよ」

希は言った。

「えつ、モエル? そうなの?」

「つて言つけど、ほんとは近いほうがいいよね」

「うん……僕もそう思うかな」

近いより遠いほうがいいなら、結婚とか変だと思つのだ。

「あ、あとね、こと座も昔は鳥だつたんだよ。だから、夏の大三角形はみんな鳥みたいに自由なの」

「えつ、琴も鳥だつたの？」

「うん、そうだよ。だからゼウスつてす」いんだよ」といつもの通り、希のつけ足す星座の話はだいたいデタラメだった。

「朱鳥くんも鳥だね！」

「まあ、そうだね」

朱鳥は鳳凰つまり不死鳥のことだ、と父の廉太郎から教わった。だから鳥ではあるけれど、神様というか、想像上の生き物なのだ。

「ハクちゃんは……白鳥？」

いや、ハクアは超肉食だからワシのほうじやないかな、と思うけれど。池をゆつたりと泳ぐ姿がどう見てもハクアに思えなくて、タツヤはこつそり笑つた。

「わたしは琴だね。ピアノやつてるしー」

「あ、ほんとだ、ぴつたりだね」

「ほんとに？ うん、織姫 名前がかわいいよね、織姫ちゃん」
希はウキウキと弾むように笑つた。

その少し前、曲がり角でバスがゴトンと揺れて、ハクアが一瞬目を見ました。隣りにいた希の姿がなくて、前の座席からタツヤと希の楽しそうな話し声が聞こえた。二人はこと座とかゼウスとか星座の話をしているみたいだった。

少し考えたが、ハクアは再び田をつぶつた。タツヤはバスに乗つてから機嫌が悪かった。たぶん、希を自分に取られてつまらなかつたのだと思う。

あたしの前で心を偽るなよ？

いまさら、ハクアは自分が言つた言葉が少し憎らしかつた。自分を天体観測に誘つてくれたのは希なのに、何だかタツヤの一言一言がつい気になつてしまふ。それは、希にも申し訳ない。

外の景色はだいぶ街中から離れて暗く、ゆるやかに丘を登ついた。とりあえず、もうこれ以上何も考えず、目をつぶった。またゴトンと揺れて、窓ガラスに軽く頭をぶつけたが、ひんやりとしてなぜか心地良かつた。

「ハクちゃん、もう着くよ」

肩を叩かれ、ハクアは希に起こされた。今度は、希はちゃんと横に座っていた。

タツヤもリュックを持って通路に立っている。もう不機嫌そうな顔はしていない。ゆっくり希と話せて落ち着いたのかなと思う。

「ハクちゃん、起きられる?」

「おう!」

気合を入れて威勢良く起き上がつた。よだれの筋が唇の下に乾いてこびりついていた。そんなに長い時間は寝てないと思ったが、バスの時計を見ると、三十分近く乗つていたみたいだ。

「お金ある?」

「おう!」

ハクアはまだ少し寝ぼけていて、それ以外の返事が出なかつた。

タツヤと希は一ヶ月ぶりに、郊外の公園前のバス停に下りた。草の匂いがぐつと強くなる。これはいつも同じだ。そして、流星が夜空を走つた瞬間を今でもはつきりと思い出せる。続いて、ハクアは少しよろけながらバスを下りた。

タツヤはぐつと背筋を伸ばす。少し歩いたところに団地もあるせいか、他にも何人か下りた。大人だけでなく、高校生や、同じ年くらいいの子供の姿もあつた。ここは終点ではないので、バスはドアを閉め、次の停留所に向かつて去つて行つた。

バス停のところは外灯が何本も立つていて明るいが、少し離れればだいぶ暗さが濃くなつてしまつ。公園のまわりは外灯も少なく、公園内部はもつと暗かつた。公園の入口は芝生できれいに整備されているが、それでもフェンスに押し寄せる緑の群れはざわざわと何かを呼んでいるかと思わせる不気味さがあつた。

タツヤは初めて希と来たとき、恐さで足が一瞬止まつたが、四度目の今日はもうだいぶ気持ちも慣れていた。よし、行くか、とタツヤがいつものように希の手を引こうと差し出すと、希は顔を赤らめて首を横に振った。

「ううん、今日はいいよ」

「……そつか

希は「今日は」と言つたが、もしかするとこれから三人で来ると、希の手を握つて歩くことはないかもしない。希が恐くないならそれでいいのだけれど、何だか天体観測の雰囲気が少し変わってしまったようで、タツヤはまたさびしい気分になった。

そして、肝心のハクアを見ると、なぜかバス停のベンチに座り込んでいる。

「よし、バッヂリ食うか

明らかにリュックからスペシャルギガ弁当を取り出そうとしていた。希が小走りに止めに行く。タツヤも何か言おうと思ったが、希に任せた。

「ハクちゃん、ここではまだお弁当食べないよ

「えつ？ まだ？ うーん……」

「でも、お弁当はきれいな星を見ながら食べるとおこしいよ

「……ここにしようよお

さつきまで寝ていたせいか、シャキっとせず、少しこらだつようなどだつ子ぶりだ。

「まだだよ、外灯とか電線がたくさんあるからダメ

「うーん、そつかあ……」

ハクアは渋々立ち上がる。タツヤは少し離れて見ていて、ハクアは夜に弱いのかな、と思つくらい脱力していた。希に手を引かれて入口まで來ても、まだ「なあ、やつぱり、バス停のベンチに戻らないか？」と何度もぼやいていた。

弱音はあまり吐かない性格のハクアだが、いくら空腹でも、希にそこまで食い下がるのは少し様子がおかしい。やはり、先週の超能

力の反動がまだ残っているのか、それとも単に寝ぼけているせいなのか、気になつた。けれど、希がとにかくハクアの手を引っ張つて公園に入るので、タツヤはおとなしくあとに続いた。

希は先頭になつて、大きな円形ベンチがある広場をめざす。そこは大きな外灯があり、それでも最高に見晴らしがよく、星空がすくすくきれいに見える場所。つまり、タツヤの希があの流星を見た場所だ。ハクアと会う運命のはじまつたところ。

そこに向かつていて、本当に渋々歩いているハクアの後ろ姿を見ると、何だか気分が悪かつた。広場までは、細いけれど舗装された一本道があり、別に歩きにくくはない。けれど、ハクアの足取りが重いのだ。希が心配して手を引きながら声をかける。

「ハクちゃん、暗いのは恐い？」

「いや、全然そうじやないんだが……」

「おなか空いたのは我慢して。もうちょっとだから」

「まあ、それも我慢できるんだが……」

公園に着いてから中身が変わったのかと思つほど、ハクアは歯切れが悪くなつた。ときどき、思い出したように後ろを振り返り、その度にタツヤと目が合ひ。振り返つたハクアの表情は、見る度に険しくなつていて。タツヤはさすがに気味が悪くなつてきた。せつかく楽しみにしていた天体観測なのに、何でハクアはこんなに調子がおかしいのだろうか。炭酸のコーラでも飲ませたら普通に戻つたりしないか。そんなことを思つた。

「ハクちゃん、ほらつ、広場に着いたよ」

希が前方の広々としたところを指さす。中心に明るい外灯が立つていて、その下に円形のベンチがあり、芝生が一面に取り囲んでいる。広場の外周は真つ暗な雑木林だつた。

そして、見上げるとまさに狙い澄ましたように、美しい真夏の三角形がでっかく浮かび上がつていて。星の光の粒が大きいから、三角形はすぐ分かる。けれど、それを隠すくらい無数の星が広場の空

を覆い尽くしていた。黒い雑木林の端から反対の端まで、少しの隙間もなく細かやな星空があり、三人の影を静かにじっくりと包んでいた。

「ハクちゃん」

「…………ん?」

「いつもここでお弁当にしてるんだよ。待たせかけって『めんね』

希が草の上を跳ねるよつた足取りで手を引く。

明るい円形のベンチのところで、三人ともリュックを下ろす。希はリュックから小型の望遠鏡を取り出し、ヒモで首にかけた。

「あとでハクちゃんにも貸してあげるね」

肉眼でも十分星空の美しさを味わえるが、望遠鏡があるなら視力の良くないハクアもきっと星をじっくり見られるだろう。タツヤは希の気配りに少し感動した。

「まずはお弁当タイムだね」

「いや…………ここじゃダメだ……」

あれだけハクアは弁当を食べたがっていたのに、いまは異様に険しい顔をしていた。外灯のおかげで表情がよく見える。タツヤは背筋がゾツとした。ハクアはなぜか再び希の手を握る。希の顔色が曇るが、ハクアはじりじりとベンチから離れはじめた。

「…………ダメだ。やっぱり、明るいところはダメだ」

ハクアの声が一段と低くなる。

「だつて、お弁当」

希が言いかけたとき、広場の暗がりのどこかでカチャリという金属音が鳴った。その瞬間、ハクアは今日一番の大声を出した。

「誰かいる！ ライトから離れろ！」

叫びながらハクアはすでにそこから走り始めていた。希の腕を強く引き、ベンチからも広場の入口からも離れた方向へと走った。芝生を蹴り、雑木林に向かって突き進む。タツヤもその声を信じて後ろ姿を追つた。

ピカツと暗闇の奥から鋭い閃光が見えた。広場の入口の方向だ。

「ハクア！ いま光つたぞ！」

「あたしも見た！ 正体はわからん！」

懸命に走りながら、それだけの短いやりとりを交わす。

「動物か？」

「あの足音は人間だ！ それくらい聞き分けられるだろ？！」

そして、外灯から少し距離を取つたところで、ハクアは振り返つた。ここはだいぶ暗い。足音が聞こえるから輪郭がつかめるが、表情はまったく見えない。急に走つたせいで、希の息が上がっているのが気配で伝わってきた。外灯までの距離は二十メートルくらいはあると思える。ハクアが言つた足音の聞き分けは、タツヤにはよく分からなかつた。

「たつづん、やばいぞ……」

ハクアがつぶやく。

三人と外灯を結ぶ直線上の少し明るいところに、奇妙な現象が起きていた。夜の公園には羽虫や蛾がよく飛んでいるが、その場所で大きな蛾が、いきなり芝生の上に急降下した。まるで吸引機に吸いこまれるようだ。そして、その上から真っ黒いもつと大きなものがバタバタはためきながら地面に落ちた。大きさから、小鳥のように見えた。

いつたい何が、何がそこで起きたんだ。

タツヤは恐る恐る後ずさり、ハクアの横に並んだ。希もちゃんといる。

「ちつ、外したか」

暗闇の先で、聞き慣れない女の子の声がした。目を凝らすと、広場の入口方向からひとつの人影がこちらに向かつて歩いてくる。その輪郭が見えた。顔までは無理だ。背丈は大きくない。いや、自分たちとそれほど変わらない感じに見えた。

こんな時間に、女の子一人がこんな場所になぜいるのか。

「なんだよ、気持ち悪い。コウモリか」

得体の知れない少女は悪態をつくと、また手元でピカッと閃光を放つた。すると、風が吹いたわけでもないのに、その場所の芝生がざわめいて、コウモリや蛾などが再び地面から飛び立つた。コウモリは明かりの外へすぐ消えた。

外灯は、広場の中心まで歩いてきた少女の姿をゆっくりと照らした。一番目立つのは、真っ赤な服　いや、ガールスカウトみたいな格好というか、あれは映画で見るような軍服と言つほうがいいような服装。茶色っぽい巻き髪。そして「つい」革靴を履き、右手には何か黒いものを持っている。

姿をこっちはよく見せたいのかと思えるほど、明かりの下で仁王立ちした。

「お・待・た・せ、おかげハンターさん」

少女は笑みを浮かべ、ねつとりとした口調で挑発するように言った。

「その呼び方……！」

ハクアはいつもよりずっと声を抑えつつ言い返す。

「悪いけど、あんたとは面識ないんだけどね。薬がないのに、元気にしてた？」

少女はキープタブレットのことも知っている。間違いない。

「追跡隊！　とうとう来たか！」

ハクアは一声叫ぶと、いつそう警戒心を高め、外灯から一定の距離を取りながら旋回し始めた。タツヤも歩調を合わせる。とにかく、この状況はハクアに合わせるしかない。相手はほぼ確実に超能力者なのだ。しかも、ハクアと違う種類の能力を持っているように思えた。

巻き髪の少女は、こちらが横歩きする気配を察したらしく、だいたいの位置を目で追つてくる。

「あたし、お仕事はテキパキしたいの。あんまり粘らないでくれる？」

そして、少女も明かりの外に向かって少しずつ歩き出した。

ハクアはさすがにもう何も答えないが、余裕があるようには感じられない。不良や引っ張ったくろ犯をまっしぐらに追つたときの勢いとは全然違う。すごく慎重に行動を選んでいる気がする。もしかするとハクアはここで捕まつてしまつんじゃないか、と不安ばかりが強く込み上げてくる。

巻き髪の少女の姿は、ついに半分ほど暗闇に溶けた。

「脱走したやつとは訓練の年期が違うんだよ！ 一般人を二人も連れて逃げられると思うなよ？！」

右手を前方に突き出す。あれは銃だ ！

閃光が走つた。発砲音は鳴らないが、銃口がピカッと光つたのが見えた。タツヤの体には異変がなく、何も起こらなかつたように思えたが、次の瞬間、希が鋭い悲鳴を上げた。

「きやあっ！」

「のぞみん！ どうした？！」

「ハクちゃん、足が 動かない！」

恐怖のせいで希の声は絶叫に近かつた。一人ともそんな大声を出したら、

「あはっ、ラツキイイイ！」

巻き髪の少女は歓喜の声を上げ、素早く走つて近づき、再び銃口を構えた。

ハクアはその場に止まつたままだ。まさか敵の動きが見えてないのか？！

タツヤは慌てて走り出す。

「また撃たれるぞ！」

もうタツヤからハクアに体当たりするような勢いだつた。ハクアの体がよろけるのを自分で必死につかみ止める。腕を握つた感触と体温があつた。

「お前は希の手を絶対離すな！！」

「うん！ ぐつ、のぞみんが重くなつてゐる！」

「ごめんね！ ごめんね！」

「静かに！ とにかく引っ張れ！」

そう言い交わしながら、タツヤは懸命にハクアの腕を引いて暗闇を突っ走った。背後で銃口がまた光ったが、タツヤの体に異変はなかつた。この暗さでは、方向感覚は正確とは言えない。けれど、あの少女の射程範囲から離れないとい、希の足がどうなつたかも確認できぬ。痛いとは言つてないが、とにかく危険な状況だ。何度も芝生で滑りそうになるが、スニーカーを履いてきて良かつた。目の前にいきなり木の幹が迫つた。

ガサガサッと落ち葉を踏む音がして、木と木の間に突入した。星がほとんど見えなくなる。星明かりすらも届かない暗闇だ。だが、それでも雑木林に入つたのは、とにかくあの危険な銃撃を防ぐためだつた。ここなら木が障害物になつてくれると考えた。

しかし、タツヤはこの雑木林は狭く、しかもフェンスに囲まれているのを知つていた。ただ、それより希の足だ。幸い、あの軍服の少女は林の中まで追つて来ていない。ハクアを捕まえるつもりでここに来たのだ。この公園の構造を知つてゐるに違ひない。

タツヤは深く入らずに立ち止まつた。雑木林の中だが、木々の間から広場の外灯が見えるくらいの位置だ。まず、希がいることを小声で確かめる。

「月本さん、いる？」

「う、うん」

希は息を切らしつつ、タツヤに合わせて小声で答える。表情がまったく分からぬのがすごく不安だ。

「足を撃たれたの？」

「……う、ううん、撃たれたんじゃなくて、急に左足がすごく重くなつたの。いまは大丈夫」

「えつ？ いまは大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」

ハクアも呼吸を弾ませながら、小声で入ってきた。

「エリア系だ。あの女はエリア系だ。だけど、何であいつは」

「ハクア、エリア系って何だ？」

「エリア系第一段階、マグネティック・エリア。手に触れた場所の重力を異常に上げて、その場所にしばりつけるんだ。だけど、何であいつは、あいつは」

「落ち着いて。どうしたんだ？」

タツヤはハクアの肩をさすり、手を握った。

「あいつは何で、手で地面に触れてないのに発動するんだ？！ それがエリア系の発動条件なんだ。たつつん、これは絶対なんだよ！」ハクアはひどく動搖している。せっかく小声で聞いても、ハクアの声はすぐ大きくなってしまう。これではまずい。しかも、ハクアがこんなに動搖していると、希もタツヤも最悪の結末をどうして考へてしまふ。だけど、ハクアは大切な友達だ。絶対に離れ離れになりたくない。ハクアがいるから自分は サクツ、サクツ。雑木林の外で生々しい足音が聞こえた。少女がゆっくり近づいてくる。

「あんた声でかいから、林の外でもだいたい聞こえてるよ」

追跡隊の少女の輪郭がぼんやりと見えた。銃を右手にしつかり構えている。

「あたし、あんたが不得意なエリア系だよ。地面撃てばおしまいだからね。鬼さん、鬼さん、出でおいでー」

またも挑発だ。ハクアは完全に落ち着きを失っている。林のすぐ外で超能力者の銃口が待ち構える。そのプレッシャーに迫られて、三人とも暗闇や無言や恐怖に押しつぶされそつだつた。

希が震える声で聞いた。

「ねえ、ハクちゃん、連れ戻されるとどうなるの……？」

「一度脱走したやつは、死ぬまで独房に入れられる決まりだ。それから強制的に実験体になる」

独房、実験体

想像のつかないものに対し、タツヤも希も言葉

が続かなかつた。

「ガン首そろえて出ておいでー 楽しい学校に帰りましょつ」

歌いはじめた。背筋が冷たくなる。希がタツヤとハクアに体を寄せてくる。

「ハクちゃん、あの子は知つてるの……？」

「名前はわかんない。けど、絶対に訓練学校の追跡隊だ。脱走した超能力者を連れ戻すのが役目なんだ……！」

それを聞きながら、タツヤは唇を強く噛んだ。

「こだまが翼を折っちゃうよー 楽しい学校に帰りましょつ」

「学校じゃない、もうあたしには牢屋しかない……！ こんなに楽しい生活を知つちゃつたんだ。いまさらそんなもの、死ぬよりイヤだつ！！」

ハクアの口からしぼり出される悲痛な叫び。それはきっと、気味の悪い鼻歌を浮かべる追跡隊の少女にも全部聞こえているだろう。とにかく、ハクアが不得意な相手なら、ここから何とか逃げ出さなければダメだ。いま考えることは、捕まつたらどうなるかでなく、あのエリア系超能力の有効範囲のことだ。一発目は撃つても当たらなかつたわけだし、そのあと希は片足が捕まつたのに、ハクアが何とか引つ張つて逃げ出し、いま大丈夫なのは、もしかすると有効範囲から離れたからじゃないだろうか。

「ハクア、もう一度、あの能力のことを落ち着いて聞かせて」

「う、うん……」

「銃のことは知らないんだよね？」

「うん、わからない。あんな銃、訓練学校で見たことない」

「そつか。じゃあ、普通なら重力が上がる場所つてどれくらいなの？」

「普通なら……普通なら、半径一メートルくらいだったかな」

ハクアの声が少し落ち着いてきた。

そして、タツヤも自分の心を何とか静めながら、ここまでやられた攻撃を思い返す。半径一メートル。もし、そうだとしたら。

そうだ、言われると、そんなものだつたんじゃないだろうか？二発目、希の左足がやられたのは、あの少女がだいたい見当をつけて撃つたら、たまたま左足だけ捕まつてしまつたのかもしれない。あの少女は、撃つた場所と声の方向で追い詰めようとしている？

なら、三発目は本当に運良く外れただけだったのか。
だとしたら……。タツヤは少し考えて、意を固める。

「三人で何とかしよう」

ハクアはその言葉に素早く反応した。

「だつたら視力を貸して！ あの弾をよけないとやられる！」

「違う、そうじゃない。視力はダメだ。落ち着いて。自分のことだけを考えたらダメだ」

タツヤは押し殺した声で、また浮き足出つハクアを抑えた。

「三人で何とかするんだ。三人の力を合わせて、ここを突破しよう」
漆黒の雜木林に包まれ、タツヤは一人の震える手をもう一度ぎゅ
つと握り締めた。

ハクアを加えて初めて三人で天体観測に来た、郊外の公園。いつもみたいに弁当を食べながら星を見上げるはずだった広場。だが、今夜は状況が一変してしまった。

広場の中心には一本の外灯がスラリと立ち、その光の下に円形ベンチがあり、三人のリュックはまだそこにある。広場を囲む暗い雑木林の中に、小動物のように潜みながら、三人は狩猟者の人影を注意深く見つめていた。

林の外には、赤い色の軍服を着た、巻き髪の少女が一人立つ。ハクアはあれが追跡隊だと言った。少女は、右手に黒い銃を持ち、ずっと銃口を三人が囁き合つところに向けて構えている。学校へ帰りましょ、と鼻歌を浮かべて威圧してくる。だが、ハクアが連れ戻される先は一生出られない牢獄だ、ハクアがそう叫んだ声が脳裏に蘇る。

三人の力を合わせて、ここを突破しよう。

タツヤは怯える一人の気持ちをひとつに合わせるために言ったが、決定的な作戦があるわけではなかった。だが、ここで三人がバラバラに動いても、誰かが少女が使うあのマグнетイック・エリアの超能力で捕まるだろうし、それを見捨てて逃げるわけにはいかない。三人ともここから逃げのびなければダメだ。取り残されるなんてことは、絶対にダメだ。絶対にダメだ！

けれど……どこまで逃げればいいんだろうか。本当にハクアの自由は守れるのだろうか。

「ハクア、追跡隊のことをもう少し教えて」

「な、なんだ？」

「ハクアはあいつに発見されちゃったんだ。どうやって逃げるんだ？」

難しい質問だった。タツヤの口から、逃げるのは無理だと言つて

いるようなものだ。ハクアもそれを分かつてはいるのか、低く沈んだ声で答える。

「追跡隊は、超能力を知らない人間の前では能力を使わない……はずだ」

「そつか。……それなら、どうして僕らの前では襲ってきたんだろう？」

タツヤは林の外で歌う人影を見ながら、ハクアに聞いた。

「そんなこと、あたしもわかんないよ」

ハクアはうつむきながら苦しそうに答える。希はそのとき何か言いかけたが、口をつぐんだ。ここで言い合つたら、三人の力を合わせることはできないのだ。

「じゃあ、一般人の前では超能力を使わないつてのを 信じるしかないか……」

「うん」

「よし。帰りのバス停なら、大人がいつも何人かいるんだ。何とかそこまで逃げよう」

タツヤは囁き声で、いま考えている作戦を二人に話した。ハクアも希も真剣に聞いて、深くうなずいた。タツヤや希の財布や携帯はリュックの中だ。だから、リュックを取らないといけないし、三人とも無事にバス停まで戻らないといけない。

マグнетイック・エリアの射程範囲はだいたい半径一メートルらしい。相手は銃を撃ち、超能力を使つてくる。三人バラバラで林から駆け出せば、相手をたぶん混乱させられると思うけれど、もし捕まつたら、さつきの希みみたいに自力では抜け出せそうにない。それから、ベンチにあるリュックを取りに行くところを狙われたら危険だし、一人でリュックを三つも持つたら、早く走れるわけがない。すごく危険だ。

それなら、ハクアのレンタルフォースの能力をうまく使うしかない。

作戦を伝えると、希は、首からかけていた小型の望遠鏡をハクアに手渡した。使って欲しい、といふことだ。

ハクアは望遠鏡の重みを手に持つて確かめる。真っ暗い林の中で、希はハクアの目をじっと見る。いまここに何も使えるものがないときには、確かに一番いい道具だった。足元を探せば小石くらいはあるだろうが、小石では大きさと重さが足りないのだ。

「のぞみん、……いいのか？」

「ハクちゃんを守るほうがずっと大事」

希は小声ながら力強く言い切る。ハクアは一瞬無言になつたあと、タツヤのほうを向いた。

「たつりん、断られるのをわかつて聞くぞ」

「うん」

「これであいつを直接」

タツヤは即座に首を横に振つた。

「そんなのダメだ。追跡隊でも、大ケガをせるのはダメだ。それに、ハクアが捕まつたら終わりなんだ。お前も逃げて、僕らも逃げるんだ」

ハクアは少しだけ笑顔を見せ、また険しい顔つきに戻つた。そして、タツヤと希二人の腕をぐつとつかむ。

「それじゃ、借りるぞ」

「うん」希はうなずく。

「ちゃんと、返すからな。絶対に、時間切れとかじやなく、離れ離れとかじやなく、ちゃんと一人にお礼を言つて、あたしの手で返すからな！」

ハクアは少し語氣を荒げた。涙声混じりに聞こえたのは氣のせいではないかもしない。

「大丈夫、うまく行くよ」

タツヤは腕の力が体から消えていくのを感じた。いま、ハクアに移つたのだ。

木の葉の間から差すわずかな星明かりの下で、希のおでこに猫の

肉球型のあざが現れたのが見えた。たぶん、タツヤのおでこにも出ているはずだ。このあざが、暗く厳しい状況で、ハクアと絆がつながった証しに思えた。

追跡隊の少女 羽島こだまは、三人が山猫みたいに隠れたままでこないので、歌うのに飽きたので止めて、少し肩の力を抜いていた。動けば草を踏む足音がするだろうし、手ぶらの連中に、このリモートガンに対抗できる手段があるとも思えない。

こだまは先日の訓練学校での作戦会議で、フォース系超能力者「寺野ハクア」のプロフィールや能力値の記録をだいたい聞いていた。と言つても、たかが第一段階だし、訓練の途中で逃げ出したわけだから、持続力も低いし、しかも直接手で触らないと発動できないのだから、たいした戦力ではないな、と鼻で笑つた。

こだまはエリア系なので、フォース系の学生棟だったハクアとは一度も会つたことはない。訓練も完全に別だった。ちなみに、隊長の天童はフォース系なのでハクアのことを知つていたが、天童から聞いていた性格によれば、ケンカっぱやく、とにかく何も考えず突撃してくるだろう、ということだった。反射神経が良くて俊敏なのが厄介だが、慌てず着実に足下へショットして動けないようには問題ない、という指示だった。

ところが、いまはカメかアナグマのように暗い場所に引きこもつたまま、ちつとも出てこない。仲間を置いて出られないのか、ハクア自身が臆病風に吹かれているのか、まあ、どちらでもいい。隊長の話とはずいぶん性格が違うが、たぶんリモートガンのことを知らないからだろう。こだまは火を恐れる動物を、じりじりと追い詰めるような気分だった。

こういう機会があるから、追跡隊に抜擢されたことを幸せに思う。エリア系の学生棟でもすごく優秀でかつこいいと噂が聞こえていた天童隊長と一緒に仕事ができるのも幸せだが、逃げるウサギを実戦で捕えることができるのが、面白くて仕方ない。

メテオドロップという星空から授かった才能と宿命を受け入れられない軟弱者など、みんなの能力開発の踏み台になればいい。訓練学校では、追跡隊を一部恐れる声もあるが、こだまはそう割り切っている。天童隊長はそこまで言わないが、だが、超能力者が一般人の生活に紛れ込むことを絶対に見逃さないという鉄の意志を持つていた。

理由は簡単だ。数年前、妹の紅花がまだ超能力に目覚める前に、脱走者によって誘拐されたのである。当時の追跡隊と校長自らの出陣によつて、脱走者は捕えられたが、それから、天童隊長と紅花は脱走者に対して強い警戒心を持つようになった。当然だな、どこだまは思う。

とにかく、今回は事情があつて一人ともここには来られないが、一人でさつさと片付けて、隊長に褒めてもらうとしよう。林の中の三匹は、追い込んだときに比べて急に静かになつたが、位置は動いていなのは分かつている。

口元に笑みを浮かべながら、ぐつと銃を構える。

ハクアは呼吸を整える。望遠鏡を握り締める。そして、脱出作戦決行のために、雑木林の入口まで歩いて行こうとした。そのとき、タツヤは外の様子を見て、「ハクア、少し待つて」と小声で制した。ハクアは黙つて振り返る。険しい表情だつたが、公園に来て嫌な予感に囚われていたときとは雰囲気が違い、勇気と覚悟を帶びていた。それは、ハクアの腕に三人の力が注入されたからだと思う。

一方、タツヤは腕の力がガクッと抜けて、不安がこみ上ってきたが、何とか胸の中で抑えていた。ハクアに再び戻してもらうまでの我慢だ。他にいい作戦が思いつかなかつた。それでも、ハクアと希が一人も納得してくれたのだから、やるしかない。

あとは決行のタイミングだ。

そのとき、ブルルルルと低い振動音が聞こえた気がした。風もない葉がこする音もない夜の広場と雑木林に、少し違和感のある音

だつた。

すると、追跡隊の少女は銃口と顔をこっちに向けたまま、左手でポケットから何か取り出した。青く光っている。携帯電話かもしれない、とタツヤは思った。

「はい、天童隊長！ こだまです！」

少女は明るく大きな声で出た。一瞬だけ携帯の画面を見たが、視線をまたこちらに方向に戻す。タツヤは眉をしかめる。この状況で電話に出るのか。隊長と言つたな。増援が来るのだろうかと不安がよぎる。同時に、すぐ背後にいる希が無言でタツヤの背中に身を寄せてきた。同じことを考えたのかもしれない。

ハクアは数歩前で様子を見ていたが、その名前を聞いて変な反応を見せた。

「天童だと……？！」

タツヤはすぐさましつとハクアを黙らせる。ハクアもうなずいて一呼吸した。

追跡隊の少女はこちらを見ながら、携帯電話でそのままべラべら話しあじめた。

「はい、郊外の公園です。ほんと、せっかく夜に外かけたと思つたら、バスなんか乗りやがつてねえ。紅花ちゃん、初出陣楽しみにしてたのに、車に弱いですもんね。ねえ、泣いてません？」

クスクスと笑い声を浮かべた。話が長い。それなら話しじ中に動くか。タツヤは考えた。すると、少女は電撃に撃たれたように、いきなり姿勢を正した。

「あつ、はい、すいません！ 気を引き締めます。はい、大丈夫です。フォース系の落ちこぼれくらい、あたし一人で片付きますよ！」

「なんだと……！」

ハクアが低い声でうなる。そうだ、この性格を考えないと。タツヤは答えを出した。

「落ち着いて、ハクア、挑発に乗るな。合図を出すまで待つて」

「うん、オーケー」

囁き合つ。そして、電話を切つた瞬間に決行すると伝えた。ハクアは力強くうなずき返す。

少女の電話は続いている。

「ええ、まあ、なんかコソコソ抵抗してますけどねえ。籠城中です。本当によくしゃべる相手だ。タツヤは一歩進んで、ハクアの横まで歩いて行く。希も合わせてついてきた。当然、追跡者はこちらの足音を聞き、冷酷な視線で明らかに動きを追つている。

「あははっ、油断なんかしませんよ。それでは隊長！ さくらんぼ隊の名誉にかけて！」

電話を切つた。少女の視線が携帯に行く。

その瞬間、ハクアとタツヤは待機場所からYの字に走つた。同時にスタートを切つた。林の中の人影が二つに分かれたことは、当然こだまは察知した。焦らずポケットに携帯をしまい、銃を構える。ウサギが二方向に動いたので、こだまは実戦感覚的に、広場の出口に近いほうへ銃口を向けた。逃げ道に近いほうを押えるのが優先だ。広場の出口方向へ走つたのはタツヤと希の二人だった。先頭を走るタツヤは、雑木林のへりに着くと、立ち止まり、地面に落ちている葉を思いきり蹴り上げた。夏だから落葉の数は多くないが、葉が大きくて敵に派手な動きを見せるには十分だった。

そして必死で転ばぬようにバランスを取つて、その場から飛びのいた。腕が脱力しているから運動感覚がおかしいが、何とか体を切り返した。

銃口が一発光り、予想通り、木の葉が舞い上がつた場所にマグネットイック・エリアが着弾した。こだまは、誰かが走り出てきたと思ったのだ。タツヤの狙いは的中した。そして、二人の目に、舞い上がつた葉が地面に吸いつけられて落下する異常な様子が、暗い中でぼんやり見えた。

とにかく、タツヤの足は射程範囲に入つていない。もし万一ここで食らつたら、その後の作戦を希に託す予定だつたが、この先も自

分が行けると知つて、気合いと安堵が同時に噴き上がつた。

「あれつ？！　かわされたかつ？！」

こだまは叫ぶ。タツヤたちの時間稼ぎは十分だつた。

ハクアは広場の奥方向で走り、雑木林のへりに着いていた。林からは出す、視界が広くなつたところで立ち止まり、望遠鏡を持つた右手を大きく振りかぶつた。満天の星空の下にひとつ大きく輝いている外灯めがけて、全力で投げつける。

「トリプルパワー・ショット！！」

三人の力。思わず叫んだ。あの高い位置へ投げるには腕力の増強が必要だつた。だから、三人分の腕力を集めた。同時にコントロール精度も三人分になつてゐるはずだ。そんなもの、ただの予想だ。根拠なんてない。だが、信じる気持ちも三人分だつた。

望遠鏡は高速回転をしながら、目標へ一直線に飛び、外灯の電球に直撃した。

威力は十分だつた。コントロールが良かつたのか、あるいは運が良かつたのか。とにかく、三つ固まつた電球のうち、二個を見事に破壊した。全壊にはならなかつたが、それだけでも十分あたりの明るさはぐつと減つた。

「こつちがハクアかつ！」

こだまは、ハクアが叫んだせいで気づいたようだが、声を出さなくてもこんな破壊能力は普通の子どもでは無理だろう。反射的に、意識を広場の奥に向けた。

「あははっ、まさか全部割るつもりだつたか？！」

「これで十分だ！　行くぞ！　本気でぶつ飛ばしてやるからなつ！」

ハクアは大声を出してすごんだ。こだまは、頼りない明かりに不安に覚えながらも、誇りとともに気持ちを奮い立たせ、銃口をしつかり構え、ハクアの襲来に備えた。

だが、しかし、それは来ない。ハクアも挑発に乗りやすい性格だが、こだまも挑発に応じやすい好戦的な性格だと見抜かれていた。ハクアはこのタイミングで駆け出したいのをぐつと我慢した。雑木

林のへりでまだ待機していたのだ。

その作戦を考えたタツヤ自身は、外灯が壊れて、望遠鏡が地面に落し、立て続けに大きな音が鳴ったときに、雑木林を颯爽と飛び出し、単独で広場を走っていた。ハクアのように声は上げない。非常に危険だと分かつていながらも、こだまの背後をめがけて必死で突進していく。

このときもし、こだまがハクアに全神経を向けていなければ、さすがに暗くなつた広場でも、タツヤが迫る姿を見てすぐ二発目を撃つたかもしれない。だが、こだまは追跡隊という責任感から、ハクアに意識が傾いていた。天童隊長から俊敏だと聞いていたのもひとつの中だし、超能力者の攻撃を警戒したというのも間違いない。とにかく、こだまが背後へ迫つてくるタツヤの足音に気づくのが大幅に遅れたのだ。草の上を走る音を聞いて、こだまは慌てて振り返つた。暗い。誰かが向かつてくる。距離もない。

もう平常心は保てなかつた。だが、それでも訓練を受けた隊員として、迫る相手に銃を向ける運動神経は生きていた。

「来るんじゃねえつ！」

タツヤは銃口を見て、とつさに叫んだ。防衛本能だつた。

「僕は一般人だつ！！ 撃つなあああつ！！」

こだまは、その言葉によつて心のブレーキを思いきり踏まれ、射撃をためらつた。ほんの数秒、体が固まつた。よけることも忘れた。それが相手の侵入を許した。

タツヤは全力で身を投げ出して、こだまに体当たりした。正確に言えば、足がもつれて地面を這うタックルみたいな体勢になりながら、何とか持ちこたえ、こだまの細い両足に体の重みをぶち当てるのだ。

もしかすると、ここにこだまが銃でなく本来の手で迎撃していたら、タツヤの進撃を止められたかもしれない。だが、こだまは前めりに倒れ、草の上に突つ伏した。これが実戦の結末だ。意識が乱

れ、手から銃が離れた。地面に倒れたタツヤの体に乗りかかり、混乱を極めた。暗さが不自由さを助長する。

「こだまはフラフラと上体を起こす。少し時間が過ぎていた。そして、また近くに駆け足の音が迫っているのに気づいた。ハクアのいた方向からだ。こうなると分かつて突進してきたのか。

「くそっ！　来るんじゃねえって！」

銃を探す。黒いせいがすぐ見つからない。時間がない。手のひらを硬い草が刺す。そうだ。手だ。至近距離なら、銃に頼る必要はない。こだまは暗さにぐっと目を凝らし、迫つてくる人影を視界に捉えた。顔が見えた。間違いなくハクアだ。

「来てやつたぞ！」

「うるさい！　あんたさえ止めれば、あたしの勝ちだ！」

こだまは右手で地面に触れ、腕に力をこめた。これでマグネティック・エリアを発動できる。半径一メートル圏内は、自分の完全勢力圏になる。こだまは勝利を確信し、自分の足元を見た。つまり、ハクアから目を逸らしたのだ。

ところが発動と同時に、飛びこんで来たハクアの両手がこだまの喉元に届いた。こだまは息が止まつた。手が地面から離れる。軍服の襟と右袖がすまじい腕力によつて引っ張られた。体が空へ浮き上がる。

「トリプルパワーショット！　そのいいいっ！！」

世界が回転する。こだまは恐怖で目をつぶつた。

ハクアは、発動しかけた重力場に対し、腕に全力を込めて、こだまの体を空まで担ぎ上げ、鮮やかに一本背負いへ持つていつた。引き剥がされ、マグネティック・エリアの発動は不完全に終わつた。一瞬おかしくなつた重力感覚はすぐ元に戻つた。

ドスンと大きな音がした。こだまは背中を地面に強く打つて、夜空を仰ぐ。叫びそうになつたが、呼気が詰まつて声が出なかつた。ハクアは軍服の襟と袖を握つたまま、息を切らしつつ、倒した相手をゆっくり見下ろした。

全員の動きが止まり、あたりに静寂が戻る。

タツヤは、腕力がなくて起き上がりがない状態だったが、ハクアの逆転劇を見て、すかさず気力が復活した。ハクアが前みたいに足の脚力を取ろうとしたところに、声をかけた。

「ハクア、その子からは腕力を持つて。そしたら、銃を撃てないよ」腕力を奪われたら腕が上がらない。つまりこの状態だ。銃は構えられないだろう。

「よし！ 帰るまで借りとくからなつ！」

ハクアは痛みにうめいているこだまの腕から力を抜いた。どんな相手だろうと、おでこに猫の肉球マークが出る。これを見ると、戦いが終わつたのだなと思う。

「ハクちゃん、朱鳥くん、大丈夫？」

希が、暗がりの中から心配そうな顔でやつてきた。こんな感じだとタツヤの代わりに希がこだまに突っ込むなんてのはまったく無茶だつたかもしれない。あれが失敗していたら、ハクアの追撃は距離を考えても返り討ちに合つていたのかな、と思うと、今回は幸運が重なつて何とか手にした勝利だつたとタツヤは感じた。

それをハクアはどう考えているか……分からぬ。

「うん、無事だよー！」

そして、ハクアはすぐにタツヤと希に腕力を戻した。希のおでこからも肉球マークが消える。ようやく体の力のバランスが正常になり、安堵の気持ちが湧いてきた。

ちゃんと二人にお礼を言つて、あたしの手で返すからな！

作戦を始める前にハクアが二人に言つた言葉はきちんと守られた。離れ離れで力だけ戻つてくるなんて絶対に嫌だと思っていたから、これまで普通だつたことが、何だかすごく嬉しかった。タツヤはリュックを持ち、気持ちを切り替える。

「仲間がもつと来るかもしない。早く逃げよう！」

希は真剣にうなづく。一方、ハクアはきょとんとした。

「えつ、弁当は？！」

驚いた。

「えつ？！ こんな場所で食べられるかよ！」

追跡隊の少女がそこに仰向けで倒れてるんだぞ。ハクアの感覚はおかしいのか？ とタツヤは耳を疑つた。希も少し顔を曇らせた。とにかく人がいる場所へ帰らなくては。

「ハクちゃん、バスが来ちゃう時間だから。急げ！..」

希の言う通りだし、タツヤは一刻も早く、この暗く恐ろしい広場から離れたかった。外灯の明るさも減り、円形ベンチの上には白いガラスの破片が落ちて鈍く光つていて、いつも楽しい天体観測の広場とはまるで違う。星空は同じはずなのに、まったく知らない場所に迷い込んだような感覚だつた。

タツヤと希は出口をめざす。だが、ハクアはなぜか出口と違う方向へ走つた。

「待ってくれ！ のぞみんの望遠鏡を探すから

二人は足を止めた。希は、ハクアの背中に声をかける。

「ハクちゃん、望遠鏡、絶対壊れちゃつてるからいいよ！ 帰ろうよ！..」

「違うんだ」

ハクアは振り向いた。

「あれ、のぞみんの名前のシールが貼つてあつたんだ。いたずらしたと思われる」

確かにそうだ。事情はともあれ、外灯を壊したのはこの二人だ。公園の管理しているところから希の家や学校あたりに問い合わせが来るかもしれない。

「つたく、何でこんなに暗いんだ……」

ハクアは自分で外灯を壊しておいて、そうぼやいていた。だけど、ハクアは視力が悪いはずだ。タツヤはすぐに駆けつけ、リュックか

ら携帯を取り出し、そのライトであたりを照らした。希もタツヤのあとに続いて、同じように携帯のライトで草を照らした。ライトを使うと、望遠鏡はすぐ見つかった。表面が白っぽくて探しやすかつたせいもある。見ると、名前のシールが貼ってあり、住所と学校名まで書いてあった。これはもし置いて帰つたら確実に電話が来ていた。

そして、一緒に戦つてくれた望遠鏡は、レンズに大きなヒビが走つていて、覗く部分も割れてベコリと曲がっていた。

「コペルニクス……」

希は悲しげに見つめ、溜め息をついた。いま呼んだのは、望遠鏡の愛称だろうか、商品名だろうか。その横で、ハクアは仏壇みたいに手を合わせる。

「よし、帰つたらお墓を作ろっか

「お墓?」

「うん、コンペイト・ウミックスの」

タツヤも覚え切れなかつたが、たぶんそんな名前じやなかつた。

三人は広場を出て、バス停に戻つた。広場に置いてきた追跡隊の少女は、去り際に体を起こしたが、腕の力が抜けているので、うまく起き上がれないだろう。あの暗い中で銃を探すと、きっと時間がかかると思う。携帯電話を使うのもかなり難しいと思う。脚力より腕力を、というのはあの少女から逃げるために正解だつた。

タツヤはバス停めざして早足で歩きながら思う。あの子はいまだんな気持ちだろうか。油断したわけではないと思うが、三人が合わせた力がきっとあの子の予想を上回つたのだ。一般人二人がいたつてここまで抵抗するなんて想像しなかつたと思う。タツヤだつて、ハクアの超能力を何度も見てているから、この脱出作戦がうまく行つたのだ。

ふと、自分が体当たりしたとき、一般人を撃つな、と思わず口から出たことを思い出す。たぶんあれで撃たなかつたのだから、追跡

隊はハクアの言う「一般人の前で超能力は使わない」というのは合っているのかもしれない、とも思う。

追跡隊は何人くらいいるのだろうか。そういうえば、途中で天童隊長というのと電話をしていた。隊長は離れた場所にいるみたいだった。

天童だと……？！

ハクアはその名前に反応していた。訓練学校時代の知り合いだつたのだろうか。先頭をすたすた歩くハクアの背中を見たが、この話題をするのは思い止まつた。バスに乗るまでは余計なことを考えさせないほうがいい、とタツヤは感じた。

帰りのバス停に着くと、大人が四人並んで待つていた。赤い軍服でなく、普通の服だ。一瞬考えて、タツヤはハクアを呼び止め、小声で聞く。

「なあ、追跡隊つてのは……変装とかするのか？」

すると、ハクアも言いたいことが分かつたようだ。腕組みをする。「変装はするかどうかわかんないけど、超能力を持つてれば、この距離ならあたしもわかるよ」

「それで？」

「うん、みんな普通の人だ」

普通の人という言葉の響きが、夏の夜なのに、なぜか急に背筋を冷たくする。前回までの天体観測なら、バス停に並ぶ人を疑うことなんてなかつた。いや、人が敵かもしれないなんて考えが生まれて初めて感じたものだ。アニメやドラマを見ていて、この人の正体は悪者っぽいな、とか思うこともあるが、その感覚とは全然違う。もしハクアがさつきの問いに「超能力者が混ざってる」と言えば、タツヤと希はどうすればいいのだろう。ハクアと一緒に逃げるのか。

だけど、自分たちは一般人だ。普通の人だ。力を抜き取つたり、重力を上げたり、そんな異常な能力を持つた相手に、普通に戦えるわけがない。ハクアが絶対に勝てる力を持つているわけじゃないことは、いま目の前で見てきた。ハクアは強い、ハクアは勝てる、と

いうことが通じないことがある。タツヤはすり傷だらけでじわっと血がにじんだ自分の右手を見つめた。公園入口の水道で泥は流したが、血はまだ止まっていない。

ハクアはあの性格じゃあ、もつといろんなやつを巻き込むと思つぞ。

「ごめんな。俺、サッカーの試合をテレビで見たいんだ。

アランの言葉がなぜかこのタイミングで脳裏に浮かんでくる。ハクアの秘密を知つて、ハクアの涙を見ても、深入りしない態度が少し薄情だと思っていたタツヤだが、手のひらの血を見て、気持ちが揺らいでいた。

希だつて危険だ。作戦の成り行きによつては、希が追跡隊の少女と戦い、返り討ちに合つてたかもしれない。追つ手の影もなく、落ち着いた雰囲気でバスを待つ二人をちらりと見た。ハクアが空腹を訴えて弁当を開けたがるのを、希が困つて止めている。追跡隊のことがなければ、本当に楽しそうな仲のいい友達だ。

だけど、希は戦う力なんかない。追跡隊の超能力を受けたのは、希だ。そのあと、口数もすごく減り、林の中でずつと震えていた。タツヤの後ろについてくるのが精一杯だった。

大切にしていた望遠鏡は、戦いの中で壊れてしまった。あれは、最初の天体観測で持つてきたとき、お父さんに買ってもらつたと嬉しそうに話していたものだ。

「ハクちゃん、望遠鏡、絶対壊れちゃつてるからいいよ！ 帰ろうよ！」

希は、それを拾いに行くのも拒絕した。

本当は……希の胸の内側も、タツヤと同じくらい揺れていんじやないだろうか。タツヤは楽しかった前回までの天体観測を思い出し、胸が痛くなつた。

異常に長く感じた五分がようやく経つて、帰りのバスが来た。タツヤは乗るときに、ハクアに小声で話しかけた。ハクアはバスの乗

客数名を見渡し、「大丈夫だ」と言つた。

タツヤはそれでも他の乗客と離れたいと思って、一番後ろの座席に行き、三人並んで座つた。希は、ハクアが弁当箱を開けないよう見張ると言つて真ん中になつた。タツヤは気になつて後ろの大きな窓から外の景色をじつと眺めていた。

ドアが閉まり、バスが出発した直後、あの赤い軍服の少女が、公園入口の手前まで走つて追つてきた姿がちらりと見えた。腕を両側に力なく垂らし、悔しげな顔をしている。

そして、その場にしゃがみこんだ。腕力三人分の背負い投げのダメージも大きかつたのだと思う。バスはあつという間に公園前から離れ、軍服の少女の姿も視界から消えた。ハクアと希は、前を見ていて知らなかつた。タツヤも何事もなかつたように座り直した。

ハクアの超能力は三十分で自動的に切れる。あの少女からは逃げ切れると思うが、問題はそこではない。いまは何とかなつた。だけど、ハクアが追跡隊に発見されたのは確かだ。このまま、ハクアは一人で家に帰つて大丈夫なのか？ と大きな不安がよぎる。

バス停は出発場所で下りて平氣なのか、ハクアを家まで送つたほうがいいのか、交番に行くとかそういうのはダメなのか、父親の廉太郎に打ち明けて相談したほうがいいのか、もしそれで父親に深入りするなと言われたらどうすればいいのか などと、タツヤがずっと押し黙つて難しい顔をしていたら、希も無言になり、やがてハクアはまた寝てしまった。

希は溜め息をついた。

「ハクちゃん、すぐ寝ちゃつたね……」
「うん……」

タツヤは次々と胸に噴き出す不安を隠しながら、うなずいた。

「朱鳥くん、本当にケガはないの？」

「ああ、それは大丈夫」

「嘘はダメだよ」

「うん」

希のほうを向いて、顔をちゃんと見る。タツヤは希の左側に座っていたが、ふと見れば、希の左側の髪を束ねていた星の髪飾りがな。黒いゴムだけで止めているようだつた。

「あれ?
髪飾りは?」

希は驚いた顔をして、寂しい目を見せた。

たぶん、広場に落としちゃった。小さいから、絶対に見つか

「二十九、余雖不以爲然，但其說亦可謂之有據也。」

希はゆづくつとつなづく。

「……朱鳥くんは、ほんとやれっこよね」

それは希にも返してあげたい言葉だつた。せつかく楽しみにしていた天体観測で、望遠鏡も壊れて、星の髪飾りもなくしてしまつた。それでも、希はタツヤにケガがないか心配している。ケガはないと言つたが、それ以上どう言えば安心してもらえるか分からぬ。

いるのに気がついた。

あ、た、大丈夫だよ、髪飾り、一緒に探そう。

30

「……違つの

二〇

「天体観測、もうできないよね……」

深く突き刺さる重い言葉だった。望遠鏡がどうとかではない。ハ

ケルが見つがうで、もうあんな場所に行けるわけがない。お互に言えないけれど、心中ではつきりわかつっていた思い。泣き声が漏れ

出
す

希はいつも明るくて、我慢強くて、みんなのことを考えていて、

泣いたことなんか見たことがない。でも、いまは違った。

壊れてしまったのは、大事な友達との思い出だ。ハクアに星座の話ををして、隕石を見た出会いの場所へ連れてきたのに。せっかく新しい思い出ができる夜だったのに どうしてこうなってしまったのか。

タツヤは唇をきつく噛んだ。もしかすると、あと何日、いや何時間ハクアと一緒にいられるかも分からない。バスに揺られながら、そこまでの大きな大きな不安を、タツヤは口が割けても言い出せなかつた。タツヤは何度も迷い、何度も違う言葉を飲み込んだ。

「天文新聞は 続けようよ」

そういう言葉がいまの希が聞きたいものだとは思わない。けれど、本気で心にあることを出せば、応援団と言つて三人で笑つた日からのこと我が全部むちやくちゃになりそうで恐かつた。希の泣き声はバスの中に響いて、前のほうの人もちらちら見ている。

「……なんで自由じゃないのかな……」

うめくように吐き出した希の小さな言葉は、ズキリと胸に刺さつた。

タツヤは希の顔をよく見る。

「僕は、ハクアを助けたい」

希はハツと顔を向けた。タブレットの話が頭をよぎる。

「僕は ハクアがここにいたい理由は、僕たちがいるからじゃないかな、と思う」

タツヤの言葉を聞きながら、希は心細げな目に涙の粒をたくさん溜めていた。

自由は一人だってたぶん自由だ。けれど、いまここには自分たちの存在がある。ハクアのことを真剣に悩み、力がなくても一緒に戦い、ハクアの行きたい方向へ後押しをする。もちろん、そんな考えはおおげさかもしれない。重すぎるかもしれない。

「なあ、僕たちが、ハクアにこのままいて欲しい理由は何なのかな」

「……理由……？」

「今日みたいに、星を見せたいから、とかもあるけど」

「うん」

「でも、理由はもつと大きいと思うんだ。友達をなくしたくない、つてこんなに真剣に考えたことなかつた。ハクアだから、なんだ。あいつが勇気を出すから、僕たちは力を合わせることを一生懸命考えたんだよ」

希の泣き顔は少しづつ元の様子に戻っていた。バスが曲がり角でごとんと揺れる。希の体がそのままタツヤに胸に飛びこんできそうだったが、タツヤは手で肩を支えた。

「……朱鳥くんは、本当にハクちゃんのことが大切なんだね」

「うん」

希の言葉は、まさにタツヤの気持ちを言い当てていた。「私もそうだよ」と希は少し明るい表情でつぶやき、リュックから出したハンカチで涙をふいた。

「ううん……」

ハクアは寝返りを打った。希の背中に寄り添う。それがハクアの性格だと思うが、自分が一番大変な状況なのに、どうして赤ちゃんみたいなかわいい笑顔で寝ていられるのか、タツヤは少し不思議だつた。

停留所が近くなってきたところで、タツヤはハクアを起こし、この後のこと二人で話し合つた。ハクアは一人暮らし。バスを下りた後、停留所までの帰り道で、追跡隊の別の超能力者に狙われるかもしれない。もしかすると、家に直接やつてくるかもしれない。タツヤがその危険性を話すと、ハクアはひどく驚いたような顔をした。まったくそこまで考えていなかつたのだ。

希はだいぶ落ち着いた顔をして、ひとつ提案をした。

「ハクちゃん、うちに泊まりなよ」

タツヤもいい考えだと思った。追跡隊は一般人の前では超能力を見せないことにしているはずだ。そうすると、希のうちは両親と祖

父母がいて家族が多い。

「……いいのか？」

「うちなら、ハクちゃんが着られる服もあるよ」

「いや、そうじゃなく、いきなり行くわけだし」

「お父さんもお母さんもいって言つてくれるから大丈夫。お弁当は、私の部屋で食べようね」

ハクアは真顔になり、いきなり一筋の涙をこぼした。希もタツヤも驚き、目を丸くした。分かっていたことだけど、胸に大きな不安を貯めていたのは三人とも同じだったのだ。ハクアはすぐ笑顔になつた。

涙は、あのときの流星のように一筋大きく光つただけだった。

「のぞみん、ありがとう」

そして、これからることは明日学校で話し合つことにして、今日は希の家に泊まることで決まった。

バスの停留所に着くと、タツヤが一步先に下りて周囲の様子を観察した。巻き髪の少女が追いつくことは当然無理だと思うが、追跡隊の仲間がいるような気配もなかつた。停留所のあたりは店も多く、人の通りが多いので、郊外の公園のところよりもずっと安全だつた。ハクアと希もそろつてバスから下りた。

ハクアはまっすぐ希の家に向かうことになつた。タツヤも遠回りになるが、一緒に同行した。最初は何となく警戒して慎重に歩き、曲がり角や暗い道はしっかりとあたりを見渡しながら進んだが、拍子抜けするくらい何事もなかつた。もしかすると、三人が追跡隊を撃退したことで、追跡隊も一旦退いてくれたのではないか。甘い考えかもしれないが、それでも思わないで、湧き上がる不安を抑えることは難しかつた。

無事に希の家に着くと、タツヤも一緒に上がつてお弁当を食べようと一人から誘われたが、家に帰る時間を廉太郎に約束していたので、タツヤは一人帰ることにした。

タツヤの家は近い。自分の家に着くと、廉太郎が居間でテレビをつけサッカーを見ていた。妹の由果は風呂だった。『ごく当たり前の日常だが、あの激闘から何とか逃げ出してきたことを思つと、深い溜め息がこぼれ出た。

「……転んだのか？」

廉太郎は目ざとく、草で汚れた服と疲れた顔を見て、息子に声をかけた。「大丈夫」

最近これが口ぐせになつてゐると思う。お前はいつも大丈夫つて言つけどな、というアランの言葉は、おおげさでも何でもなく本当に自分の性格を見抜いていると思う。だが、人に言われるほど、気持ちが重くなる。

タツヤはすぐ部屋に入り、まず希に電話をした。とりあえず大丈夫だった。電話口で希はいつも通りの明るい声だった。

「びっくりした」

「え、どうして？」

「ううん。……朱鳥くん、お弁当食べた？」

「いや、まだ」

ふふつ、と笑い声がした。

「食べていいよ」

「うん」

「ハクちゃんと代わる？」

「いや、いいよ。そつちが大丈夫なら、いいんだ」

そして、希との電話を切り、タツヤは持ち帰った弁当を部屋で食べ、ベッドに寄りかかった。窓の外の少しくすんだ夜空を見る。それは水面に映つたようにじわじわと揺れていた。

天体観測は、終わつた。そして、帰りのバスで希に伝えた自分の決意を思い出した。

僕は、ハクアを助けたい。

この言葉は、軽くない。それは分かつてゐた。情けない目元の痕跡をこする。

タツヤは悩む。追跡隊は本当に一般人がいるところでは襲つてこないのか。それなら、どうして僕たちは襲われたのか。銃のこととか、ハクアも知らないことがあった。

ハクアは当然タツヤよりも超能力や訓練学校や追跡隊のことを知つてゐるけれど、途中で脱走したのだ。知らないこともあるだろう。不安だが、とにかくハクアを信じるしかない。それと、ハクア自身も悩みの種だ。ハクアはいまの自由を何とか守りたい気持ちでいっぱいだ。きっと、先のことを考えていなくて、いつまでも希の家に泊まれるわけもない。

明日の夜から、どうするのか。

それから、ハクアが視力を氣にするのも氣がかりだつた。もしあのとき、ハクアのそばにいなかつたら、希はどうなつていていたのか。戦いを思い出すと、次々にいろんなことが頭を搔き乱す。服に残る草の臭いがそれを生々しく心に刻みつけてくる。

ざわつく渦の中心　　それは、敵に、体当たりをした感触。生身の人間。ハクアは少女を力いっぱいぶん投げた。地面に叩きつける音。あのときはそれで助かつたと思つたが、弱氣の虫が騒ぎだし、心は再び曇つていく。決めたはずなのに。誓つたはずなのに。

言えたのは、あのときハクアが眠つていたからかもしれない。タツヤは、正面からまだ伝えていないのだ。

恐くなつて目を閉じると、一階の廉太郎から風呂が空いたと大きな声が届き、タツヤは空っぽの弁当箱を持って、部屋を出た。

いつも通りに目が覚めたが、頭が重い。タツヤは朝ご飯の支度をする前に、気分を入れ替えようと、先に歯を磨いた。

妹の由果も起きてきた。最近、起こしに行かなくても自分で起きるようになったのだ。何となくうれしい気持ちになった。

「お兄ちゃん……目が真っ赤だよ」

歯ブラシをくわえて振り向いたタツヤの顔を見て、由果はおびえるような顔をした。

「おはようは？」

「あ、うん、おはよう」

ぐつすり眠れるわけがない。夜中に何度も目が覚めてしまったのだ。枕元の時計が三時とか五時とかを指していたのをつっすら思い出す。

昨日の天体観測のピクニックで、追跡隊の少女にいきなり襲われて、何とか逃げ出すことはできだが、結局何も解決なんかしてない。追跡隊は、この美星町にハクアが住んでいることは絶対にわかっているだろうし、ハクア一人では手が出ないような超能力や武器を持つている。

あのとき、銃を取つておけば良かつたな……と後悔もした。ただ、とにかく逃げることで必死だつたのだ。暗くて銃がどこに落ちたかわからなかつたせいもある。

そして、ハクア一人では危ないから、昨日の夜は、希の家にハクアも泊まることになった。起きてすぐ希の携帯に『大丈夫?』とメールを送つたが、返信がなかつた。すぐ電話もかけたが出なかつた。なので、まだ安全が確かめられていない。いいほうに考えれば、寝ているかもしね。けれど、悪いほうに考えれば、

「お兄ちゃん、由果に……怒つてる?」

パジャマの背にしがみつくなつて由果はこわいわと聞いてきた。

「えっ、な、何で？」

「……あいさつしなかつたから?」

「ん? いましただろ?」

すると由果は首を横に振った。

「だつて、なんか恐いんだもん」

「ああ、ごめんな。ちょっと まあ、通知表が心配で」

適当に『しまかした。一応、明日は一学期が終わる日だ。由果はきよとんとする。

「お兄ちゃん、あたま悪いの?」

「えつ? ! 悪くはないよ!」

うつかり語氣を荒げてしまい、言つてから後悔した。由果はまた泣きそうな顔になり、「『ごめん』と言つて廊下に逃げた。ダメだ。ハクアと希の無事な姿を見るまでは、心が無意味にとがつてしまつ。ひとまず着替えるために部屋へ戻ると、机の上で携帯のランプが光つていた。新着メールが一件届いている。

希からだつた。急いで中身を確認する。

『おはよー！ ハクちゃん、起きませーん！』

枕に抱きついて寝ているハクアの寝顔の写真が添付されていた。すべてを失うかもしない最悪の危機だと思っているのは自分だけなのだろうか。全身の力がへなへなと抜けた。いま動くのは指先だけ。

『無事でよかつた』と返す。すると、

『ハクちゃんが生まれてはじめて撮つた写メだよー』

今度は、パジャマ姿の希が、カメラ目線でふんわりピースした笑顔の写真が届いた。かわいいと思ったが、何だか切ない溜め息が出てた。

当たり前だけど、ハクアと希は一人そろつて登校してきた。ハクアの服がいつもの感じとまるで違う。教室に着くなり、いきなり二

人でタツヤのそばに来た。希はハクアをくるりと回して見せる。

ハクアの服は希から借りたものみたいで、爽やかな水色の可愛らしいワンピースだった。胸元にきれいな白いレースの刺繡が入っている。ハクアは少し女の子らしい雰囲気で、にこりと微笑む。

「たつつん、おはよう」

「……おはよう。無事でよかつた」

一方、希はちょっと地味な半袖ブラウスとスカートだった。

「朱鳥くん、今朝メールありがとね」

「ごめん、心配しすぎだったかな」

「ううん、ありがとう。朱鳥くんからメールが来てうれしかったよ」
希の顔を見ると、朝来たピースの写メを思い出して少し恥ずかしい気持ちになつた。それにしても、希は帰りのバスでみんなに泣いたのに、朝にはもう笑顔に戻るなんて、ハクアが泊まりに来たことが楽しくて仕方なかつたのかな、と思つ。

「ねえ、ハクちゃんどう？ 似合つてると思わない？」

すると、ハクアは少し照れ臭そうな表情を見せた。

「すまんな。確かにたつつの家で見せるつて約束だつたけど、まあ、フライングだ。こつちで勝手にやつた。後悔はしないぞ」

ハクアは堂々と胸を張る。

「ああ、うん かわいい服だと思つよ」

「服はのぞみんのだ！」

ハクアは声を荒げた。希の家に泊まつたんだから、それは言われなくてもわかる。

「寺本さん、おはよう。へー、そんな服も持つてたんだな」

丘野アランがいつの間にかタツヤの後ろにいて、ハクアの格好をじっくり見ていた。

「アラン！ どうだ？」

「いいんじやない？ これからそつちにしたら？」

アランはすこく軽い口調で言つた。ハーフだから自然にそんなふうに言えるのだろうか。

「ううん、服はのぞみんのだっ！」

チャイムが鳴り、そろそろ晴海先生が来る時間になつて、三人とも自分の席に戻つた。とにかく、一般人には手を出さないと思われる追跡隊の再攻撃もなく、希もハクアもいつも通りの元気を取り戻していた。

タツヤは昨日の恐ろしい出来事や、一人の泣き顔を一瞬忘れてしまいそうになつたことを疑つた。こんなに 平和で、本当に大丈夫なのだろうか。

授業が終わつて下校時刻になり、タツヤは少し緊張感を強めた。ランセルを持ち、すくつと立ち上がる。

ちょうどハクアの席のところに希が立つていて、一人の腕をつかんだ。ハクアが目を丸くする。水色のワンピースのスカートがふわふと揺れた。

「どうした？」

「夏休みの作戦会議だ。アランも呼ぼう」

「宿題の話？」

希はとぼけたことを言つ。そんなことじやない。明日から長い夏休みに入るのだから、ハクアの身の安全をどうやって守るのか、それを考えないといけないと思つたのだ。

「たつりん、アランが帰るぞ？」

ハクアに言われて振り返ると、アランがクラスの友達と廊下に出ようとしていた。タツヤは慌てて捕まえに行く。アランはましいものを見たような顔でタツヤに向き合つた。

「な、なんだ、タツヤ」

「ちょっと残つてほしいんだ」

「つたく……また天文係か？ 入らないって言つたはずだけど」

「違う」

「でも、お前が俺に言つてくるのつて、遊ぼうとかじやなくて

ハクアのことだろ？」

その通りだつた。一瞬タツヤは黙りこむ。

「今日はハクアに関係ない用事か？」

「……いや、ハクアのことだ」

「ほら、やつぱりなあ」

アランは本当に面倒くさそうな口調で言つた。教室のドアのところで、クラスの友達たちが不思議そうな顔をして待つてゐる。

「とにかく！ 賴む、ちょっと来てほしいんだ」

大変なんだ と言いかけて口をつぐんだ。そう言つてしまふと、確実にアランは頬みを振り切つて帰るような気がしたのだ。アランは明らかにあまり巻き込むな、という顔をしている。だが、ハクアの超能力を知つているタツヤと希が一緒に追跡隊に襲われたということは、アランだつて同じ目に遭うかもしれない。考えすぎならそれでいいが、とにかく昨日の出来事は伝えないと困るのだ。

アランは周囲を気にしながら、声を落として聞いてきた。

「また、何かの力を 貸せつて貰つのか？」

タツヤは首を横に振つた。

「違う。そういうことじやない。話しておきたいことがあるんだ」

ふん、とアランは腕組みをする。顔つきから険しさが消えた。

「……聞いたら帰るぞ。俺、サッカーしたいからな。いいなつ

「うん。ありがとう」

タツヤは三人を連れて、いそいそと廊下を進み、誰もいない空き教室に入った。この空き教室は、たまに委員会活動などで使われているが、今日は何もなかつた。長机がいくつも並べてある。締め切つた教室なので、暑い空気がこもつていた。

ドアを閉める。

「星はどうだつた？ よく見えた？」

アランが軽い感じで、ハクアと希に話しかける。ハクアは「まあな」と一言答えたが、希は暗くうつむいてしまつた。アランは戸惑

いの色を浮かべる。

「あれ？ まことに聞いた？」

「僕から話すよ」

「は？ 星のこと？」

「ううん、ハクアのことだ」

アランは両手を広げ、意味がわからないといつジョスチャードをした。確かにそうだと思う。四人は何となくイスに座った。

タツヤはひとつ深呼吸をしてから、アランに対し、昨日あつたことを説明した。ハクア以外の超能力者が追跡隊としてこの町に現れしたこと、ハクアを狙っていること、ハクアでも苦戦したこと アランは最初驚きを声にしたが、その後はずつと恐い表情でじっと話を聞いていた。希の家に泊まつたことまでの話が終わり、一息ついた。

アランはなぜか落ち着いた目をしていた。

「……それで？」

「このままだとハクアが連れ戻されちゃうんだ。何とかしないと」

タツヤは不安を噛みつぶしながら言つ。

「それって 仕方ないよな」

予想もしない冷たい言い方だった。その瞬間、普段はおとなしいタツヤの頭にも、噴き出すような熱い血が昇つた。思わず大きな声を張り上げた。

「仕方ないって何だよ！――

ハクアと希が驚くのがわかつた。エアコンのない教室にこもつた熱気が、一段と息苦しくなつた氣がする。一瞬、二人とも何か言うとする気配があつたが、先にアランが答えた。

「お前、転校するやつを止められるのか？」

「なに言つてんだ！ 全然そんないと違うだろ！――

「変わんねえよ。お前らがどんだけ嫌がつても、連れて行かれるのは仕方ない」

「丘野くん……ハクちゃん、大変なんだよ」

希が目を赤くしながらつぶやいた。アランは「わかるよ」と言い、ハクアの顔を見た。

だが、そのとき、ハクアは押し黙つたままだつた。どうして何も言わないのか。今日は女の子らしい服を着ているせいか、あまり威勢がないように見えた。本達は、友達から見捨てられたような言葉を目の前で向けられたはずなのに。

どうして何も言わないのか。

まさか、ハクア自身もあきらめてるんじゃないだろうか。一番恐い想像がタツヤの頭を捕える。それを振り切るように、必死で腹から声を出した。

「僕たちはハクアを助けたいんだよ！」

そして 不気味な暑い静けさが教室の四人を包む。

「わかるよ」

同じ言葉を繰り返すアラン。タツヤは、アランのことを単なる同級生でなく、仲間だと思っていた。ハクアの超能力を知り、ハクアの応援団に入つた仲間だと思っていた。いつもは関わりを面倒くさがるけれど、それに天文係は趣味じゃなさそうで断られたけれど、いざというとき正直に想いを打ち明ければきっと協力してくれる、そう思つていた。

けれど、その答えは恐いほどに冷たかつた。

「俺だつて寺野さんが何か悩んでるんなら聞くよ」

「ハクアでいい」

この教室ではじめてハクアの口から出た言葉。思わぬタイミングだつたので、タツヤはなぜか背筋がゾクッとした。ハクアの撃つた小さな刺は、怒りからか、悲しみからか、それもよくつかめない。

「ああ、ごめん。いや、俺だつてハクアは大変だと思つ。だけどさ」「うん」

タツヤは神妙に頷いた。

「追跡隊に対抗できるのか？ 敵は超能力者なんだろ？ ハクアで

すら手も出せなかつたレベルだろ？」

「いや、だからみんなで協力したいんだ」

「お前、その考えは甘いんだよ！ 全員やられるぞ…」

アランは荒っぽい声を吐き出した。その霸氣は、タツヤの胸を貫く。そう、確かにその通りだ。そんなのは昨日の夜から十分感じている。何日かハクアをかばつたとしても、何も解決できない悔しさが苦しいくらいに込みあげてくる。

「でも、ハクちゃんが連れてかれちゃつたら……」

希は悲痛な声を漏らした。帰りのバスのときよりも激しく泣き出す一歩手前だつた。

「あのさ、『ごめん』『めん』

突然、ハクアは言つた。他の三人はまた息を飲む。その声に絶望感はなかつた。

「たつつん、のぞみん、ありがとう。アラン、お前は正しい

「ハクア……」

タツヤはそれ以上続けなかつた。ハクアは凜々しい顔になる。

「一応な、昨日だつて対抗はできたんだ。勝つたんだ。向こうが銃を持つてかなりパニッシュになつたけど、あの銃が何なのかわかれば、絶対に一人でも対抗できる」

ハクアは自信に満ちた眼差しで言い切つた。

「ハクちゃん……」

「のぞみん、大丈夫だから。あたしはみんながいる限り、この町にずっといるから」

そして、タツヤのほうを向く。

「たつつん、あたしが一番不安なことを、誰より早く気づいてくれて、みんなを強引に集めてくれて、ほんとにありがとう。これだけ励まされたら、次はあたしがどうするか、ちゃんと考える番だ」

ハクアはぐいっと身を乗り出した。

「ほんとごめんな。こんなときが来るとわかつてて、ずっと考えるのから逃げてた。その後から、のぞみんの泣き顔を見たくなくて、

とつあえず明るくしてた。でも、それがたつりんを傷つけたんだな

「うん」

少し目頭が熱くなつた。やつぱり、あのときハクアは起きていたのかもしない。

「たぶん、たつりんが一番聞きたいのは『あきらめてない』ってことだよな?」

まっすぐな問い。

「うん、そうだよ」

まっすぐな答え。

「だつたら、あたしは『あきらめてない』。それを約束するよ」

最後にアランのほうを向いた。

「アラン、心の重荷を勝手に分けてしまってすまない」

「……そんなのはいいんだよ。俺だつて応援団なんだろ。ハクアがいきなり消えるほつがショックがでかい」

「アラン」

「力が必要なときは貸すよ。だけど、全員がやられるのは絶対にダメだ。お前には家族がいないけど、俺たちはいる。それを甘く考えないでくれ」

アランはこれ以上ないくらいはつきりと考えを言った。タツヤは隣りのイスに座る同級生をじっと見た。ハクアに家族がいないのはハクアのせいではない。アランもそれは知っている。だが、この危機の主人公はハクアだ。これからることは、その決意ひとつだ。ただ一心にハクアを助けたいと願つ自分よりも、ずっと深くまで考えていた。

ハクアは溜め息をつく。

「あたしの考え方だつて甘い。実は知らないこともあるんだ」「わかるよ」

三度田の言葉。だが、少し優しい伝え方だつた。

「だけど、本当に自分のことを守れるのか?」

「自信はあるが、不安もあるのが正直なところだ」

それがハクアの包み隠さない本心だと、タツヤも肌で感じる。アランはその告白に対してはそれ以上責めなかつた。希もじつと息を飲み、ハクアのことを見つめている。

タツヤは考える。追跡隊はいつぞこで襲つて来るかわからない。そこを悩んでも仕方がない。問題はあの銃だと思ひ。あれがハクアの苦戦した大きな理由だつた。

「銃のこと……何とかならないかな」

「そうだな。あれがつらかつた」

「さつき銃のことがわかれれば、つて言つてたけど、わかるの？」

「あてはある。もしかすると養父なら」と思つてゐる

すると、アランが勢い込んで口を挟んだ。

「じゃあ、ここで話してないで、早く行つたらいいじゃないか」

直接は会えないんだ。弁護士に会いに行く

前にハクアから、生活費をすべて出してくれている養父がいて、お金やいろいろな手続きは弁護士に任せていると聞いたことがある。その弁護士のことだと思つ。

希も入つた。

「ハクちゃん、弁護士さんは近くに住んでるの？」

「そんなに遠くない。今日、会いに行こうかと思つてた」

ハクアは行動力はあるけれど、実は大事なことを言いそうちつとも言わない性格だ。向き合つて聞かないとわからないことが多い。一緒にいてそれを強く感じる。だが、それでもタツヤは、ハクアの面倒を見てくれる大人がいて何だかほつとした。どんなにハクア応援団が頑張つても子供の力では限界がある。

ただ、弁護士はハクアの超能力のことを知つてゐるのか気になつた。もし知らなかつたら、ハクアはこの状況をどう説明するんだろうか。

「ハクア、一人で大丈夫か？」

ところが、アランが横から口を出す。

「お前、余計なやさしさを見せるな。一緒に行つてどうなるんだよ

タツヤはむつとす。

「ハクアのことが心配なんだ」

「それは俺も心配だけど、誰にでもべらべら話せる内容じゃないだろ。友達がついてきたら、その人が困るだろ。考えろよ」

正しい。アランは悔しいくらい正しい。ちやんと考えている。けれど、その冷たい言い方は何とかならないかなと思つ。

「よしつ！」

ハクアは掛け声を上げた。

「アランの言う通りだ。自分で弁護士にすぐ連絡するよ。たつん、あとで力を貸してくれ」

「えつ？　どの力を？」

戸惑つた。

「ごめん、携帯の」とだよ

ハクアは舌を出して笑つた。からかわれたのだ、と気づく。ハクアはもうまわりをこまかす形だけの笑顔でなく、だいぶすつきりした本来の笑顔に戻つていた。

四人で廊下に出る。階段に向かって歩いている途中、自分たちの教室のドアが開いた。出てきたのは十和田霧枝だった。ランドセルを背負っているので帰るところだろう。

「あんたたち、こんな時間に何してんの？」

「あ、えっと」

目が合ったタツヤは少し慌てた。

「天文係だよ」

希が横からあつさり適当なことを言つ。この一人は幼稚園からの友達だ。

「霧枝ちゃんも遅いね」

「うん、ちょっとしやべつてた」

教室の中ではまだ何人かクラスの女の子がおしゃべりをしていた。霧枝はドアを閉めた後、顔ぶれを見て意外そうな顔をした。

「あれっ？ アランがいる。どうしたの？ 入ったの？ ああいうの好きだっけ？」

「 知るか」

「あれ？ それとも、星じゃなくてどっちかが好きなの？」

霧枝はアランの顔を覗き込んでニヤニヤとした。

「うるせえ、誘われたけど断つたとこだ。いいからお前は黙つて帰れよ」

手で追い払うよつな仕草をして、冷たく言い返す。

「ツッキー、アランを誘うなんてセンスないよ。こいつ頭も口も悪いし、字も絵もヘタクソだから。 てか、黙つて帰れってなんなの？ あんた何様っ？！」

背の高いアランと背の低い霧枝が向かい合つ。どっちが先に囁みついても不思議でない雰囲気だった。

「あー、もう、ちつこいのがキャーキャーうるせえな！」

「ちょっと、ちっこいの言つな！ ほんと性格悪いなあ！」
「お前に言われたくないねえよ！ これ以上言つと泣かすぞ！」

いきなり言い争いをはじめる一人。お互いの悪口を次から次に並べていく。みんな下校して、廊下には五人以外の姿はない。お腹も少し減ってきた。

タツヤは振り返り、ハクアと希に「帰ろう」と言った。ハクアは面白そうな感じで大小二人の口ゲンカを眺めていたが、唇をとがらせてうんうんと頷いた。

「アラン、『ごめん、俺たち帰るよ』

「いや、待て、俺も帰るよ！」

アランは食いつくように言つた。早くこの場から離れたいみたいだ。

「霧枝ちゃんも一緒に帰る？」

どうしていまの一人の口ゲンカを見て、希はあつさりそんな誘いを言えるのだろうか。

「うん、あたしも帰る」

霧枝もあつさりついてくる。よくわからない。タツヤはアランを気にした。

「アラン、どうする？」

「帰るよ。言いたいことは言い切つた」

それもよくわからない。とりあえずアランと霧枝は両端になり、五人で廊下を歩く。すると、霧枝が突然大きな声を上げた。

「あつ、テリー！ 晴海先生が探してたよ。職員室に行つたほうがいいかも」

ハクアは首をかしげた。

「ん、何で？」

「わかんない。何か聞きたいことがあるんだって」

「あたし？」

「うん」

そのまま五人で職員室に行くことになった。さすがにアランが帰りたがったが、希が一緒に帰ろうと引き止めたので、渋々ついてきた。タツヤが言つても帰つただろうが、希の言葉はわりと素直に聞くような気がする。

「ねえねえ、天体観測つてどんなことするの？」

と霧枝は無邪気に聞いてくるが、希はその話題になると落ちこむので、タツヤが代わりに説明した。郊外の公園にバスで行くこと、星空をじっくり見渡せる広場のこと、そこで流星を見たこと。もちろん超能力を知らない霧枝に対し、追跡隊のことは一切話さなかつた。それと、いつも二人並んでお弁当を食べたことも言わなかつた。絶対に冷やかされると思ったのだ。アランは本当に興味がなさげに横を向いているが、霧枝は流星の話にすじく目を輝かせた。

「流星なんて見たんだ、すごいね！ あたしも見たい！」

天体観測がたぶんもう出来ないことは、希の前でタツヤの口から言えなかつた。正直、希の沈んだ顔を見ると、この話題も早く終わらせたかった。けれど、霧枝がしつこく聞いてくる。どうも星ではなく、タツヤと希が一人で出かけたことに興味があるみたいだ。

一方、ハクアは別のことを考えているようで、話に混ざらなかつた。晴海先生に呼ばれたことを気になるのか。それとも、弁護士や養父のことだろうか。

話好きな霧枝にタツヤが困つていると、アランが割つて入つた。「タツヤ、よせ、こいつが関わるとろくなことがない。全部仕切らうとするぞ！」

「はあ？ そんなわけないでしょ？ 何言つてんの？」

「ほり、口答えするところだぜ」

霧枝はアランを睨んだ。

「……あんた、先に帰つてもいいよ」

アランは苦笑いを浮かべて返す。

「あのなあ、俺はお前のお友達に引き止められたんだぞ」

希が霧枝の目を見る。

「霧枝ちゃん、機嫌直して」

「だつて、あたしもわざと帰れつて言われたもん！」

「仕返しはダメだよ。どっちか心の大きいほうが飲みこむの」

希は上手な止め方をするな、とタツヤは横で聞いていた。そんなふうに言つたら、霧枝の性格だと、もう言い争いを続けられない。希がアランを引き止めたのも、これが言いたかつたからなのかな、とタツヤは勝手に想像した。

職員室の前に着く。五人は足を止めた。ハクアは落ち着いた顔をしている。

「みんな、先に帰るか？」

「いや、ここで待つてるよ」

タツヤが言つと、他の三人も頷いた。タツヤの内心は、友達だからという理由だけではない。追跡隊のことを考えると、昼間とは言つてもハクアを一人で下校させるのは不安だった。タツヤがいたところで、たいした護衛になるとは思えないが、

ハクアがいきなり消えるほうがショックがでかい。

さつきのアランの言葉が耳に残つていて。いつの間にかハクアがいなくなる、それが一番恐かった。

ハクアが職員室に入つて数分が過ぎた。すぐ終わると思っていたが、なかなか出てこない。

「なんか時間かかりそうだね。テリー、悪いことでもしたのかなあ。先生のお説教なら長いよね」

霧枝がつぶやく。タツヤもそんな予感がした。

希は困った顔をしながら、廊下の時計を見た。タツヤのそばに来て耳打ちしてくる。何となく霧枝とアランの視線を感じた。

「おけいこ、そろそろ行かないとお母さんにしかられるんだ……。ハクちゃんが出てきたら、今夜も泊めていいって言つてくれる?」「わかつた、ハクアを月本さんちに送るよ」

「うちの晩ご飯は大丈夫?」

「少し遅れても平気だよ」

希は安心した顔になり、帰る挨拶をした。

「あっ、あたしも一緒に帰る」

霧枝もついていく。もともと仲良しだからそうなるなと思い、二人に手を振つて別れた。

職員室の前にはアランと一人きりになつた。他のクラスの先生が出てたり入つたりするので、自然とドアから少し距離を置いた。

「お前、ハクアのためにどこまで頑張る気だ?」

アランはタツヤにしか聞こえない小さな声で話しかけてくる。

「……どういう意味だよ」

「本音を言うからな」

「うん」

「相手はハクアみたいに異常な力を持つてるんだ。しかも脱走者を追うつてことは、超能力のことを隠そうとしてるんだろ? もし捕まつたらお前も何をされるかわからない。ハクアがお前を守れるかもわからない。自分が心配にならないのか?」

タツヤは、ハクアの友達として精一杯の覚悟を決めたつもりだったが、あらためて言われると、その決心がまた強く揺さぶられる。父親や妹の顔も浮かんでくる。さつき、空き教室でアランがハクアに向けた言葉は、タツヤの胸にも突き刺さつていたのだ。

「……全部予想じゃないか」

「予想が当たつたら終わりだぜ。俺たちは普通の人間だ。ハクアに力を貸したら、その分、弱くなるんだ。逃げのびる自信があるか? ずっとだぞ? ずっと戦うんだぞ?」

少し怒りが込み上げてくる。タツヤは肩を震わせ、小さな拳を握り締めた。

「だからって、見放すことはできないだろ」

ハクアのことを何も知らないならそれもできたと思う。けれど、

超能力のことを知り、訓練学校や体のことを知り、連れ戻された後のことを見聞き、追跡隊の強さを体感した以上、ここで逃げ出すことなんかできない。何とかしてハクアを守る方法を探し、協力するつもりだった。だが、アランの考えは変わらない。

「悪い、俺はお前ほど身を投げ出せないよ。これはむちやんと書いておくからな」

「そんな……アラン、お前……本気か?」

「本音を言つと言つただろ。俺だつてハクアが嫌いなわけじゃない。いい友達だと思つ。だけど、俺も親と弟がいるんだ」

わかつてゐる。アランの表情は真剣そのものだ。

「……お前、さつき、必要なときは力を貸すつてあいつに言つたじやないか!」

タツヤは最後の気力を振りしぼつて抵抗した。それでも答えは想像できている。

アランはやはり首を横に振つた。

「いいや、力を貸すのと、あいつの盾になるのは別だ。なあ、違うか? 僕は間違つたことを言つてるか?」

「でも!」

「ハクアに言ひ直せつて言つなら、それでもいい」

だつたら、なぜここで僕に言つんだ、とタツヤは瞬間的に怒りを通り越してつらい気持ちになつた。アランの言葉は、何から何まで全部自分の胸のうちにあるものと同じだつたのだ。それを素直に貫くアランと、心に刃を立てて必死で捻じ曲げたタツヤ。つまり、この差だつた。

「霧枝を見ただろ。あれだつて友達だ。あれと同じじや、ダメなのか?」

「わかるよ」

さつき言われた言葉をそつくり突き返す。

「危ないことはしたくない。これからも学校では仲良くするよ。だけど、戦う相手のことをよく考える。俺は、お前が心配なんだ」

「わかるよ！」

思わず大声を上げてしまった。廊下の先で振り返った先生や生徒がいた。アランは熱く深い溜め息をつく。

「タツヤ、もし俺と絶交だつたらそれでも仕方ない。無茶はするな。言いたいことがあつたら言つてこい」

最後にそう告げて、アランは帰つた。

何様だ！ 何様なんだ！ タツヤは一人になつた廊下で、ひたすら自分の心の弱さを憎んだ。ハクアの宿命に巻き込まれそうな自分のこと、を本気で心配するアランの考え方の正しさを、タツヤはよく理解している。だからこそ、いま、これだけ心が痛いのだ。

アランが帰つた数分後、ハクアが出てきた。ここには、タツヤしかしれない。

ハクアは最初やつと帰れるという安堵の表情をしていたが、タツヤ一人がぽつんと立つているのを見て、すつと沈んだ顔色になつた。「ごめん、月本さんは習い事に間に合わないからつて帰つたよ。それより、何だつたの？」

それで合つてゐるのに、なぜかごまかすように早口で言つた。

「あはは。いやー、昨日、あたし掃除当番だつたんだ。帰つちゃつたから、それを先生に怒られた」

背負う宿命の大きさに対し、本当に小さな叱られ事だつた。ハクアはまた舌を出して明るく笑つた。きっと照れくさいのだ。それでも、実は当番だつたのをタツヤと希に黙つていたほど、天体観測を楽しみにしていたのか。

「それは……晴海先生、そういうの厳しいから

「たつぶんだけか？」

話しながらハクアが歩いてきた。

「ごめん、月本さんは習い事で帰つたけど、今夜も泊まつていいつて言つてたから大丈夫。十和田さんは一緒に帰つたよ。アランは

たまたま通つた友達がサッカーを誘つりやつてね。『めん、て言つてた』

胸が苦しい。希や霧枝は『』として、自分の口からアランの本音は絶対に言えない。

「そつか

「……うん

「まあ、のぞみんの家にあまり泊まつたら悪いと思つてたけど、事情が事情だしな。今夜も甘えよつかなあ。ほんと、風呂が超でかいんだぜ！」

ハクアはまぶしきほどに明るかつた。

「楽しそうだな。ほり、一緒に帰りつ

二人並んで歩き出す。階段をもう一階下りると、すぐ昇降口だ。ハクアはしばらく希の家の大きさや料理の美味しさを感動的に語つていたが、靴を取り出したところで、ふと声の感じを変えた。

「……たつづん、これから時間あるか？」

「ん？」

「晩ご飯の用意とかあるか？」

「まあ、何とかなるけど……何で？」

お腹が空いたからバーガーアウルスに寄りたいと言つのかと思つた。でも、何か食べたそうな物欲しげな感じではなく、もつと思いつめた用をしていた。

「あ、携帯電話か？」

学校を出ないと電話はできない。校則で禁止されてるのだ。

「ああ。うん、早く電話がしたい。貸してくれるか？」

「いいよ

「それと

ハクアが不意にタシヤの腕をゆっくり取つて握つてきた。手のひらが熱い。

「これからどうするか、ちゃんと考えたんだ

正面に向き合つ。顔が近い。まっすぐに見つめられる。

一番苦しかるのハクアだ。楽しい生活も、友達も、自由も、全部なくなってしまうかもしれない。

こんなときが来るとわかつて、ずっと専念のから逃げた。

違う。そんなもの、楽しいときに考えられるものか。美味しいご飯を食べていて、もし食べられなくなったらどうしよう、なんて考えたりしない。面白いテレビを見ていて、もし目が見えなくなったらどうしよう、なんて考えたりしない。それが普通だ。

本当に何とか立ち向かわないといけない状況になって、自分で解決方法が見つからなくて、頼れる人にも限界があって、本当の願いに気づく。それが普通だと思う。

大丈夫だから。あたしはみんながいる限り、この町にずっといるから。

みんながいる限り。

どうしてそこをいま思い出すのだろう。ハクアはぎゅっと握んだ手を離さない。手はじつとり汗ばんでいたが、タツヤはそこから強い意志が流れ込んでくるのを感じるようだった。

「いまから、弁護士に会いに行く。あたしは自分でどうやって身を守つたらいいか、聞きに行く」

ハクアは真剣な顔だった。

「だから、一緒に来てくれ。いま、たつと離れたくない」

その瞬間、すべての痛みや迷いが吹き飛んだ。

「わかった」

やっと出た、それがお互いの本心だった。

脱走者・寺野ハクアと追跡隊・羽島こだまの交戦は、訓練学校内にも報告された。追跡隊の隊長である天童将王は、隊員の薩摩つばさと妹の紅花を連れて、硬い表情のまま廊下を歩いていた。校長室や作戦会議室に向かうわけではない、まずは医務室である。

医務室の白いベッドでは、こだまが上体を起こし、沈んだ顔でぼうつとしていた。体を動かすと背中にズキッと痛みが走る。

昨日のことを思い返す。こだまは、ハクアたちの乗ったバスが出てしまった後、力を抜かれた腕で何とか携帯を取り出し、草むらに隠れ、天童に「一ルした。携帯を握つていられないので、草の上で、寝ながら電話をするみじめな格好になった。

こだまは悔しさを噛みつぶしながら、ハクアを取り逃がしたことを報告した。天童の答えはシンプルである。

「わかった。次のバスで街に帰つてくるんだ。訓練学校に戻ろう」
「当然の判断だ。溜め息をつき、通話を切ろうとする。そのとき天童が少し言い足した。

「バスは乗れるか？」

「はい……大丈夫です」

こだまは早く隊長に会いたかった。

次のバスが来たときには敗北感も收まり、頭も冷静になった。バスに乗ると、やがて腕力も自然に戻り、ハクアの超能力が三十分くらいしか持続しないことも、天童に追加報告した。

バスから降りると、天童に肩を支えられて、車に乗せられた。訓練学校から迎えに来た緊急用のワゴン車である。運転手は訓練学校と守秘契約を結んでいる一般人だ。

こだまは、天童の手によつて後部座席に寝かされた。

「俺も紅花たちと一緒に学校へ戻る。明日見舞いに行くからな」

紅花は車酔いが激しいので車に乗れないのだ。

「はい、待つてます」

「痛いのは少し我慢するんだ。いいな?」

「はい……隊長」

天童の声を聞き、落ち着いて目をつぶると、そのまま車は走り出した。天童はテールランプを見送り、拳を握りしめる。

フォース系の落ちこぼれくらい、あたし一人で片付きますよ! 医務室に向かって廊下を歩く天童の脳裏に、こだまの声が浮かんでくる。天童は判断が甘かったと反省する。落ちこぼれとは言え、追いつめられた相手が反撃してくることは、過去の教訓で十分わかつていたはずだ。紅花の初出陣、ハクアの性格を知っている余裕、バスによる隊の分断……いろいろな要素が重なった。

ただ、予想外の流れになつたところで、思い止まり立て直すべきだつた。勝気なこだまの単独行動を許したのがまずかつたのだ。

「隊長、通り過ぎますよ」

後ろからつばさが呼び止める。赤い隊服、褐色の肌と規律正しいメガネ。

医務室の三番と聞いていた。天童は足を止める。そこが三番だった。つばさの肩で、南国九官鳥のデンロクも首を傾げてクルクルとのどを鳴らしている。

「お兄さま、こだまを怒らないでね」

紅花も少し責任を感じていることが顔に現れていた。頭を撫でる。

「いや……ああ、そうだな。怒るつもりはないよ」

天童はひと呼吸して、ドアを開けた。

こだまは、天童たち三人が入ってきて、くしゃつとなつた巻き髪を少し直した。

「大丈夫か?」

天童の声だけでも心が癒される。約束通り来てくれたのだ。

「いえ……ただの打ち身です。心配をかけてすいません」

「ただの……と言つても、医務官には一、三日は様子を見るよつ言われたぞ」

天童は眞面目だ。医務官がそう言つたとしても、そんな大「」とではない。こだまは慌てて首を横に振る。

「大丈夫です。追跡隊の名に泥を塗つてしまつたし、早く挽回したいんです！」

「泥を塗つたとか、そんなこと俺はまったく思つてない」

「……はい、すいません」

天童の言葉は励まして、いるつもりでも、語気が強いので怒つて、るよつに聞こえてしまつ。ドアの前で言つた通り、怒るつもりは本當にならぬのだ。それはみんな分かつてゐる。

「とにかく、医務官の命は守らせる。ちゃんと休めよ」

「はい」

こだまは掛け布団をぎゅっとつかむ。

天童はベッドに腰かけ、すつと顔を近づけた。こだまは目を丸くする。すぐにも立ち上がりそうなこだまを安静にさせるために、この距離でゆつくり語りかける。

「大事にならないで良かつた。向こうも必死だ。深追いはするな」

「……はい」

「ただし、やるときは手を抜かない。ちゃんと力になつてくれ」

「こくん、と頷く。

「返事は？」

「はい」

悔しさ、恥ずかしさ、背中の痛みが混ぜこぜになり、こだまは赤い顔でうつむいた。

天童はこだまの頭を撫でて、立ち上がる。振り返り、つばさの目を見た。

「つばさ、あとでハクアの位置を再探知して報告してくれ」

「はい」

「それと、こだまに何か元気が出るものを持む」

「はい」

「紅花、校長室に行くぞ」

「うん」

天童はこの件を報告するために校長室へ向かつた。紅花も兄の後ろについていく。医務室に残されたのは少女一人と鳥一羽だった。

しかし、天童が出て行つた瞬間、ベッドから起きて着替えはじめたこだまに少し驚いた。つばさは医務室のイスに座りその様子を見ていたが、顔色からも無理をしているのはよく分かる。

こだまはトレーニングウェアに着替えると、つばさの前を素通りして、すたすたと廊下に出た。校長室とは逆方向へ行く。会議棟でなくトレーニング棟だ。つばさも続いた。

「どこで休むつもり?」

「つるむさい」

一人は廊下を並んで歩き、医務棟とトレーニング棟の間にありフレッシュコルームに出た。売店があり、おばさんに声をかけられる。つばさは思わず足を止めた。

「こだま、元気が出るもの買つてあげる」

「……は?」

売店には三種類の一色ソフトクリームがある。バーラとパインの月見ソフト、紫いもと抹茶のあじさいソフト、あずきとざくろのデーモンソフト。どれがいいか聞くと、何も言わないでの、自分が好きなあじさいソフトを二つ買つてひとつを渡した。

こだまは迷惑そうな顔をする。

「……朝から?」

「別にいいじゃん。もう買つちゃつたし」

二人は肩を並べてベンチに座つた。窓から今日も暑そうな陽の光が差し込んでいる。その向こうに校庭が乾いて見えていた。なんだかんだ言って、こだまは甘いものが好きだった。天童に頼

まれた意味は分かっている。パクパク食べるこだまの様子を横目に見ながら、つばさは気さくに話しかけた。

「あせらなくても良かつたのに。相手がフォース系なら、隊長がいるときじゃないと」

「つるさい」

「隊長には頼りたくないの？」

「つるさいって」

「みんなでかかれば楽勝だよ」

「負けたのが悔しいんじやないって」

つばさは息をつき、今回の落ちこみは手強いなど感じた。実は、つばさにはこだまがいら立つ本心が少し見えていなかつた。

天童を隊長とする追跡隊は、結成されて約一年くらいだ。その間に、つばさは逃走した超能力者を一人で捕まえたことがある。その間に、つばさは昇格審査をパスし、エリア系の第二段階の使用が許可された。昇格した超能力は慣れないうちは反動があると聞いていたが、つばさは平氣で使いこなしている。校長の直系である天童を除けば、つばさはとにかく成長の早いエリートだった。

つばさは銃の扱いも上手くて、シユーティングの教官たちにも好かれている。当然、天童からの信頼もつばさのほうがずっと厚い。

負けたのが悔しいわけじやない。こだまは一人でやつたのを天童に認めてもらう絶好のチャンスだったのだ。それくらい自分もできるところを見せたかった。

けれど 失敗した。

追いこまれた超能力者の逆襲に警戒する天童の性格から、もうこだまの単独行動は許されないだろう。つばさを見返すチャンスを失つたのだ。

暗い顔で早々とあじさいソフト食べ終えたこだまを見て、つばさは聞いた。

「違うやつがよかつた？」

「……何でもいい」

「こだまは肩を並べて座るエリートに、一人で捕まえたときどうやつたのか聞きたかったが、プライドが邪魔して聞けなかつた。

「あたし、リモートガンの練習してくる」

「教えようか?」

「いいよ。人に見られると集中力が落ちるんだ」

「実戦向きじゃないなあ」

つばさの無邪気な一言一言が、こだまの胸をズキズキと刺す。体にはまだ痛みがあるし、天童には休めと言われた。けれど、誰でもいいから、自分ひとりの力で誰かを倒さない限り、このモヤモヤはずつと晴れないままなのだ。

こだまは包み紙をくしゃっと丸め、立ち上がり、トレーニング棟の中にあるシユーティングルームに行くことにした。銃はいま持っていないが、そこには練習用がある。

つばさは、シユーティングルームに向かうこだまの後ろ姿を見送つた。すると、タイミングを計つたように、天童から電話が来た。

「こだまは?」

シンプルな質問。医務室でじつとしていないことが分かつていただと思う。

「銃の練習です」

素直に答えると、一瞬の間があつた。

「邪魔してきてくれ。こだまを休ませてほしい。頼むぞ」

つばさは電話を切り、立ち上がる。

「んじや、邪魔してくる……か」

灰色の壁と天井しかない空っぽの広い部屋で、シミュレーションゴーグルをかけたこだまは、手に持ったリモコンで立体映像のセットアップをする。シーンを何度かチェンジし、ハクアとの接触が一番多そうなシーンを考える。

そして、逃亡者が町の狭い路地に逃げ込んだ、という設定を選ん

だ。路地にはポリバケツや「ミ袋や空き缶や、放置された自転車などいろいろなものがある。

時間帯は夜。ローディング。

「ゴーグルを通した視界の明度が一気に落ちる。体のだるさが一段と増す気がした。敵の能力を設定する。レンタルフォースで脚力を十倍に強化したターゲットにした。とりあえず最強レベルを倒せば何事にも対応できるというのがこだまの基本的な考え方だ。シュー・ティングの教官には三倍くらいを何度もこなすよう教えられたが、戦力として出遅れているのだから、追いつくためにはこれくらいの難易度でやるべきだと思う。

性別は男。仲間はゼロ。ローディング。

これで、黒い服を着た顔なしの少年が逃亡者としてセットアップされたはずだ。スタートの段階では、路地の中に潜んでるので姿は見えない。だが、超能力者の体から発する微弱な周波数によつて何となく敵の位置がわかる。

路地の奥、曲がり角の先に いる。

早速、敵が動き出す気配。こだまは先手必勝とばかり、曲がり角の地面にマグネットックエリアのマークリング弾を撃つた。だが、ちよつとコントロールが悪く、手前のポリバケツに当たつてしまつた。標的は一瞬ひるんだが、再び動き出している。

急いでもう一発を装填する。脳内イメージは、体内のエネルギーを手のひらに集め、銃のグリップに移動させる感じ。これが少しかかるのでスピードに連続で撃つことができない。とにかく集中する。

ここでの自分の体内エネルギーの流れに集中する分、相手の動きを追いかけるのが少しあるそかになる。その間に、レンタルフォースを使う顔なし少年が正面の視野に躍り出て、こちらを向いた。増強した脚力を使って、足元に転がった空き缶を蹴つてくる。一気に鼻先に迫る。予想以上にものすごいスピードだった。

こだまは集中を瞬間に解き、間一髪でそれをかわす。危なかつ

た。脚力強化によってコントロールも完璧になつていて。草むらと違つて、まわりに物が多い場所では、レンタルフォースは近接戦闘型と言つても手強い。

だが、こだまも発射準備ができていた。今度こそ命中させると意気込み、照準を絞る。すると、顔なし少年はその場で飛びあがり、横壁にある窓枠に足をかけ、思いきりこちらに向かつてジャンプした。

十人分の脚力での跳躍は、想像をはるかに超えたスピードで距離を縮め、上空から襲いかかってくる。実は、ターゲットの『抵抗レベル』も最高値に設定してある。マグネットイックエリアなどベースツクな超能力は熟知していて、対応策を必ずやつてくる という設定だ。これを乗り越えないといけない。確実に撃破しないといけない。こだまは迫りくる標的の体に向かつて、一発目のリモートガンの引き金を引いた。

銃口から、超能力を有形化した小さな弾丸状の破片が射出される。少女の体内から絞り出された能力の結晶体。当たれば、敵の体は数倍の重力を持ち、すぐさま地面に落下するはずだ。

だが、敵にも対策があった。手に持ったカバンを投げてそれを防いだのだ。一瞬のタイミングだった。超重量になつたカバンが地面に落下する。

こだまは焦つた。こう来るのは思わなかつた。距離がない。後ろに下がり、再び体を狙う。あるいは地面か。どっちへ撃つべきか。

そのとき、顔なし少年は空中で動きを変えた。横壁を片足で蹴り、反対側の壁に跳んだ。三角飛びで前方へ加速する。一気に鼻先まで迫ってきた。動搖し、うまく照準が定まらない。顔のない少年。背筋が凍る。指が固まる。ハクアの突進が蘇る。

「こだまちゃん、やられちゃうよ！」

両側の壁に向かつて、後方から弾が飛んだ。着弾し、半径一メートル以上の効果範囲が壁にマーキングされる。顔なし少年の体は、空中でグラグラッと揺れて加速が止まり、近いほうの壁へ横向きに

吸い寄せられて激突した。痛そうな大きい音が路地に鳴り響く。

「すばやい相手は体じゃなくて、壁に撃つて」

振り向くと、両手にリモートガンを構えたつばさが立っている。ゴーグルをかけ、その下に見える余裕の笑顔。肩にはデンロク。いつも特製ゴーグルをかけている。

つばさは、すかさず真下の地面にマーキング弾を撃ち、新しい重力場を作った。それが済むと、スイッチを左に変え、両壁の重力場に対してキャンセル弾を撃つた。

リモートガンは超能力の発動と解除両方を撃つことができる。発射前にスイッチによつて、発動と解除どちらの能力を弾丸化するかを設定するのだ。スイッチを右に向ければマーキング、左に向ければキャンセルになる仕組みだ。

キャンセル弾が壁に当たり、顔なし少年は横向きの重力から解放される。そして、たちまち下の地面に急降下し、地面に貼りつけ状態になつた。もはやまったく動けない。

つばさは、右手の銃だけスイッチを右に向け、さらにポリバケツを撃つ。顔なし少年がひれ伏す重力場にポリバケツが飛んできて、体の上にのしかかつた。まるで漬物石のような感じ。サルカ二合戦で言えば、とどめのウスだ。

これは、マーキングポイントに物体を高速移動させる高次元の能力。当然、物体はその重力場で重量が増す。これがエリア系第二段階で使えるようになるもの エリアデバイス。こだまがいくら望んでも学校から適格でないと判定される、まだ手の届かない能力だつた。つばさはそれをすでに使いこなしていた。

「こだまちゃん、手錠持つてる？」

「……え？」

呆然としていて咄嗟に答えられなかつた。

「ない？ じゃあ、デンロク、手伝つてあげて

肩に乗るデンロクがつばさの声に応えて鳴き声を上げた。羽ばたこうとする。

「待て！ 手錠は持つてる！ それより、何で割り込んでくるんだ！」

こだまは声を荒げた。デンロクは躍起になつたこだまの様子に押されて、羽をたたむ。つばさはやつぱりという困り顔をして、両手の銃を両足のガンホルダーに収めた。

「……隊長から共同訓練しろって言われたの。ごめんね」

こだまはそれを聞いて急に悲しくなつた。つばさが嘘をつくわけがない。天童の指示なのだと知つた。自分が一人でトレーニングに入つたから、後からつばさに追わせたのか。こだまの単独訓練に意味はないと言つているのか。しかし、それではこだまが誉められる日はいつやつてくるか分からぬ。同じ系統の、上位レベルと同じ隊にいて、これだけ捕獲能力の差を見せられて、いつ追いつけばいいのか。

「隊長は、何で最初からそう言つてくれないんだ」

氣力がすっかりそがれたこだまが虚空につぶやく。手錠を持つていると言つたが、それを捕獲した標的にかけに行くつもりはないようだ。つばさは腕を組み、冷静に尋ねた。

「共同訓練……もつと続ける？」

「疲れた。部屋で休む」

そして、つばさはショミリーショノルームから出て行くこだまの後ろ姿を見届けて、訓練終了のスイッチを押し、静かにゴーグルを外した。胸ポケットからメガネを出し、かけ直す。デンロクが豆を要求したので、つばさはデンロクの運動がてら、ひょいと天井に投げた。

ハクアとタツヤは並んで自転車に乗っていた。

弁護士の事務所が少し遠いので、学校を出た後、ハクアの家とタツヤの家を順番に回り、自転車を持ってきたのだ。二人ずっと一緒に行動している。自転車と言えば、前に引ったくり犯を追つたとき二人乗りをしたことを思い出す。今日は一人乗りとは違うが、何とかしなくちゃいけないという緊迫感と、仲間であるという安心感が、ハクアとタツヤの気持ちにつながりを与えていたことは同じだった。ハクアは、希に借りた水色のワンピースを着たままだったので、自転車は少しこじぎにくそうだったが、「スカートがそんなに長くなから平気だ」と笑っていた。いつものショートパンツと感じが違うと言っていた。

やがて、明るい感じで振り向き、目的の場所に着いたことをタツヤに伝えた。人や車の通りも結構あるところだ。一人は歩道に自転車を止め、白くてひょろりとしたテナントビルを見上げた。ビルにある看板のなかで弁護士っぽいのは、

『 笹ヶ瀬 姻戚関係相談所』

というもののくらいだが、学校で習つたことのない字が多くて自信がない。タツヤは漫画やアニメで見た探偵みたいな感じをちょっとと思い出した。

ハクアは自転車に鍵をかけ、すたすたとビルに入していく。タツヤもあとに続いた。あまり人がたくさんいる感じがしない。一人は自動ドアをぐぐり、エレベーターで三階に向かう。タツヤはエレベーターにあまり乗らないから少し緊張したが、乗るときも下りるときも誰にも会わなかつた。

それはそれで安心したが、ビルに入つてからハクアが全然しゃべらないのが気になつた。緊張しているのだろうか。

「ハクア」

「……ん? ビ「うした。トイレか?」

「ち、違「うよ」

ハクアに声をかければ、いつもと雰囲気は変わらない。拍子抜けするが、一緒に方法を探すといつのは楽しくもあつた。いま、誰かに頼らなければハクアの自由を守る」ことは無理だ。けれど、もつ気持ちは少しも曇つていなかつた。

「きつと何とかなるからさ。元気出せよ」

すると、ハクアは嬉しそうに笑つた。空気が明るくなる。

「うん、ありがとう」

廊下を曲がると、つきあたりのドアに『笹ヶ瀬 姻戚関係相談所』のプレートが貼られていた。やは「う」だつた。

「これ、なんて読むの?」

「たつ「つん、頭いいのに、あたしに聞く?」

「いや、ハクアは知つてるんだろ?」

「うん、知つてる」

「じゃあ、教えてよ」

「えへへ」

ハクアは看板を読んだ。『ささがせ いんせきかんけい そだんじょ』。笹ヶ瀬が弁護士の名前なのだといつ。ハクアはゆっくりドアを開けた。

弁護士ってどんな人だろう、いきなり目が合つたらビ「う」と一瞬考えたが、ドアの向こうは受付で、人はいなかつた。受付の先に擦りガラスの入つたドアがある。

ハクアは受付にある電話で内線をコールした。すぐに入人が出た。

「あつ、ハクアです! 来たよ!」

何か軽いな。

「うん、そうそう。見つかつた。オッケー、了解!」

いまさらつと『見つかつた』と言つたが、それはともかく、相手がずいぶん仲の良さそうな人でほつとした。何度か会つてゐるのだが

う。すぐに中のドアの鍵が開く音がした。ハクアが駆け寄る。

ドアを開けて現れたのは、紺色の着物に身を包んだ年上の女性だつた。タツヤは驚いた。まさかこんな和風の人が出でくるなんて。着物には流れるような銀色の笹の葉が刺繡してあり、キラキラ光っていた。

「ハクタロー、学校楽しい?」

「さとりん、あたし、もうそれどじろじやないつて!」

「ん、話は中で聞こうか。 あ、この子がお友達?」

「たつつんだよ」

いきなり紹介されて、タツヤは体が固まつた。

「こ、こんにちは……朱鳥タツヤです」

「はじめまして、笹ヶ瀬聰里です。ハクタローのお世話をしてる弁護士です」

「あ、はい……」

ハクタロー。犬みたいだ。

「ん? ほら、バッジあるでしょ。テレビで見たことがある?」

紺色の着物の襟に、金色の弁護士バッジが輝いていた。この人が弁護士なのか。弁護士はもつとおじさんっぽい人をタツヤは勝手に想像していた。年齢は暮田先生と同じくらいの二十代後半に見えた。細身で、ずっと笑顔だ。

「入つて」

聰里は一人を室内に入ってくれた。事務所の中は別に和風でなく、事務机があつたり、パソコンがあつたり、本棚があつたりと普通だつた。ただ、室内に巨大なだるまや招き猫やたぬきの置き物があり、白フクロウの剥製があり、何種類もの天狗の面や提灯が壁にかかっていた。聰里はとりあえず一人にソファに座るよう言つと、部屋の奥へ行き、大きなものを手に持つてすぐ戻ってきた。

「はい、これでもつまんで」

タツヤは目を丸くする。巨大な容器に、お菓子のプチシューが百個くらい山のように積み上げられたものがテーブルに置かれたのだ。

うつかり下のを取つたら崩れそつなくらい山盛りになつてゐる。

「すげー！」

ハクアはソファの弾力を面白がつてポンポン跳ねた後、プチシューを遠慮なくひょいパクひょいパクと食べた。あつという間に五六个が口に吸い込まれた。タツヤは一応ひとつ手に取つた。カスター味の普通のプチシューだ。

「それとも、今日は時間があるから、お茶たてよつか？ 氷で冷ましても美味しいのよ」

「あたし、苦いやつは無理だ。それより早く聞いて」

「……せつかくいいもの仕入れたのに、つれない子ね」

麦茶をコップに注いで持つてきて、聰里は一人の前に座つた。口の中がカスターで甘かつたから、タツヤはすぐ飲んだ。冷たいものがのどを気持ちよく流れしていく。体の汗も少し引いた。プチシューの山を挟んで、二人は聰里に向き合つた。

「で、今日は何？ 次のお客さんの予約があるから、面会時間は二十分よ。よろしくね」

聰里もプチシューをパクパクつまむ。何だかイメージしていた弁護士への相談ではなく、正月に着物姿の親戚のお姉さんとちょっと話しているような感じだ。その変な雰囲気に頭がいって、今回のことをどんなふうに話すのか考えていなかつた。

「追跡隊に見つかつた」

ハクアはいきなりそう言つた。聰里の目の色がサッと変わる。

「 本当の話？」

聰里はそう聞き返した。つまり、この人はハクアのことを全部知つてゐるのだ。

「 うん、そうだ。昨日、追跡隊のやつと戦つたんだ」

戦いの感触や傷跡がまだタツヤの体や手にも残つてゐる。聰里はすっと眉をひそめて、ハクアの熱っぽい眼差しをじっと見た。

「 で、一応無事だつたわけね？」

「「」のたつづんのおかげだ」

聰里と田が合ひ。

「タツヤくんもハクタローの「」とはだいたい知つてゐるのね？ 私のこと、説明は要る？」

「あ、あの……」

「恐がらなくて大丈夫。私はハクタローの味方だし」

タツヤは頷く。聰里は続けた。

「看板にも書いてるけど、普段は男女の姻戚に関する相談を受けてるの。それが普通のお客さん。で、すつごくたまに空から降つてくる隕石に関する相談も受けるの。要するにメテオドロップよ。これは知つてるんでしょ？」

「はい、知つてます」

「じゃあ、問題はここから先ね」

聰里は胸元から扇子を取り出し、バツと広げた。銀色のきれいな波や水しぶきが描かれていて、着物の柄と合つていて。ただ、室内は冷房が効いていて、うちわみたいにあおぐほどではない。聰里は着物の襟元を少し開けて、扇子で風を送り込む。胸元が少し暑いのだろうか。

ふうと息をつき、聰里は再びハクアと向き合つた。

「捕まれば一生独房なんだよね。絶対に嫌でしょ？ あの人もきっとそれは許さないし」

あの人とは、二人の話ぶりからしてハクアの養父みたいだつた。ハクアは会つたことがないと言つてゐるが、聰里さんは会つたことがあるのだろうか、とタツヤは様子を見る。

その隣りで、ハクアが大きく息を吸い込んだ。

「引つ越したくはないんだ。あたし、このままがいいんだ」

すると、聰里は神妙な顔つきで扇子をたたみ、パンッ！とテープルを叩いた。

事務所の空気が一瞬重くなる。

「ハクタロー、あなたもバカじやないでしょ。居場所が特定された

のよ。逃げたいなら動くのは仕方ないわ

仕方ない その言葉でアランの最初の反応をタツヤは思い出した。無理なのはみんな分かっている。それでも何とかしたいのだ。ハクアは必死にすがりつく。

「頼むつ！ なあ、さとりん、それ以外の方法はないかっ？！」

だが、聰里は素直に何とかしようとは言つてくれなかつた。

「いい？ 子供だから言わなかつたけどね、無理を望むなら、代償は必要なのよ」

その瞬間、タツヤは頭に血が昇つて立ち上がつた。

「ハクアがこのまま生きるのが無理だつて言うの？！」

言い放つた後、心臓の急速な鼓動が追いかけてくる。背筋がザワザワと熱く震えた。

「たつん」

驚いたのはむしろハクアだつたかもしれない。聰里は少年少女二人の顔を見比べた後、プチシューをひょいと口に運んだ。麦茶でのどを潤す。

時間が少しうつくりになつた。

「……でもね、私もそう何度も家探しするのは面倒なのよ

「どういう意味？」

ハクアは身を乗り出す。

「本気なのはよく分かつたわ。もつたいてぶつてごめんなさい。なら、私もちよつと覚悟を決めたいの。それくらい時間はもらえる？」

相談者一人は揃つて頷いた。聰里は苦笑いを浮かべ、腕組みをする。

「追跡隊を相手にしたら、逃げては見つかり、逃げては見つかりの繰り返し。だつたら、こう思わない？ 追跡隊を再起不能にしてしまえばいい」と

再起不能。その言葉が事務所の空気をさらに重いものにする。タツヤにも意味は分かる。おそらくハクアにも。黙り込む一人を前に

して、聰里は続けた。

「あそこは最後にしようと思つてたけど、たつた一ヶ月で終着駅とは……不幸ね。ハクタローにちょっと同情しちゃうわ」

そして、聰里は立ち上がつた。壁にかかつた天狗の面に向かって話しかける。

「シユタイン、どう?」

タツヤは目を疑つた。間違いなく、天狗の面だ。

『聰里さん。厄介事は困る』

天狗の面が男の声でしゃべつた。若い声だった。いや、けれど、それは間違いなく天狗の面なのだ。

「えつ？ あれつ？」

ハクアも激しく動搖した。聰里は「ちょっと黙つてて」とハクアたちを制止し、天狗とまた話し合つた。

「確かに少し手狭になるかもしけれなけれど、大目に見てよ

『そんなことは小さな問題だ』

「この子は、戦力よ」

聰里はハクアを指差し、天狗の面に主張する。

『……どうだか』

「頑固ね。スポンサーの意向と言つたほうが飲んでくれる?」

すると、天狗の面の声は黙つた。

「こつちで契約確認していいかしら?」

『勝手にしろ』

いまので話が終わつたようで、聰里はソファに座り直した。ポ力と口を開けたままのハクアとタツヤにとりあえずプチシューを勧めた。麦茶のおかわりを聞いてくる。ハクアは両方もらつたが、タツヤは両方遠慮した。そんなことよりも、天狗の面といま何の話をしたのか、早く話して欲しかつた。

聰里はくすくすと笑う。

「驚かせて悪かつたわね」

いや、絶対にそのつもりだつたはずだ。

「いまのはね、さつきのやりとりを全部バスチエッカーで聞いても
らつてたの」

「バス……？」

「シュタインが使える、ネットワーク系の超能力。たぶんハクタロ
ーも知らないでしょ？」

フォース系、エリア系以外の系統の話だつた。シュタインという
のは外国人の名前だと思うが、普通に日本語だつた。タツヤは混乱
し、もう何が何だか分からぬ。とにかくハクアの身が安全になる
ほうに話が向かっているならそれでいい。

見れば、ハクアも首を傾げている。

「ネットワーク系……？」

「遠くにいる人の会話を盗み聞きできる超能力よ。あんなふうに声
を出すこともできるわ。メテオドロップはまだ未解明な部分がたくさん
あるのよ」

「なるほど」

ハクアは納得したようだが、タツヤは念のため聞いた。

「シュタインさんも超能力者なんですか？」

「そうよ」

「あの……ちなみに、聰里さんもですか？」

「ううん、私は一般人」

話は一旦途切れた。

「じゃあ、問題はここから先ね」

さつきも同じ言い方だつた気がするが、聰里があえて区切りをつけたのは本当に大事なことをハクアに問うためだつた。

「独房の実験体と、防空壕の掃除係、どっちがいい？」

防空壕。聰里の口からそのとき初めて出た言葉だつた。さつきの天狗男に関係あるのだろうと感じる。

「どっちへ行つても能力開発と観察はされるわ。そして、戦いから
は逃げられない」

聰里はハクアに決断を迫る。

「違ひは、肉が与えられた分だけか、いくらでもあるかくらいよ。
あと友達」

「多いほうだ！」

ハクアは大声で言い切った。聰里は目を丸くする。どうせなら肉の量の段階で答えて欲しくなかつたが、肉も多くて友達も多いほうと答えるはずだ、とタツヤは思い、苦笑いがこぼれた。

聰里は納得した表情で深く頷いた。

「よろしい。契約成立つてことね。それじゃあ、ハクタローには明日から『ブレイクチャイサー』という組織に入つてもらいます」

「組織？ 訓練学校みたいな……？」

ハクアの声がちょっと小さくなつた。どうにも束縛や規律が苦手みたいだ。

「ううん、大げさに考えなくていいわ。共同生活よ。契約書はないけれど、私も聞いたし、彼も聞いたわ」

「彼？」

聰里は壁を指差す。

「あそこ。何でもお見通しの天狗様、よ」

『ぐだらん』

天狗の面がまたしゃべつた。タツヤはさつき聞いたはずなのに、まだ心臓がビクツとする。壁にかかつた面がしゃべるのは気持ち悪い。だが、ハクアは興味津々に面を眺めている。

「なあ、さとりん 天狗は中から出でこないのか？」

聰里とタツヤはきょとんとする。

「……パステッカーの説明、もう一回する？」

『聰里さん、悪いが戦力外だ』

「ちよつと！ あきらめないでよ！」

天狗としゃべる聰里的表情は何となく楽しそうだった。

少し学校生活や天体観測の話をして、約束の三十分が近づき、聰

里はビニール袋いっぱいのプチシューをおみやげに渡してくれた。ハクアは手離しにテンションが上がっていたが、タツヤはもう胸焼けがして食べられない。希や由果は喜ぶだろつか。

帰り際、聰里とハクアは約束をする。

「とにかく。今日はどこか安全な場所に泊まって、明日この地図の場所へ行きなさい」

「うん、さとりん、ありがとうー」

元気いっぱいの笑顔を見ると、本当に何とか自由を守つてあげたくなる。願いを叶えてあげたくなる。聰里はハクアの頭を撫でて、きゅっと軽く抱き寄せた。

事務所を出る直前に、ハクアがトイレに行つたとき、聰里はタツヤにも声をかけた。口数は少ないけれど、問題はここから先と言うと、ハクア本人よりも真剣な顔で向き合つてくる。この子は、状況をよく分かっている。だから、無理を望むなら代償が必要と言つたとき、真つ先に強い声を上げたのだ。

シユタインや他の連中とは全然違う、やさしい性格。けれど、それが大きな危険をもたらすこともある。

「タツヤくん、あの子の面倒見るのは大変よ。親切心ならいいけれど、それ以外の気持ちなら、覚悟を決める時間をいつか持ちなさい」

「……はい」

タツヤはゆつくり頷いた。この子だけがついてきたのも、本當はたまたまそなつたわけではないのかもしれない。

たつた三十分で、いまの言葉はどれだけ信用されただろうか。聰里は、ハクアの身の隠し場所は責任もつて確保した。ただ、このやさしい性格の少年がこれからどうするか、少し見通す自信がなかつた。

ハクアは希の家に泊まり、希にひと通り話した。そして翌朝、弁護士の聰里に指定された集合時間と場所に三人で行くことにした。朝になり、タツヤが希の家に自転車でやって来て、三人とも自転車に乗り、聰里の書いた地図をもとに向かった。場所は住宅街ではなく河川敷の上流のあたりだった。自転車でも十分以上かかりそなところだ。前に引っかかり犯を倒した場所よりもっと上流だった。コンビニや公園などの目印をひとつずつクリアし、地図で指示された場所に着くと、土手の上に一台の車が停まっていた。高そうな大型の赤いスポーツカーだ。三人が自転車でそばに行くと、サングラスをかけた着物姿の女性が運転席から下りてきた。昨日と違う白っぽい着物だが、間違いない聰里だ。

「おっ、ちゃんと来たねー。おはようー」

「おはようございます」

着物にサングラスというのも何だか不思議な感じだし、着物で運転は大変じゃないのかな、とタツヤは少し思う。とにかく、聰里は楽しそうに手を振つて三人を迎えた。今日もちゃんと着物の襟に金バッジをつけている。和物のハンカチで顔の汗をふき、銀色の扇子で胸元をパタパタ仰いでいた。初対面の希は挨拶をする。

「はじめまして、寺野さんと同じクラスの月本希です」

「希ちゃんね。どうも、弁護士の笠ヶ瀬聰里です。へー、ハクタローみたいに日焼けしてないんだね。運動が苦手?」
「えつ、あの……苦手ではないんですけど、私、あんまり日焼けしないんです……。バレエとかを習つてます」

「じゃあ、白いほうがいいよねー」

「はい。あと、ショークリームありがとうございました。美味しかつたです」

「あつ、食べてくれたんだ! いやーうれしいなあ。また今度作つたです」

てあげるね！」

あれは聰里の手作りだったのか。そして聰里は一呼吸置くと、サングラスを外してまぶしそうな顔をした。

「さて、問題はここから先ね」

扇子をパシッと気持ちよく鳴らして閉じ、真剣な顔でハクアと向き合つた。

「ハクタローは決心したのね？」

「ああ」

力強く頷く。

「 よろしい」

聰里は笑顔になり、ハクアの頭を撫でる。この人に相談してからハクアのことが何とかなりそうで、表情も明るいし、タツヤは本当にうれしかつた。

希は恐る恐る質問する。

「あの……こんな場所にハクちゃんを助けてくれる人がいるんですか？」

「そうよ。簡単に言うとね、追跡隊と戦える連中のアジトがあるの」「アジト……？」

希は首を傾げた。タツヤは意味がわかる。

「まだ学校で習つてない？ ごめんね、秘密基地よ。とにかくそこに案内するから」

「 そななのがあるのか」

ハクアが言う。やはりハクアも知らないことが多い。

「おとうさんがこの町に引っ越させた理由がわかつた？」

養父のことを言つているとタツヤは思った。ハクアは深く頷く。

「じゃ、ついてきて」

聰里はまわりを確認する。河川敷には誰もいない。すると、手さげの巾着袋から新しい白い軍手を取り出し、河川敷に三枚並ぶ立て看板に向かつて歩き出した。

聰里が車を停めた近くに、遊泳禁止、花火禁止、バーベキュー禁止と書かれた三枚の立て看板があった。一枚に書けばいいのにとタツヤは思うが、それぞれにイラストが描いてあるので、別々に立てられたのかもしない。

とりあえず聰里はその前に立つと、腕まくりして、軍手をはめ、遊泳禁止の看板をつかんだ。「ほつ」と言って上へ持ちあげると、看板が少し動いた。さらに浮かせたまま看板を半周以上回した。三人とも驚いてじっと見つめる。

「違うの、怪力じゃないのよー」

聰里が笑いながら言う。遊泳禁止の看板の向きを変えると、一旦、巾着袋から携帯を取り出し、画面をチエックした。そして次に、花火禁止の看板を同じように動かし向きを変える。遊泳禁止とは違う角度だ。最後に、バーベキュー禁止の看板を持ちあげ、逆方向へ回した。地面から力チツと金属音が鳴ったのが聞こえた。

「よし、これで開いたはず」

聰里は笑顔で振り返る。ハクアもきょとんとしていた。

「え……何が？」

「ん？ あれよ」

そう言つて聰里が歩いて行つたのは、三枚の看板の近くにある石のベンチだった。両手でベンチをつかむ。

「これはちょっと重いのよね」

ベンチのふたと言つたら良いのか分からぬが、とにかく座る部分が横に「ゴリゴリ」と動いた。そばに駆け寄ると、ベンチの中に穴があつた。とても暗いが、穴の底にぼんやりとコンクリートっぽい床が見える。

「一瞬恐いけど、浅いから大丈夫よ。順番に入つて。ふたは下から閉められるから」

聰里は着物の裾をつまみ、ひょいっとジャンプして穴の中に降りた。すぐに着地する音がした。上から覗くと聰里の頭が見える。浅

いと言つても、大人の体がすっぽり入るくらい深いのだが、ハクアはさつさと石に腰かけ、すぐに飛び降りたので続くしかなかつた。

確かに、秘密の入口の前でじつとしているわけにもいかない。希が少し恐がつたので、タツヤは手を持つて支えながら降りるのを手伝つた。そして、最後にタツヤが飛び降りた。

穴の底は、床も壁もコンクリートだつた。思つたより埃っぽくなつたが、かなり蒸し暑くて、草と土とコンクリートと臭いが混ざり、異世界にやつて来たような錯覚を感じた。穴の底は何人か立てるほどの広さしかなく、鉄のドアがあり、数字錠みたいなものがついている。

ハクアと希は聰里にぴつたりとくつついていた。聰里は暑そうに扇子を広げ、胸元を少し開き、パタパタと風を送り込んでいる。

「じゃ、閉めるね」

聰里は、壁に取り付けられたハンドルを握り、グルグルと回した。ふたがゴリゴリと動き、上から入る陽の光が減つていく。ハンドルはそれほど重そうでもなく、何周か回すと完全に締まつた。一旦、真つ暗になる。

聰里が携帯の明かりで壁を照らすと、ハンドルの横に青いボタンがあつた。ボタンにはROCKという字がある。それを押すと、ガチャッと大きな金属音が穴の中に鳴り響いた。ベンチのふたがまたロックされたのだとタツヤは思つた。

「ハクタロー、覚えた？」

「えつ？ あ、うん」

「まあ、連中からまた聞いて。あと、あなた携帯持つてないから、百均でペンライトを買うといいわ」

「うん、そうする」

ハクアは素直に頷いた。何となくさつきから、聰里はハクアだけに言つてゐる言葉が混じる。もちろんハクアの問題だから当然だと思うが、聰里がタツヤと希を少し別扱いしてゐる感じを覚えた。

「じゃあ、問題はここからね。ここを開ける数字は毎日変わるの」「難しいな……」

ハクアが小さな声でつぶやく。

「大丈夫、慣れよ。数字はショタインが毎日設定するの」「面倒だなあ」

「だから、絶対に逆らわないでね」

聰里はクスクスと笑つたが、少し恐い言い方だつた。数字を入力すると、ピピッと電子音がしてロックの開く音がした。

ショタインは組織のリーダーだと聰里は昨日言つていた。遠隔で聞いたり話したりできる超能力者によつた。外国の名前だが、日本語をしゃべつた。ちなみに、ハクアが希の家に帰り、例の天狗の面がしゃべつたことを希に話したら、面白い人だねとすこく笑つたらしい。タツヤはあのとき不気味さを強く感じたのだが、希は先に超能力だと聞いたから印象が違つたのだろうか。

聰里がドアを押し開ける。降りる階段があり、天井に薄暗いライトがついている。蒸し暑さと息苦しさは変わらない。階段は何度か折り返しがあり、感覚的に地下一階分くらいの長さがあつた。聰里を先頭にしてゆっくり降りる。すると、終着点にまた数字錠のついたドアがあつた。

「またか……」

ハクアが面倒くさそうに溜め息をつく。

「うふふ、ここは上と同じ番号よ」

聰里が数字錠を解き、ドアを引くと、階段よりずつと明るいライトで照らされた広い部屋が見えた。

「うおー！ ここは涼しいっ！」

「ほんとだねー！」

ハクアや希が気持ち良さそうに目を輝かせる。確かに冷房が効いていて驚いた。秘密基地と言つていたから、タツヤはかなり狭苦しい場所を想像していたが、まったく違つた。普通の家みたいに天井が高く、壁や床も清潔だつた。

テーブルに男女二人の子供が座っていた。ただ、一人とも年齢はタツヤたちよりも少し年上に見える。

「お客さん、来たわね」

ティーカップを置き、黒いドレスを着た少女が振り向いた。肌は人形みたいに真っ白だ。

「聰里さん、久しぶり！」

青と白のラガーシャツを着た背の高い少年が、聰里にっこりと笑顔を向けた。

「元気そうね」

聰里は三人の小さな客人を背に従えて、リラックスした笑みを返した。

まず、黒ドレスの少女が立ち上がり、聰里に丁寧なおじぎをした。腰まである黒く長いストレートヘアに白バラのカチューシャをつけ、黒いキャミソールとふわりとした黒いレースのスカートに、黒い皮のブーツを履いている。ブーツの丈はひざの上まである。

聰里は握手しようと手を差し出す。

「おはよう、マリネ。今日は早起きなのね」

「早起きと言つても十時だ。」

「正直、激しく眠かつたけど、気つけのレモンティを飲んだの」マリネという名の少女は黒い網編みの手袋を外し、握手に応えた。追跡隊と戦うのはどんな人なんだろう、とタツヤはそつと少女の姿を見た。冷房が効いているけれど、真夏に長いブーツは珍しい。だが、それより目についたのは少女が腰に差した一本の傘である。白と黒の一本ずつ。ベルトにくくりつけてあり、まるで一刀流のようだ。

「日傘よ」

はつとして顔を上げると、マリネの冷やかな視線とぶつかった。確かに刀のさやみたいに見えたのは傘を入れるレースの袋のようだ。日傘は母親も持っていたので知っているが、こんなふうに腰に一本

もさげているのは初めて見た。

「文句ある?」

「えっ、あ……その……」

タツヤは動搖して口ごもった。

「マリネさん、恐がらせるなよ」

笑いながら口を挟んだのはラガーシャツの少年だった。そのままスクツと立ち上がる。タツヤよりも背が高い。声変わりもしている。

「ごめんな、俺は敷^{じぶ}淨^{じょう}司^し。年は中学一年だ。ここではみんなにブツシユって呼ばれてるから、ブツシユで頼む。よろしくな!」

「……ちょっと、あんた本名言つていいわけ?」

「今日から仲間なんだから問題ないだろ?」

ブツシユという中学生の少年は、目が細くて、ずっとここやかな表情だった。笑うと目がもつと細くなる。タツヤは明るい感じの人がいて安心したが、『仲間』という言葉が胸の中に小さな重りのようになってしまった。

「私の本名は、まあ忘れていいけれど……黒木^{くろき}摩利音^{まりね}」

「寺野ハクア、五年生だ!」

ハクアはまるで緊張していない感じで、元気よく言った。続いて、タツヤと希も順番に名乗った。ハクアの同級生であることも話す。聰里は一步引いたところで子供たちの様子を興味深そうに見ていたが、自己紹介が終わるとまた前に出た。

「シユタインは? 十時に来るって連絡したはずだけじ

「うん、聞いてる。シユタインなら奥の部屋だよ」

ブツシユが答えた。その横でマリネは眉をひそめる。

「ねえ、聰里さん、どの子が脱走者なの? 私、あんまり人の名前覚えられなくて」

「あたしが脱走者だ! 寺野ハクアだ!」

聰里が言う前に、ハクア自身が堂々と大きな声で答えた。再度、聰里に聞く。

「……へえ。他の子はなんなの？」

「付き添いよ。一般人の子たち」

「派手にばれてるのね」

「仕方ないわ。ショタインには説明してあるわよ

「……なら、いいんだけれど」

そう言うとマリネは席に戻った。ふああつとあくびをして、レモンティを一口含む。もう関心はなくなつたという感じだ。引き継ぎように、ブッシュが奥の部屋へ行く廊下に四人を案内してくれた。廊下の左右にはドアがいくつも並んでいた。ドアにはハート、スペード、ダイア、スペードなどトランプのマークが描かれたフレートがつけてある。何もないドアもあつた。

「これは俺たちの寝室。ハクアちゃんには、あとで説明するよ」

「うん、よろしく頼む！ ティッシュ先輩」

「あはははっ、ブッシュだよ。すつごい間違え方だなあ。面白いな～」

そして、突き当たりのドアには天狗の顔が書いてあつた。

「これがリーダーの部屋」

三度目の数字錠がある。ショタインは本当に警戒心が強いというか、しつこいくらいだ。

「この番号は入口と同じか？」

ハクアが質問すると、ブッシュは数字を入力する手を止め、首を横に振つた。

「違うよ。ここはいま十五桁」

「うつ そんなに？」

ブッシュは目を細めて苦笑いする。

「ここ」の数字はまだ教えられない。全員が戦い続けるための『結束の証し』なんだ

はつきりした声で、そう答えた。

ドアが開くと、大きな事務机が見えて、正面に若い大人の男性が

座っていた。白衣を着て、頬杖をつき無言で来客たちの姿を観察している。やせ型で神経質そうな顔だが、ふさふさのパーマ頭が異様に目立つ。イスの後ろには真っ赤な巨大な天狗の面が壁に立てかけてあった。

近づくと、瞳の色が青いのに気づいた。

「カラーコンタクトだ」

それが最初に発した言葉。天狗の面で聞き覚えがある、シユタインの声に間違いない。外国人ではなく日本人だった。

「問題でも？」

誰に言ったのかわからず、しかも巨大な天狗の面に圧倒されて、タツヤはきょろきょろしていると、「久しぶりね、シユタイン。最近はその色なのね」と聰里が気さくに話しかけた。

「オレンジは飽きた」

シユタインが渋い顔で答えると、ぎい、と後ろで音が鳴った。ブツシユが部屋に入らず廊下に残つてドアを閉めていた。ドアの陰から笑顔で手を振っている。まったくねー、と口パクで言つていた感じだった。

ドアが閉まるごとにロツクがかかる音がした。

「聰里さん、その短い髪の少女が脱走者だな？」

シユタインはイスに座つたまま言つた。年齢は聰里と近いが、少し下くらいだろうか。だが、表情を見ると、初対面からかなりイライラしている。

「おいつとりあえず、体から拡散波長が出てる。早くこれを飲め！」

そう言つて、シユタインは錠剤の入つたビニール袋を荒っぽく投げてよこした。

「えつ？」

ハクアはそれを両手でキャッチし、驚いて目を丸くする。

「キープタブレット……なんで？！」

「いいから早く飲め！ ここが特定されるだろ？が、クソガキ！」

シユタインの怒声が飛ぶ。ハクアは急いで錠剤を飲もうとしたが、口の中が渇いてパサついていたせいで、錠剤が飲めずになってしまった。手で口を押え、苦しそうに咳き込む。

「ハクちゃん、大丈夫？」

希が心配して背中をさすつた。

「 つたく！ カボチ、水持つてこい！」

シユタインが隣りの小部屋に向かつて叫ぶ。

「えつ。あ、いま麦茶入れてるんですけど……」

女の子の声が返ってきた。

「何でもいい！ 早く一個持つてこい！」

すると、隣りの小部屋から、麦茶の入つたコップを持った少女が飛び出して、むせているハクアに駆け寄つた。少女は内側にカールしたシヨートボブで、腰にエプロンをしている。年齢はたぶん同じくらいだ。とにかく、ハクアは麦茶をもらい錠剤をすぐに飲み込んだ。

「あ……ありがと……」

落ち着きを取り戻し、少女にコップを返す。少女は屈託のない笑顔で空っぽのコップを受け取つた。

「えへへ、こんにちはー。あなたが新入りさん？ フォース系なんだよね？」

「う、うん」

「あたし、加保千晶かほ・ちあきって言うの。六年生だよ。カボチでいいからねを確かめる！」

シユタインが後ろから冷たく制止した。

「あ、はい……すいません」

カボチという少女は頭を下げ、そそくさと隣りの小部屋に引っ込んだ。ハクアは少女の背中を見送り、あらためてシユタインの顔を見た。だが、白衣のシユタインは険しい顔で腕組みをしながら、聴

里をじっと睨みつけている。

「聰里さん」

「なに？」

「俺はこうこう騒々しいのが大嫌いなんだ」

シユタインの一言で、ハクアは口をつぐんだ。顔に緊張の色が走る。

「知ってるわ」

聰里が返すと、シユタインはパーマ頭をぐしゃぐしゃと搔き亂つた。

「だが、俺は一度ここに入れた同朋を見殺しにしたことはない」

「それも知ってる」

聰里は余裕のある笑みを浮かべて、じつくりとその言葉を聞いている。

「キープタブレットは希少品だ。それを分け与える食いぶちが増えてしまった。これは深刻な問題だ」

「承知してるわ」

「この代償は大きいぞ。俺にもそれなりの覚悟がある。 そう、バックに伝えてくれ」

「もちろんよ」

しん、とする。張りつめた空気が部屋中を包む。

そこに、トレーに人数分の麦茶を載せたカボチが、カチャカチャと音を鳴らしつつ入ってきた。トレーに集中しているが、歩き方が少し危なっかしい感じだ。

「カボチ」

シユタインが呼び止める。

「はつ、はい！」

「今夜は豪勢な飯が作れるか？」

「えつ？ あ、はい！ 大丈夫です！」

すると、シユタインはイスから立ち、ハクアの前まで歩み出た。
「寺野ハクア、俺の本名は秀多院相夢しゅうたいん·あいむだ。この女との契約が続く限

り、お前を追跡隊から守つてやる

ハクアの肩に手を置く。タツヤと希はその様子をじっと見つめていた。ハクアは、シュタインの鬼気迫る鋭い眼差しに対し、両拳を握り締め、闘志に満ちた笑顔で返した。

「うん！ あたしも戦うから！」

だが、シュタインは眉をひそめ、首をゆっくり横に振った。

「 まずは力試しだ。フォース系のパフォーマンスをよく見ておきたい」

タツヤは、なぜかその言い方に少し冷たい響きを感じ取った。

シュタインの部屋の奥に別のドアがあり、また下りの階段があつたが、それほど長くはない。このドアは数字錠もなく、ノブを回すとすぐに開いた。ただ、聰里、タツヤ、希の一般人三人は立ち入りを禁じられた。シュタインがリビングと呼ぶ最初の部屋に戻るよう命じたのだ。

タツヤと希がハクアについていきたいと言つと、シュタインは鬼のような形相で立ちふさがつた。当然逆らえるわけもなく、意氣消沈してリビングに戻つていくと、廊下の向こうからマリネとブッシュがやって来てすれ違つた。タツヤは思わずブッシュを引き止めて聞いた。一番聞きやすそうだつたからだ。

「あの……何をするんですか？」

ブッシュはすぐ困った顔をする。

「えつと、うーん、話していいのかな？」

隣りのマリネに聞く。

「えつ、私に聞くの？ダメじゃないの？」

「そうだよなあ」

ブッシュは頷くと、スッキリした笑顔でタツヤの肩を叩いた。

「というわけで、『めんね！秘密！』

「えつ、あつ……」

組織メンバーの二人は足早にシュタインの部屋へ入つて行つた。

タツヤは少しでも何とか聞きたいと思ったが、聰里もこれは仕方ないという感じで溜め息をつき、タツヤの背中をぐいっと押した。

リビングに着くと、テーブルには三人分の麦茶と水ようかんが置いてあつた。カボチが持つて来てくれたのだ。だが、カボチもそれ終えると、軽やかに手を振つて、シュタインの部屋へ小走りに向かつてしまつた。

「じゃ、『めんね！秘密！』

おそらく同じ理由だと思つた。シユタインの部屋のロックが下りる音が小さく聞こえる。あの白衣姿を思い出すと、まるでこれからハクアの手術が始まるかのようを感じて、タツヤの胸に不安と寂しさが湧き出し、止まらなくなっていた。

ハクアを連れてさらなる地下室に来たシユタインは、階段の終着にある鉄のドアを押し開けた。真っ暗な空間だつた。そこから流れくるひんやりした空気がゆるやかに体を包む。シユタインは右手で壁を触つた。

「光れ」

暗闇に声が反響した。そして、その触れたところから壁がパアッと光を放ちはじめ、光る部分はどんどん広がつて、目の前に岩肌の大きな天然ドームが見えてきた。やがて、岩の壁全体と地面全体が光り、空洞の広さがよく分かるようになつた。ハクアの知つている広さで言えば、学校の体育館の半分くらいだ。

ハクアはシユタインの右手を観察する。触れている岩壁には電気のスイッチのようなものは見当たらない。

「あれ？ いま、電気つけたのか？」

「ここまで電線は引いてない。気にするな。あとで説明してやる」

シユタインは右手を壁に触れたまま、今度は壁に向かつて話しかけた。

「おい、マリネ、もう着くか？」

壁が返事をするわけがない。ハクアは後ろにぼうつと立つて不思議そうに見ていた。

「なるほど、そうか」

シユタインが壁と会話している。ハクアは天然ドームの天井を見上げた。

ここは鍾乳洞というほどではないものの、天井には岩のでっぱりがたくさんある。ただ、天井のでっぱりを削つたような痕跡もいくつかあつた。一方、地面は平らで見通しはいい。

「ハクア、防空壕つてのを知ってるか?」

「ボウクウ、ゴウ?」

「そうだ。戦争中に避難するために使われた場所だ。たぶんここはそれだ。だから地面が座りやすいように土で固めて平らにしてある『戦争』……」

ショタインは一旦黙り、壁のそばから離れ、岩石ドームの中央に向かって歩いた。ハクアも後ろについて行く。足下は多少『じつ』つするが、確かに歩きにくくない。

「さつき、お前は『自分も戦つ』と言つたな」

「うん！ そのつもりなんだ！」

ショタインは立ち止まる。白衣の後ろ姿を見ると、少し恐怖を覚えた。

「いいか、ハクア。もしそれを俺に誓つなら、最後の最後までやるつもりで言え」

ハクアはこの組織に入る覚悟を試されているのだと直感した。急に悔しさが込み上げて、歯を食いしばる。

「当たり前だ！ あたしだつてさとりんから聞いてる！ 最初からそのつもりだ！」

すると、ショタインは高笑いして振り向き、冷酷な笑みをにんまりと浮かべた。

「よく言つた。じゃあ、それを貫く厳しさを思い知らせてやるう！」

ドアが開き、ブッシュとマリネが揃つて岩石ドームに入ってきた。ショタインはドームの中央に立ち、その到着を待っていた。そばには緊張した顔つきのハクアがいる。

「マリネ、持つてきたか？」

ショタインの声がドーム内に反響する。

「んもう、心配性ねえ。何年の付き合いつ？」

「……お前はまだ一年も経つてないだろ」

ショタインは無表情で答えた。

「うーー、ちょっとカワイイ台詞を言つてみただけよ」

「カワイイ台詞か？」

横からブッシュが笑つて口を出す。マリネは無視して、ドームの中央まで歩み出た。

ブッシュは壁際に残つたままだ。背後でガチャッとドアが開き、少し息を切らせたカボチが顔を出した。階段を転びそうになりながら走つて降りてきたのだ。

「始まる？」

「おう、始まるぞ」

カボチはブッシュの隣りに並んで呼吸を整えた。

マリネはハクアと正面から向き合つよう立つた。シュタインは少し離れて立つ。

「さて、これからハクアの『力試し』をする。相手はマリネにやつてもうう」

「よろしくね、ハクア」

「ハイツ、よろしくお願ひします！」

軽い雰囲気のマリネと、いきなり腰を落として構えるハクアが好対照だ。

「ルールだが、この空間にあるものは何でも使っていい。ただし、審判の俺は手を貸さない。あと、審判の俺が『勝負あり』と言つたら終わりだ」

シュタインは、ハクアとマリネの顔を交互に見た。両者とも気合い十分の顔つきだ。

「以上。では、はじめてくれ

マリネは相手が近接戦闘型だと知つてるので、まずは後ろに下がつた。

一方、ハクアは追いかけず周囲を見渡した。何でも使っていいと言つても、地面に落ちている石くらいしかない。それに、マリネの超能力もわからない。最初から距離を取つたということは苦手な工

リア系か と警戒し、少し考えてみたが、作戦は何も思い浮かばなかつた。やはり突撃するしかない、と意を決めて踏み出した。

マリネは腰に差す一本の日傘をさつと抜いた。右手に黒い傘、左手に白い傘という戦闘のスタイルだ。黒傘はやや重く、白傘は軽い。やはりハクアは無策でスタートを切つてきた。足は速い。マリネはハクアの走つてくる軌道を迎え撃つべく傘を構えた。

ハクアは白くて見えやすい傘の側から迫つた。マリネは予想通り白傘を振つてハクアの足止めを狙つてきた。持ち前の反射神経でかわす。体の横を白傘の影が流れるとき、ハクアは一気に背後に回り、低いタックルで脚力を奪いにかかつた。

だが、マリネは黒傘で地面に突き立て、それを軸にしてひょいつと飛び上がつた。跳んだというよりは、ハクアを踏み台にしたと言うべきか。ハクアは後頭部にスコンと軽いキックを受け、思い切りつんのめる。だが、ハクアもここは踏ん張つた。

急いで切り返すと、いきなり田の前が白くなつた。敵が白傘を開いたのだ。それがどうした！ と傘を左手でなぎ払つてふところに右手を伸ばそうとした。だが、そこにもうマリネの姿はない。白傘も宙へ逃げる。一瞬、混乱する。

マリネはくるりと弧を描いてハクアの頭上を跳んでいた。黒傘でハクアの背中をひと突きする。傘の先端には両方とも『力試し』用の丸いゴムキャップが付いていた。先程シユタインに持つてきたかと聞かれたのはこれだつた。ピンポン玉ほどの大きさで、鋭さはないが、ハクアの体に十分な衝撃を与えた。

ズザアッと地面に突つ伏すハクア。背中の真ん中を突かれて、一瞬、呼吸が止まつた。

マリネは、すかさずハクアの足首をつかみ、「踊りなさい」と命じた。そして、また後ろに下がり距離を取る。白傘を閉じるマリネの顔に、フツと勝ち誇つた笑みが浮かんだ。

壁際ではカボチとブッシュが観戦している。

「なんか闘牛士みたい……」

「マリネさん、楽しそうだなあ
ショタインは難しい顔つきで、ハクアの動きをじっと観察していた。

一方、肝心のハクアは地面から起き上がりがれずにいた。さつき足首を触られ、マリネが超能力を発動したのは分かつた。けれど、何をされたのか把握できない。ひとつ言えるのは、体が思うように動かせないので。起きようとすると体はもつと伏せてしまう。指を開こうとすると拳を握ってしまう。体の動きが意志とまったく逆になってしまうのだ。

ハクアは生まれたての仔馬みたいに動きが鈍くなつた。おでこにはクラブのマークが出ている。明らかに超能力を受けたのだ。マリネはそれを見て、白黒一本の傘を重ねて槍状に構えた。ぐつと腰を落とす。

そのとき、ハクアの上体がようやく起きてきた。やつと仕組みに気づいたらしい。だが、もはやマリネにとつて格好の的でしかなかつた。

「キャップついて感謝しなさい！」

一本の田傘が高速で突き出され、一閃でハクアの左肩を直撃する。強烈な一撃を食らい、ハクアは後ろに吹っ飛んだ。

ハクアの背中は土まみれになつた。頭がグルグルする。痛みをこらえながら必死で考える。意志と逆に体が動くなら、後ろに寝ようとすれば起きられるはず。後ろに寝ようとすると、寝ようとする。視界が変化する。田の前によつやくマリネの姿を見つけた。

「…………うぐぐぐ…………うううう！」

「あら、ちょっと順応してきたのね？ やつも胸を狙つたのに外したわ」

ハクアは鎧びたロボットみたいに何か起き上がる。ただ、やつぱり思うように動けない。体の動きは要領をつかんできたが、歩こうとすると足の意識があべこべで、フラフラとよろけた。

「うふふつ、糸の切れた人形ね」

マリネは左手の白傘を前後逆に持ち替え、フックを前に向けた。

軽快に踏み込み、白傘のフックでハクアの上着の襟を引っかけ、後に体を搖さぶる。ハクアは抵抗しようとしても頭の処理が追いつかず、完全にパニック状態になった。

ふらついたところに、マリネは右手の黒傘を引いて構えた。

「黒ちゃんは重いわよ！ お腹に力入れてー！」

力を入れようとすると、抜けてしまった。当たり前だった。言葉に踊られたのだ。

襟を引っ張られたまま、ズドッと黒傘の重い一撃が繰り出され、ハクアの脇腹をかすめた。マリネもさすがに鬼ではない。これはもうわざと外したのだ。

「……バカね。ダメよ、そこは力を抜かないと」

マリネは白傘のフックで、ハクアを地面に引き倒した。ハクアは再度地面に転がった。

「勝負ありだ」

ショタインは高らかに終わりを告げた。

マリネは息をついて、張りつめた神経を一気にほぐした。同時に、ブツシユとカボチも息をついた。ショタインは首のこりをほぐしつつ、戦つた一人に向かって歩いていく。

終わつた感覚がないのはハクアだけだった。

「…………うごつ…………ぐつぐつ！」

マリネは、足元でハクアが悔しさのあまり泣き出したのかと思つた。だが、そうではなかつた。ハクアの目は野獣のように爛々と燃え、まだ闘志むき出しだつたのだ。必死で自分の体に動けと念じているのだ。

「うごつ…………うがつ、うがああああつ……！」

服も泥だらけになり、まるで亡靈みたいに右手が這い寄ってきた。ハクアはパニック状態の中、明らかにこの足を狙つてゐる。まさか脚力を奪う気が。マリネは受けかけた白傘を構え、ハクアの右手に

突き立てた。力は入れず、動きを止めるだけだ。残酷だとは思うが、これはもう仕方ない。

「むぐつ！ あはあつつ！」

ハクアは苦しそうに叫んだ。右手を止められると、今度は左手が懸命に這い寄ってきた。今日から仲間になるよしみと思つたが、こうなるとただのお荷物にしか見えない。頭が瞬間に沸騰した。

「しつこいわよ…」

蹴ろうとする。

「マリネ、止める！」

ショタインが叫んだ。はつと我に返る。頭に血が昇り、危うく最悪なことをするところだった。

マリネは冷静になり、回り込んで左手でハクアの体に触れ、発動させたパルス系超能力『フル・ダンス』を解除した。これは、ハクアが戦いの中で感づいた通り、動かそうとする意志と逆方向に体を動かしてしまう能力である。単純な肉弾戦闘派ほどの超能力は相性がいい。

元に戻すと、ショタインと田が合つた。

「手こすつたら第一段階で仕留めようと思つたけど、第一段階で十分だつたわね」

マリネは日傘の汚れを払い、レースの袋に直した。ここからはリーダーに任せることにした。

その間に、ハクアは通常の運動感覚になつたことに気づき、やつとパニック状態から覚めた。だが、すぐには立ち上がりず、地面にしゃがみこみ、ぜいぜいと荒い呼吸を漏らしていた。疲れやダメージよりも、まったく歯が立たなかつたショックが大きいのは誰の目にも明らかだつた。

ショタインは少し残念そうにハクアを見つめた。

「まあ、適応能力がいい くらいか。何も考えず突進するようではダメだ」

「……はあ、はあ……」

正直、ハクアは自分の戦い方を振り返る余裕もなかつた。

「この空間にあるものを使つていい、というのも通じなかつたみたいだな」

「確かになあ。俺はてっきりこっちに走つてくると思つてたよ」「そう言つてブッショウが苦笑いしながら歩いてくる。カボチも一緒にだつた。

カボチは手にハンカチを持つてゐる。失意に沈むハクアのそばに駆け寄ると、ハンカチで服の泥を払つた。

「マリねえは迎撃が得意なんだもの。こんなに汚れてかわいそう。お風呂入れてあげないと……」

「そうね」

マリネは、ハクアの経験不足が勝因みたいに言われたのが不満で唇をとがらせた。

「レンタルフォースつてこんなもんなのね。ちょっと拍子抜けだけど、可愛いからいいか」

だが、シユタインは険しい顔をした。

「これで力を測るな。本当に厄介なのは、銃を持ったフォース系だ」「忠告を伝えながら、ハクアを抱き起こすカボチを見た。

シユタインは冷静に、ハクアを含めた顔ぶれを見渡して考える。追跡隊に発見されたハクアをかくまうということは、タブレットで拡散波長を抑えたところで、いつかここは攻撃を受ける可能性が高い。自分自身を含めて、もともと性格が好戦的でもなく、破壊力のある能力を全員が持つてゐるわけではない。

だが、何としてもハクアを守らなければ、シユタインは重要な後ろ盾を失うことになる。ハクアの能力はわかつた。問題はこの猪突猛進の性格だ。うまく転ぶときもあるが、極めて危険な場合もある。運や相性次第というのは論理的なシユタインが最も嫌うことだつた。

「シユタインさん、お願ひです」

慣れない声に呼ばれて下を向く。ハクアだ。そのまつすぐな眼差しには胸を締めつけるほどの執念が宿つていた。

ハクアはいきなりシユタインの白衣をつかみ、顔を埋めた。

「シユタインさん、お願ひです、あたし、強くなりたい……」

体が小刻みに震えている。これは泣いているのではない。悔しくて顔が上げられないのだ。おそらく、このままの気持ちでは友人たちのもとへ笑顔で戻ることもできないだろう。自分も戦力になるといつた言葉を、絶対に取り下げるだろう。

シユタインは本当に強情で一本気な少女を見て、一瞬、過去の残酷な思い出が蘇つたが、鉄の理性でそれを抑えつけた。

「お前をかくまうのは契約だが、鍛えるのは契約外だ」

白衣にしがみつくハクアの両手に異様なほど強い力がこもった。シユタインは困つて目を閉じた。

「……と、言いたいところだが、あとで相談に乗つてやる」

ハクアがバツと顔を上げる。目がギラギラと輝いて、いま言ったことを早速後悔したい気分になつた。まわりの三人も意外そうな顔をしている。これまでの接し方と比べれば、それも当然だろう。

「まあ、やさしいこと」

マリネはじとつとした流し目でシユタインをひやかした。

「俺もそれなりの覚悟をした、と言つただろ」

懸命な願いに折れたことは否定しない。だが、これから戦いに向けて、やはりフォース系のパフォーマンスは徹底的に研究しておきたい、と考えたのもまた事実だった。

シユタインの部屋から、『ブレイクチャイサー』の面々が出てきた。白衣のシユタインを先頭にして、ラガーシャツのブッシュ、ゴシック服のマリネ、エプロン姿のカボチと続く。最後にハクアが出てきたが、希に借りている水色ワンピースは泥だらけに汚れていた。ハクアの表情は元気を失い、少し目を赤くしている。

聰里、タツヤ、希の待つリビングに入つてみると、急に狭苦しい感じになった。タツヤは真っ先に立ち上がる。

「ハクア！」

駆け寄ろうとすると、シユタインの白衣がさえぎった。

「騒がしいな。要件が済むまで静かにしていろ」

タツヤは一瞬立ち止まつたが、構わず駆け出し、ハクアのそばに行つた。

「ハクア、どうしてこんなに汚れてるんだ！」

「ああ、うん……あんな

すると、今度はマリネがハクアの前に立ちふさがつた。不機嫌な猫のような冷めた視線を向ける。

「お掃除よ、お掃除

「えつ うそだ！」

タツヤが感情的になつて叫ぶと、横からブッシュが肩をポンポンと叩いた。何も言わなかつたが、肩をつかむ手と、高いところから見下ろす細い目には少し威圧感が込められていた。タツヤはぐつと息を飲む。

聰里も立ち上がり、用意してきた封筒から契約書を取り出した。

「シユタイン、これに署名をくれる？」

「これで 四人目か」

そう言って契約書を受け取ると、さつと一読した。

「おそらくキー・プタブレットはこの人数が限界だ。これが最後だ」

「……そんなに、いないわよ。もつ

「まあ、そうだな」

シユタインは深い溜め息を漏らした。何が言いたかったのか、『ブレイクチャイサー』のメンバーと聰里は察したが、タツヤと希は戸惑うような表情をしていた。

「さとりん

突然、ハクアが一步前に出る。

「どうしたの？」

「本当にこれで　心配ないんだな？」

「ええ、約束するわ

聰里はそばに寄り、小さな妹を落ち着かせるような感じで髪を撫でた。だが、ハクアは浮かない顔のままだった。そして懇願するよう聰里の目を見る。

「一人とは、話せるようにならないか？」

すると、聰里はハツという表情を見せ、振り返った。

「それは……シユタイン、どうするの？」

「悪いが、ここに電話はない。一般回線を使うわけにはいかない」

「別の方法はないの？　また何か条件提示が必要？」

「いや　それは要求しない。そうだな。明日から、俺のバスチエッカーを使って午後五時ちょうど一日五分間ハクアとしゃべれるようにしてやる。これを持つて帰れ」

シユタインはそう言って壁にかかっていた小さな天狗の面をひとつ外してテーブルに置いた。聰里は唇をとがらせる。

「五分か……」

「うるさいな、それなら十分だ。それ以上は勘弁してくれ

「じゃあ、それでこちらはOKよ」

そして、シユタインはテーブルに契約書を置くと、末尾の署名欄にサインをした。ニックネームでなく本名の秀多院相夢の名を書き、聰里に返す。

「これで済んだな。あとはこっちの問題だ」

聰里は受け取り、サインを確かめた。

「じゃあ、タツヤくん、希ちゃん、私たちは帰りましょ！」

そのとき、タツヤはハクアの手をつかんで、じっと田を見た。

「ハクアはこれからどうなるんだ？」

「たつ…」

ハクアは答えに詰まつた。それをかばうように、聰里が穏やかな口調で話しかけた。

「タツヤくん、私から話すわ。ハクタローも十分わかつてないしね。今日からハクタローは『ブレイクチャイサー』の一員になるの。つまり、シユタインが保護者になるわけ。ここなら追跡隊に突然襲われる可能性も低いし、メテオドロップの拡散波長を抑えるキープタブレットもあるからね」

「ハクアは、今日からここに住むの？」

「要するに、そうね。ハクタローがあの家に住みつけ安全だと思つ？」

「……思わないけど」

「そういうこと。荷物は私が車で運ぶわ」

「僕たちは？」

「もうここには来られないわ」

タツヤはこの言葉によつて胸の中にある何が爆発した。

「えつ？！ ねえ、何でつ？！」

「……あれだけ大変な入り方を見たでしょ？ ここは秘密の場所なのよ」

聰里はひるんだ。予想では素直に理解して帰ると思つていたが、まったく違つた。ハクアが何とか話せるように、と懇願してきた理由がわかつた。そして、ハクアをこの組織に預けるといふた立ち会わせてあげようと思つたことを少し後悔した。

シユタインが横から割つて入る。他のメンバーはじつと様子を見ている。

「聰里さん、半端な言い方は意味がない。いいか、少年、ここは俺たちのアジトだ。ここには俺のルールがある。はつきり言つぞ。お前たち一般人は出入り禁止だ。お前らが帰つたら、河川敷の看板の解錠方法も変える」

だが、タツヤは食い下がつた。シユタインの白衣に飛びつく。

「僕だって守りたいんだ！ ハクアと約束したんだ！」

しかし、その一言が今度はシユタインの逆鱗に触れた。タツヤの襟をつかみ、ぐいっと強く引き上げる。

「ここが安全でないとでも思うのか？！ この人数を誰が守つているかわかつてゐるのか？！ お前に追跡隊を倒す力があるか？！」

「僕らはハクアの応援団なんだ！ 会えないなんておかしいよ！」
襟を締められ息が苦しくて、がむしゃらに相手の腕を振りほどこうとする。けれども、シユタインの腕は太く頑丈で、ビクともしなかつた。

「ちょっと、落ち着きなさい！」

「朱鳥くん！ やめて！」

聰里と希はタツヤを慌ててなだめに入つた。だが、シユタインは聰里を押しのけ、タツヤの体を片手で持ち上げ、壁際まで力いっぱい投げ飛ばした。

「ふざけるな！ 本気で同じ生き方が望めると思うか？！ 僕たちがどんな思いで安全と自由を手にできるかわかるか？！ 甘く見るな、クソガキが！」

目の前でタツヤが突き飛ばされるのを、ハクアは呆然と見つめていた。一般人の友達と同じ生き方なんか望めない。シユタインが放つた一言が、覚悟を決めた心にハンマーみたいに重い一撃を与えた。安全も自由も失いたくはない。そして追跡隊に勝つための力も仲間も欲しい。友達の一人を巻き込みたくない。一人の安全と自由も、自分がここに入れれば大丈夫だと考えた。きっとそれは間違つてない。けれども、タツヤは床に転び、それでも立ち上がるうとしていた。

「ハクちゃん！ どうして黙つてるの？」

希が叫ぶ。ハクアは揺れていた意識が一気に冴えた。希が悲鳴のよに続ける。

「朱鳥くんは、誰のために、あんなこと言つてるの？！」

タツヤが自分に会いたいと、これほど強く願つてゐる。止めなくてはならないけれど、嬉しくて嬉しくて体中が震えて動かなかつた。胸の奥から温かい何かがこみ上げてくる。それが目元にじわじわと溜まりはじめたのがわかる。

だけど、ここは他の誰でもないハクアが自分で制するべき場面だつた。幸せな気持ちを噛み殺し、氣を奮い立たせる。

「たつづん！ 待つて！」

タツヤは振り向いた。

「あたしの考えを言うから、待つて」

「ハクタロー、あなた、責任があるのよ」

即座に、聰里が毅然とした態度で釘を刺した。強い眼差し。

子供だから言わなかつたけどね、無理を望むなら、代償は必要なのよ。

あのときと同じ。聰里がハクアに甘いことを言つたことなんか一度もない。自分でできるから、大丈夫だから、そう言つていろいろな安全策を断つてきたのはハクア自身なのだ。でも、だからこそタツヤと希に会えたし、大切な約束を交わすことができた。

自由を与えてくれた二人への感謝の思いはあふれて止まらない。けれど、もう正直に言わないとダメなのだ。

「たつづん、これは約束を破つたことにならないよ。あたし、この町に残れるだけでも嬉しいんだ。たつづんと話せる距離で暮らせるだけでも嬉しいんだ」

だが、当然タツヤはまったく納得のいかない顔を見せた。

「……お前、なに言つてるんだ。こんなのが全然違うじゃないか……」

「そうじゃない。あたしはここで追跡隊を迎撃つ」

「意味がわかんないよ。応援団は、僕らじゃないのか？」

「あたしが一番つらいのは、一人の前からいきなり消えてしまうこ

となんだ。あたしは、ここにいる。間違いない、ここにいる。近くで、安全な場所にいれば、ちゃんと話もできる」

つまり、それは事実上の解散宣言だった。

聰里は三人の子供たちの様子を見つめる。事情は全部ハクアから聞いていた。希が作ろうと言った小さな輪。それは、ハクアにとつて唯一本音を打ち明けられた小さな世界。訓練学校の輪から一度逃げ出したハクアからすれば、新しい未来はここから生まれると思えたことだろう。何でも隠さず話していいなんて、絶対に秘密を守ってくれるなんて、嘘みたいな驚きと感動だったに違いない。

同じ場所と、近い場所、隔たりのないことと、隔たりのあることと、子供にとって、これは決定的な差だ。だが、いまハクアは自分で苦渋の選択をした。自力で抗うことへのこだわりを捨て、覆いくる暗闇を打ち払う一筋の光明に頼ったのだ。

ハクアだけを見れば大きな成長だが、三人の友情にとつては大きな区切りだった。

タツヤは少し静かになった。希もすっかり呆然としてしまつている。

聰里は、これ以上ハクアに話しつづけるのは残酷だと感じた。
「……そうなの。この町にハクアを住ませたのは、この組織があるから。いざというとき頼れるからよ」

ハクアをかばう空気を察して、『ブレイクチャイサー』のメンバーも口を挟んだ。最初に口を開いたのは、三人と年齢が一番近いカボチだ。

「そうそう、毎日しゃべれるならいいじゃない。シユタインさんが一日十分つですつごい大サービスだよ！」

それから、マリネがハクアに腕をからませ、薄ら笑みを浮かべる。
「ハクア、あたしがあの少年を忘れさせてあげよっか」
横からブッシュが言いとがめる。

「マリネ、余計なことを言つた。相手は思春期だぞ」

「ちょっとお。あたしもよ

「マリネがふくれつ面をすると、カボチも一緒にクスクスと笑った。場の雰囲気は何となく歪んだ感じにゆるんだ。ハクアは、とりあえずマリネの腕のからみをほどいて、田元を少し指先でねぐうと、まつすぐタツヤに向き合つた。

「大丈夫、全部終わつたら帰るよ

それは 曇りのない声だつた。

「……ということだ」

シユタインが素早くまとめに入る。怒りは少し収まつていた。

「マリネ、カボチ、ハクアを風呂に入れてやれ

「はーい」

二人が揃つて愛らしく答える。シユタインが普段そんな気遣いをするわけがない。要するにもう騒がしいからハクアを奥へ引っ込めろ、というシユタインの命令だと受け取り、マリネはハクアの手を引き、カボチは背中を押し、バスルームへ連れて行こうとした。ハクアも鈍感ではない。幕を下ろしたのは自分だ。このまま別れの顔を見せないほうが心は苦しくない。下唇を噛むハクアの顔を、マリネが愛おしげに覗き込む。

「ねえ、ハクア、一緒に入る？」

「マリねえ、三人は狭いよお」

「はつ？ ジヤあ、あんたは外だわ」

ハクアは、タツヤの家に泊まり、希や由果と入つた楽しい風呂を思い出す。それだけじゃない、次々と頭にたくさんの思い出が湧き出してくる。初めてメテオドロップのことを打ち明けた日の夕焼け。二人乗り自転車で必死に追いかけたこと。一緒に乗つた夜のバス。広場から見上げた最高の星空。何とか押さえつけようと、拳を握りしめた。

「ハクア！ 全部終わるのつていつだよ！」

タツヤの声が背中に届いた。ハクアは固く目をつぶる。振り返つたらダメだ。

「いつ終わるかだと？」さつきから聞いてると、少年、君は物事を暗く考えすぎだ。世界に、永遠の別れというのは命の終わり以外にないだろ？離れて終わりなら、それは君の精神力の問題だ。シユタインが妙なことを言つ。ブッシュは不穏な気配を嗅ぎ取つた。一旦収まつていたシユタインの顔がまた修羅のように険しくなつていく。だが、タツヤは臆さず言い返した。

「僕は何もおかしい」とを言つてない！暗いのはハクア、お前の顔だよっ！」

タツヤは廊下の奥まで届くよつ力強く叫んだ。脱衣所のドアノブを持つマリネの手が一瞬止まる。ハクアは表情を隠した。マリネは溜め息をつき、脱衣所の中に押し込んだ。

一方、リビングではシユタインがタツヤの前に立ち、肩に右手を置いた。

「少年……仕方ない、これも教育だ。もつと世界を明るく見えるようにしてやるの」「はっ？」「はっ？」

タツヤは顔を上げる。

「待て、シユタイン！」

咄嗟にブッシュがシユタインの背後に飛びつき、右手を引き離した。

その勢いでタツヤは後ろによろめいた。ブッシュはすかさずタツヤの腕を取り、引っ張つてドアまで走つた。タツヤは足がもつれながらわめき散らす。

「引っ張るなよ！やめてよ！」

「うるせえな、お前が意地を張れば、あの子もお前もみんな犠牲になるんだよ！」

ブッシュは大声で叱りつけた。

「やめてよ！やめてつたら！」

「歯向かう相手を間違えるな、バカ野郎ッ！」

そのままドアを開け、階段へと放り出した。すぐにドアを閉める。

数字錠でオートロックされる音が鳴った。

「朱鳥くん！」

希がドアのそばに駆け寄った。内側から開けたいと思ったのだろう。そこにブツシユが立ちふさがる。中学生の大きな体は頑として動かなかつた。ドアの外ではタツヤが必死にドアを叩き、「開けてよ！ 開けてよ！」と叫びはじめた。

「ブツシユ、やつき止めてくれて助かつた。猛烈に気分が悪い。すまない、あとは任せた」

シユタインは白衣を翻し、自分の部屋のほうへ消えた。数字錠のドアの外からは、聰里に番号を聞くタツヤの声が続いている。

「お願い、入れてあげて……」

希は気力が尽きて、その場にへたりこんだ。

「聰里さん」

ブツシユは鋭い声で聰里を呼んだ。

「これで、俺の能力を使つたら全部片付くけど、そんなことしたくない。この一人をちゃんと連れて帰つてくれ」

「あ、えつ」

聰里は気圧される。ブツシユは大人への怒りをあらわにした。

「連れてきたあなたの責任だ！」

「そうね。ごめんなさい」

聰里は頷き、希を抱き起こした。希は感情をむき出しにして、首を横に振る。ハクア応援団はハクア自らが幕を下ろし、頼みのタツヤは隔たりの外へ追い出されたのだ。もはや何を訴えようにも希だけでは無力だつた。聰里は希の肩を抱きながら、息を整える。

「朱鳥くん、希ちゃん、帰りましょう。ハクタローの言葉を信じられないの？」

ドアを叩く手が止まる。

「お願い、私の忠告を聞いて。これ以上ワガママ言えれば、シユタインはあなたたちとの関係を断つわ。話すこともできなくなるわよ。一番悲しむのは誰？ あなたたちとの再会を待つあの子じゃないの

？」

そして、リビングはようやく静かになつた。

地上に出ると、聰里は裾の汚れを払つた。タツヤもそつだが、希はもつとひどく意氣消沈してしまい、階段を上がる足取りも重く、タツヤは手をつないで地上まで戻つてきた。天狗の面は希が胸に抱えて持つてきた。

河川敷には、聰里の車と三人の自転車がある。秘密の地下世界から追い出されたわけだが、もう一度と入れないとと思うと、ハクアを残してきたことへの強い後悔の思いがタツヤの心を霧のようになに覆つた。それなのに、聰里は母親みたいに一人の頭をやさしく撫でる。「あなたたちも危険なのはわかるでしょ？ いまはハクタローとあなたたちを離れさせるしかないの」

希はこくんと頷いた。タツヤも一応合わせた。

「じゃあ、私は仕事があるから帰るね。帰り道、気をつけたね」

「……ハクアの自転車は？」

「心配ないわ。ちゃんと保管しておくから」

聰里はこやかに手を振り、車に乗つて去つた。

残された一人は、とりあえず自転車を押しながら、河川敷の夏草を揺らす川風に吹かれて歩いていた。すぐ自転車に乗る気分にはなれなかつたのだ。歩こうと言つたのはタツヤのほうだつた。

「月本さん、これでいいと思つ……？」

「私もさびしいよ」

「そうだよな！ 頑張つて頼めば何とかなると思つんだ。聰里さんにお願いしようよ」

だが、希は沈んだ顔のまま、首を横に振つた。

「でも、大人に頼ろうと言つたのは私たちだもん……ハクちゃんが言つたのは間違つてないよ」

タツヤは希の答えに驚いた。

たつづん、これは約束を破つたことにならないよ。

あの言葉はもぢろん嘘じやない。だけど、タツヤは言葉じやなく、顔をじつと見たのだ。さびしさを我慢している、あの悲しい目。ハクアは約束を破つたと内心は思つていて。タツヤはそれがわかつた。本当は離れなくない、自分たちがそばにいるからハクアは楽しい生活を送ることができない。 そう信じるだけの思い出や誓いがあるはずだった。

一方、希の態度は、隔たりができた瞬間からあきらめに傾き、それをタツヤにも納得してもらおうとしているように見えた。ブッシュが最後に投げかけた、意地を張ればみんな犠牲になる、という説得は確実に希の心に影を落としていたのである。あれはタツヤにも聞こえていたわけだが、ブッシュの迫力と真剣さを肌で感じてしまったつまり、ドアの中と外の違いでもあった。

タツヤは希の態度に腹が立ち、その場で足を止めた。希も止まる。

「あれがハクアの本心なわけないよ！」

「そんな……ハクちゃんは私たちに嘘なんかつかないよ……」

希の顔には明らかにタツヤへの怯えが浮かんでいた。歯向かう相手が違う ブッシュの言つたことが再び希の胸をとらえる。希が、いままでずっと頼りにしていたタツヤのことを疑つてしまつたのはこれが初めてだった。

「そうだよ！ ハクアもあいつらもみんな正しいよ。間違つてるのは僕なんだ！」

「ううん……そんなこと言つてないって」

「 月本さんまで僕をハクアから離そつとするんだな」

「やめてよ！ 違うつたら！」

タツヤは自転車のカゴに入れた天狗の面を見ると、ふつふつと悔しさや憎らしさが込みあげてきた。

「これ、あげるよ。声なんか聞いたら、我慢できなくなる」

天狗の面を渡す。それは希だつて同じだ。話したら会いたくなるに決まつて。けれど、ハクアが話したがつてているのに嫌がるなん

て絶対できるわけない。ハクアのためにと思つて持つてきたのに、どうしてそれを渡すのか。希もハンドルを握る手が震えた。

「待つてよ！ ハクちゃんが聞きたいのは朱鳥くんの声じゃないの？」

だが、そのとき逆にあきらめ顔をしたのはタツヤのほうだった。

「……僕も暗く考えないようにするよ。それを持つてると、とにかくつらいんだ」

それはタツヤの隠せない本心だった。

「なに言つてるの？！ ふざけないでよ、応援団じやないの？！」

ただ、希もさつきまで同じ顔をしていたわけで、一方が弱音を吐けば一方が怒りつける、どうにもならない状態だった。そして、タツヤにもまた譲りたくない意地があつた。

「全部終わるまで大丈夫って言つたのはハクアだ！ そんな応援団に意味があるのかな？ 用本さんはハクアを正しいつて言つたけど、ほんとにそう？ ちゃんと本音を言えよ！ 僕はこんなのは許せないよ…」

「…………うわ、うわ、うわあああつ…………！」

ずっと堪えていた涙がいきなりあふれ出し、希はとうとう声を上げて泣き出した。

希を泣かせたのは、タツヤはこれが初めてだつた。高ぶつた感情のせいでこれ以上言葉が出てこない。小さい頃から仲が良くて、希が何かで涙を浮かべる度に、いつも味方になつてなだめてきたタツヤだが、自分が責めたことでこつなると完全に困惑してしまい、いつも立つてもいられなくなつた。

「泣いたつて仕方ないじゃないか！ 我慢しろよ！」

真っ赤な顔で言い捨てる、天狗の面を希のカゴに入れ、力いっぱい自転車を漕ぎ出した。追いかけてくるかと思つてすぐ振り返つたが、希はその場で泣いていた。けれど、もつ戻ることはできなかつた。もう何が何だかわからなくて、とにかく身を裂かれそうな苦しさから逃げ出したかった。

それを、天狗の面を通じてパストエッカーで聞いていたのはシユタインだつた。自分の部屋でイスに座り、沈痛な面持ちで「コーヒーを飲んでる。シユタインは夏でもホットコーヒーである。」プラックでしか飲まない。

部屋にはブツシユだけがいた。ただ、パストエッカーで話が聞こえるのは能力者のシユタインの耳だけだ。ブツシユは追い出した後味の悪さを紛らわすために、シユタインの部屋に来ていた。

シユタインは向こう側に声が出ないように、パストエッカーの能力を解除した。

「まあ とりあえず、ヒーロー気取りは帰ったようだ」

目を閉じたまま、低い声でつぶやく。ブツシユは腕組みをして溜め息をついた。

「少し……かわいそうだな」

ここに集まつたメンバーには、みんなあれだけ心配してくれる友達がいなかつた。ブツシユも能力が覚醒したあとは、ずっと普通の友達には秘密にしていたことを思い返す。ここにかくまわれるまでの話だ。本当の意味で運命を理解し、一緒に生き方を考えてくれる仲間は、ここで初めて会つたのだ。

だから、ハクアを必死に引き止めようとしたタツヤたちに對して、冷たく、あるいは厳しく言つたのはどこか底知れない羨ましさがつたのは否定できない。

「そう思うか？」

しかし、シユタインは顔色ひとつえていなかつた。

「お前は 甘さで消息を絶つた同朋にそれが言えるか？」

その通りだつた。リーダーの非情さがあるからこそ、ここでの安全が守られているのだ。いや、それでも多少は同情する気持ちがあつたから天狗の面を渡したのだと思うが、そうさせたのは一人を連れてきた聰里の思いやりだらう。こうこうとき、ブツシユはシユタ

インの真意が見えなかつた。

「ははは、同意を求められても……ついにな」

「いや、お前は副リーダーなんだ。これと並んでは判断してくれよ」

「恐いこと言つなよ」

ブッシュは苦笑いしたが、ショタインは複雑な顔つきで田を見つ

めるだけだつた。

バスルームから少女三人が出てくると、リビングは一気に賑やかになった。カボチは鼻歌を歌いながら冷蔵庫のジュースを取りに行き、マリネはついでにアイスレモンティを頼んだ。真ん中に入るハクアはリビングに誰もいないのを見て、ひどく残念そうな顔をした。

「あ、たつづんとのぞみんはもう帰ったのか……」

「みたいね」

マリネはにこやかに答えた。バスルームではシャワーの音であまりリビングの物音は聞こえなかつた。たぶん、あの様子だとハクアの友達たちは帰り際に粘つただろう。駄々をこねて暴れたかもしれない。ただ、最終的には脳里が説得して連れて帰つたと想像できた。それと、もうひとつ対応策があつた。シータインから、ネットワーク系第二段階のジャミング・バードという能力をバスルームに発動しておいたから、合図をしたら連れて行けと命令されていたのだ。ジャミング・バードは、発動した空間において外部からの音声や通信をすべて遮断する能力だ。だから、リビングの声や物音は何ひとつバスルームに届いていなかつたのである。

あらためて合理的で非情な人だ、とマリネは思うが、あのときリビングでハクアが動搖し大騒ぎになつていたらと思うと、常に早く物事が進む方法を選択する人だと敬服する。もちろん、これはハクアには話せない。

「しばらく会えないんだな……もうちょっと話しておけばよかつたな」

ハクアは純粋な心でしょんぼりとしてテーブルに着いた。着替えの服はカボチのシャツを借りていた。マリネもそばに座る。ハクアに自分のゴシック服をいろいろ着せてみたいが、それは明日からにしようと心に決めていた。

冷蔵庫の前でカボチが元気いっぱいに振り返つた。

「もう、なに暗い顔してんの？ 毎日話せるじゃない！ それよりハクアは炭酸がいいかなあ？ さつき『一ラが好きって言つてたよね。『ごめーん、サイダーでもいい？』

「あ、うん。ありがとう」

カボチは話を変えてしまう天才だった。

タツヤは部屋のベッドに『ころん』と横になり、希からの返信を待っていた。携帯に電話をかけたし、メールも送つたが応答はなかつた。ちゃんと家に帰つたか心配だったのだ。あんなふうに泣かせてしまい、ひどいのは自分だとわかつていた。だから、きちんと謝りたかつた。実は、途中で一度引き返したのだが、そのときはもう河川敷に希の姿はなかつた。すれ違つてしまつたのだ。仕方なく一人で帰宅した。

父の廉太郎が、昼はみんなで外食に行こうと誘つてくれたが、タツヤはお腹の調子が悪いと言つて部屋に入った。それで、廉太郎は妹の由果と一緒に出かけて行つた。

本当に、何も食べる気にならなかつた。いま『ころハクアはあのアジトで超能力者たちと仲良く昼ご飯を食べているかと思うと、起き上がる気力も湧かなかつた。

しばらくして、ようやく希から返信が来た。メールだつた。

『心配してくれてありがとう 帰つたよ 今日はもう大丈夫』

それだけだつた。

こつちも『もう大丈夫』か。いまなら出ると思つて電話をかけたが、希は出なかつた。苛立ちが増して、携帯を床の上に放り投げた。どうすればいいのか、本当にこのままいいのか、誰に向かつてぶつかつたらいいのか、頭の中が煮え返り、冷静さを失つているのはタツヤも自分でわかつている。

本気で同じ生き方を望むのか？

お願い、私の忠告を聞いて。一番悲しむのは誰？

そんなもの、全部大人の理屈じゃないか！ 会えないことにどんな理由をつけられたって、会いたい気持ちが抑えられるわけないじゃないか。応援団会議のあと、みんなが帰ってしまったとき、ハクアは何て言つたんだ。

いま、たつとんと離れたくない。

「僕は、あの言葉を信じたんだ！ ハクア、僕だつてお前と離れたくないんだよ！ 守りたいのに、守りたいのに……！ ふざけるなつ！」

枕をつかんで思い切り壁に投げつける。

そのとき、床に落ちた携帯が新しいメールを受け取る音が鳴つた。

拾うと、意外にもそれはアランだつた。

『ごめん、月本さんから事情を聞いた。応援団は終わりじゃない。

お前に言いたいことがある。明日、話そつ』

応援団は終わりじゃない、という文字を見て、ふうと熱い息がこぼれ落ち、タツヤは目をつぶつた。

ハクアは硬い表情をなかなか崩せず、口数も少ないままだつたが、まわりはお構いなしという感じでテキパキと動いていた。カボチが夕食は豪勢にするから、ということで昼はごく簡単に済んだ。そして午後は、部屋にこもつたシユタインを除くみんなで物置を片づけ、ハクアの寝室を新しく用意してもらつた。

最初、マリネは面倒だからハクアとルームシェアでもいいよと申し出たが、ブツシユがマリネに「お前、思春期なんだろ。危険すぎる」と言つて却下した。がつかりするマリネを見て、カボチはこうこう笑い転げた。

ハクアは一人じぱらく浮かない顔をしていたが、みんなと一緒に体を動かしていると、だんだんこの地下アジトの雰囲気にも馴染んでき、自分からまわりに話しかけはじめた。しかも、タツヤや希のことを気に病む度に、カボチが次から次にテンポ良く話を変えて

しまい、ハクアを沈ませることはなかつた。ブッシュも、マリネも、カボチも、新しい仲間が増えたことを心から喜んでいた。そして、絶対に離したくなかったのである。

たっぷり体を動かしたので、夕食はいつもより早めの時間になつた。カボチは精一杯腕をふるい、マリネも適当に手伝つて、テーブルの隅から隅まで料理を並べた。ハクアの大好物のハンバーグをはじめ、山盛りの唐揚げ、バンバンジーの野菜サラダ、ビーフシチュー、ソーセージピザ、特大焼豚チャーハンまでの見事な肉祭りである。

これだけ出されて、最後にお得意のカボチャケーキが登場したときは、ハクア以外はちょっと食傷気味に苦笑いした。シュタインも普段は食糧の備えに口づるとい性格なのだが、今日に限つては何も言わなかつた。

「ハクア、ほんとよく食べるわね」

マリネが食後の紅茶を飲みながら、ハクアの手をいじりつつ、ところとした目で見つめた。

「うん、肉が大好きなんだ。なんか、こんなに食べてみんなに悪かつたかな」

「遠慮しないでいいよ！ わたし、すっごい嬉しいの！」

カボチは、シュタインにコーヒーのおかわりを出して、イスに座つた。シュタインはいつもだと食事が終われば部屋に入つてしまつたが、今日は珍しくずっとリビングに残つてゐる。ハクアとメンバーがうまくやつていけるか観察しているようにも見えたが、それよりは穏やかな表情であつた。

ハクアは自分のケーキが食べ終わり、マリネが一口だけ食べて残したケーキをもらつた。

「なあ、マリネはダンス系つて言つてたよね？ カボチとブッシュはどんな能力なの？」

カボチはシュタインの顔色をちらりと窺つた。シュタインは特に何も口を挟まない。

「えっとねえ、ライン系という名前よ」

「ライン系？ そんなの訓練学校で一度も聞かなかつたなあ。ダンス系もここで初めて知つたし」

「えへへつ、最近のやつなの。フォースとかより可愛い名前でしょ？」

「ふーん、そうかな。で、どんな力なの？」

「あ、それは内緒なの。ごめんねつ」

カボチは舌を出して笑つた。ハクアは仲間なのにどうして内緒なのか不思議だつたが、いつか岩石ドームでトレーニングをすれば教えてもらえるのかな、と何となく思った。続いてブッシュのほうを向く。

「ん、俺か？ 俺はハート系だ」

「ハート系か。ふーん……それも初めて聞いたなあ。で、どんな力なの？」

「いや、うん、それは内緒なの。ごめんねつ」

ブッシュも舌を出して照れ笑いした。作った気持ち悪い声色だ。カボチがいきなり噴き出し、お腹を抱えて笑つた。

「おいつ、なんじゃそりやああつ！ 似てねーし！ ハート系、超可愛い名前だし！」

真似されたのを怒るかに見えたが、むしろ足をバタつかせて喜んでいる。どうも変なツボに入ったようだつた。ヒーハー言つている。カボチの弾ける笑顔を見ていると、ハクアも何だかすく楽しい気分になつた。

「そうだ。あのさ、二人とも第一段階なの？」

そう聞くと、またカボチはシュタインの様子を窺つた。能力のことになるとだいたいこの反応なのだ。超能力を持つ仲間同士なのに、どうしてすつと話してくれないのか変に感じる。とりあえず、シュタインが答えてくれた。

「全員第一段階だ。ここに来てそこまで行つた」

「そつか……じゃあ、第一段階はあたしだけか。シュタインさん、

どうかお願ひします

ハクアは頭を下げた。

「まあ 明日、メテオドロップの原理を話してやる

シユタインはそう言い残して部屋へ戻った。

リビングの雰囲気は、シユタインがいるときとしないときでは少し違う。カボチは常に細かく機嫌を見ているように思えるし、ブッシュは一步引いて様子を見守っている感じがする。態度が同じなのはマリネくらいだ。

「……ハクア、あんたさあ

横からマリネが猫なで声を出した。手は触ったまま。カボチとブッシュはキツチンで皿洗いをしている。今日は一人が当番らしい。その日が届かないところで、マリネがじりっとハクアに身を寄せてくる。

「自分が能力を持つて、幸せだと思ったことはある？」

「あるよ……そんなの、いっぱいあるよ！」

ハクアは自信たっぷりに答えた。最近だけでも、不良を倒したり、引つたくり犯を倒してたり、道案内をしたり、追跡隊から身を守つたり、そして何より信頼できる友達ができた。指を折りはじめたハクアの手を、マリネは優しく握りつぶして止めた。

「へえ……」

瞳の奥に、力試しで向き合つたときよりもっと冷淡な色が浮かんでいた。

「あたしは一度もない。なればよかつたと思つてゐ

「えつ、どうして？」

「一生ずっとお薬を飲むんだよ。存在を、消す、薬を　ね
噛んで噛めるようにつまづくつと言つた。

同じ日の夜、訓練学校の作戦会議室に、天童の率いるアメリカンチエリー隊が集められた。緊急の集合だった。羽島こだまも、体調は万全ではないものの、医務室から出ることは許された。ただ、外出許可はまだ出ていない状態である。

天童の妹、紅花もこだまの具合をしきりに心配したが、薩摩つばさが来ると、天童は会議室の明かりを落とした。緊張感が一気に高まる。つばさは報告書をスライドで投影した。ハクアの拡散波長を計測したグラフだった。不規則な波形が映し出される。超能力を使っている証拠だ。一週間前に限界近くまで使った形跡があり、拡散波長が最も高く放出されており、そこからゆるやかに下降していたが、先日また高い数値を出していた。これが、こだまと交戦した日である。

ところが、今日は極小値まで一気に下がっていた。場所の特定がかなり難しいレベルである。こうした状況をつばさは淡々と説明した。

「報告、終わりです」

つばさは席に着いた。

「作戦を伝える」

続いて、天童が口を開く。

「可能性は、いまのところ三つ考えられる。一番考えられるのは、寺野ハクアが遠くに移動したことだ」

隊員の三人と一羽は黙つて聞いている。

「一つ目は、かなり可能性は低いが、拡散波長が抑えられたこと」「えつ、そんなことが？」

こだまは思わず声を上げた。

「三つ目は、その両方だ。いずれにしても、身柄確保よりも情報収集が先になった。もし仮に追跡阻止の支援者が現れたとしたら、こちらの戦力としても、こだまの回復を待つ必要がある。実戦は数日置いて行いたい」

「……ご迷惑をかけて、申し訳ありません」

「こだまは深く頭を下げる。天童は困ったような優しい笑顔を見せた。

「謝るな。隊長の俺が悪かった。とにかく、何か対策を打たれたのは明らかだ。まず、一緒にいた少年少女から情報を聞き出そう。これは面の割れてないつばさと紅花に頼みたい」

「はい」

「はいっ！」

「一人とも威勢のいい返事をし、お互い顔を見た。紅花は兄の天童に、つばさと同等に扱われたことが嬉しかった。紅花もまた、前回の作戦が失敗した原因のひとつだと自覚している。意氣込む一人に、天童は声をかける。

「一般人にはできるだけ接触したくないが、このままハクアを逃すわけにはいかない」

次に、こだまの表情を確認する。

「こだまは基本的に待機、つまり休養だ。ただし、銃撃の精度を上げてほしい。一日三時間のシミュレーション練習をしてくれ」

「は、はいっ！」

そして、天童は隊服の襟を少し直した。慎重に伝えたい言葉が控えていたのだ。

「それから、俺から校長に頼み、一般訓練生へのキープタブレットの配布を明日からしばらく停止してもらうことにした。校内は、能力訓練は禁止し、体力訓練のみとなる」

三人の顔色がサッと曇る。南国九官鳥のデンロクも緊張が伝わりバサッと羽を広げた。

「安心しろ、君たちの分は内密に確保してある」

「それは……？」

こだまは不安げな目で天童に問い合わせる。

「まだ推測の域だ。だが、火のないところに煙は立たないと思わないか？」

「そうですね」

つばさは神妙に頷いた。

「横穴があるならば、圧力をかけて あぶり出しにかかるまでだ」
そして、天童は緊急会議の終了を告げた。

アジトでの一日が過ぎ、ハクアは早起きしてリビングで一人待つていた。

服や靴といった身の回りのものは、昨晩いつの間にか届いていて、ハクアらしい普段のスポーティな服装に戻った。家の合い鍵を持っているのは聰里だけなので、きっと聰里が運んでくれたのだろう。ただ、アジトの中には顔を見せなかつた。タツヤも希もそうだが、しばらく別れる挨拶ができなかつたことが、ハクアには寂しかつた。カボチが朝食を作るために起きてきて、ハクアと顔を合わせて驚いた。

「ハクアは早起きなんだね」

「いや、シユタインがメテオドロップのことを教えてくれると言ったから」

「えへへっ、シユタインは顔は恐いけど、優しいんだよ」

カボチはエプロンを着ける。朝起きて、家族 じゃないけれど、仲間がいる生活が始まつたことがハクアの胸を静かに捉えた。何だか温かい。何も隠す必要がない。キッチンからふんふんと弾む鼻歌が聞こえ出す。これが、守られているという安心感なのだろうか。

「ん？ そうかな。あたしは顔が恐いとは思わないけどなあ」

「それは、ハクアを気に入つてるんだよ」

「気に入つてる？」

「そう。ちょっとズルイくらいにね」

カボチはハクアに背中を向けながらそう答えた。

シユタインはコーヒーを飲み終えると、ハクアを連れて最下層の岩石ドームへ向かつた。銀縁メガネはそのままだが、今日は白衣ではなく、真っ白いジャージを着ていた。

リビングでは、ブッシュが眠たそうな顔でトーストをもぐもぐしながら見送ってくれた。目が細いせいもあるが、完全に寝ているようには見えない。カボチは向かいで漫画を読んでいる。それと、マリネは起きてこなかつた。これはいつものことらしい。一度寝か、三度寝をしないと起きられないと昨日の夕食後に自慢げに言つていた。

シュタインは岩石ドームに入ると、壁に触れて全体を明るく照らした。

「すごい便利だな」

「そう言えば話してなかつたな。これはルクス系だ。第一段階で暗くする。第一段階で明るくできる

「あ、暗くすることもできるんだ。なあ、それつて人の体に触れたらいどうなるの?」

ハクアの質問に、シュタインは一瞬ためらつた。昨日、友人たちを追い出した騒ぎを思い返したが、あのときハクアは風呂場に連れて行つた後だつたはずだ。話して問題ないと判断する。

「第一段階の『カミング・ダーク』は一時的に視界が少し暗くなる。第二段階の『ホワイト・アウト』は本気でやれば失明する」

「失明つて……見えなくなるのか? あたしが視力を借りるみたいな感じで?」

「お前の場合は時間が経てば戻るだろ? 俺の力は視神経を破壊する。違いが分かるか?」

ハクアは黙つた。その場に硬直し、なぜそんな恐いことを平氣で言つのか、という顔をしている。当然だろ?

「メテオドロップの原理を教えてやる。世界はどう創られているか知つているか?」

首を横に振つた。

「世界は、全体のバランスが一定に保たれるように創られている。研究者の間ではトータル・クリエイトと言うが、まあ、それは覚えてなくていい」

ハクアの顔は曇つたままだが、シユタインは構わぬ続ける。

「レンタルフォースは人間の力量を移動させる。お前が強くなれば、相手は弱くなる。この原理は、エリア系だつてそう同じだ。『マグネティック・エリア』は体験済みだろう？ あれは発動したところに円形の重力場を作るが、実はその周辺の広範囲でわずかに重力が軽くなつていて。まあ、体感できるレベルではないが」

シユタインは一呼吸置いた。

「……難しいか？」

「大丈夫です」

「つまり、世界全体のバランスが変わらないから、誰かが強くなれば、誰かが弱くなる。どこかが変化すれば、別のどこかが逆向きの変化をする。そういう原理になつていて。メテオドロップはその単なる調整弁に過ぎない」

ハクアは複雑な顔つきで首を傾げた。

「お前は、勝つためにどうすればいいか？ 答えは簡単だ。相手を無力化すればいい」

「それはやつてる！ でも、追跡隊にもマリネにも勝てなかつた！ 触れなかつた！」

確かにハクアはレンタルフォースの戦い方を知つていた。シユタインはマリネとの力試ししか見ていないのだ。ただ、ハクアは、レンタルフォースを使いこなせないのではなく、この能力を知らない一般人ばかりを相手にしてきた。言わば、これまで奇襲だけで勝つてきたのだ。ハクアはその自覚がなかつた。

シユタインは訝然としないが、一応ハクアの言葉を信用することにした。

「だつたら、落ち着いて考える。どうして触れなかつた？」

「それは……追跡隊は銃を持つてたし、マリネは動きが早かつたし」「そのときまわりに何があつた？ 誰がいた？」

郊外の公園ではタツヤと希がいて、岩石ドームではシユタイン、ブツシユ、カボチがいた。ハクアはそのまま答えたが、曇つた表情

は変わらない。それが何だつたのか、と言いたげに唇をとがらせている。

「ハクア、お前の弱点は 視野の狭さと、自分への過信だ」

「かしん……？」

「難しかつたか、すまないな。お前はレンタルフォースで戦おうと思つてゐるようだが、それが読まれてゐる相手もいる。レンタルフォースに頼りすぎなんだ」

「でも、あたしは」

「いいか、絶対に勝つための三ヵ条を教える。リーダーである俺に約束しろ。一つ、突進するな。二つ、敵の行動範囲に入るな。三つ、右手は確実に捉えたときに使え」

シユタインは言い切つた。内心これはハクアの戦闘スタイルを全否定するものだろう。いくら約束しろと言つたところで、一朝一夕で何年も培つてきた性格が矯正できるとは思わなかつた。案の定、ハクアは野生動物のように猜疑心に満ちた眼光で睨み返してくる。

「そんなので本当に勝てるのか？」

「じゃあ、逆に聞こう。なぜ勝てないと思つ？」

「だつて、すごく弱腰じやないか！ 後ろに友達がいて、あたしが何とかしきやいけないとき、先手も打たない、相手に近づかない、この右手を武器にしない、そんなので何ができるんだ！」

ハクアはこれまで自分を救つてきた右の拳を力いつぱい握り締める。

その言い分はよく理解できる。シユタインは不意に、自分の果敢な少年時代を少し思い出した。大切な家族を背にして、シユタインは手に持つた物体に渾身の力で『ホワイト・アウト』を注入し、強烈な閃光弾に変えて投げつけた。それで逃げられるはずだつた。だが、能力はすでに把握されていたのだ。シユタインは苦々しい過去を胸にしまい、冷静な気持ちで少女に説いた。

「もつひとつ聞こうか。お前が戦つたマリネは弱腰だつたか？」

「……いや、そんなことはない」

「なら、正しいのは俺のほうだ。マリネはさつきの三ヵ条を徹底している。突進せず、お前の行動範囲を避け、右手は確実に捉えたとき使ったはずだ。違うか？」

ハクアは沈黙する。拳に込めた力は徐々に抜けかけていた。

「もう一度聞く、あれは弱腰か？」

「マリネの戦い方は、本当に正しいのか？」

シュタインは、ハクアが口にした正しさの意味がよく理解できなかつた。目的がまったく違う。敵よりも圧倒的優位に立つて倒すことでなく、自分が不利な状況を回避してこそ勝利だ。メテオドロップは力比べの格闘技ではない。ほとんどが一撃必殺でやられたら終わりなのだ。状況は覆らない。それはマリネのフル・ダンスをくらつて身に染みたはずではないのか。

思えば、あのタツヤという少年も繰り返し『どっちが正しいか』を感情的に叫んでいたが、もしかして正しさというものに一番こだわり、結果的に周囲の犠牲を生み出しているのはハクアではないだろうか。あの少年はその影響を知らずに受けているのではないか、とシュタインは感じる。だつたら、なおさらその考えを放置はできない。甘く接するわけにはいかない。

「強くなりたいとすがりついてきたのはお前だ。予想以上に頑固だから、もう一度言っておく。右手は確実に捉えたときに使え。能力者同士の戦闘は、先に手のひらを見せたほうが負けるんだ」

「……わかった」

本当にわかったとは考えにくい、渋い返事だった。だが、今はそれでいい。シュタインは話しそぎて、のどがそろそろホット「一ヒー」を欲していた。

「一週間後、マリネと再戦させてやる。それまでに勝つ方法をよく考えるんだ」

ハクアの目つきが変わった。

「もう負けない」

「ふん、言葉だけはいつも立派だな」

「あたしだつてみんなの力になりたいんだ」

青臭くて笑えてくる。過去の自分を本当に映したようにまつすぐで剛毅だ。ただ、こんなに面白い野獣はなかなかない。思い通り火の輪をぐぐるまで徹底的に鍛えたいという意欲がどんどん湧いてくるから不思議だつた。

「まあいい。俺の能力はだいたい三時間は持つ。ここで好きなだけ体を動かしていい。暗くなつたら出て來い。そしたら昼飯だ。肉を多めに調達しておいた」

シユタインはそう告げて、ハクアを一人残して岩石ドームを出た。

タツヤは妹と一緒に昼食を取つた後、自転車に乗つて一人で出かけた。行先は、市立図書館の裏にある大きな公園である。アランの住むマンションがその近くにあるのは知つていたが、家は弟がいて嫌だといつので、外で会うことになつた。

応援団は終わりじやない。お前に言いたいことがある。

公園に入つて自転車から降りて歩く。昨日アランが送つてきた携帯メールを読み返し、ポケットに入れた。タツヤは、昨日感情が高ぶり希を怒鳴つて泣かせてしまつたことをアランに叱られると思つていた。反省したつもりだつたが、あれから希とはメール交換をしていない。今日の午後五時、おそらくハクアと天狗の面で話すのだろうが、タツヤは行かないつもりだつた。用事があるのでない、希に合わす顔がないのだ。

園内を探すと、アランは先に来ていた。大きな木陰のベンチでぼんやり空を眺めている。自転車がないから歩いて来たのだろう。青いTシャツに白い半ズボンという夏らしい格好だつた。

「暑いなあ。アイスでも食うか？」

最初に叱られると身構えたが、意外にもアランは気をくに話しかけてきた。少し離れたところに売店が見える。

「……アイス？」

「要らないか。じゃあ、俺だけ買つてくれるよ」

「いや、僕も食べる」

「同じのにしようぜ」

アランはなぜか笑顔だった。そして、一人ともソーダ味のフローズンドリンクを買い、またさつきの木陰のベンチに戻った。タツヤは冷たいものはともかく、甘いものを食べたい気分ではなかつたが、同じのとこに響きにちょっと心が動かされた。

ベンチに並んで食べはじめると、希のことを責められると思つて、いた警戒心はすっかり解けてしまい、変な言い方をすれば拍子抜けだつた。最近アランと口ゲンカばかりだつたから、こんなに明るく接してくるのは驚きだつた。

「ハクアが脱走者の仲間になつたんだつてな」

アランが小声で切り出した。木陰だが、夏の空氣はずつとそこには止まつてゐる。汗だけが額や首筋にしみ出した。

「うん。まあ、もともと脱走者だけど、同じ人たちと住みはじめた」お互い超能力者という言葉は使わない。この炎天下にまわりに人がいるわけではないが、口に出してしまつと、まるで次元の違う存在に思えてしまつのが嫌だつた。ストローでいじる指が重い。だが、アランはズルズルと青いフローズンドリンクを吸つていた。ふー、大げさな仕草でこめかみを押さえる。タツヤはその明るさをじつと隣りで耐えていた。

「何か少しだけ通信できるらしにけど、これからもう会えないみたいだな」

「……何だよその言い方。アランだつて応援団だよな？」

「ん？ ああ、応援団だよ」

即答だつた。そこまできれいに返されると、タツヤは完全に言葉を失つた。

「言いたいことつて何だよ。はつきり言えつて！ そのために呼んだんだろ？」

アランは振り向く。

「いや、だつて　言われることはわかつてるつて顔してゐからさ
一瞬にして田の前から笑顔が消えていた。そつた、こつちがいつ
もアランの顔つきだ。タツヤの思つことを全部見透かしてゐる。そ
れをあえて言つてゐる。何か言い返そつとするが、アランはそれを
容赦なくさえぎる。

「言いたいことを言ひ」

「だから、言えよ」

「月本さんはさ、いま、お前のほうが心配なんだよ」

ふつと時がまどろむ。少し理解しにくく言い回しだつた。

「僕のほうが、つて……ハクアよりも？」

「話せばわかるだろ」

こいつは何を言つてゐんだ　タツヤは一瞬そう思つたが、すぐ
にアランの真意を理解した。確かにハクアは安全な場所に移ること
ができた。聰里とシユタインはそれを約束してくれた。それが事実。
安全になつて良かつたじやないかとアランは言いたいのだ。

けれど、ひとり心が荒れでいるのは自分だ。希を怒鳴りつけ、ア
ランの明るさに啞然とし、ひどく頭に来ている。我慢したいが無理
だ。声は低く煮え立つたままだ。

「そうか。言いたい」とはそれだけか？

「もう少しある」

「だから、言えつて！　全部言えつて！」

アランは少し寂しげな目をした。

「　月本さんを大事にしろよ」

思考が停まる。迷つて言い返そつとしたが、またアランが先に覆

いかぶせてきた。

「ハクアは頼れる仲間ができたんだ。お前が下手に張り切る必要な
んかないだろ？　それより、月本さんの心は傷ついたままだ。ハ
クアに裏切られ、お前にも距離を置かれたら、誰があの子のつらさ
をわかつてやるんだ」

河川敷で希が流した涙を思い出すと、タツヤはただ黙るしかなかつた。食べる気も失せたフローズンドリンクのカップはびっしょりと汗をかき、右手を冷たく濡らしている。

アランはふつと不思議な笑顔を見せた。

「……俺はお前を心底すごいと思つ」

「何だよ、嫌味か？」

するところなり肩をつかまれた。アランの語気がさりげて強くなる。「俺は、お前みたいな優しさがうらやましいよ！ いつもみんなお前を頼つてんじゃないか！ 正しいことを言えばみんなが信じてくれるわけじゃない。お前が必死で歯向かうから、お前が一緒に悩むから、二人とも信じてくれるんじゃないか」

アランの顔は真っ赤だった。怒りも興奮もすべて混ぜこぜになつた感じだった。

「だつたらお前が」

「うるせえ、お前なんだよ！ わかんねえのかつ！」

怒声が木陰に散つた。しんと静まり返る。

パラソルの立つ売店の前から数羽のスズメが音もなく飛び立つた。話し合いは終わつた。もう、そういう雰囲気だつた。タツヤは液体になつた冷たいソーダを一気に飲み、アランの空きカップと重ねてゴミ箱に捨てた。自転車のスタンドを上げると、アランが目の前に立つた。

「今日の五時に月本さんの家に行くぞ。迎えにいくからな」

「……僕の気持ちは関係なしか」

「お前は、本当にむかつくやつだな。俺は月本さんの家を知らないんだからな！」

いつも迷いなく責めてくるアランが、そのときだけは少し決まりが悪そうにタツヤを頼つた。

「アラン。僕は、いまは我慢する。だけど、ハクアにもし何かあつたら、そのときは絶対に守る。その気持ちは変わらない」

「それは、俺だけが聞いておく

「わかつたよ」

さつきまで座っていた木陰のベンチは斜めに日差しが入り、表面が白く照りはじめた。

少年二人が別方向に別れた後、ベンチの後ろに立つ大木の裏に二人の少女が身を隠していた。いくら少年たちが小声で話しても、この静かな公園で木を一本隔てた距離ならば話は筒抜けだつた。それに後半はお互い熱くなつて声も大きくなつていった。

薩摩つばさと天童紅花は、赤い隊服でなく普通の服を着てそこに座つていた。腰の高さまでの植木があり隠れるには十分だつたが、一応幹からはみ出さないようにつばさは紅花を抱えていた。少年たちの姿が完全に見えなくなると、ようやくつばさが口を開いた。

「ハクアが、脱走者たちと暮らしあげ始めた」と

こだまの戦闘報告から、郊外の公園に一緒に行つた少年はアスカという名前だと特定していた。天童の命令を受けて、朝からつばさと紅花は無人の美星小学校に入り、五年生の教室を回り、掲示物から寺野ハクアの名を発見した。そして、同じクラスに朱鳥タツヤの名があるのも見つけた。この朱鳥は珍しい名字だ。交番で聞くとすぐ分かつた。迷子と思つてくれたようだ。子供には何とも警戒心が薄くてありがたい。

昼が過ぎ、朱鳥タツヤと思われる少年を尾行すると、こんな場所で友人と待ち合わせだ。そして早速、ハクアの情報がこぼれ出た。天童隊長の狙いは正確無比だつた。

「ねえねえ、つばさ。これつて『エビでタイ』つてやつ?」

妹みたいに愛らしく振り返り、紅花が上目遣いに聞いてきた。実際に嬉しそうだ。追跡隊として初めての実戦任務に入り、ハクアだけでなく、さらに数名のターゲット情報を得たのだ。訓練学校で待機中のこだまには少し申し訳ないが、任務遂行に運といつのはない。絶対に勝つためには、突進してはいけない、敵の行動範囲に入らな

い、能力は確実に捉えるまで使わない、なのだ。これは追跡隊に昔から代々伝わるという教訓だ。

「うん、やったね。隊長に褒められるよ」

「でも、脱走者のいる場所まではわからなかつたね」

紅花はふくれつ面をして見せた。年齢はまだ小学一年生なのに、目的までの進み具合を把握する頭の良さには恐れ入る。やはり統率者として君臨する天童家の血筋だろうか。こんなに小さい体をしているが、経験を積めばさらに強力な存在になるに違いないと思う。つばさは紅花を降ろし、立ち上がった。

「ツキモトさんて子の家で、ハクアと通信できるみたいね」

「通信ってどういうことなの？ 電話？」

「わからない……でも、電話だったらどこでもできるはず。隊長に報告する」

メテオドロップの種類はまだあまり解説されていない。それに、能力者たちとの接点だ。それが能力である可能性もある。さらに、ツキモトという子の家に仲間の護衛がいるとも限らない。安易に深入りしては危険だ。

「今日はツキモトさんて子の家まで確認しようか」

「尾行するのね？」

紅花はワクワクした笑顔で見つめ返した。

夕方、タツヤは外出した。約束通りアランが迎えに来た。正直、希に会うのはすごく気まずかつたし、もう少し落ち着くまでハクアの声を聞くのは避けたかったが、アランの強い誘いに負けた。まさか分裂しかかった応援団を、一番面倒くさがっていたアランが積極的につなぎ止めてくれるとは思わなかつた。

応援団はきっと、希がハクアともつと一緒にいたいという気持ちと、ハクアがすべて話せる友達が欲しいという願いで出来ていた。だから、ハクアと分離され、ハクアに新しい仲間ができたとき、つながる理由が消えかかつたのだ。ハクアがいないのに、それを続ける意味。そんなもの。もう、悩むのは止めた。

「月本さんちつてデカイんだろ？ 僕、緊張するなあ」

アランがやたら明るいので何だかバカバカしくなつたのだ。

玄関に迎えてくれたのは希だつた。二人の顔を見るなり嬉しそうに顔を輝かせ、タツヤの手を取り、自分の部屋まで引っ張つていつた。玄関は広くて花屋みたいにいい香りがして、廊下も長いし、天井も高いし、壁には立派な額縁に入った絵画がたくさん飾られていた。アランもきょろきょろしながら、楽しそうについてくる。

希とは幼なじみだが、部屋に入るのは今日が初めてだ。白やピンクの色合いが多くて、女の子らしいふんわりとした雰囲気だ。ハクアはここに泊まつたのかな、と考えながら見渡す。ハクアの部屋みたいに何もないのと違うし、妹の部屋みたいに書道が飾つてあるのも全然違う。お菓子みたいに甘い匂いがする。

「お菓子が置いてあるの？」

「ううん、ないよ？ いま、お母さんが持つててくれるから」

希はすっかり機嫌が直つているようだつた。アランは写真立てに興味を持っている。

そしてお菓子とジュースを持ってきた母親が部屋を出ると、希は

バッグから真っ赤な天狗の面を取り出し、かわいい丸テーブルの上に置いた。聰里の事務所やシュタインの部屋も不気味だったが、希の部屋ではもっと異様な感じだった。三人はジュースを飲みながら、シュタインからの通信を待つ。

五時になつた。いきなり、希の枕元の目覚まし時計が鳴る。タツヤは腰が浮くほど驚いた。すると、希の携帯のアラームが鳴つた。

「あ、あのつ、あのつ……消すからつー、ごめんね！」

希が慌てて目覚ましや携帯のアラームを止めようとするが、手に収まらない。なぜかアランも落ち着かずにおたおたしている。本や漫画の入つた棚の前から、そそくさとテーブルに戻つた。

『 時間は守る。うるさいから止める』

天狗の面がしゃべつた。実に不機嫌そうな声の調子だ。

「すいませんつ……」

希は天狗の面に頭を下げている。目覚ましを急いで叩き、抱き込むように携帯の音も止めた。

『 のぞみん！ いるの？！』

ハクアの声だつた。

「うん、いるよ！ ずっと待つてたよ！」

『 たつ つんは？』

「ちゃんといるよ」

心は苦しかつたが、無理して明るめの声を絞り出した。

『 アランは？』

「いるよ。全部聞いてるから大丈夫」

まるで応援団がちゃんと揃つているかの点呼みたいだつた。タツヤは唇を噛んだ。アランが無理に呼んだ理由がよく分かる。本当に優しいのはアランだ、と胸の中で感謝する。

ハクアは、あの後こつちがどれだけつらい思いをしたかも知らないで、どこへ行つても何をしてもみんなが自分を信じてくれると思っていたのだ。それがその通りなのが悔しくて、そんなハクアに直接想いを言えないのがひどく寂しかつた。

『十分な。言つとくが俺はここにいるからな』

「シユタインさん、ありがとうございます」

希が律義に頭を下げる。テーブルに置かれた天狗の面はなぜか気まずそうに見えた。

そこからはハクアの独壇場だった。歓迎パーティのこと、カボチの料理が美味しいこと、自分の部屋を作つてもらつたこと、地下に大きな岩石ドームがあること、ハクアの説明がうまいわけもなく、肉がたくさん出たことはやたら繰り返し言つた。希は「すごいね！いいなあ」と無邪気なことを言つていたが、向こう側にいるシユタインはどんな顔色になつてゐるのか何だか恐かった。

『十分だ。今日はこれで終わりだ』

シユタインの声が割つて入つた。機嫌は悪そつではなかつた。

「あつ……はい」

希はしゅんとしおれる。ちなみに、タツヤとアランはそこにいたが、結局ほとんど何も話せなかつた。

『明日もつなぐが、君たちはいるか？　外出とかで必要ないときは言つてくれ。これから毎回確認する』

『明日もいます。明後日もいます。えつと、その後は……』

希はバッグから手帳を取り出した。

『明日だけでいい。切るぞ』

『みんな、またねー！』

通信が切れた。確かに応援団は終わつていない。ちゃんと続いていきそうだ。けれど、何とも言えない空しさが残つた。

タツヤは少し氣の抜けた表情で、希の顔を見た。希は、星のキラキラシールがたくさん貼られた手帳を閉じ、ふうっと溜め息をついた。何だかその仕草は珍しかつた。

「シユタインさん、結構いい人だね。ちゃんとハクちゃんのこと考えてくれてるね」

「うん……」

パチッと頬を打たれた。一瞬、何が起こったか理解できなかつた。だが、目が覚めた。そこに希のまっすぐな強い視線があつた。こんな表情を見たのは初めてだつた。

「朱鳥くん、みんなのことをもつと考えてよ」

「胸をきつく締めつけられるような言葉。

「丘野くんが言ってくれなきや、本当に来ないつもりだつた?」

アランは腕組みをして黙つている。希はタツヤの手を取つた。汗ばんでいる。

「ねえ、本当だつた? 答えて」

タツヤは頷く。

「ごめん。言いたいことを全部言つよ。僕は、ハクアと離れることがつらかつた」

希は手を握つたまま聞いている。タツヤは覚悟を決めた。本音はアランだけに留めるつもりだつたが、この状況は逃げられない。アランも口は出して来ない。

「ハクアは眞面目だ。ハクアはバカだ。ハクアは危なっかしい。そんなあいつを何度も見て、僕は力になりたいと言つた。そしたら、ハクアは僕と離れたくないと言つた。そのとき、希も、アランもいなかつた。学校で、応援団で話し合つて、二人が先に帰つた……あの後だよ。希にもアランにも都合や考えがあつたのはわかる。僕だつてそういうのを言つてるんじゃない」

タツヤは一息置いて続ける。希の潤んだ瞳を見続けることはつらかつた。少し目を逸らした。けれど、やっぱりその瞳はもう一度見るしかなかつた。

「あいつは、何でみんながいるときに言わなかつたんだろう。何で僕だけに言つたんだろう。あいつ、あのときどう思つたんだろう。それをずっと悩んでた。あいつあの性格だから、ほんとは何も考えてないかもしれない。あいつバカだもん。けど、僕は本気で言つたんだ。力になりたいって」

「そんなの……全部わかってるよ

希は少し涙ぐんでいるように見えた。タツヤは何度この子を泣かせば済むのだろう、と胸が痛んだ。

「全部?」

「だって、朱鳥くんだもん。いいかげんな気持ちじゃ、そんなこと言わないもん。言つたら、最後まで、やつてくれるもん。わたし……知つてるもん」

もう完全に涙声だ。こんなに信頼してくれる希を、どうして泣かすことしかできないのだろうか。タツヤは希の手を強く握り返す。希の体温がどんどん流れ込んでくる。

「確かにあそこは安全だと思う。でも、僕たちはあいつとはっきり区別されたんだ。これからあいつに何が起こっても、僕たちにはもう何も知らされないかもしない。困ったとき力になれない友達つて何なのかな? 僕はいま自分の立てた誓いに必死でしがみついているんだ! これが……砕けちゃつたらダメなんだ!」

タツヤは顔を真っ赤にして言い放つた。希の体温を受け止め、全身が熱くなっていた。

「いまは我慢する。だけど、ハクアに何かあったら、僕はあの場所に何としても行く」

それは自分にも言い聞かせる言葉だ。

「俺も、タツヤの考えに賛成だな」

アランだ。

「約束を破つたのはハクアだ。でも、ハクアが嫌いになつたわけじゃないし、無理に何とかしようってわけじゃない」

まさかそんなふうに言つとは思わなかつた。アランは天狗の面を見た。

「けど、向こうが通信をやめたりしたら、俺はタツヤに力を貸す」

最後に希は手の力をふつと緩めた。ぐしゃぐしゃの顔に、涙混じりの笑みが浮かぶ。

「えへへ……。二人が決めたことを、わたしがダメって言えるわけないよ……」

すると、アランが優しく希の肩に手を置いた。

「違うって。三人で決めようよ」

「ごめん、そうだね。ごめんね……うん、わたしも同じ気持ちだよ」

「なつ。同じなんだから、もう泣くなつて」

アランのかけた言葉は、希と分離しそうになつていたタツヤの心中に嬉しかつた。

それから六日間が過ぎた。幸い、何事もなかつた。

ハクアはいつも通り、ひたすら食べ物の話ばかりした。でも、それが元気な証拠であり、ハクアが何も変わらない安心の印だつた。希が習い事のある日は、タツヤが天狗の面を持ち帰り、一人で受け答えをしたが、アランもサッカーの練習がないときにはタツヤの家に来てくれた。十分間の通話が終わつた後は、適当にリビングでゲームをしたり、漫画を読んだりして帰つた。

一度目に来たときは、タツヤの誘いで夕食まで一緒にいて、内気な妹とも少し仲良くなつた。それと、タツヤの作った麻婆豆腐が美味しくて驚いたが、それ以上に、母親がいないのに家事をきちんとやるタツヤが少し頼もしいような気持ちになつた。

正直、アランにとっては、あれだけタツヤと希の二人がケンカするほど切羽詰まつっていたのだから、すぐ異変が起きるんじゃないかと心配したのだが、何だか空振りに終わつた感もあつた。ただ、秘密基地を作るほどだから、追跡隊への警戒心はかなりあることは頭の中に置いておいた。

また、希から一度だけ通信中に「週に一回でも、会える日を作れませんでしようか?」と提案してみたのだが、ハクアはやたら乗り気だつたものの、シユタインは即座に却下した。三人は、もしかしたらハクアがシユタインに食い下がるかと期待したが、「全部終わるまでおあずけだな」と大人しく引いたのを聞き、通信が切れた後、自然に溜め息が出た。

七日田にマリネと再戦をする約束をしたハクアは、朝早くからリビングで待っていた。カボチとシュタインとブッシュはいつも通りの順番で、いつも通りの時間に起きてきたが、マリネはさらに一時間遅く起きてきた。もう昼前だ。シュタインも、ハクアのはやる気持ちは伝わってきたが、昼食後に岩ドームへ全員を集めるにこした。

マリネは腰に白黒一本の傘を差している。入口近くの壁際にブッシュとカボチが立ち、シュタインが審判として中央に立つ。そこまでは前回と同じ。だが、ハクアは岩ドームの隅にいた。

「ハクア、そこでいいのか？」

シュタインが声をかける。

「はいっ！」

威勢よく答えるので、そのまま始めの合図を出した。

ハクアはそこからまつたく動かない。マリネはお手上げという仕草をした。

「ねえ、シュタイン……何が入れ知恵したの？」

「三カ条は話したが

「ふうん、それね。まつ、それなら、一いつから行つてあげようかしら」

マリネはぐつと伸びしして、一気に駆け出す。ハクアはまだ動かない。距離はどんどん詰まっていくが、一歩も動かない。逃げるつもりもないらしい。マリネは不愉快に感じながら、それでもハクアが前回見せた初速スピードを想定し、適度な間合いで止まり、様子を見た。

「ハクア、あんたこのまま睨み合いつつするつもり？」

「今日はあたしが絶対に勝つ」

「私、勝負事は身内だろうと本気なの。つまらない策を出す前にこぶしちゃうわよ」

挑発に乗つて突つ込んでくるかと思ったが、そこは学習したよう

だ。マリネは冷静に周囲を観察する。ここは壁際。てっきり、レンタルフォースでブッシュやカボチの脚力でも借りに行くかと考えたが、二人とも距離があるからその気配もない。自分の力でやり返したいというつまらない意地でもあるのだろうか。だったら、レンタルフォースの使い手としては最悪だ。

「ごめんね、今日はお昼寝したいから早く終わらすわ

「えつ、まだ寝足りないの？」

「うるさいね。行くわよ」

ハクアはおそらく右手で攻撃してくる。だから体の左側は防御していくはずだ。マリネは右前方に素早く駆け込み、右の白傘を突き出した。

パンツ！

甲高い音とともに、白傘の先っぽが宙に跳ね上がる。傘を蹴られたのだ。マリネの右脇が大きく開いた。だったらとすかさず左の黒傘を構える。突進してきたところを突く。マリネは標的の動きをよく見る。それだけのことだ。

ところがハクアは、マリネの開いた右脇を眺めるように、横向きに走った。それでも関係ない。白傘を振り下ろす。これで追い打ちすればいい。しかしその瞬間、ハクアは全力で加速した。

確かに右手を縦に下ろせば、右後方は見にくくなる。左腕も咄嗟には動かしにくい。ハクアの狙いはわかつたが、マリネの経験値は甘くない。下がった白傘を水平になぎ払いつつ、その勢いで体をハクアの正面に向ける。まるで回転斬りの要領だ。

だが、ハクアがいない。もつと先へ走ったのか。どこだ。

背中に何かが迫る。さすがに間合いを取るべきだ。黒傘を地面に立て、ジャンプする。視界が広がった。だが、それでもハクアがないのだ。何が起きた。

いきなり下から左足を掴まれる。

「マリねえ、借りるよ！」

ハクアの声と同時に、がくんと脚力が抜かれる感覚が襲ってきた。

黒傘で地面を突いた地点の裏からハクアの茶色い髪が見えた。背後に回り込んだ直後、ジャンプしたマリネの真下を通りたのだ。そうでないと、視界から消えるわけがない。

「きやんっ！」

マリネは着地した足の踏ん張りがまったく効かず、その場に倒れ込んだ。けれども、両手の力はまだ残っている。近くにいるハクアの足に触つてフール・ダンスを発動すれば、形勢は五分かそれ以上だ。急いで上体を起こす。

しかし、ハクアの立つ場所とは一メートルくらい離れていた。手で触るどころではない。

「ごめん、手で少し投げちゃった」

「なっ、投げんな！」

これは投げただけではない。脚力を奪つたあと、ハクアはさらに後ろに跳んで距離を作つたのだ。動物的な直感で、仕留めた獲物が動かないことを、少し距離を置いて様子見たのだ。シユタインはその驚異的な俊敏性や切り返しを目撃し、確信した。

ハクアの攻めの行動原理に、敵の行動範囲から徹底的に回避することがインプットされたことで、おそらくマリネの腕の長さも傘の長さも軌道ですらも全部見切つていたように見えた。相手の筋肉の動きや呼吸の流れをすべて感じ取つているのではないか、といいくらい正確な動きだ。そして、マリネが黒傘でジャンプすることを、あそこで予測できるものだろうか。瞬間に予測できなければ、低姿勢で真下をぐぐるなんて出来るわけがない。

「やめっ！」

シユタインは終了の合図を発した。それは、勝負にほぼ決着がついたこともあるが、まさにハクアの力試しの終了といつ感覺だった。ハクアが振り返る。

「ん？ あれでいいのか？」

「勝負ありだ。マリネに力を戻してやれ」

ハクアが左手を差し出したとき、マリネは悔しげに噛みつきそう

な感じだったが、さすがに足の力が抜けたは氣勢も削がれ、大人しく解除された後は、スカートの汚れを念入りに払っていた。そばに来たカボチとブッシュに、黒傘ジャンプのタイミングがまづかったと聞いていたが、一人とも困った顔をしていた。

カボチは初戦を思い出し、ポンつと手を打つ。

「この前ハクアはワンピースだったしね。動きが悪かつたんだよ」

「……待つてよ、私はこれよりミニにしたらまるつきりショーガルじゃないの」

「思春期なんだから、変な格好でうろつくなよ」

ブッシュが笑う。その輪の外で、ショタインはハクアに話しかけた。

「ハクア、お前、何での位置まで離れた」

「ああ、マリネの動きをよく見るためだ」

ハクアは満面の笑顔だった。おそらくマリネも、標的としてハクアの動きはしつかり見ていただろう。近接戦闘ではその経験値が重要だが、ハクアの場合は、マリネの生き物としての動きをよく見ていたようにショタインは感じる。

「……そつ言えば、追跡隊に苦戦したとき真っ暗だったと言つてたか？」

「うん、星を見に行つた場所だしね」

「暗いと戦うのは大変か？」

「目線の動きが見づらいから、やりにくいんだ」

「周囲に人がたくさんいると気が散るか？」

「うーん。戦う相手ならたくさんいても平気だけど、友達がいると困る」

追跡隊の襲撃は、ハクアにとつて大いに苦手な状況だったということか。ショタインはハクアを追う側の指揮官に対し、いま初めて少し脅威を覚えた。リモートガンという有利な武器を持っていながら、確実な勝ち方を考えてくる。もしこの基地がすでに特定されないとすれば、今は向こう側にとつて目的達成までのリードタイ

ムだ。本当に全員を守り切れるか、もう少し防衛策を練る必要があるかもしれない。シユタインは眉間に深いしわを寄せた。

……と、そこで思考が沈む。カフェインが足りない。

「カボチ、コーヒーを淹れてくれ

「あー、私はアイスレモンティ

「あたしもコーラが欲しいつ！」

「俺、イチゴ牛乳

「なんじゃあ、最後のかわいいなあつ！」

カボチは噴き出し笑つた。

そして、今日をもつて間違いなく『ブレイクチェイサー』の新戦力となつたハクアは、夕方五時の友人との通話で、嬉々としてマリネとの再戦勝利を報告するあたり、何とも言えない期待と不安が複雑に入り混じつていた。通話を認めたのはシユタイン自身だが、ハクアが戦闘要員として着実に訓練されていく様子を、おそらく少女たちは感じ取るだろう。もつとも、強くなりたいと望んだのはハクアだ。

シユタインは、ハクアが弾むようにして部屋から出た後、キーパタブレットの新しい箱を開けた。だが、そこには予想外にも三分の一の量しか入つていなかつた。さらに、青色のマジックペンで『×』と書いてある。シユタインは顔をゆがめて、思い切りデスクの奥を蹴つた。

バスチエッカーでブツシユを呼ぶ。

「兵糧攻めだ、すぐ来い」

『 わかつた』

能力を解除し、手元のコーヒーカップを持つたが、乾いた黒い粉が底に円くこびりついているだけだつた。

第13話 『過去の答えとチャリータルト』 1/2 (前書き)

キャラクター紹介はこちらにあります。漫画っぽいイラストが大丈夫な方はぜひ。

http://www.geocities.jp/sleepdog550/novel/hakua/hakua_chara.html

次回は3/27(日)更新予定です。

最後に起きてきたマリネが身支度を整えたのを待つて、シュタインはリビングで全員に説明した。キープタブレットの入手が困難になつたことである。タブレットのケースに書かれていた青い×印は、その伝達信号だった。

「ねえ、何があつたの？」

マリネが真っ先に聞く。隣りでカボチもまた同じ驚きの顔をしている。

「調査中だ」

シュタインは冷たく答えた。マリネとカボチはタブレットの入手経路を知らない。知つてるのは口の堅いブッシュだけだ。新入りのハクアにも明かしていない。マリネは気つけのアイスレモンティを一口飲み、腕組みをする。

「前から気になつてたんだけど、タブレットはどうで手に入れてるの？」

「それは言えないと言つたはずだ」

「あつ、そう……」

マリネが大人しく引き下がると、カボチも一緒に静まつた。ブッシュは渋い表情でずっと黙つている。その中で、ハクアだけがあまり緊張感がなかつた。事態がよく飲み込めていないのでどうかとシユタインは考えながら続ける。

「そういうわけで、今日から超能力の発動は禁止だ」

「えつ？！」

今度はハクアが激しく反応した。やはりキープタブレットや拡散波長のことが十分理解できていないのだろう。

「ハクア、このあと俺の部屋に来い。話がある」

「なあ……たつんたちともう話せないのか？」

勘だけは鋭いのがハクアだった。

「俺だけ好き勝手に能力を使うわけにはいかないだろ？」「好き勝手じゃない！ みんなとの約束だろ？！」

「……だから話そう。これはお前を守るためにもある」

シュタインはハクアの手を引き、一人してリビングを出て行つた。残された三人は苦い雰囲気で顔を見合わせる。マリネは溜め息をつき、レモンティの底に沈んだシロップをストローでかき混ぜた。氷がぶつかり合う音だけがリビングに鳴つっていた。

その日の夕方五時、今日は三人とも希の部屋に揃つていた。希の母親は、夏休みになつて急に男の子一人がよく遊びに来るのを不思議がつたが、希は天文係で一緒に自由研究をしていると説明していた。言いにくいことは学校の勉強を理由にするのが一番だつた。時間になり、希が引き出しから天狗の面を取り出す。さすがに天狗の面をこの可愛い部屋に飾るつもりはないみたいだ。

コンコン

天狗の面からノックの音がする。シュタインがお面を叩いているのだ。パストエッカーによる通信開始の合図だつた。

「はい、います。今日はみんなです」

希が答える。

『のぞみん……』

いきなりハクアが口を開いた。いつもならシュタインが話して良いと言うのが先なのだ。

「ハクちゃん？ どうしたの？」

『ああ、すまない。実は君たちに言わないといけない大事なことがある。通信は明日からしばらくできなくなる』

『えつ、どうしてですか？！』

希が聞き返す。タツヤも驚き、天狗の面に飛びつこうとしたが、ぐつと我慢した。慌ててはいけない。アランにもそう言われたはずだ。

『理由は、申し訳ないが説明できない。ハクアにも納得してもらつた』

「そんな……」

「それじゃ、約束が違うよ！』

ハクアを盾にされると弱い希に代わって、アランがいつになく強い態度で食い下がつた。会えなくとも応援団は終わりじゃない自分でそう言ってタツヤや希を励ました責任を感じていた。だが、シユタインは極めて冷静に対処する。

『こちらにも事情がある。状況が変わったんだ。一度と通信しないと言つたわけではない。わかつてほしい』

シユタインは、相手は子供だが、慎重に言葉を選んで話していた。外部の友達を刺激したくないのもあつたが、一番警戒していたのは自分の隣りにいるハクアだつた。直情的で妥協の通じないハクアは、内部崩壊を招きかねない危険分子でもあるのだ。

一方、アランもどう言えどハクアと通信が続けられるか自信がなかつた。話が急すぎて混乱したのもあつた。

『そうだけど……じゃあ、いつ再開するの？』

『何とも言えないが、こちらも、そんなに長引かなければいいと思つてゐる』

どうにも言い返しにくい答え方だつた。アランは氣勢をそがれた。ここで黙つたら今日で通話が終わつてしまつ、希の落ち込む顔が目に浮かぶ。アランはあせつたが、どうしても言葉が出なかつた。何も変えられなくて、ただ、呆然とした。

最後にタツヤが身を乗り出した。

『シユタインさん、アジトの場所は変わらないよね？』

『……ああ、そうだ』

『だけど、それが本当か 僕たちはわからないです』

タツヤはシユタインのことを完全に信用したわけではなかつたが、これがハクアの安全に関わることだと感じた。そうでなければハクアが納得するわけがない。ハクアの声が聞きたい。そうすれば自分

たちは待つことができる。

『たつづん、ここから移らないのは本當だ！ あたしを信じて！』

まるで心の願いが通じたように、ハクアが言った。

「ハクア、僕たちはいつだってハクアの言葉を信じてる。お前がおかしいと思ったら、ここに帰つて来ればいいからな」

『たつづん……うん、わかった』

シユタインはこのやりとりを横で聞いて、これ以上話すのは危険だと察知した。ハクアに同胞との連帯意識を天秤にかけさせてはいけない。運命共同体の中で生きていく上で、安全性は必要だが、選択肢は必要ではないのだ。

『そういうわけで、悪いがこれで』

「ダメッ！ 十分の約束はお願ひします。……まだたくさん残つてるもん！』

希が声を荒げてさえぎつた。たくさんと言つてもあと五分しかなかつたが、その五分がどれほどの宝物かわかつていて、希はどうしてもそれを捨てたくなかつたのだ。

『シユタイン、あたしからも頼む。決めたことは曲げないから』

『……わかつた。時間まで話していいぞ』

ハクアは与えられた残り時間で一生懸命たくさん話した。カボチからたくさん漫画を借りたこと、風呂掃除をしたらすじくピカピカになつて気持ち良かつたこと、コーラにアイスクリームを入れたら意外に美味しかつたこと……まるで明日から通信がないことを忘れてしまつぐらじ普通で明るいハクアだつた。そして最後にこう言つた。

『のぞみん、たつづん、アラン、今日は三人ともいてほんと良かつた。あたしが毎日楽しいのはみんなのおかげだよ。でも、あたしの住む場所があるのはシユタインたちのおかげ。だから、あたしはどつちとも約束を守る！』

そう言われると、まわりはもつ頷くしかなかつた。タツヤは代表して天狗の面をつかんだ。

「ハクア 僕たちは必ずお前の力になるからな！」

『うん、わかつた！』

そうして、バスチェックカーでの通信時間は終わつた。

訓練学校でキープタブレットの配布が止められてから一週間以上が経つていた。校内にそれほど動搖はなかつたが、何かしらの作戦が進行中なのかもしないという気配は漂つていた。だが、こうしたものは校長の決定事項なので、誰も教官に詳しく聞こうという者もいなかつた。

実際、教官たちも何の目的で配布中止になつたか聞かされていなかつたのだ。ただ、メテオドロップを使った訓練は全面禁止になり、もし体に異変が起きた生徒がいれば、担当教官が医務室に連れて行き、体調回復のために最小限の数をその場で飲む、というルールが出ただけだつた。キープタブレットの配布中止など滅多にある話ではない。一週間くらいなら何も起こらないだろうが、さらに一週間も経つたら体調が崩れる生徒も出てくるのでは、と予想していた。

シミュレーションルームのドアが開き、羽島こだまが練習を終えて出てきた。この部屋はリモートガンの練習専用の部屋なので、ドアを開けるにはリモートガンのシリアルナンバーを入力すること必要だつた。当然、追跡隊に属していない生徒はそんなものを持つてはいけない。

だが、一時間集中して射撃訓練をしたこだまが、もふもふタオルを首にかけて、巻き髪の毛先を整えながら出でてくると、廊下に一人の少年が立つていた。見慣れない顔である。もつとも、他の能力系統の生徒とはまず顔を合わす機会がないから、まれに知らない顔とすれ違うことはある。少年はサラサラの髪で、背は低くないが体の線が細く、まるで女の子みたいな雰囲気の持ち主だつた。気配が薄い。廊下にいたので話しかけてくるかと思ったが、そんなつもりでもないようだ。

「こだまは背を向け、自分の部屋に向かつて歩き出す。

「あ、あの……」

「後ろから呼び止められた。声は少年からだった。他には誰もいない。

「羽島こだまさんですか？」

「そうですけど、何か？」

「あの、実はちょっと相談したいことがあって……」
少年がそばに近寄つてくる。やわらかい物腰で、少しおどおどしているが嫌みはない。年齢は同じくらいか、もしかすると少し上にも見えた。

「は？ 相談？」

「はい、えつと あつ！」

「きなり少年は何もないところですましいで、こだまの胸に飛び込んできた。咄嗟に支えようと思つたが、バランスを崩して足がもつれる。少年はすいませんと言つて、さつとこだまの腕をつかんだ。体を動かして火照つた腕に、ひんやりした少年の生白くて長い指先がからみつく。

「ごめんなさい、なびいてください」

それが発動の言葉だった。こだまは尻もちをつく。少年も覆いかぶさるように重なつた。こだまはきょとんとした顔をして、少年の顔を見て少し照れ臭そうにはにかんだ。くるつとした前髪の間からのぞく小さなおでこにちゃんとスペースのマークが出ている。少年はうまく行つて、よしよしとこだまの髪を撫でた。

「はうひ……！」

「こだまは小動物みたいに首をくすめて、顔を赤らめた。倒れて重なつたままもまずいので、少年が手を取つて起こそうとすると、こだまは首を横に振つて断り、きなり両手を少年の首の後ろに回して瞳を閉じた。ふるりとした唇を近づけていく。少年はあせつて手で押えて離した。

「ちよつ、ちよつ……顔が近いけどそれは早いよ

「えつ？ えつ、なんで ？」

「こだまがきゅうと体に抱きつき、すがりついてくる。」の近畿で見ると本当にいじわるしたいくらいに可愛いが、少年はそういう目的で超能力を使つたわけじゃない。

「なんでじゃないって。とりあえずシノブ・ルームに戻ろうか。監視カメラってある？」

「ないよ」

「じゃあ、入れて、番号」

「う……うん。入れる」

ちゃんと立たせると、こだまは素直にドアの数字錠にシリアルナンバーを入れた。少年が左右を確かめて中に入る。念のため天井を見渡すが、監視カメラは見当たらない。当然、こだまも後ろにピッタリ貼りついて来た。ドアが閉ると、こだまがすぐ身を寄せてきて、にっこり笑つて瞳を閉じるので、少年は距離を置いて落ち着くように命じた。

「ここの子、大丈夫かな。欲求不満つてやつかなあ」

「ねえ……こっち来てくれないの？」

不満そうに口をとがらせる。部屋の壁に背を預け、ぽんぽんと股のあたりを叩く。

「こめんね、たぶんそばに行つたら会話にならないよ。僕の『フラグ・セッター』は確実なんだけど、きみの効き目は特にすごいなあ。まあ、仕事がやりやすいからいいか」

「うーん、そこでお話しするの？ そつかあ……」

少年はこだまの異様な甘えっぷりを無視して、次々と質問をしていく。

「えつと、きみはハクアを追つてる追跡隊だよね。いま、どんな作戦を立ててるの？」

「ん……あのね、一般生徒にキープタブレットを配らないようにしたの。隊長がね、外に渡つてる可能性があるって言つてたあ

「さうか、そこまで読んでるんだ。体調不良になつたら医務室へ行つてことは長期戦にするつもりだね？」

「うん、そうだよ。」

「ハクアのいる場所は特定できるの？」

「うーん……まだなの？」

「こだまは指をくわえてしおれた顔をする。少年は少し安堵し、尋問を続ける。

「キープタブレットはいつ配布を再開するの？」

「んふふ、そんなの決まってないよ。ハクアを捕まえたらいやない？ 今度こそあたしが捕まえてやるんだからっ！」

「こだまは上気した顔で、拳を握りしめてほっぺをふくらませた。が、少年にまっすぐ見つめられると体の芯がすぐふにゃふにゃになつてしまつ。

「きみはキープタブレットをもらつてる？ いま持つてる？」

「うん、もらつてるし、持つてるよ。」

「見せて」

「ん……えつと、ちょっと待つてねえ」

「こだまは隊服のポケットに手を入れ、錠剤が何個も入つたケースを取り出して見せた。

「それ、もらうよ？」

「うん、いいよ。はいっ、どうぞ」

「あつさりタブレットを渡す。」

「今日、僕に会つたこと、キープタブレットを渡したことは誰にも言わないでね。思い出さないでね」

「はあい」

「ありがと。じゃあ、イスに座つて。お礼に解除してあげるよ。」

「こだまは言つ通りにイスに腰かけた。少年は左手で体に触れ、フラング・セッターの超能力を解除する。こだまは気を失い、ぐつたりとその場に倒れ込んだ。少年は体を支えてイスの背もたれに託すと、足早に部屋を出て行つた。」

少年は廊下に出るなり、人影に注意しながら気配を抑えて歩いた。こだまに使つた超能力はマインド系第一段階のフラグ・セッターだつた。相手を言いなりにするほどの強い好意を一時的に抱かせるものだ。発動中とその前後の記憶は、解除したときに曖昧になつてしまつ。つまり、キープタブレットを持つていて記憶も、渡してしまつた記憶もぼんやりする。しかし、ここで命じたことはしばらく記憶に植えつけられるので、念押しで命じておくことは重要だつた。とにかく、キープタブレットは手に入つた。少年はいつまでこの厳しい状況をしのげるか不安を抱えながら、せわしない気持ちで廊下の突き当たりまで進み、通常のIDカードキーでドアを通つた。

トレーニング棟とは隔絶された指令棟のモニター室で、天童将王と薩摩つばさは青白く光る画面を並んで見つめていた。確かにシミュレーションルームに監視カメラは取りつけられていない。だが、部屋に置かれた機器に超小型の隠しカメラを埋め込んでいた。キープタブレットの配布を禁止した前日に、天童が校長に承認を得ていたものだつた。

「まさか内通者が……このIDはロック系一般生徒の湯田玲です。ゆだ・れい
湯田が　コンバインという記録はありません」

つばさはIDの照合結果を確認し報告した。コンバインとは複数能力適格者のことで、二系統以上のメテオドロップを使うことができる者を呼ぶ。天童の知る範囲では、一部の教官と、校長くらいだつた。過去には追跡隊にも何人かいらしが、いまはいない。天童将王も校長に憧れ、コンバインに憧れたが、それが覚醒するタイミングは年齢的に逃してしまったと思われる。天童は顔を曇らせた。「しかし、湯田がコンバインなのはたぶん間違いないよ。どういう系統か心当たりがない。あとで調べてほしい」

「はい。　それにしても、人を言いなりにさせるなんて……タル・クリエイトの概念では考えにくい、得体の知れない超能力ですね」

「校長が、少しそういう方向に何か心当たりがあると言つてた。あとで相談に行くよ。問題は、湯田はこだまから聞き出した作戦を誰に伝えるか、だ」

「寺野ハクア……とは考えにくいですね」

「きみの報告では、敵グループには何の通信回線も使わず、遠隔で話す能力を持つているやつがいるんだったな。たぶんそいつがリーダー格だろう。湯田は校内の状況を報告してたんだ。こだまがシミュレーーションルームに出入りしているのを見れば、当然、俺の部隊は内密にキープタブレットをもらつていると考へるだろうな」

「隠しカメラをあの部屋に取りつけもらつて正解でしたね」

「こだまと紅花にはこのことは伏せておく。まだ向こうに『バレてない』と思わせたい」

天童は一層険しい顔つきになつた。仲間内でも情報を出し分けすることは時に必要だ。こだまをおとりに使つたのは事実だが、こだまがそのまま知ると落胆するのは間違いなくて、さすがにそれはつらかった。

「それと、湯田とは常に距離を取るように。きみから情報が漏れたら大変だ。きみはいろいろ知つている。ハクアの友人の家まで特定しているのもバレるとまずい」

「はい、もちろんです」

つばさは深く頷く。いくら超能力のせいとは言え、あんなあられもない恥ずかしい姿を天童に見せるわけにはいかない。

「抜け穴が特定できただけでも大きな収穫だ。こだまに感謝だな。

本人に言えないのが残念だけど、ちゃんと仇は討たせてやるぞ」

天童は隠しカメラのモニター越しに、ようやく気を取り戻した少女へ言葉を送つた。

第13話 『過去の答えとチャリータルト』 2/2 (前書き)

キャラクター紹介はこちらにあります。漫画っぽいイラストが大丈夫な方はぜひ。

http://www.geocities.jp/sleepdog550/novel/hakua/hakua_chara.htm

次回は3/27(日)更新予定です。

校長室の前で、天童将王はひとつ深呼吸をした。隊服の襟をきちんと正す。いつも身なりは整えているが、ここに来ると一段と気が引き締まる。IDカードをかざし、網膜認証も行い、ロックを解いた。

ドアを開けると、女性秘書が一人座っている。「天童くん、こんにちはあ」とにこやかに微笑みかけてくれるが、今日は笑顔を返す心境ではなかった。内通者発見のこと、作戦変更のこと、頭の中は困惑と疑心で満ちていた。こういうとき、校長と隊長という立場を超えて、一番信頼できる人に会いに来るしかなかつた。

「入ります」

「はい、どうぞ」

女性秘書の一人が手元のスイッチを押すと、横のドアが開いた。もう一人の女性秘書が声をかけてくる。

「ケーキは何がいい?」

「……じゃあ、さくらんぼのを」

「天童くん、それ好きよね」

「お願いします」

天童は一人の秘書に頭を下げ、校長室の中に入った。天井がものすごく高く、奥行きも相当ある巨大な扇状の部屋である。扇の要の部分に玉座があり、校長が威風堂々と座っている。校長室は、西洋の城にある謁見の間をイメージして作られたと聞いたことがある。廊下と受付を通りここに来ると、世界が一気に広がつた感覚を受ける。

玉座まではゆるやかな階段があり、天童は一步一步落ち着いて向かっていく。校長は肩肘をつきながら、巨大スクリーンに映る将棋番組を見ていた。若い棋士一人の対戦を、美人女流棋士が解説している。

「どうした？ あれは順調か？」

「……重要な報告があります」

「ほう、物々しいな」

校長の名は天童源兵衛てんどうげんべえとさう。校長は将王の血縁、つまり祖父であつた。源兵衛は上等な紺の羽織袴を着て、見事なほどに気品ある象牙色の髪で、老齢にもかかわらず背中までの長さがあり、あごひげも同じ色で絹糸のように長くまつすぐ伸びている。玉座の左手にオシドリという力モノの飾りが取りつけられており、その丸い頭を手のひらで撫でながら話すのが長年の習性だつた。

源兵衛が手元のリモコンを操作すると、目の前の床が左右に開き、きらびやかな西洋装飾の美しいテーブルとイスが下からせり上がりてきた。真珠のように輝くシルクのテーブルクロスがかかつており、まるでここで国際条約でも結ばれるかのような莊厳な雰囲気だ。そして、スクリーンに映る将棋番組をリモコンで消し、将王との話に集中することにした。

将王はイスに座り、源兵衛の眼差しを一身に浴びた。源兵衛は玉座からは動かない。女性秘書が熱いほうじ茶一ひとつとチョリータルトを持ってきて、お茶の一つは源兵衛の脇に、もう一つはチョリータルトと一緒に将王の前に置き、静かに部屋を出て行つた。

源兵衛は熱い茶をする。

「お前はさくらんぼの洋菓子が好きだな」

「母がよく作ってくれたので。これとは……少し味が違いますが」

将王も熱い茶に口をつけた。気持ちが安らぐ。

源兵衛は祖父だが、一緒に暮らしてはいない。肉親と言えども、訓練学校の最高責任者と寝食をともにすることはできないのだ。しかも、将王は身近に両親がいなかつた。源兵衛の子供は娘一人しかいなかつた。それが将王の母である。訓練学校の優秀な教官の男性と結婚し、将王と紅花が生まれた。

メテオドロップの覚醒は実際のところ血縁とは関係ない。一般人

の子供が突然変異みたいに適性を持つのが普通で、逆に適格者の子供がみんな適格者になるかと言つと、それはほとんどない。ただし、必ずメテオドロップ適格者を生む家系があつた。それが天童家である。ちなみに将王の母は、違う系統のメテオドロップを持っていた。だが、二年前、天童家は思いもしない悲惨な事件に見舞われた。ある超能力者が紅花を人質にして学校から脱走したことが始まりだつた。両親は紅花を奪還すべく追跡したが、反撃に遭つて捕虜となり、両手を拘束されメテオドロップを使えない状態で監禁されたため、植物状態に陥つた。仲間によつて救出されたときは、もう完全に手遅れだつたのだ。紅花もあと一歩のところで同じようになるところだつたが、状態変化に個人差があり、ギリギリ間に合つたらしい。

逃亡者は捕まつたが、両親は専門病院でいまも治療を受けている。治るめどは立つていない。メテオドロップを長期間発動しないことによる植物状態化もまだよく解説されていないのである。治療を指示したのは当然、源兵衛であつた。

たつた 二年前のことだ。超能力者を追跡することはそれだけの危険を伴う。相手がメテオドロップのことを知つていれば、より必然的な手を打つてくるのだ。

だが、将王は悲嘆を跳ねのけるような鉄の意志と覚悟を持ち、追跡隊への入隊を志願した。妹の紅花も兄の背中を追うように願い出た。それを承認したのも当然、源兵衛である。副校长や、父親の同僚である教官たちは反対したらしげ、源兵衛の考えはまったく搖らがなかつたと聞いている。

いま、将王と紅花は一般生徒よりも少し広い部屋が与えられ、給仕の女性が生活を面倒見ている。もつとも、将王は朝早くから訓練学校で模範生のように勉学やトレーニングに励み、この二年のうちに新しく開発されたリモートガンも早々に習得した。紅花も使つたがつたが、これは手首に衝撃を受けるので、紅花の年齢ではまだ許可されていない。

将王はリモートガンを初めて使つたとき、これからは近接戦闘でなく、一定距離を置いた戦闘になると強く感じた。そして、リモートガンが扱える者を校内から選び抜き、自分の追跡隊を結成した。それが、薩摩つばさと羽島こだまであった。それを報告に行つたとき、源兵衛にその人数でいいのかと聞かれたが、将王は胸を張つて答えた。

「 少数でいい。得るものは少しずつでも、失うものは少ないほうがいい」と。

源兵衛は湯飲みを置き、愛する孫の深刻な顔つきを見やつた。将王からの報告を聞き終わつたのだ。

「なるほど、やはり内通者がいたか」

「……校長の予測は当たりました。両方同時に捕えなければいけないと思つています」

二人の間に少しの沈黙があつた。

それから、先に口を開いたのは源兵衛であった。

「天童隊長、もう一度、昔と同じことを聞くが、得ようとするものが大きいときでも、やはり少数にこだわるのか？」

源兵衛は将王のことを天童隊長と呼ぶ。いまはその言葉が重かつた。

「一度にすべてを失つたら終わりです。何かあつたら、救援をお願いします」

将王は深々と頭を下げた。源兵衛は息を飲む。

これは、将王からの出征の挨拶なのだ。

「 そうか、お前は歴史が好きだつたな。だから、過去によく学ぶ。しかし、すべての答えが過去にあるとは限らんぞ」

源兵衛は少し声を大きくした。脅すつもりはなかつたが、それでも自分の孫を戦地へ送り出すことは、心臓を神の手のひらに載せるようなものだつた。神はこれをどう扱うか、いかなる知恵で最善の計略を巡らしても、望む結果と望まない結果はおそらく紙一重であ

るつ。

将王もそれは十分予期している。輪郭を捕えた相手は、もはやただ一人の脱走少女でなく、大きな潜伏組織なのだ。二年前のことは何度も悪夢のように蘇る。迷いを断ち切るよう、リモートガンをホルダーから抜いて、テーブルの上に置いた。

「この銃が作られて、戦い方は過去と同じでなくなつたと思ひます。そして、この左手の使い方も」

そこで言葉が詰まつた。うつむいて唇を噛む。校長室に来るまでに固めたはずの決意に不安の波が押し寄せ、ぐらぐらと入り混じり、思考が止まつてしまつ。出直そつか。いや、ここに躊躇つたら同じことだ。両親の事件は過去だが、いまは過去を塗り替えるべきときだ。

源兵衛はその様子を見て玉座から立ち上がつた。年輪のよにしわが刻まれて血管の浮きたつた肉厚の右手を差し伸べる。

「過去に答えがなくとも、ここに家族がある」

将王はハツと顔を上げる。

「いいが、絶対に無事に帰つてこい、将王」「はいっ！」

温かい肉親の手を握り締める。

「作戦を変えたいと言つたな。よからう。では、わしの考えを伝えよう。そいつを食べながら聞きなさい」

源兵衛に言われて、将王はチエリータルトを見つめた。楽しそうにキッキンに立つていた母の面影をまた少し思い出すと、自分がこの戦いで取り戻そうとしているものをようやく知つた気がした。

湯田は自室に入り、机の上から青いペンを取ると、すぐベッドに潜り込み布団をかぶつた。部屋の天井には防犯カメラが必ず一台取りつけてあるのだ。布団で身を隠した状態で、キープタブレットのケースから一粒取り出し、つばで飲み込んだ。熱い溜め息が漏れる。

ケースの裏に青いペンで×印を書く。入手困難な状況は続いているが、自分の正体は誰も疑っていない。そう伝えるシユタインへの暗号だ。布団の下から封筒を取り出し、宛名を書いた。インクの臭いが布団にこもるので、湯田はキャップを閉めた。

夕方まで静かに部屋で待ち、訓練生がみんな食堂へ向かう時刻になつたところで、湯田は部屋を出た。廊下を歩く数名の訓練生はさすがにみんな表情が暗くなっている。キープタブレットの配布を止められているから、体調が良くないのだ。生徒から不満が出ないのは、校長の決定だからである。だが、限界が来る生徒がどんどん増えるだろう。校長はいすれこれを解くに違いない、と湯田を含めてみんな考えていた。

湯田は食堂の前を通り過ぎ、食糧貯蔵室の前にこつそり来た。ここには外部の食糧配達センターのトラックが週に一回、特別に入つてくる場所だ。もちろん、訓練学校とは守秘契約を交わしているはずだ。

貯蔵庫のドアに鍵はかかっているが、湯田はロック系第一段階の超能力「クイック・オープ」を発動し、あっさりとドアを開けた。ここを通りと、その先のトラック搬入口まで人目に触れずに通り抜けられるのだ。足音を立てないように注意し、ひんやりした貯蔵庫を慎重に進み、配達トラックを発見する。トラック運転手が荷物を下ろしはじめたところだ。湯田は棚の後ろに潜んで様子を見る。

運転手が両手で台車を押しながらやってくる。湯田の隠れた場所を通り過ぎる。低姿勢でさつと背後に回り、運転手の背に右手を当てる。

「じめんなさい、今日もなびいてください」

一瞬で発動すると、運転手は悲鳴もあげることもなく、くるりと振り向いた。おでこにスピードのマークが出ている。大丈夫だ、今日も抜かりはない。湯田はポケットに入ってきた封筒を渡した。

これは二重の封筒になっている。外側は配達センターが業務用に使う封筒を何枚ももらつたうちの一枚だ。以前、この能力で運転手

を言いなりにして手に入れた。そして、内側に入っている小さな封筒には笹ヶ瀬姻戚相談所の住所が書いてあり、切手も貼つてある。この中に、にじだまから奪つたキープタブレットを入れてあった。

「えっ、この手紙は なになに、なんなの？ 僕に？」

運転手は決まってこの反応をする。体格のいい作業着のおじさんだ。配達センターの帽子の下はにこやかで、湯田を見つめる目はアロンとしている。

「ごめんなさい。帰る途中で、外側の封筒を開けて、中の封筒を開けずにポストに入れてください。お願ひします」

湯田は要件を言つてすぐその場を離れようとしたが、いつものように手をつかまれた。バレたわけではない。向こうが名残惜しいのだ。運転手は容赦なく間を詰めてくる。

「うんっ。おじさん、ちゃんと言ひと聞くからねー」

あごひげが伝染しそうなほど頬ずりしたがるのを懸命に食い止める。毎度のことだ。

「ちよっ、ちよっ……顔が近い！ 汗臭いって。早く仕事に戻つてよお

戻つてくれないと学校の警備員が怪しむのだ。命じると、素直に運転手は仕事に戻つてくれた。湯田はほつと息をつく。

本当は早く貯蔵庫を出たいところだが、湯田は念のため配達トラックが外へ出していくのを見届けた。シャッターが完全に閉まる。緊張を解き、一安心した。

「とりあえず、これで一ヶ月は持つかなあ。その前に学校が配布を解禁するはずだ」

タツヤたちとの通信が断たれて、一週間以上が経ち、ハクアは部屋にこもりがちになつた。口数も、食事の量も一気に減つてしまつた。カボチたちは口を揃えて心配したが、シュタインは「構うな」と一言メンバーに伝え、それ以上何もしなかつた。

ハクアはベッドに寝転がり、退屈で不安な時間をひたすら過ごした。本当にこのままずっと通信がないままなのか。シユタインはタツヤたちとの関係に賛成でなかつた。一般人の友達に超能力のこと話をしたこと、面倒くさそうに言つていた。そのうち再開すると、いうシユタインの言葉を信じていいのか。考えれば考えるほど、タツヤたちと話したい気持ちが積み重なつた。

超能力の訓練を禁止されていることも、ハクアにとつては大きなストレスだつた。精神的に苦しいものもあるが、やはり能力を使わないといと体の調子がどんどん悪くなるのだ。すでに指先が麻痺してきている。訓練学校で能力禁止がどれくらい持つかテストされたことがあつたが、ハクアは他の生徒よりも体調悪化がずっと早かつた。ただ、その結果は教官がカルテをつけるだけで、ハクアがそう知らされたわけではなかつた。

だから、同じく能力禁止されているメンバーが平然としているのが、ハクアには不思議で仕方なかつた。逆に、メンバーはそんなに早くハクアに体調変化が出たとも想像していなかつた。

ハクアは苛立ちが高まり、何度も勝手に能力を発動しようかとも考えた。だが、フォース系はエリア系などと違つて、相手がいないと発動できないのだ。相手はメンバーしかいないが、内緒で発動できるわけもない。それと、最初はタブレットが三粒もらえたのに、今週は一粒だけになつた。シユタインの説明では、能力を使った後の拡散波長を抑えるのは、一粒では足りないらしい。だから、能力発動は禁止だ、と。

とにかく、何かおかしい　　そうハクアは全身でそう感じていた。自分は騙されているのではないか。ハクア自身も無意識のうちに、そういう結論に達してしまつていた。

翌朝、ハクアはシユタインの部屋の前で待ち、出てきたばかりのシユタインに詰め寄つた。

「頼む、能力を使わせて！　これ以上は限界だ！」

シユタインは虚を突かれて、質問の意図を取り違えた。ハクアがバスチエッカーを使って友達と話したいと懇願したのかと思った。ただ、すぐに別の意味も考えたが、ハクアがウズウズして訓練したくなつた程度に思つた。一週間でこんな禁断症状が出るなど頭になかつた。

「ダメだ。まだ我慢しろ」

シユタインはハクアを押しのけて廊下に出ようとする。その瞬間、ハクアのヒューズが飛んだ。咄嗟にハクアは狂つた野犬のように飛びかかり、レンタルフォースを発動し、脚力を奪い、空いたままのドアをぐぐつて部屋の中へ飛び込んだ。部屋の中にタブレットがあると考えたのだ。

「ぐあつ！」

意表を突かれてその場にしゃがみ込んだシユタインは、必死で手を伸ばしたが、ハクアにあと少し届かなかつた。そのハクアはすごい形相で机の上の物を引っかき回している。

「ごめん、本当につらいんだ！」

タブレットを探していると理解した。すぐ見つかる場所には入れてないが、勝手に荒らされるわけにはいかない。だが、足にはまるで力が入らない。これがマリネも食らつたレンタルフォースか。シユタインはリビングに向かつて大声で叫んだ。

「誰かハクアを止める！ 薬を奪われる！」

ハクアは机の上にないとわかつて、本棚を片つ端から漁りはじめていた。きれいに整理した本や書類が無残に床へ落ちていく。シユタインは床に力いっぱい拳を打ちつけた。

「シユタイン！ どうしたの？！」

廊下からカボチとブッシユが駆け寄つてくる。戸口に倒れたシユタインの姿を見て、二人は騒々しい室内を見た。ハクアが半狂乱で棚の中身を次々と床にまき散らしていた。

カボチがハクアの名を叫ぶと、動物みたいに振り返つた。だが、ハクアの血走つた視線はシユタインを見ていた。その瞬間、シユタ

インはこの事態を收拾する方法を考えついた。

「おい、ハクア！ タブレットは俺の白衣のポケットだ！」

もちろん嘘だつた。だが、ハクアはその言葉を単純に信じて突進してくる。

「悪いが、二人ともあれを止めてくれ。能力を許可する！」

ブッシュは苦渋の表情で戦闘スタイルに身構えた。と、その数歩前にカボチが躍り出た。

「ここは私が止めるわ。馬鹿ハクア」

カボチは身をかがめ、右手を床につけた。

「もう、これ以上かばいきれないよ！ 戻つて！」

発動条件の言葉だつた。ハクアはカボチを障害物みたいに飛び越えようとする。ところが、ハクアの体は空中で一瞬だけ静止し、元来た方向へ吹き飛んだ。棚に背中を強打する。大きく棚が揺れて、中身がいくつかこぼれ落ちた。

「初めて見せるよね。これがライン系第一段階『ブーメラン・ストリーム』。こっちに向かつてきたものを、全部逆方向に跳ね返すの」ハクアは身を起こす。カボチの話を聞いていたが、いなかつたか。パニック状態のまま、足元に落ちていた厚い本や重いファイルをいくつか投げつけた。カボチは血相を変えた。

「ハクア、抵抗するんじゃねえよ！ あんたにぶつけたくないんだつて！」

カボチは能力を第一段階へ切り換える。投げられた本やファイルは、カボチの発動範囲に入ると、天井へ打ち上がった。ライン系第二段階『ボンフライ』は当たつたものをすべて猛スピードで上方へ吹き飛ばすものだつた。天井に当たつた物がボトボトと床に落下する。

このとき、カボチは能力を見せつければ、ハクアは静かになるとを考えていた。だが、それは甘かつた。ハクアは投げた物をおとりとして、同時に走り出していた。しかも、第一段階のときに自分の体が逆方向へ戻されたことで、カボチの能力を瞬時に理解し、投げた

物が跳ね返つても当たらぬように少し弧を描いて、カボチの横を一気に通り過ぎようとした。シュタインだけをまっしぐらに目指していたのだ。

「鳴り響け！」

ブッシュは発動条件を言い放つ。カボチの背後から現れ、右腕を突き出した。カボチもシュタインも咄嗟に耳をふさぐ。ブッシュの右手から凄まじい爆音が全方位に放出される。無防備なハクアは耳鳴りに急襲された。我慢できず足が止まる。ブッシュはさらに追い打ちで、よろけたハクアの腕をつかみ、腕から爆音を一気に送り込んだ。ハクアのおでこにハートマークのあざが浮き出る。

「うあああっ！　ああ、あああっ！！！」

ブッシュのハート系能力第一段階『パラノイズ』は周囲数キロの騒音を微量ずつ吸い寄せ、右手に集中させて放出するものだつた。なぜ騒音をハート系と言つかはブッシュ自身もよく知らないが、アザのマークがそうなのだ。そして、騒音の結集した右手で敵の体に触れば、相手の頭のなかに騒音が鳴り響く。逆に周囲は静かになる。

室内の音が止み、ハクアが耳を押えて苦しみ続けている。ブッシュが体に直接攻撃したので、足止めでなく本気でハクアを失神させようとしているとシュタインは察知した。

「ブッシュ、もうよせ！」

シュタインの声で我に返ったブッシュは、慌てて左手で解除した。ぐつたりとしたハクアは、力なくその場に崩れ落ちた。衝撃に耐えきれず、気を失つてしまつたようだ。ブッシュは顔にひどく汗をかき、苦悶の顔つきをしていた。仲間にここまでことをしたことは一度もなかつたのだ。

倒れたハクアにカボチが駆け寄る。

「ハクア、大丈夫？　ねえ、大丈夫っ？！」

カボチは必死で声をかけるが、強烈な制裁をしたブッシュを責めることはしなかつた。自分自身がハクアの動きを一瞬見失つたこと

で、ブッシュが手を出さざるを得なかつたのだ。シュタインが能力発動を許可したことで、ハクアがこういう形で止められることは予想できていた。ハクアの突進でなく、この結果を防ぐつもりだったのに カボチはハクアをゆっくり抱きかかえ、胸のうちに謝罪した。

ブッシュはシュタインに肩を貸す。興奮は静まつていた。

「ハクアはこれ以上放つておくと危険だな。……隔離するか？」
温和なブッシュとは思えない冷徹な提案だった。シュタインは、自分が何かあつたら頼むと伝えたことを少し頼もしく、そして恐ろしく思つた。 いや、もともと強力なメテオドロップを持つブッシュは、攻撃的な性質を奥底に隠していただけなかもしれない。ともあれ、リーダーに牙を向いたハクアの処遇を決めなければいけなかつた。

「いや……ハクアも能力を使つたから少し落ち着くだらう。ハクアは“燃費”が悪いのかもしれない。もう少し事情を聞く必要があるな」

「だけど、また暴走するかもしれないぞ。いいのか？」

シュタインの甘さをとがめるように、ブッシュが言い返した。滅茶苦茶に散らばつた室内を見渡す。確かに、ハクアは行くときは振り切れるまで行つてしまつ。その力が外敵に向かうのならば心強いが、ノイローゼ状態から仲間に向かつたときは暴風雨としか表現しようがなかつた。やはり、自由を奪わなければならぬ。シュタインは決断した。

「両手を縛ろう」

カボチが驚きの目で訴えた。

「シュタイン、そんなの止めて！ ちゃんと話せばハクアもわかるよー！」

その膝の上でハクアはうわ言を漏らした。

「みんな……たつづん……」

三人は静かに息を飲む。

「……会いたいよ……帰りたいよ……」

カボチは不意に涙ぐむ。なんと言つていいか分からなかつた。きっと外の世界はハクアにとつて楽しくて平和な時間だつたのだと思う。そして、普通の友達と同じ時間が流れていたのだと思う。ここは時間が止まつてゐる。シユタインのおかげで、不便は何もない。だけど、友達に会つなんていう当たり前のこともできない不自由な場所。

憎むべきは、歯向かつたハクアじやないはずだ。ハクアだつて同じ犠牲者だ。普通の世界で、普通に暮らす権利を奪われたのだ。メテオドロップの適格者になつて増えた幸せなんか一つもない。幸せを呼ぶ神様はここにいるメンバー全員を船から投げ捨てたのだ。何のために。どうして。自分たちが。

「わかつた、縛ろう。シユタインは俺たちのリーダーだ」

ブッシユが同意した。であれば、この地下組織では決定事項だ。カボチは肩を揺らして涙をこぼした。悔しくて声も出なかつた。

戸口で足音がする。

「……あのさあ。遅れちゃつてごめんなさい」

ひらひらしたネグリジェ姿のマリネが眠たそりにドアのそばに立つていた。一本の傘は持たず、見事に手ぶらだつた。

「マリネ、これは」

シユタインが説明しようとする。足の力が抜け、ブッシユに肩を借りてゐる姿をマリネは見た。リーダーのおでこに肉球マークのあざが浮き出でている。

「ああー。うん、見たら大体わかるよ。さつきのも聞こえたし」

マリネはカボチのそばに歩いてきて、背中からぎゅっと抱き締めた。カボチは真つ赤に腫らした目を閉じる。マリネの胸の中で、嗚咽が少し漏れた。

「でもさ、ハクアという異分子を受け入れた仲間として言わせてよ」マリネはシユタインの目を直視した。

「こんな小さな世界で、仲間を隔離するとか、手を縛るとか……見苦しいわね。特定されたつて戦えばいいじゃない。あなたたち攻められたら勝つ自信がないの？『ブレイクチェイサー』は名前だけ？名前をつけたのは誰？」

すると、カボチは何かに解き放たれたように泣き出した。マリネは微笑み、んーんーよしよし、とやさしく髪を撫でた。シユタインもブッシューも完全に黙り込んでいた。マリネはゆっくり立ち上がる。「あとさ、悪いけど、今週もらった薬、微妙に味が違うわ。確かめようがないけど、偽物の可能性があるわよ」

「なつ なんだと？」

突然シユタインの顔色が変わった。そんな情報はゴダから入つて来ていない。まさか、あつちも騙されているというのか。

「シユタイン、あなた、もう一度ちゃんと作戦考えなさいよ。飼い犬に噛まれて気分が悪いのはわかるけど、中より外を見なさい。わたくしたちはいま攻撃を受けているの。ここで仲間をつぶすタイミング？」

眉間にしわを寄せ、シユタインは首を横に振った。

「……悪かった。どの道、タブレットがもし偽物ならここは特定されるな。やつらが踏み込んでくることを想定した戦略に変えよう。ブッシュー、カボチ、異論はないな？」

ブッシューは同意を伝えた。ただ、それ以上の言葉はなかった。カボチも頷く。膝の上で、ハクアはまだ目覚めないが、乱れた前髪を少し整えてあげると、少しずつ安らかな表情に戻りつつあるのが見えた。

「そうよ、わたしたちは負けないわ。だって、こんな場所だって自由はとっても気持ちいいもの」

マリネは軽やかに弾んで笑った。ネグリジェがふわりと揺れて、キッキンからヤカンの湯が沸騰した音がかすかに聞こえてきた。

マリネの言葉によつて室内の雰囲気は落ち着いたが、ハクアは床に倒れたまま、まだ目を覚まさなかつた。

ブツシユは足の力が抜けたシユタインの肩を支えつゝも、あらためて自分がやつてしまつたハクアの姿を見ると、青ざめた顔で唇を震わせた。アジトでは、能力を訓練で発動したことはあつても、人に向けたことはほとんどない。いつも穩健なブツシユの変貌ぶりを見ると、シユタインはハクアを本氣で止めると命じた自分にも責任を感じた。

「……マリネ、カボチ」

二人を呼び、ハクアを部屋に連れて行つてくれと頼んだ。

その後、シユタインはイスに座り、机の上に白い紙を広げ、キープタブレットを置いた。ブツシユは憔悴した表情で壁に寄りかかり、それをぼんやり眺めている。マリネもカボチもシユタインの部屋にまた戻つてきてデスクを囲んだ。マリネは説明する。

「表面はいつもの味でコーティングされてるんだけど、中身の味がおかしいの」

シユタインはカッターの刃をタブレットの溝に当て、力を入れて二つに割つた。きれいに砕けて、粉末状の欠片がこぼれ散る。シユタインは表面と断面の味を比べてみた。

「確かに……言わるとそんな気もするが、俺には違ひがはつきりしない。カボチはどうだ?」

「えつ、あ、うん」

急に指名されたカボチは驚き、小さな指で欠片をつまんで舐める。表面と断面の味は微妙に違う気がする。

「うーん、何か違うかも……。マリネみたいに舌が敏感じゃないけど」

「ちょっと、どういふ意味よ」

マリネはふくれつ面をする。で、いつもならブッシュュが横から茶化してくるところだが、今は恐いくらい静かだつた。

最終的にシユタインが決断を下した。

「わかつた。入手元に確認しよう。少し時間がかかるから、ひとまずみんな部屋を出てくれるか」

「あつ、そう。それじゃあカボチ、朝食をお願い

「え？ た、食べるの？」

「食べるわよ。お腹空いてるんだから」

二人は廊下に出る。後ろから亡靈みたいにブッシュュもついてくる。カボチは困惑して眉をひそめた。

「でも、一時間後にはお昼だよ」

「それも食べるわ」

部屋に一人になったシユタインは、やむを得ずバスチエッカーを使い、コダのいるところに接続し、コンコンと合図を送つた。すぐ出られなければ後にしようと考えていたが、意外にもすぐ『はい、大丈夫です』と小声で返答があつた。

「キープタブレットが偽物の可能性がある

少し沈黙があつた。

『……なるほど』

「確かめられるか？」

『すいません、確かめる方法はわからないです。聞き出すのも難しいです……』

そして、コダは現在の一般生徒配布禁止の状況と、今回どうやつて入手したかをシユタインに説明した。なるほど、追跡隊のメンバーから奪つたものなら偽物の可能性が低いだろうと思うのだが、仲間の一人が違うと証言している以上、疑いは捨てられない。確かめ方がない、一般配布の再開予定が見えないとなれば、すぐ別の

回避方法に動いたほうが良いとも思えた。

「ありがとう。これで終わる」

『どうかご無事で』

「ああ、そつちも」

通信を終了し、今後のことを考えはじめる、シユタインの足に力が戻った。ハクアの超能力の時間が切れたのだ。

シユタイン、あなた、もう一度ちゃんと作戦考えなさいよ。

マリネの言う通りだ。ふう、と熱く苦しい溜め息を漏らす。

そのとき、廊下側のドアをノックする音がした。開けると、豆のいい香りが立ちこめる。ホットコーヒーをトレイに載せたカボチだつた。

「あの、そろそろコーヒーが欲しいかな、って。あと……お部屋の片付けに来ました」

部屋はハクアの暴走でメチャクチャになつたままだつた。カボチの和やかな笑顔を見ると何だか急にほつとする。

「助かるよ。入つて」

「はいっ」

カボチは「コーヒーをカップに注ぐと、机にトレイを置いた後、床に散らかった本やファイルをせつせと棚に戻しました。シユタインは休んで申し訳ないと思いながら、テキパキと片づける姿をぼんやり眺めていた。視線に気づき、カボチは気恥ずかしそうに振り返る。

「シユタインさん」

「……あ、ごめん、俺もやるよ」

「ううん、いいんです。シユタインさんは一服して、じっくり考えてください」

カボチのやわらかい声が胸の奥まで響いてくる。

「あの マリネえはあんなふうに言いましたけど、みんなが本気で頼れるのはシユタインさんだけです。お願いです。普通の子とは違う、わたしたちの未来を守つてください」

未来。こんな小さな世界でも、未来という言葉が生まれるのだ。
淹れたての熱い「コーヒーをぐつと飲む。体の中が熱くなる。

「ああ、約束する」

「わたし、シユタインさんのコーヒー飲んでると、好きですよ」
カボチは少しばかりと、照れ臭そうに目を逸らし、また小さな手で周りの本を取つて重ねた。

タツヤは昼食が終わり、部屋に入つて聴里に一度田の電話をかけた。一度田は朝だったが、受付の人が出で、「先生はまだ来てませんので……」と言われた。それで午後にかけ直したのだ。アジトの状況を聞いたかった。

電話には聴里が直接出た。タツヤは子供のいたずら電話と思われないようすにすぐ名乗つた。

「あっ、タツヤくん？ あれ、電話番号教えたつけ？」
驚いているのは無理もない。

「電話帳で調べました」

「そうなんだ。……あなた、ほんと頭いいのね。小学生とは思えな
いわ」

「そんなことより、ハクアに連絡したい」とがあるんですが、でき
なくて困つてるんです」

「えっ？ そうなの？」

電話の向こうで『惑う反応。

「……あの、シユタインさんから聞いてないですか？」

「いや、ハクアのことはあの人任せてるから」

タツヤはすぐに状況を話した。先週一方的に通信中止を言われたこと、それから一週間経つたがまだ再開されないこと。昨日は夏休み中の登校日だったが、ハクアが無断で休み、先生も心配していたこと。

追跡隊に狙われている状況なので休むのはわかるが、誰も休むと

聞いていなかつたのだ。そこで不安が走つた。放課後、希とアランに相談して、タツヤが聰里に電話することになつたのだ。

「登校日か」

聰里がつぶやいた。その口ぶりは、やはりハクアの状況を多少知つてゐるような感じだつた。

「先生が心配してます」

タツヤは強引な言い方をせず、少し聰里をあせらせぬように話した。実は、ハクアは前に超能力を使いすぎて体が動かなくなり、勝手に休んだことがあるので、本当は晴海先生もそんなに心配していなかつたが、下手な演技をしてでも、聰里から少しでもハクアの情報を見きたかったのだ。それと、聰里が困つて電話を切り上げてしまつ前に、これをどうしても確かめておきたかった。

「シユタインさんたちはまだあの場所ですよね？」

「ええ、そうよ」

それは迷いなく即答だつた。

「先生が心配していいたことを伝えてほしいんです」

「……わかつた。シユタインに連絡するわ。『ごめん、みんなとの通信について』はシユタインからの再開を待つてね」

ごめん という言葉が胸をチクリと差す。何か悪いことがないと口に出さない氣がするのだ。とにかく、聰里はこれで話を終わらせようとしている感じだつた。

「どこか具合が悪くなつたのか、僕たちも心配しています」

「ううん、そんなふうな連絡は来てないよ」

「してないだけかもしません」

「……タツヤくん」

聰里の語気が少し険しくなる。

「すいません。あの、通信再開を待つてます。お願ひします」

タツヤは胸に湧き上がる感情を抑え、通話を切つた。そして、すぐ聰里との電話内容を希とアランの携帯にメールした。一人ともすぐ返答があつた。

『朱鳥くん ありがとう 聰里さんも知らなかつたのは気になるね
…』

『ありがとな。少し安心した。でも、お前の心配はわかる。俺も協力するから』

タツヤは一人に対し「少し考える」と短く返信すると、強張つた体を伸ばそうとベッドに寝転んだ。一応、シユタインがあそこにいるのなら、ハクアも一緒のはずだ。

ただ、シユタインが聰里と通信していないのは不思議だった。タツヤは考える。

例えば もしかして、パスチェックカーを使えないから通信中止になつたとか。アジトに入つたとき、シユタインは超能力を使うと拡散波長が出るからタブレットを飲めとハクアに渡したのを思い出す。だつたら、ハクアが来てタブレットが足りなくなつたとか、そんな理由で追跡隊にアジトを発見されそうになつてるんじゃないだろうか。

ハクアの安全は本当に大丈夫なのか。ハクアと通信できないと確かに理由がわからない。聰里も一方的な通信中止について悩んでいる様子だった。

それと、もうひとつ気づいたことがある。聰里は、学校の先生を理由にされると態度が変わつたのだ。もう少し普通にハクアと会える可能性があるのでないか。

胸に溜まつたものを吐き出したい。誰かに強く背中を押してもらいたい。力が欲しい。希望の光を自分でつかむ力が欲しかった。

聰里は受話器を置き、壁にかかつた天狗の面を見た。朱鳥タツヤの勘の鋭さを少し甘く見ていた。登校日か。夏休みなのに、そんな

のがあつたんだな。担任に電話を一本しておくれべきだつた。

ハクアの保護契約を交わした後、シユタインには「自分たちは一般人とは別物だと認識してくれ、ハクアも同じだ」と強く釘を刺されていた。それを理解したつもりでいた。だが、朱鳥タツヤという少年は、ハクアのことをあそこまで深く考え、これからも行動をともにしようと思っている。その強い意志が、電話をするほんの短い時間だけでも十分伝わってきた。

してないだけかもしません。

聰里は脱力し、着物の裾を整えながら、ソファに身を沈めた。先週シユタインから連絡があつたのだ。内容は、キープタブレットの入手に異変が起こり、新しい潜伏先への移動を考えたいから候補を探してくれ。まだ様子見中だが、バスチェックカーの使用は控える、というものだつた。

知らないふりをしたことで、きつとタツヤたちの疑いを深めただろう。だが、知つてていると言つたら、あの子たちは自分を敵と見なして、三人で無茶な行動に出ていたかもしれない。味方として留める側にいるにはああ言うしかなかつた。

こちらの少年少女たちは何とか説得するしかない。だが、一方でハクアは大人しくシユタインに従うか疑問だ。もはや、すべてがうまくいく道は残されていない。誰も傷つかない、誰も裏切らない解決なんて探しても見つからない。

聰里も悩みに悩んで、答えを出した。

つまりは　ハクアとハクア応援団を分離させることが一番小さい犠牲なのだ。

これは聰里の独断ではない。契約主である養父の承認も得ている。ハクア、タツヤ、お願ひもう抵抗しないで……。一生懸命待ち望んでいる未来はもう実現してあげられない。

そのとき、コンコンと天狗の面からノックする音が鳴つた。

「はい、大丈夫よ！」

受付を兼ねた事務の女性は少し遅めの昼食に出かけていた。

『聰里さん、状況が変わった』

久しぶりに聞くシユタインの声。

「えつ……どっちに？」

『悪いほうにだ。今から説明する』
本当は聞き返すまでもなかつた。シユタインの険しい声がすべてを物語つていた。

午後、訓練学校の会議棟の一室で、天童将王はつばさと極秘会議を行つた。こだま、紅花はトレーニング棟の室内プールあたりで泳いでいるはずだ。天童は、こだまの体調はもう問題ないと医務官から報告を受けていた。

つばさは自分が呼ばれた意味を察した。ちなみに、つばさの肩にはいつも通り南国九官鳥のデンロクが乗つてゐる。

天童は要件を伝える前に、テーブルに緑黄色まんじゅうという謎の食べ物を置いた。実は、先週から天童が隊員に会つ度に、「これ、ビタミンがすごいから! ビタミンがすごいから!」としつこく勧めてきたものだつた。隊長命令なら仕方ないが、極めて変な味だつた。こんな重要な会議でもまたそれが出てくるわけだが、そんなに肌荒れしているだらうか、とつばさは心配になる。メガネのせいで血色が悪く見えるのだらうか。いや、そんな……。

「ついにアジトの場所が特定できただんな?」

「はい、ターゲットの拡散波長を検出しました。さらに、近くに複数の反応が」

つばさはレポートを渡す。天童は素早く目を通し、確信の顔つきになる。

「時間がない。食べながら聞いてくれ」

とせき払いで促しながら天童は言った。つばさは仕方なく袋を開けて、かぶりつく。ペースト状の緑黄色野菜の味と匂いが口の中に充満する。子供のおやつにしては拷問だ。

「ここからのこととは校長と相談してある。作戦を変更する。やつらのアジトには俺とお前とデンロクで行く。こだまと紅花は学校に残させて、湯田というスパイの少年を捕獲させる。一人にはまだ伝えるな」

モグモグしながら、つばさは頷いた。水が欲しい。

「内通者の可能性も校長に言われた。だから、あぶりだし作戦がバレることも想定のうち。向こうは能力の使用を控えるだろうが、それでも体調異変が起きれば、ターゲットが能力を発動すると読んだ」天童は、ハクアの体調変化の短さを、医務室に保管されていたルテで把握していた。

「あと、黙つていたが、先週からきみたちに配つていたキープタブレットは偽物だ。本物のタブレットは粉末状にしてこの『緑黄色まんじゅう』に混ぜていた。だから、きみたちの体調変化は起こらない」

「これ！ これが状態安定のアイテムだったのか。つばさは目を丸くする。

「実は 使用人に作らせるわけにはいかなくて、俺が作った。急いだせいで味は完璧にはならなかつた。それは許してくれ」

つばさは首を横に振る。何を大丈夫と言つてているのか自分でもわからなかつた。

天童は珍しく興奮ぎみに身を乗り出し、つばさの肩をつかんで揺すつた。メガネがズれる。デンロクがパツと飛び上がる。

「アジトの壊滅チャンスは一度きりだ。内通者の始末も同じタイミングでやらなければならぬ。俺たちは出かける準備をするぞ。決行は明日だ！」

「ハイッ！」

威勢よく返事すると、口からまんじゅうの中身が出そうになつた。アジト攻撃に向けた天童の執念に感激しつつ、つばさは水が欲しかつた。

タツヤは、気分転換に少し早めに夕食の支度でも始めようかと階段を下りてくると、リビングで廉太郎と目が合った。廉太郎は休みの日で、午前中は洗濯物を干すのを手伝ってくれたが、午後はだらだらとテレビを見ていた。上半身は裸で、缶ビールを一本飲んでいる。

「タツヤ、お前どうした?」

「えつ……?」

「便秘と下痢が一度に来たような顔してるぞ」

「それって健康じゃないか。いや、そうでもないのかな。

「大丈夫だよ」

「宿題ができないのか? それとも三角関係の悩みか?」

タツヤは鍋の底に沈めていたものを棍棒で掻き出された気分になり、半裸の父親を睨みつけた。そう言えばタツヤは最近父親とあまり話していなかつた。ずっと部屋にこもつて、ハクアのために何ができるか、ちゃんと好きな肉料理を食べているか、いつになつたらまた会えるのか、そればかりをずっと考えていた。廉太郎は好奇心満々の笑顔を見せる。

「父さんに、聞きたいことがある」

「おう、聞け聞け」

「……いまさ、すごく大事な友達と、はなればなれになりそうになつてるんだ」

廉太郎の顔つきが変わつた。たぶんもっと軽い話だと思ったに違いない。廉太郎が少し姿勢を直したので、タツヤは居心地が悪くなり、逃げるようキツチンに入つた。蛇口をひねり、水道水をくむ。廉太郎はビールを喉に一口流す。タツヤは聞こえるようにつぶやいた。

「もともたしてると、大人たちが勝手に決めてしまつかもしれない」
「コップの水を少し飲んだ。思ったよりもぬるかった。」

「僕はどうしたらしいのかな」

すると、廉太郎は答えを言う前に、その友達は誰かと聞いた。タツヤは少し迷つたが、ハクアだと正直に返した。

廉太郎はハクアの秘密は知らないが、泊まりに来たとき、両親がいないことは知っていたはずだ。もちろん覚えていないかもしれない。廉太郎はどう思つたかわからないが、

「お前、何か考えていることがあるのか」

そう聞いてきた。タツヤは悩み、間を置いて答える。

「ある」

「だったら、迷うな。男なら意志を貫け。誰がどう言つたって、手放したら戻らないものがある。自分が心に決めたことを信じろ」廉太郎の言葉が胸に深く突き刺さる。ハクアの秘密は全然知らない。話せない。だけど、それは今まで誰に言われたことよりも、一番温かく、つらかつた。

「そう思つて、食い下がつて、みんなに怒られたんだ！」

必死で言い返したつもりだが、廉太郎は急にお腹を抱えて笑い飛ばした。笑われたのが悔しくて、目がかち合つた。廉太郎はテープルに片肘をつき、余裕の顔を向けている。

「ちょっとキンタマを見せてみろ」

「みつ、見せないよ！」

「なんだよ、俺は父さんだろ。タツヤ……いいか、何度だつて怒られてくればいい。怒られるのがなんだ。それで何がなくなるんだ？」胸が詰まる。何度もだつて怒られればいい。そんなふうに、誰か言つてほしかつた。

「そうだろ？ お前がやりたいことをやめて帰つてきたら、俺は百倍怒るぞ」

目頭が熱くなる。タツヤはひたすら立ち去くし、父の言葉を浴びていた。

「時間を戻したいのはお前よりも俺だ。その俺が言つんだ。まだ何とかなるなら、やつてこい、バカ野郎！」

タツヤはぐつと唇を噛み、キッチンから飛び出した。全力で廊下

を駆け上がり、バッグをつかみ、携帯を突っ込んだ。

希、アラン、やっぱりいま何とかしたい。知らないうちに全部消えてたらダメなんだ！ まだ何となるなら まだ何となるなら、それを何度も胸に刻みつけ、タツヤは外に出て、自転車のスタンドを思いきり蹴った。

その夜、聰里が事務所で一人パソコンを使つてゐると、応援団の三人が現れた。

タツヤが一人でここに飛び込んで来るような予想はしていたが、三人揃つてというのは少し驚いた。デスクを離れ、ソファに座る。三人がそばに立つたまま詰め寄つてくる。山盛りのプチシューを棚から出すような雰囲気ではない。

タツヤが先陣を切る。

「もう一度、シユタインさんと話したい。ハクアと会えなくともいいです」

聰里は渋い顔を見せた。タツヤは構わず続ける。

「何が起きているか、本当にアジトは安全なのか、それが知りたいんです」

聰里はなるべく平常心で対応しようと、胸元から扇子を出してパツと広げた。相手が子供とは言え、冷徹な心を装うのは難しい。普段と同じ仕草をしていないと落ち着かなくて仕方なかつた。

「みんなの気持ちはわかるわ。でも、どうしてシユタインからの連絡を待てないの？」

すると、アランが前に出る。

「タツヤの心配が当たつたんだ。何かまずいことが起きてるんだろ？」

通信が一方的に断たれたら、こうなることは聰里にも予想できた。再開のめども立たない上に、状況が悪化したと内密に今日伝えられた。シユタインやハクアの身が心配なのは聰里も同じだ。だが、その理由はこの子供たちには話せない。

シユタインがハクアを守るなら、この子たちの安全は自分が守るべきだ。そのために、ハクアと関係が切れたとすら思わせたい。だから、話さないと決めたのだ。しかし、口を閉ざす聰里に対し、語

氣の荒いアランが追い込みをかける。

「俺たちも、担任の先生とか他の大人にまだ話したくないんだ！」

頼みを聞いてよ…」

もうこれは 脅迫に近い。聰里は我慢する。

「シユタインからは安全だと聞いているわ。それに、私にとにかく来ても外の鍵を開けてあげることはできないの」

だが、希も必死で食らいつく。

「聰里さん。もしシユタインさんに会えないなら、わたし、先生やお父さんお母さんに全部話すつもりなの」

この子が感情的な勢いで言つとは思えない。聰里はたじろいだ。

「ちょっと、そんなこと……。ねえ、あなたたち……本氣で言つてるの？」

中央に立つタツヤが力強く頷いた。

「お願いです。僕たちはもう聰里さんのところに来るしかないんです」

一点の曇りもない眼差し。いや、タツヤといつ子は、前にハクアと事務所に来たときからこうだったかもしれない。屈しない。大人たちの意見や助言を、この子は全力ではねのける。ハクアはその無類の強さを肌で感じたから、信じて秘密のすべてを話したのだ。羨ましくて、ちょっと泣けてくる。聰里は声の調子を少し落とした。

「ねえ、待ちなさい ハクアの秘密を話してしまつていいと思うの？ それがあなたたちの考え方なの？」

「本当は、ハクアとそれを話したい。だけど、手放したら戻らないものがある。あとで聰里さんに謝られたつて意味がないんだ。三人で決めたんです。もう、僕たちは引きません」

聰里は目を伏せ、銀色の扇子を静かに閉じた。

「……わかつたわ。明日の夜、車で連れて行くから。シユタインに依頼する時間をちょうどい

「お願いします。約束です！」

タツヤは小さな小指を立て、聰里の鼻先に突き出した。

扇子でグイッと弾き返す。タツヤは目を丸くした。

「なめないで。こつちにも預けた責任があるの。約束するわよ」

夕食の片付けが終わっても、ハクアは部屋から出てこなかつた。カボチが様子を見に行つたが、布団を頭からかぶつたまま、呼びかけにも答えなかつたようだ。ブッシュの超能力「パラノイズ」は神経系に直接的なショックを与えるので、一日頭痛が治らないのは当然の結果だつた。その上、もしタブレットが偽物ならば、ハクアの体調が悪化していることが回復を遅くしているだらうとみんな考えた。

一方、シユタインもまた、一度だけコーヒーのおかわりをもらいに来ただけで、それきり部屋から出てこなかつた。機嫌が悪かつたわけではなく、部屋にこもるときはだいたい考え方事に集中しているときなのだ。それで、他のメンバーはそのままにしておいた。

マリネとカボチは普通に過ごしたが、ブッシュも沼の魚みたいに存在感がなく、物静かだつた。カボチが、せつかくハクアが復活したら食べてもらおうと思つて焼いた厚切りのローストハムは、五分の一も食べられない今までパックに入れられた。

「明日も食べられる料理でよかつたよね」

そんな言葉を自分にかけたが、やはり元気を失い、早々に部屋に引っ込んでしまつた。

マリネは風呂から上がり、リビングを通つた。ブッシュが一人テレビの隅で何か考え方をしている。マリネはバスタオルで髪をふきながら、さつくりと話しかけた。

「あはは、うふねえ。女の子に手をあげたのがそんなにショックだつた?」

「……そう見えるか?」

ブッシュの視線は暗く冷たかつた。マリネにはそれが異様に腹立

たしい。

「まあ、両手縛るのは無しだけど、私、あんたの行動は支持するわ
「だけど、ショタインを見苦しいと言つたじゃないか
「あれば本音だけど、売り言葉よ。ほら、怒りをどつかに逸らさないと止まんないじゃない」

「……そ่งだが」

「男の意志でしょ。後悔は気持ち悪いわ」

マリネは鼻歌混じりでテーブルの斜め前に座つた。

「そう言つなよ」

伏し目がちにブッシュは苦笑する。

「とにかくあんたは支持するわ。じゃあ、答えてよ。あんとき、あんたが守つたものは何だったの？ ショタイン？ それともハクア？」

予想外の問いに、ブッシュは虚を突かれた。だが、真面目に考えを伝える。

「 ショタインだと思うが、本当はハクアかもしれないな」

マリネはすらりとした白い人差し指を立て、ノンノンと横に振つた。ほんのり上気していて、手から湯気がうつすら漂つて見える。

「あんたが守つたのは秩序よ」

マリネの喉は、本当はよく冷えたレモンティを欲していた。けれど、カボチは寝てしまつたし、ブッシュの青臭い正義感をいじくるのも悪くない。

ブッシュの顔つきが少し変わる。

「秩序……？」

「あの子はさ、恐怖心から薬を独占する暴挙に出て、共同体のルールを破壊しかけたわけでしょ。それをみんな食い止めただけ。見苦しいのは、それに同情し、真に受けたこと」

マリネは卓上のソルトシェイカーをつまみ、ぐるぐると踊らせる。

「これでハクアも目が覚めたでしょ。冷却期間なのよ、ほつときなさい。で、あんたはさつさと立ち直りなさい。でかいくせにしあれ

てたら、歩くのに邪魔だわ

テーブルの隅にいるのに邪魔と言われて、ブッショは何だか情けなかつた。

「……ハクアは本当に田が覚めるだらうか

「突き放せばいいのよ。」これで反省しなかつたら、今度は私が本気でぶちのめすわ

すつと田が呟つ。

「いやいや。マリねえ、一回負けたじゃないか

「ちょっと！」マリネちゃんマジ神モード『知らないわね！ 田

傘六本持つてんのよ？！』

六本。それは知らなかつた。思わず笑つてしまつ。

「あはは、どうやって持つんだよ」

「四本を背中に差すのよ。縦一本と横一本で、こうクロスして」

マリネはテーブル上に指で何か描いているが、向かい側からは全然わからない。

「下に向けたら神輿だな

「想像で担ぐな！ あのさあ とにかく、あんたはこのチームのくさびなの。アンカー。前線でどんな犠牲があつても退路を作つてよ。頼むわよ」

急に真面目な話になつてブッショは心臓が止まりそうだつた。マリネはソルトを戻し、次はペッパーのやつをいじつて。指先で何かしていないと落ち着かないのだろうか。

「……大役だな

「バカね。前線は口八丁だつて大事なの。寡黙な朴念仁より、口の滑らかな美少女がいいのよ

「適任だな

すると、今度はマリネが意外そうな顔をする。

「美少女は否定しないのね」

「俺はいつもそう思つてる」

濡れた長い黒髪にバスタオルをかぶせる。その揺れ動く白い布の

隙間から、マリネの流し目がちらりと覗いて見えた。

「軽口は似合わないからやめなさい。はー、寝た寝た」

「そうだな。悪かった」

ブッショはわざとらしく頭を下げる。いや、ここは礼を言つべきかな、と思つて顔を上すると、マリネの瞳もこぢりをじっと見ていた。

「……ちよつとくらいい添い寝してほしい?」

「いやいや。口の滑らかな添い寝は眠れないな」

「ふつ、ふふふ、面白いじゃない。ま、本氣で言つてないわよ」

「俺はいつもそう思つてる」

「ちっ。死ねっ!」

マリネはテーブルの下からスリッパを飛ばして來た。すねに当たつたが、所詮やわらかいやつだ。そして、飛び散ったスリッパを王女のようブッショに命じて拾わせると、バスタオルで髪を乾かしながら、また鼻歌を浮かべて部屋に戻つて行つた。

ブッショは寝る前にキッチンに入り、水を一杯飲んだ。頭がすつと冷えていく。耳にこびりついてしまつた犠牲という言葉の残響を振り払う。

「……ちくしょう。あんな恐いこと、笑顔で言つんじゃねえよ……」

その翌日、夕食が始まつたばかりの訓練学校の食堂で、こだまと紅花の一人は、隊服でなくトレーニングウェアを着て、湯田が見える位置に座つた。湯田が席にいることを、こだまは天童にメールで報告する。これが、作戦決行の第一段階だった。

三枚の立て看板が並ぶ、夜の河川敷に、窓ガラスを黒塗りにしたワゴン車が止まっている。こだまからのメールを受け取り、赤い隊服に身を包んだ天童は、車から出る覚悟を固めた。その横には、同じく隊服姿のつばさも一緒にいる。ただ、つばさの肩にいつも通り

乗っているはずの南国九富鳥の「テンロクがない」。

つばさは、昨日のうちにおよそ特定できたサー・チ範囲から発する拡散波長をさらに細かく解析し、今朝までにかなり絞り込みをかけた。そして、ワゴン車で近くまで来て、あとは自分たちで体感できるほど拡散波長が複数出ているポイントと、九富鳥「テンロクの持つ超能力によつて入口の場所をほぼ完璧に発見した。

フォース系の天童にとつては、なおさら同じフォース系のハクアが発する拡散波長は捉えやすかつた。メールを読み終えると、つばさは天童に状況を聞いた。

「向こうは大丈夫ですか？」

「ああ、隨時報告が来ている。食堂に来たつてことは、湯田はまだこつちの作戦に気づいてない。こだまもハクアとの戦いで、慎重さを身につけたよ」

つばさは頷く。メガネはいつものカジュアルなものでなく、密着性の高いスポーツタイプだった。天童は携帯画面をじつと見つめる。「ああ、こいつを送つたら出よつか

その時刻、天童源兵衛は巨大な玉座に鎮座して、孫の将王から突入開始のメール報告を受け取つた。これが成功すれば、校内のキープタブレット配布禁止も解除できる。

この日、源兵衛の手元には、医務官や教官たちから生徒の心身被害が心配だという苦情がだいぶ届いていたが、その上に今夜まではずしつと文鎮を置いていた。

『帰還を待つ』

源兵衛は非通知設定で、天童隊長に短いメッセージを返した。

河川敷の上空を九富鳥の「テンロク」が飛び回り、やがて、三枚の立て看板のひとつに止まつた。ようやく鍵穴の位置を探し当てたのだ。デンロクは地面に下りると、くちばしで看板の根元をつつき、ロック系第一段階「クイック・オープン」を発動した。続いて、石のベ

ンチへと飛び移る。

ワゴン車から出た天童とつばさの一人は、足早に土手を進み、デンロクが止まっているベンチのそばに来た。天童がベンチを動かしてみると、ふたのよう横へスライドして、梯子が現れた。天童は懐中電灯で慎重に下を照らす。コンクリートの底がすぐ見えたが、人の姿はなかつた。つばさは眉根を寄せて覗き込む。

「こんなものが……」

「よし、突入だ」

そして、天童はこだまと紅花の携帯に湯田確保作戦のGOサインを送った。

笹ヶ瀬姻戚相談所の前に、派手なスポーツカーが現れた。運転席には昨日と違う着物の聰里が険しい顔を向けている。タツヤと希は知つていたが、猛々しいエンジン音にアランは畠然としていた。歩道で待つていた応援団三人に、聰里は車の中から颯爽と手を上げた。「ごめんね、後部座席は狭いから、希ちゃんは後ろね

「あ、はい」

希は小走りに向かつ。

「助手席は僕が座るよ」

少し腰が引けているアランに、タツヤは声をかけた。聰里を信用していないわけではないが、助手席で道を見ながら、確實にハクアのいる場所へ向かうことを自分の目で確かめたかった。少し窮屈そうだったが、アランは希とぴったりくつつく感じで乗り込んだ。

タツヤは聰里の表情を見る。昨日よりもずっと恐い表情のままだ。これは自分たちがワガママを言つたことを怒つてゐるのか、それとも本当にアジトが危険な状況になつてゐるのか知りたかったが、車が走り出したら高速と爆音で流れる街の夜景を浴びて、もう聞けなかつた。

聰里は一日の時間の猶予をもらつてから、ずっと悩んでいた。シ

ユタインとの契約を破らない範囲で、どのように子供たち三人を納得させるか、ずっと考えた。だが、とにかく河川敷までは連れていくしか思い浮かばなかつた。

実は、聰里は昼までに移転先候補を調べてシュタインに伝えるつもりだつた。それで、向こうに判断を委ねようと考えていた。だが、三人が前日に事務所に来たことで、聰里はそれを躊躇つた。シュタインにはとにかく急いでくれと言っていたが、聰里は一日遅れても大丈夫だらうと勝手に判断したのだ。昼間のうちに催促は来なかつたし、シュタインが緊急性を正確に伝えなかつたこともあつた。

ただ、シュタインに聞かれたときを考え、移転先候補の書類はタツヤたちに隠した形で持参していた。聰里が無言だつたのは、勘の鋭いタツヤを少し恐れていたこともある。決心した以上、愚直に河川敷をめざし、車を走らせた。

車の中で、アランは隣りの希に一言謝り、いきなりパンを食べはじめた。タツヤは驚いて振り返る。今日、タツヤと希は家で夕食を済ませた後、すぐに出かけてきた。それぞれの親には近所の公園で天体観測すると言つてある。

ただ、アランは親が共働きで、しかも帰りが遅いので、夕食はいつも十時くらいになるらしい。それでパンを買つてきたのだ。

赤信号で止まるごと、タツヤはバッグから弁当箱を取り出し、アランに渡した。

「アラン、これ食べる?」

「え?」

ふたを開けると、まだ温かいビーフロロッケがたくさん入つていた。香ばしい匂いが後部座席に立ちこめる。

「……お前、何で弁当なんか持つてきたんだ? ハクアのか?」

「うん。もしハクアに渡してもらえるなら……と思つてね」

「そつか。だつたら、悪いよ」

「ううん、食べていいよ」

タツヤは、前にアランが泊まりに来たとき、アランの家庭の話を

話してくれたのを覚えていた。だから、たくさん作って持ってきた。廉太郎も由果も大好物の自信作なのだ。みんなにも食べてほしいと思つていた。

「じゃあ、一個もらひます」

アランはパンを膝の上に置き、嬉しそうに口ロッケにかぶりつく。サクッと揚がった衣がはじけ、口の周りに油がついた。牛肉の粒がたくさん混ざつている。ハクアが喜びそうな味だ。

希もちょっと欲しいというので、アランは半分渡した。何だか希と一緒にものを吃べるのも楽しかつた。希はいきなり声を上げる。

「あつ。今日は水曜日、お弁当の日なんだね！ そつかあ！」

「天体観測のやつ？」

アランが希に聞く。でも、希と並んで吃べる口ロッケにも夢中だ。

「うんっ！」

聰里のスポーツカーは屋根を完全に開いていた。

青信号になり、道路の上の夜空が再び流れ出す。やがてさえぎるビルもマンションも少なくなり、河川敷にどんどん近づいていた。郊外に出ると夜空が一気に広がり、星の動きも子供たちを待つていたみたいに、ゆっくりと時間を包みこむようだつた。

平穩な会話のかけで黙つていた聰里が、不意にタツヤに話しかけた。

「タツヤくん 私が言つてもシユタインが応じてくれるか約束はできないわ」

昨日は約束すると言つた聰里の口から出たのは、意外にも弱気な言葉だつた。ただ、タツヤは三人の願いを聞き入れてくれた聰里に詰め寄る気持ちはひとつもなかつた。

「僕は、ちゃんと通話してくれたシユタインさんの優しさを信じてます。僕たちはハクアを待つていてるシユタインさんに伝えたいんです。そしたら帰ります」

聰里は「……そう」と短く切り、再び黙つた。

四人を乗せたスポーツカーは、もうアジトに向かう以外の選択肢

はなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0758n/>

「全力のハクア」

2011年3月29日21時10分発行